明治三十九年二月十五日発行
毎月一回一日発行
明治三十七年十二月九日
第三種郵便物認可

女子文壇

我き羅ぢ

定期増刊

二巻第三號

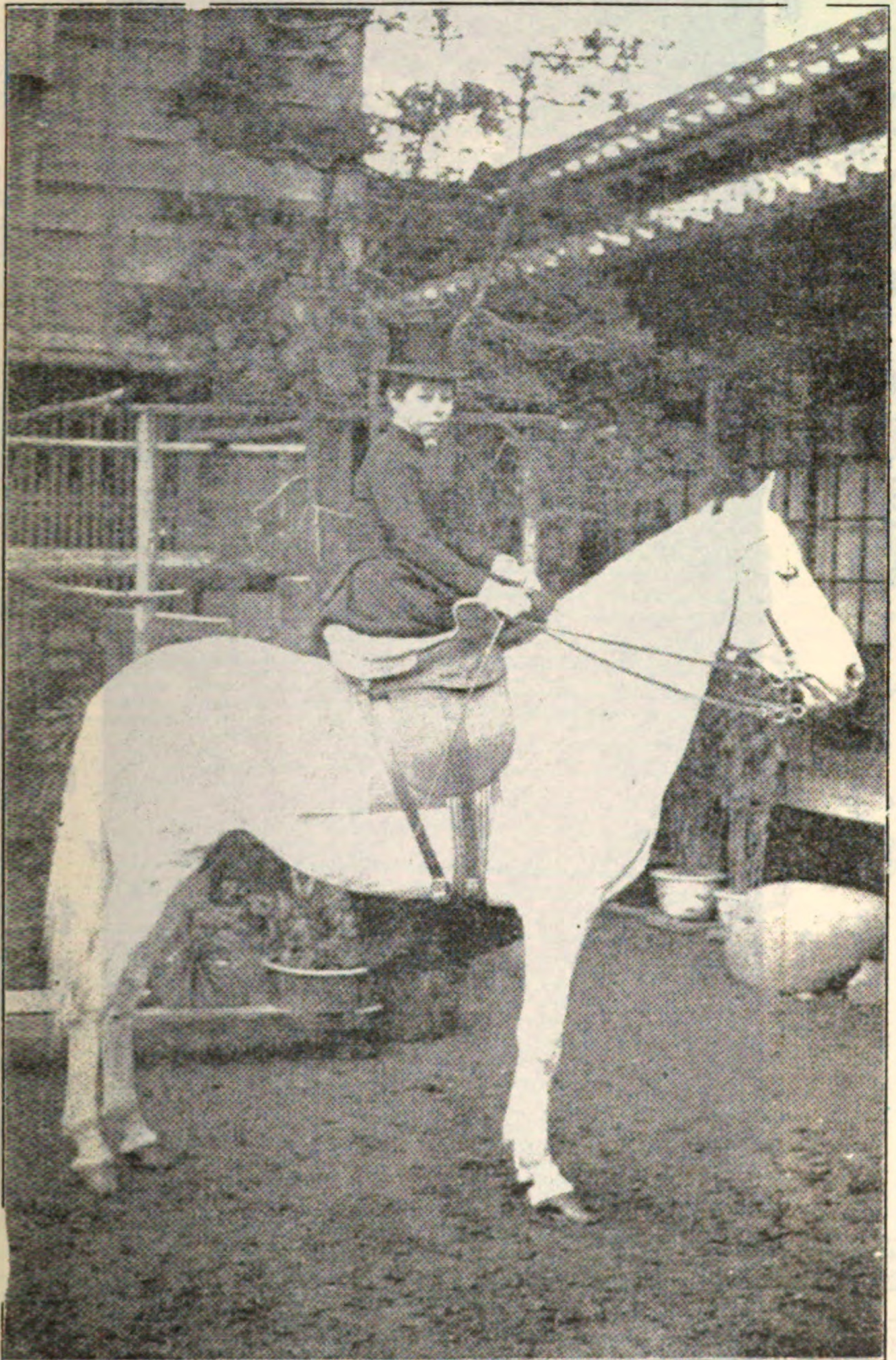






粧鏡（ヘイ氏筆）

馬上の田中子爵夫人



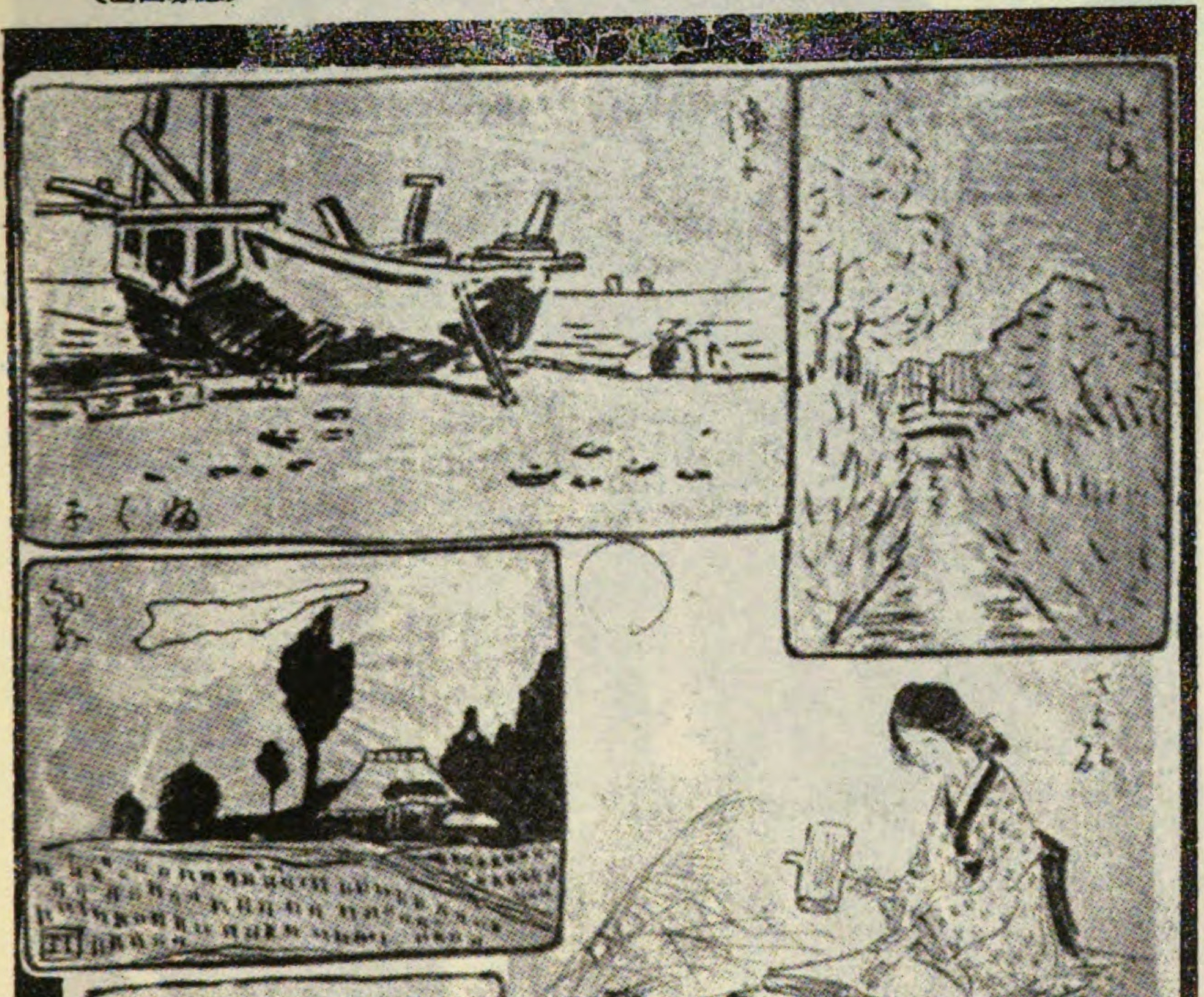


眩き白衣（英國クーパー氏筆）

古洞先生選

賞外佳作

(應募圖畫)



月夜　神奈川縣池田さま子○漁舟　栃木縣川合ふく子○小流　府下土子小柴操
○郊外　紀伊紅月女史○さよ砧　山口縣永地菊枝○夏日　廣島縣秋山泡花

女子文壇　第二巻第三號
定期増刊

きさらぎ

河井酔茗

早緑姫「霜に築ける銀殿に、冬の翁は厳めしく、土を去らじと構へたり。さはいへど、日あたり風をよけて置く、いさゝ紅梅ふくらみて、朝や花と開くらむ。山なる雪は溶けずとも、大野を染むる早緑の、下ゆく水はぬるめるを、行け、行け、翁、北はなほ、雪も殘れる境あり。

若菜少女「佐保姫、行きのまに〱、野は青む、若菜若くさ、尖れる山も圓らかに、凍れる雲もゆるやかに、光は和む、森、林、樹立も今に曲を得て、自然の歌に舞ひ出でむ。上つ世ありし日の御子の、若菜摘む子に名を問はす春や少女も若やぎて、胸あたゝかき戀もせむ。

金衣公子「佐保姫、あらはれよ、佐保姫、あらはれよ、紫の裾を曳き、濃緑の、羽を伸して、糸遊の、空に織る、九かすみに立ちこめよ。

佐保姫「青柳を、片糸によりて、おけや、鶯の。鶯の、ぬふといふ笠は、おけや、梅の花笠や、青柳うたふ樂の座の、『春鶯囀』の曲につれ、臨めばこゝはきさらぎの、若菜少女に早緑姫、春の儲をつくろへり。やよ更に、遠野の末に霞を渡せ、海なる草に香をあらせ。



短篇小說

廣津柳浪先生選

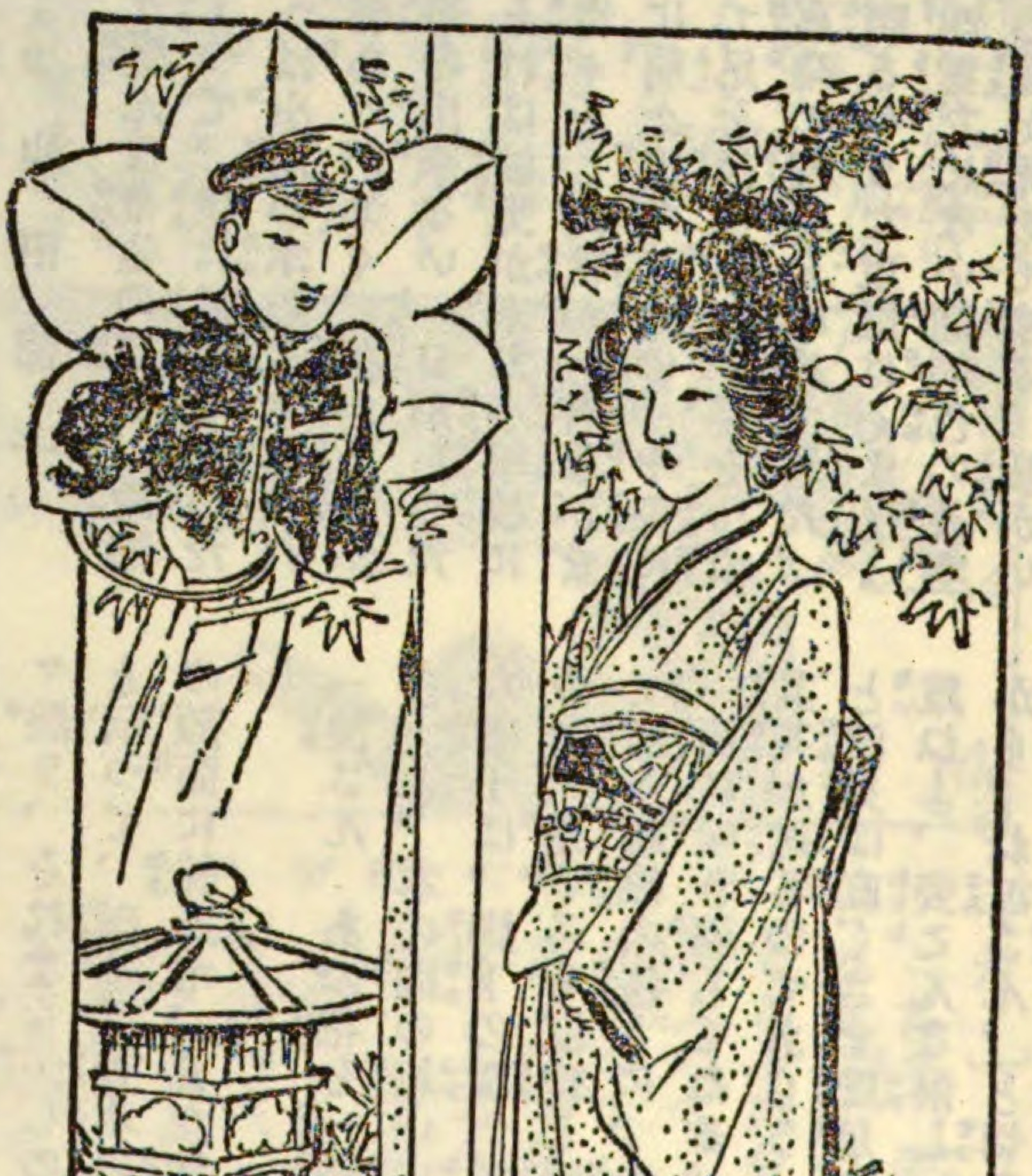
天

○小春日和

雲州　白すみれ

「あゝ餘り一生懸命で縫つたものだから肩が懲るよ、誰か肩をたゝいて呉れゝば宜い」と左の手を廻はして右の肩をたゝきながら靜かに障子を明けましたのは美緒子であります。「あゝ女程をかしいものはありやしない、昨日まではやれ大きい京人形を買つて下さいの、玩具のゴム人形を買つて下さいのいつて「美緒樣はもう十八でせう」とお母樣に笑はれた其美緒樣が今に人の御母樣になるんだもの、それにしてもお母さんが此世に被入つたらどんなに嬉しいだらう、こんなつらいめしないだらうに……、お繼母さんつたらひどいわ實にひどいわ、どんなに私が憎いからつて怨しいあんまりだわ、私がお繼母さん未だ早う御座います、彼方も未だ學生で被入し、私も女學校を卒業したばかりですし、お舅姑樣も被入ない、もう少し家事の方を勉强さしてそれからにして下さいとあんなに賴んだものを、未だ早いおだまりなさい、お父樣が留守かと思つて、私を馬鹿にする、叔父樣が舅姑はなし、こんな所は日本中探したつてないと仰有て、こゝ迄纏めて下すつたのを、罰があたりますよ、勝手になさいつて思つても身ぶるひがする、私彼時餘り腹が立つて、私が何時敏夫樣の所へ參るのが嫌だと申しましたと云つてやらうかと思つたわ、そして私を遣つて置いて、敏夫樣や私が世事に慣れないのをつけ込んであんな狡猾な手段で此家の五千圓といふ金を銀行から引出すなんて全て人非人だわ、叔父樣も一つ穴の狐だわ、私あの時氣がつかなかつたら今頃はどうだらう、此家の財産はスッカリ叔父樣やお母樣に横領されて了ふ所だつたわ、私が彼時の心！　よく病氣にならなかつた事、おゝ寒い、一層の事和蘭へ云つてやらうかと思つたけど、またお父樣がどんなに御心配なさるだらう、御心配の餘もしや病氣にてもおなりなすつたら、どうしやうと、今にさし扣へて居るんだわ、其時丁度夏休て歸

って被入た敏夫様に私は面目なくて、私を殺して許して遣って下さいと、お願したら、馬鹿を云ひ、金の欲しい奴には遣るが宜いさ、金をもって腐らかして何にする、僕はね、僕はね、美緒さんさへ取られなければ金なんかどうでも宜いよって私の……、私嬉しくって嬉しくって泣いたわ、和蘭のお父様がお聞きなすったらどんなにお喜びなさるだらう、それにしても敏夫様は今頃どうして被入るだらう、今日は新嘗祭なんだから、お友達とキツト散歩でもして被入るに違ひない、江田島、どんな所だらう、私なつかしい行きたい、早く來年が來て呉れゝば宜い、どんなに嬉しいだらう」、と美緒子はなつかしさうに南の空を仰ぎました、空は青々と高くすんで、鶯でも鳴き出しさうな美しい小春日和て御座います、美緒子は眼を轉じて、若い此家の主人が手植の小さい楓が時知り顔に紅葉して居るかを、さも可愛いといふ樣に眺め入りました。すると大きい燃ゆる樣な眞紅の紅葉がひら／＼と何所からともなく舞ひ下りて美緒子が大きい前髪に靜かにとまりました、美緒子は嬉しさうに「此樣な紅葉が江田島にあるか知らむ、どれあのお羽織にはさんで贈ってあげよう」と鬢のほつれを、かき上げながら、なつかしさうに障子を閉めました。



愛にからまつて居る美緒と敏夫は、繼母の爲に五千圓の財産を掠められた事も苦にしなかつた、敏夫は日ふ、美緒さんさへ取られなければ金なんか何うでもいゝよと、あゝ相愛するものは幸なる哉（選者評）

地

○青春の夢

釜山港南濱街二八方　池田郁子

春の若潮がさして來るやうな盛んな希望の花も、冷酷い運命の鎌に刈り取られて了つて、後に淋しう殘つた枯木のやうな波男にも、例へば小川の水の氷と結ばれ乍ら其底には微かに流れの響あるが如く、夢か幻かのやうに殘つて居て忘れる事の出來ない一日があつたどんな日であつたらう!!。それは波男が未だ小學校に通つてゐた頃の事である。青々とした軟かい若草がまるで毛氈を敷き詰めたやうに萌え出た芝生の、中央にある小高い築山の上に座つて足を投げ出し、手を少女の膝に置て簇る雲のやうな萬朶の櫻花を眺めて居た。少女は從妹の磯子である。馳るやうな東風はそよ〳〵と丘の上を吹いて、一片の浮雲だにない瑠璃色の蒼空からは音樂のやうな告天子の聲が聞えて來る。暖かい春天の麗日を浴びて豊かな頰をオレンヂ色に染めた磯子は、鳴き渡る小禽も、少時は翅を休めて聞惚れるかと思はるゝ迄に美しい聲て、讃美歌を唄ひ出した。さらでも心ゆくばかりの春の日に、快い温かさと、斯んな長閑な歌を聽くのだもの、何うして睡氣を催ふさずに居られやう。波男の眼は次第々々に細くなつて「磯さん僕あ睡くなつてきた!」と顏を見上げて云ふと「オヤ然う、それなら少しの間お寢みなさつたら好いわ、」と云つて、磯子は香水のかゝつた菫色の絹巾布を波男の顏面に掩ふて、また歌の續を唄ふてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「波さん、あの花を一枝とつて來て頂戴よ、後生だから」と、木の間の細い山徑を波男と肩を並べて歩いてた磯子は、脚下の深い谿間に咲いて居る花を指して云つた。見下ろせば珠を轉ばすやうに潺々と岩間を流れて居る細流の邊りに、大輪の百合に似た薄紫の花が一面に咲き滿ちてゐる。風につれて來る床しい香りは其花が送るのであらう。「諾し、折つてきてあげやう」と波男は直ぐさま跣足になつた、「早くとつて來て頂戴ね!、妾こんな淋しい處に獨りで待つてるはいやだから、ね波さん、」と切なげに云ふ磯子の言葉を聞き捨てゝ、草の蔓にすがり、木の根をつかまうて次第々々に谿間を目がけて下りて行くと、

不思議!!

かの異しき花野は何處ともなく消え果てゝ、霧濛々と閉せる谿間の底深く、聞ゆる水の音細う……。俄然「あれッ……、」と胸をえぐるやうな鋭い叫聲が波男の頭上に起つたので、愕然して見上ぐればこは如何に、磯子は怪しい妖魔の爲めに、その白い顔面を牙のやうな爪で掻き搔られて、淋漓と滴る血汐は、散つて紅の花瓣と化し、はら〳〵と落ちて來るので、「磯さん、磯さん！」と波男は殆んど狂亂になり、喉も裂けよとばかりに聲を絞つて、呼びながら、流れに激して雪躍る谿間の岩から岩へと飛びうつゝて行く……。

＊　＊　＊　＊　＊

「波さん！波さん！」と呼ぶ微かな聲が聞へるのに波男は目を醒して邊を見廻はすと、それは懐しい磯子の手で搖り起されて居たのである、「最う起きなさいよ、波さんは何だか大變うなされて居てよ！」と云つて微笑む磯子の、手を慥乎握り、「磯さん！磯さんは先刻から此處に居たのだね、」と未だ全く夢から醒めやらぬ波男が斯う尋ねると、「はあ、さうよ、何故？」「でも磯さん僕は磯さんが、それは〳〵恐しい妖魔に捕捉まれて、あんな慘酷い目に會つて――……僕あ哀しかつた！」



「あッ、妾が妖魔に……あのそれは何のお話なの？、まあ波さんは何かなさつてるんだわ、」と磯子が訝しげな顔をして云ふので、波男は今見た夢の一伍一什を物語つて、萬一眞乎にあんな恐ろしい境遇に陷つたなら、どんなに悲い事であらう？と云へば、優しい小羊のやうな眼を圓に、呼吸をこらして聞いて居た磯子は「あゝいやよ、波さん最う止して頂戴！」と云つて、布巾を顔に押し當てゝよゝと泣き出した。今更に怖しい夢を憶ひ出した波男も、「こんなに親しい磯さんと、何うして別れる事が出來やう!!」と聲を絞つて誓ふやうに云つた。

櫻の花は夕風に散つて雪のやうに、はらはらと二人の脊に散り掛つた。

＊　＊　＊　＊

（選外）　麹町　古谷久子

＊　＊　＊　＊　＊　＊

あゝ春日一刻の眠りに結んだ彼の幽夢が、正しく今日の運命を指示した前兆であるとは、神ならぬ身の誰か知らう。七年の後、波男は磯子の喜びを買はん爲めに功名富貴の花を手折らんと京に出て、「早く出世して歸つて來て下さい！」と云ふ磯子の言葉を唯一の力に、幾多の辛酸を嘗めて風波荒き社會の潮流と格鬪いつゝある間に、妖魔の如き或る紳士は其の殘虐な魔手をのべて、波男の愛して居る磯子を奪ひ去つて了つたのである。

濃艶なる小說、殊に夢の描寫と云ひ、眠りを誘ふあたりの叙景と云ひ、春風二十四番の花、悉く咲き出てた趣があつて優に美くしい、只終りを今少し親切に書いて欲しかつた。（選者評）

人

○妹の手紙

小石川　奈美木　翠

今しも十八日の月は黑く劃られた彼方の山の端から登つて、其淡き光りは寂しき奉天城外の郊野を隈なく輝し、今宵計りは筒の音も聽えず、いとも靜かなる夜である。山の麓を廻つて、緩かに流るゝ小川は月を碎いて金波銀波岸を洗ひ、兩岸に生ひ茂る叢の中には蟲の音さへ漏れて來る。今此さゝやかなる流れに渡した朽ち果てた土橋の上に月光を浴びながら立つてゐるのは上等兵桂一雄である。

彼れは今日故國の懷かしき妹から絕へて久しき音信に接したのを、今此月明りで披見てゐるのである。

（前畧）御出征の兄上樣に斯樣の事申上ぐるは誠に忍び申さず候へども、言はて叶はぬ事に候へば一通りお讀み下されたく候。

兄上樣と栗の花散る雨の夕、彼のプラットホームに惜しき袂を分ち進らせしは、つい此間のよしに覺えられ候も、月日は水の流るゝ如く疾くも其年は暮れて、復も想出多き夏となり申候、そのかみ永きお別れ申せしときは、誠に心細う候ひしが又俊郞樣の何かと御親切に且つは俊郞樣御卒業の曉は……との嬉しきお言葉もあるものから、彼の時は心強くも笑つてお送り申候も、哀れ今日となりては儚なき夢と消えて筆にするさへ淚に候。

其後は俊郞樣の御擧動何となく訝しきふし多く、兄

上様御出征前迄はあのようにお訪ね給ひしを、不思議にも日一日と遠ざかり行き申候、それも初めの中は試験の準備の爲めならんかと、態と妾も御遠慮申せしが、此春目出たく御卒業遊ばされ候ものから、妾は此上なき嬉しさの餘り早速お訪づね進らせ候ところ、生憎今日は是非仕終せねばならぬ用事あり、奥には母も居れば緩々お話しなされと、すげなきお言葉に、うらめしくは思ひ侍れど其日は歸宅いたし候、其後は梨の礫のそれの如く更らに音信なく、お宅には兎角お留守勝ちにてお顔さへ拝するに由なく、獨り心を痛め候折柄、先達而は又鎮守の杜陰にて俊郎様とおひて様の睦まじげに語り居り候をお見受け申し、もしや……と妾の胸は怪しき波の漂うを覺え申候ひしが、何の、決して〳〵俊郎様に限り其のような筈なく、皆自からの妬みよりと浦はづかしく獨り此身のはしたなさを耻らひ候ひしが、それも仇なれ、今宵彼君とおひて様とは華燭の典を擧げさせらるゝにて候。

ア、情なく、口惜しく、妾の此少さき胸は無量の思ひに張り裂くるようにて、うらめしきは俊郎様、悄きはおひて様、一層お二人を呪ひ殺して、と迄思ひ詰め候妾が心の中お察し下されたく候。

ア、されど此れも皆妾が足らぬ勝ちよりの事と、今は誰をもうらみ申さず、只々兄上様御身大事に天晴の御功名願ふより外何の希望もこれなく候。(下略)



(選外)　大阪　池田靜子

讀み去て一雄は故國の空をはつたと睨め、己れ俊郎！財産に眼が眩んだか、覺えて居れ!!!と其の面は宛ら朱を濺いだように紅く熱し、唇を切れよと計り嚙み占め、書狀持つ手はぶる〳〵と震ひおのゝき、忽ち斷々に引裂き、固く握り占めて水中へと投げ込んだのである。

折柄月は一片の雪に其光りを遮ぎられ、小川の流れ急に淋しく、怪鳥一聲頭上高く天の一方に飛び去つた。

短篇にて之れ位の趣考つけば、上乘と謂ふべく、文意も能く達して居る、餘裕もあり、情味もある。（選者評）

秀逸

○平和の光（上）

秋田　庄司錦子

「ほほーい、お君ちやん相變らず早い事つたなあ」白手拭肩に、大縞の胴衣着た二十八九の粋態度の男が曉の初霞を破て、驚た樣に斯樣言つた。此方は十八九の圓顔、色白にて然も愛嬌溺るゝ斗り、昨宵あたり洗ひたらん黒髪を無造作に束ね、仕立卸の飛白の綿入に紅い欅したお君といふのが、聞いたか聞かずか、其方向ふともせず、桃色の半巾にて釣瓶棹の霜を拂ふて居る。

「今日こそはと思た若水迄先を越されちやつたなあ」

「………………」

「おい。お君ちやんてふのに」

「おやお早うございます」顔は依然として口先斗り、

「命迄もつちうお君ちやんの戀人が、去年と云や、遂ひ一昨日凱旋つたげだが、滿二年も此己を振り切た丈に飛び付く斗りだつたべなあ、だが左手無の不具ぢや夫婦になつた將來が仕方あるめい」

「はいつ新年早々澤山仰言い」黒髪はさらつと眞白き頬に亂れて、存外高からぬ聲凛と四邊に響いた。

「いよー千兩々々。夫がまた滅法美いつて事さ。眞個不具にや惜しいもんだ……おつと其樣に酷く汲入ると己樣に此通りの飛沫だ」と尠なからず浴れる裾叩いて見せた。

「どうせ情知らずの妾の事、汲む間は何卒彼方に退いて居て下され」

「ほほー恐れ入た、升屋の孫七ともあろう己に散々腹氣を揉せた揚句の果が、十分水を浴せて立退とは、聞いて愈々惚入たのだ、どうれ序に其可愛手で手水盥にも一釣瓶頒はふか」

「其樣に立派な兩手が着てるのに、さあ御勝手に……：お待遠樣」後をも見ずすた〱霞に消えて行く。

（下）

家の柱は歪めど、屠蘇の香は床しく戸外に漏れて門には相應の松飾もし、日の御旗も出してある床の間には

鏡餅の折敷、由緒ありげな太刀、光り輝く鳶付の勳章など、恭しく飾つてある。

「あゝ好氣持だ。情ない身躰にはなつたが、眞實お君ちゃんのお蔭で、二年振つての若水浴び、全々生れ變た樣だ」言ふ聲音からして男らしい二十五の血氣、腹の底からして愉快げに斯樣言つた。

「おゝ左樣だろうとも左樣だらうとも、何事でも彼事でも過ぎ者さ」と五十路あまりの眞福相なる老母が、しきりに合點て無限の喜悦を禁じ得ぬのであつた。

三鼎に座り居し美しきお君も、共に笑みつゝ酌をして居る。

「吉治や、眞個にお前は幸福者だつちう事さのう、去年の今日なんざあ、夫こそ、此娘が大騷よ、お前が毎年若水浴びるのが例だからつて、それ眞暗中から他人に汲まれぬ中つてのう。其水でそらあ手拭搾つて、お前の寫眞をなあ全身拭てやつただ、其可愛念が屆いて、まあ戰死ねばならぬ身躰が凱旋て來たつちうもんだがのう」

「あれまあ、老母さんこそ一生懸命だつた癖に……でも妾の拭樣が惡かつたんだわ、左手がなくなつちやつたもの」含羞つゝ言つた。

（選外）

無名子

おしまひが一寸振つて居る、全體に輕快な筆つき、惡くすると、すべり過ぎさうであるが先づ無難。（選者評）





○紫陽花

神田　大澤隆子

『御免遊ばせ』いとしとやかに音づれて、格子戸輕う引き明けつ。

來む日曜日には、必ずと約してより早や一月餘、今日や來まさむ、明日こそはと……待つ甲斐だもなきにそゞろ氣遣しく、今日しも清江は下谷なる、親しき花代許、訪問しなり。

『ハイ』うら若き聲して、立迎へしは三五ばかりの色

白く、眼涼しき、桃われに紅さ根掛したる少女。
『オヤ！お須江ちやん、お姉樣お宅……』
隔てなく、打笑みて云ふを。
『はあイ、エ……』と彼方は奥の方見かへりつ、また『何か御用なら私伺つて置きますは。』
と常に似もやらず切口上。
そよとの御音信だになきは、萬一……御病氣にはあらずや。などいとゞしく、心にかゝるまゝ、わざ〳〵音訪れしものを……清江は言ひ知れず、口惜しく、
『イヽエ、別に用ぢやないんですけれど、御門を通りますから鳥渡……。』思はず斯く云ひて、ためらふ。
『左樣ですか。姉さんは駿河臺の華族さんの許へ、お嫁に參りましたの。若し彼地へ行らしッたら、何卒お寄り下さいまし。』と又も冷やかに。
『まあ！お嫁に……？』われと我耳疑ふ如く、忙しう問ひ返したる清江、渾身の血汐も湧くらむやう覺えぬ。あゝそは眞ならむか。今の今まで堅く信じたりし花代樣、やがては兄の……實に君を義姉君と呼ばなむ、身の幸多さ事よ。とくりかへしゝもそも數や幾度。
そも今は仇となりて……。
さるにても心美しうおはしゝ花代樣、高き爵位、光榮ある位地に、心奪はれ眼くらめき給ひしか。
實に我が兄君も、貧しき少尉ならで、さるきはならましかは……。されど……世の人はあれ、彼の君のみはよも……と思ひたりしを。
實に賴み難きは人の心よ。いとせめて、妾は友一人失ひしと諦めむも、やがて凱旋ます兄君を――
あゝ情なさは花代樣、餘りなるは花代樣、恨めしさは花代樣、君は妾のみかは、兄の心をも殺し給ふか。
『御序の節何卒よろしく……左樣なら……。』
さすがに、さわぐ胸をし沈め、聲震はして云ひつ。踵を返す折柄、ふと目につきしは、半ば開かれし、枝折戸に添へる袖垣に、色美はしき紫陽花の一本。

作者は紫陽花の花の色のうつり易きをそれとなくにほはす爲に、結末の一句を加へたやうであるが、之れは必ずしも重きを爲さなかつた。矢張おもしろみは全篇にわたつた應對ぶり、突嗟に起るお須江の胸中の疑惑、失望を描す處にある。（選者評）

○倉座敷　岩代　服部水仙子

（一）

雨垂れの音も絶え〴〵て桐の大葉を渡る風サラ〳〵。
世はまた秋となりて、今日も亦霧の雨窓を打つ。

廊下續きの母屋かけ離れた倉座敷、今千代子の寢臺は運ばれた。義母の計ひ、閑靜なれば病人の爲めにはとは、至極お尤なれど、傳染を恐れての體よき避隔法とは誰が目にも。

座敷の時計二時を打つて、劍ある咳拂ひ一つ、義母の忙がしそうな絹ずれの音、彼方に消えていつた。

（選外）　神田ふみ子

よろ〳〵する身を、乳母に助けられて靜々と廊下傳へ、戶は開けられて、我を待つ薄黑暗、ハラハラと散紅葉の二葉舞ひ込んだ。

「あゝ乳母や私も此處で死ぬのだよ」

その艶のない顏に光る露の一雫、豐かな乳母の胸に何と染み入つたてあろう。

「何とお仰言いますお孃樣！」

しッかと抱いた千代子の體、之がまあ二年前まで、あの福々としてたお孃樣であろうか、いた〳〵しい此瘦せかた、如何してお大切なこのお病人をこんな陰氣な處に入れられようぞ、奥樣もあんまりな！



「竹や早く此のお藥を倉座敷に持つてお出て」

茶の間に響く義母の聲に千代子は我知らず足を踏み入れたのである。

（二）

天井の低い小ぢんまりとはして居れど幽靜なれば幽靜なるたけ微かな物音も心に響く、風通し宜からぬ倉座敷、十疊敷きの其丸窓の許に千代子が寢臺は据へられたのである。床の間の薄墨繪の掛軸稍々古く一輪差の白ばら淸いけれど寂しい。藥の香は早くも室に滿ちて昔を思ひ起す、亡き母の病當時、さては姉が最後の微笑み顏あゝ母樣はこゝて死んだのだ。姉樣もこゝてお眠りなすつたのだ。遠からず私もこゝて……そう思へば懐かしい、いつそ早く母樣や姉樣のお傍に行きたいもの親子三人同じ病氣て同じこの倉座敷て果てるとは、今は義母昔は初と呼び捨てし身の、例の病氣と見れば皆此座敷に押込めて寄りもつかず。あゝ恐るゝは尤もな

れど……

牛乳沸すべく乳母は臺所へいつた。

千代子は、凹みたる目を微かに見開いて見やるともなく見つむる窓の障子、バサリ桐の一葉の散る影うつつた。

「姉樣！」

戸口の方に微かな人の氣配、

「姉樣は入つてもよくつて」

千代子はふと耳傾けて居たがやがてまた、

「姉樣！は入つてもいゝの」

「松ちやんなのア、おはいり」

靜かに戸を開けて現はれたは髮をお下げにした、今年十三の異姉妹。

「姉樣こんなとこ淋しいてせう、何故こんなとこに轉つたの、病氣には惡るくないの？今あたしね學校から歸つたとこなのよ、あたしすぐに來ようと思つたらね、あのう母樣がね母樣が……」

「まあよく來て呉れたのねえ、母樣はいつちやいけないつて仰言たんてせう？ね、それても松ちやん來て呉れたの、ほんとに乳母やと松ちやんばかりなのね、親切にして呉れるのは……私死んても忘れないことよ」

「え、姉樣死ぬなんて……」

ばつちりとした目を見張つてさも〳〵驚いた樣の可愛さ、千代子はつと其手を取つて、

「オ、御免なさいよ松ちやん、でもねえ姉樣はもう……もう……」

サツと一陣の風外面に荒れて、と思ふと

「松ちやんは何です！私があれほど云つたのに……千代さんの病氣に惡るいでないか、さア早く彼方において！」

自慢の金齒ちらりと初子の姿、

「でも母樣……」

「いゝから早くおいてよ」

千代子の傍に居る松子を無理に引放そうとするを、

「あ、母樣どうぞ……」

と立ち起ろうとした一刹那、俄にこみあげて白布を染た唐紅！

「さア松子、早く彼方において……いゝえ聞かないか危險いからさアいくんですよ」

と己も共に走り出てゝたゞ「乳母や！乳母や！」

雨のさゝやき。落葉の響。闇は何者かを呑まんとして襲ひ來た。

對話も地の文も手に入つたもので、殆んど申分ない、只趣考の上に於て、之と云ふ取りどころがないのは、又巳むを得ない。（選者評）

○森の人

洋　松尾弔歌

（選外）

今しも沈むだ夕陽の餘光が直紅、淡紅、オレンヂ色と西の空を茫乎と末ひろがりにぼかして、猩紅色の浮雲がふうわり、鮮かにくつきりと輪畫を取た長谷布引の山麓には夕餉の烟が縷の樣になびいて居る。姫松原の林頭、歸鴉二羽淋しう鳴ひて塒に急ぐ。綾川橋を渡つて秋の草花の咲き滿ちた徑路を二丁計り二重池を回つた自分は軈て愛宕の森に入つた。



美濃　杉山敏子

愛宕の森!! 其れは極く冷靜かて神々しい所。仰げは黄葉した木々の梢が美しい空に彩織りなして、橫なる林の中には落葉がうづ高く堆積つて居る。耳を澄ますと向ふの杉の木の頂きに鵯の鳴く聲がする。樒段を登つて御社に禮拜し了つて、左にだら〳〵坂を下ると又現はれた二重池、其岸を右に暫く歩くと紅葉の木が空を覆つた少し廣い所があつて大きな石が二つ自分は其一つに腰を据えた、と思出した樣に岸邊の葦の中から鴨が二羽飛出した。

物音が絶えて又元の冷靜さに返ると自分は邊りをきよと〳〵と見回したが何も居ない、ふと其處の石に例の絹子が腰を下して居る樣に見えたので、「あッ絹さんッ」と、すがらうとしてはつと驚くと夢？幻！誰も居ない、と其れに氣付くと又例の悲しい思ひがむら〳〵と湧いて來て、自分は重い胸の深傷に又もや自から、なやまうとする。首を俛れて深い〳〵沈思に耽つた。

然うだ自分は悲哀な人の中に指を折られる一人だ、五歳の時に母に分れて又十七歳の時には一人の父にも別れた、其れからは彼伯父の手一つに漸く高等學校の門に入つて一年、今年の夏病を得て此故鄕の地に歸つた

のだ、歸省つて見ると叔父の家には變りは無かつたが自分の許嫁たる絹子の家には母が變つて今年の春の失敗から彼の父も大變痩せた。而も自分の歸省つた時には彼暴慢なる法學士の山田の許へ我が許嫁たる絹子を嫁がしめようとする話が起つて居た、踏み付けにされようとする自分は大に怒つたが、優しい絹子は「繼母は山田の縁續き故、妾は決して嫁きませぬ」と自分に誓つて涙乍らに諫めて吳れた。其後は絹子は繼母に折檻せらるゝ度、自分と此森に入つて共に泣いた、而して其悲しみをバイオリンの譜にのせて自分の笛の音に合奏して稍くに慰めるのであつた。かくて絹子の縁談も永びいて初秋の候となつた時、其悲哀の極みか絹子はふと病の床についたのであつた、會ふ事の出來ない自分は一人で心配のみして居たが、絹子の病勢は遂に肺に變つたとの下女の話。自分はかくて煩悶に煩悶を重ねて居る内、忘れもやらぬ十月の一日「文雄さん私は今死にますけれども心は常に彼森に貴郎と合奏して居る心組てす」と筆の跡もしどろの書置を自分の手に殘して、あゝ遂に薄命の佳人は永い眠りについた。自分も同じ病の身、一時は激情の餘り其跡を追はうかとも思つたが「御前は家を起さねばならぬぞ」との叔父の聲を耳にしては漸くに堪忍えて居たのだ。あゝ戀失ふた自分の此悲哀！あゝ何時の日か又癒する事が出來ようぞ!!

不意にはた〳〵と羽搏一つ、向ふの山へと飛立つた鳥の羽音に、はつと永い〳〵默想から覺めて氣付くと思付いて自分は腰なる一管の明笛を取出し紫紐を解いて歌口を濕しつゝ、吹き出だすは何の譜ぞあゝ思ぞ籠る離愁の曲!!一揚一抑、緩く急く玉の樣な音の森の木玉を響かせて夢と恨むが樣に消えて行く笛の餘韻に恍惚と耳を澄まして居た自分は最早得堪へずして笛も其儘、身を投げ出して泣きに泣いた。

暮るゝに早き秋の日の榮ある夕照の空も藍色に溶けて新星の影一つ二つ、淡靄は早や木の間から犇々と迫つて來る、瑞光寺畔の晩鐘は餘韻嫋々、山から村へ野面渡つて夕の此森に響いて來たがやがて泣くが樣に夢の樣に消えて行つた、かくて此日も暮れるのである。

文の勢ひに藉りて、情をよばふとした跡のあるのは服し難い點であるが、それだけ又文章は上手だ、努めて巳まずんば將來有望の一人（選者評）

○瀧ちやん

越後　中澤文子

涼しい夕の空は、次第に神秘めいた夜の幕に掩はれて

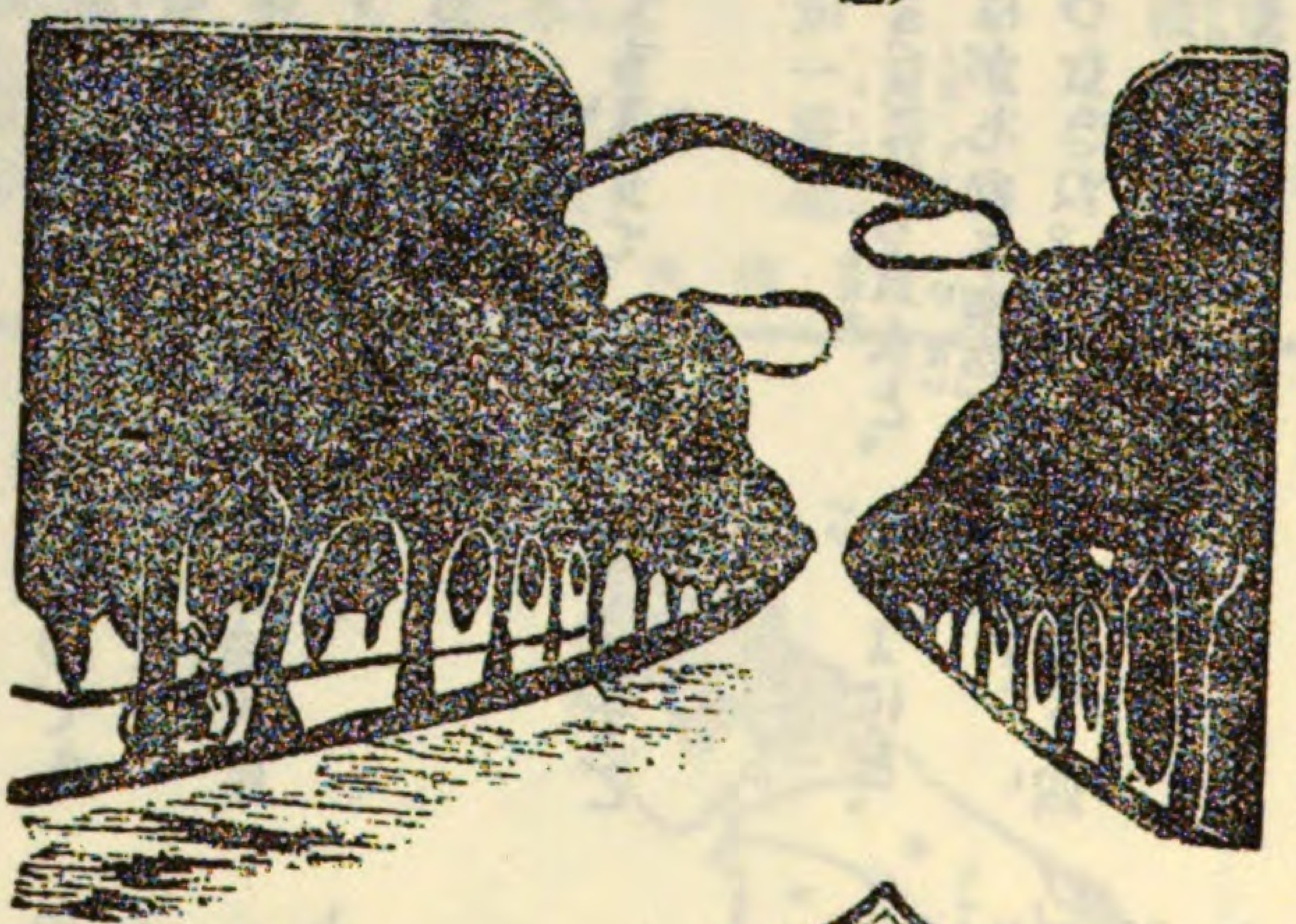
行く。

今し林の間を、縫ふて行く二人の學生、話しの調子はいと沈んで、聲さへうるみがちて、ぼんやりとした空に、松風の淋しげに聞えるばかり。

四方はひつそりとして、をり／＼虫の音とよせてはかへす男波女波の、岩に砕けて、うなるが如き。

女の方は、稍々伏目になつて、假初めに束ねた、洗髪サラリと背後に垂れ、カッキリ其處に、白く浮き出した姿　男は小倉のジヤケツ、骨格は丈夫らしいが、憂き震に、掩はれてか、いと窶れ、男盛りにも、似やらで沈みがちなる、容貌は多感な女性の、同情をひき易い。

（外選）



「貴方學校では、林さん、長さんなどは、妾をにくみなされて、誠に誠につらくつて、此頃では學校へ出るのもいやで。

「あの手紙についてですか。

「はい……あんなものを、あげなかつたならば……

「妾ばかりなら、よーありますが

「あなたのことまて、惡しざまに……

と氣の毒そうな樣子にて、男を見上げぬ。



「瀧ちやん、何にもそれ程、苦勞することはないてしやう、私等の間には、一點けがれた、疚しい心のあるてなし……

「夫んな心弱いことては……

凡て世の中と云ふものは、人の蔭言社會の迫害をうけないで居ると云ふことは、出來ませんもので一度此世に生れ落ちたが最後、免がるゝことが出來ないものです。

『だが瀧ちやん、社會の善不善は、無意味なものでありまして、其度毎に心を惱まして居つたならば、

と言ひ終りて空を仰げば、いつしか無數の星は滿天に晃き、野となく山となくうすぎぬをかけたやう。

『貴方卒業なされたなら、どうなさるの……

『私ツ

『私浮世はなれた山へでも入りて、心ゆくまゝにすごすつもりなの、

『おひとりで、

『だがねー瀧ちやん、できるなら貴女と、一しよにと、

彼は少からぬ面を、さはがしたる氣色

女は紅葉したる面、うつむきぬ。虫の音一きは高く四隣闃又寂。

漸く吾にかへりたる如くかすかに

『妾を、ともに

『はい……

『……

瀧子は、海棠の雨に打たれたるが如き、しほらしき容子もて、ひたと男の胸によりそいぬ。

何處よりか來けむ、燈火一尖うら若き戀人を照しつ清冷なる天地は彼等悠久の福音を、語つてゐるやう、微かなるひゞきに

『瀧ちやん、貴女は私の妻よ!!

『貴方妾の、夫よ!!

とさゝやき交した。

夕の戀がたり、若いもの同士の對話としては、如何にも實際で、間が拔けたやうな、辻つまの合はぬやうな、而して情熱の迸るやうな處は、却つて僞らぬ情が現はれて居る。（選者評）

○津川孤兒院

岩代　梶内小風呂子

東雲台の北の方長谷川の流に添ふて一軒の日本作りの大きな家があつて其西の方に長い平小屋が連てある、入口の正門には黑木造りの冠門が質素に建てられ津川孤兒院と麗々しく筆太に認めたる板札を掲げたるは憐れな孤兒を收容して溫い惠の懷に育てる處とは知られる。

顧ば十一年前の昔日清戰爭の當時長谷村の津川潔美と云ふ青年兵學校出の少壯士官として軍艦扶桑號に乘組

んて出征したが明治二十七年九月十七日大孤山沖の海戰に遂に名譽の戰死を遂げた、此訃音が故鄕に達した時父母兄弟親戚の其れよりも尙ほ一層悲哀の感に打たれたのは彼とは甞て許嫁の園生花子であつた。秋の夜長に廿日餘の月をながめて夜半の小窓にもたれる時靜な水の音寂しい落葉の音が一層花子の胸を惱した。

花子は天に怨み地に恨んで遂に此世を味氣なく思つて樂そ淨土に戀しい君を追はんと決心した他界の快樂を胸に浮べて心父母なく兄弟なく朋友なくもうじつとして居られなくなつた、孤燈の下に筆をとり書遺を机の上に載せて東雲の鷄鳴く頃窃と家を飛び出し長谷川の本流荒浪川の激流を目的して霜を踏み乍ら赴くのであつた、荒浪川の橋欄よりいざや此世の暇乞と身を躍らせんとしては有繫に此世の忍るゝのである、熱き涙の腸を絞つては未練を此世に殘すまいと氣を靜めてあはや飛び込まうとした時泡沫の其れよりも先きに花子の心が躍つたのである其時側に未だしい乳香兒が眠を覺まして寒さと飢に泣き叫ぶ呱々の聲を耳にしたのである、此聲が突嗟の間に起つて痛く花子の同情を動した、こし方の憂に惱んで死なうとした迷の夢も流石に高等女學校を卒業せるだけあつて此れを打破する能力が潜んであつた。薄き襁褓に包れて棄てられた見これを抱き上た時の花子の心は浮世も悟つた人倫も覺つた而して出き得る限り力を注ぎて世にも憐れな孤兒を養育やうと云ふ温い愛情が此瞬間花子の心にむらむらと起つて躊り頷のであつた。

（選外）　磯岡　中村貞子



＊　＊　＊　＊　＊

花子が慈善事業は年を追ふて益々熾になつた長谷の津川孤兒院と云へば近所界隈誰知らぬ者一人もない程にい、批評が弘がつた、初め花子が此事業に取りかゝつた時飽くまでも獨力でこれを貫かふとした堅い堅い決心は少しばかりの資本で養鷄を試みたのであるこれが案外世に容れられて好成蹟を奏したので花子は益々奮つて養鷄業の規模を擴張して今では家禽の數千羽を飼養し其利益で初めの温い事業が安々とやつて行かれるのである、鷄の世話も日覆棚の葡萄も院主と共に孤兒にやつて居るさまは如何にも羨まれるのである、此年廿八歳のうら若い身をひとり寢の寂しさも思はで親の許嫁た亡き人に貞操を守る園生花子、田舍には珍らしくもかよわき女の身でありながら事業經營家として慈善家として名聲たかく響き渡つたにも似ず初めから此事業で世の譽を買はふと云ふ樣な心でやつたでもなければ倦まず飽かず益々全力を傾け精を盡して、擴張する、己が園生の姓を避けて殊更に津川孤兒院と命名をしたのを思ふても誰しも其心根が讀まれるのであろう。

現下百二十有餘名の孤兒は惠の露に霑ほいて育つて行く姉よ妹よ兄よ弟よと互に睦み合つて母よ母よと怩み親へるさま花子の心情抑々如何であろうか。

一種の美談、おぼつかなき筆ゆきながら、其あとを辿つて行く處に多少の情感がある。（選者評）

○心のまよひ

兵庫　柳田暢子

歌子樣それは心得違でなくつて。たとへ片手はなく共日露戰爭で名譽の負傷遊ばした玉雄樣。まして貴女のお許嫁、何ぜそんなにおきらゐ遊ばすの。其れに素行修らぬ春夫樣などお慕ひ遊ばして、昨日も母樣色々てぼしていらつしてよ貴女は名譽ある幸福な御身ですのにまゝならぬ世だとか悲慘な身だとか御自分勝手の事斗り。親友の間柄お氣にさわつたら許して頂戴、妾親友の操樣の悲慘なお身の上をお話しませう。恰度二年前隣へ移居していらつしたのが操樣よ、どういふ者か二十日も立たない中に姉妹の樣に親しゐ間柄になつて忘れませんわ、夏の夜て月に浮れて緑湖畔を散歩して兄と三人て、其時神にちかつて永劫變らぬ花の兄花の妹よと妾怎麼に嬉かつたでせう操樣の手を握りメて泣ましたわ。其夜から兄は病氣、色々看病致しましたがなほらない。する内に其の病源があの操樣の爲と分り

ました、妾怎麼に喜んだてせう眞實の姉様にして見度と思つてた矢先御兩親もほめていらつしやるし。もうわけはない「兄様早くよくなつて頂戴妾が必と〳〵」其夕方限りなき希望をかゝえて妾操様の御書室へまろび入りましたの。恰度新躰詩自然の美といふのをお作りの處で「操様あの妾一生のお願ひ聞ゐて下つて」エ、と筆をお止め遊ばして「あら文子様どう遊ばしたの妾今新躰詩持つて兄様御見舞せうと思つてた處なの今日は御氣分よくつて？そう。何妾に願ひ、さアおつしやいね！」あの氣高い優しい同情に富んだお目でヂッとおみつめ遊ばすの。妾もう感せまつて嬉し涙ハラ〳〵とこぼして一生けんめいて願つて。「兄様を救ッて頂戴眞實の姉様になつて」操様ツット突然妾をこうかゝえて、泣ゐて〳〵「此御情死んでも忘れません其程迄てに妾を……ですが文子様妾……」あ、妾思わなかつて。意外な悲慘なお身上を聞からとは。妾怎麼に自分の耳をうたぐッたてせう。こうなのお聞き遊ばせ。操様の妹様雪子様とおつしやつてお十一歳貴女お可愛想に雙眼共……何といふ悲慘なお身でせう母様御死去の時吳々も雪様の事をお頼みでとう〳〵。もう其時から十五歳な操様此世をお見捨て遊ばしてよ其時の御心中怎麼でしたてせう妾泣かずにいられないワ。此の天の與へ給ふた犧牲の天職を奉じ終生妹が慰藉の友たらんと御決心遊ばしたの。父様も操様をかゝえてお泣きだつたそうで。妾操様に願ッて始めて逢てよ雪子様に。可愛らしい罪のないまる

（選外）　北總　須藤武子



て天使の樣たゞ美しい聲で神の讚美を歌ッていらつしやるの。其れにお目が!! 聞けばお生れなさつてから八年間の腦病の爲に!!「ね、文子樣此白百合の花も月の美しゐのも父樣や貴女や妾の顏も見る事が出來無のですもの」操樣の血の涙!! 斷腸の聲!! 雪樣はたゞ無心に讚美を歌つて。妾 操樣と折り重ッて「ね、永劫變らぬ兄妹よ」とあけやすき夏の短夜を泣き明しましたは御姉妹共悲慘な御身でせう歌子樣世の中にはこんな悲慘な方も有のよ。其れから去年の十月 操樣は父樣と雪樣と北海道の別莊に此のけがれた世をお逃れてした今では全く詩化して自然を友に妹が慰藉の友として思ふ事もなく暮してゐると此間お消息が有つてよ。兄は御承知の通り未だ獨身!!!」

＊　＊　＊　＊　＊

我友文子樣が涙ながらの悲慘なお話を聞いて妾は怎麼に泣たでせう怎麼に操樣に同情の涙をそゝいだでせうそして我はしたなき行爲を怎麼に恥ぢたでせう妾は罪を深く御神に謝すと共に不具なる玉雄樣を慰め永遠苦樂を共にせん事をかたくかたく神にちかひました。

妹の盲目の爲に姉が獨身を守るとは極めて悲慘なる趣向で、作者は前提を多くして、其悲慘を說くに盡て省筆した爲め、讀者はさまで操に同情し難い、終りの四五行、歌子の獨語は稍唐突に見られる、文は可成に書いてある、今後の造詣を待つ。（選者評）

○女敎師

武藏　野本ます子

某校の女敎師月岡綾子は、此邊に見馴れぬハイカラ女學生と田舍の小道を散步して居る。

『ほんとにモー飽々したのョ』つくゞ云ふたのは月岡て、『眞個に左樣でせうね』とハイカラは和するのであつた。『何方を見ても土臭い樣な、マ、私が師範校を卒業してからはモー氣に食はぬ事計りで』大氣焰て言ひ終ると、冷やかに笑つた、『全然ですよ、附屬小學校て敎へたとは全然違つた樣な生徒』

云ふ時突然に大きな聲は、彼方の畔道から、『ウワーイお轉婆!! 庇髮! 月岡敎師』クワッとして『ね貴女あれですもの折々私は獨り泣きに泣くのよ?』

ハイカラは同じ師範校時代の朋友であらう、返事の仕樣もないので、只受け答へして居たが、急に、『では貴女どちらかへ御轉校になつては!』『さ、それです』と初めて莞然して、『私の鄕里……ね、あれは一寸開けて居ますから、多少私の理想も行はれるだらうと、思ひますので、實はね、內々運動はして居ますの……』

云ひ終ると、得意の色は滿面に表れたが、忽ち不安の色に變つた。

* * * * *

運動が効を奏した譯か、それは知らぬが、月岡敎師は望み通り、轉校の辭令があつた、嬉しがつた事は一方でない、常に我が理想が……理想がと、云ひ續けてまさに出發せうと云ふ、此日は丁度ホロホロの小雨、肌寒い寂しい日であつた。正に樂しい希望を心に滿せて列車の人となつた、急にプラットホームへ出て來た一隊の女生徒、それには一人の敎師が附て居る、思ふ間もなく横にズラリと、月岡敎師が乘つて居る車の窓の下へ列んだのである、『さ先生へお別れするのです』月岡敎師は驚いて窓から覗いた、小雨の中に傘をさしたのもあれば、手に携げたのもある、ソレ涙ぐんで居る、泣いて居る俯向いて居る、慕はしげに瞻めて居る、一列の生徒をズッと見た時、思はず身躰はシーンと引き締めらるゝ樣な氣がした、あゝ此愛すべき生徒を土臭いと罵つたのは何事か、飽々した氣で數へた生徒が慕う眞情から送つて呉れたのを思ふては、恐ろしい樣な氣も起つた。

あゝ此の時、初めて與へられた天職の神聖を知つた、そして今迄それを汚して居たのを悟つた此時に於て今迄の生徒は轉じて、自分の師であるのを感じた。

あはれ此の時の感謝の意は到底言葉には盡くされぬ僅かに一滴の涙を以て答へられた、

* * * * *

汽笛の音を別れの合圖とした以來彼の月岡敎師の態度は全く一變したとのことである。

（選外）　紀伊　木村牛女



改心の動機が如何にも尤らしく、力を籠めて書いてあるから、能く讀者にも得心を與へる。（選者評）

○金さんの浮世　　三河　つま子

金さん、年は二十四の男盛り、それが不意と家を飛び出してから今日でそう五日許り、はて何うしたのでし

よう。

金さんは、大の馬鹿で、金と言ふ名より外は自分の年も所も知らない位ゐな、身躰は親爺似で随分頑丈造り、その上小力も有て智恵さへ人並なら立派な男一人てす其が丁度何て、内を飛び出します前の日で、不意にブラ〳〵と妾の家へやつて來まして、妾が機織をして居る椽先に腰を掛るのじやありませんか、金さん今日は何したのと聞きますと、大層に蒼い血の氣のない顔色て、ジロリ〳〵と妾を見るのですもの、何だかよい心地はしませぬ、で更に今日は何したのと重ねて聞きましたら、こんな事言ふのでした「何うするじや無いが俺あもう死んで仕舞ひたいだ、食ふ物は無いし、お父は居らぬし、生きとる張合もないから……」、妾は吃驚しました、其は外では有りませんが、馬鹿な金さんの口から何うして此樣な事言ひ得たのかと、それはもう此樣な筋の立つた事を一度も聞かされた事がないので妾は疑ひましたそこでしげ〳〵と其の顔を眺めますとボカンと開いた限りの口と、どんよりした鈍い眼の光とは平常に變らんのでしたが、何も今日は何か悲しい煩悶でも包んで居るかのよう、其は無論妾の心からで。金さんはブイと其の儘立ち去りましたが、其の後影は見えんでした、があり勝ちの珍しくない事ですから村の人達誰も心に留る人もありません、でも妾しは其の言葉が思ひ出されまして心配でしたから其を兄に話しますと、馬鹿の言葉をと笑つて取り合ひません、其れにしても一たい金さんは何うしたのでせう。

それはもう金さんは世の最も哀れな一人です、母親には七歳の時に逝なれまするし、父爺と言ふのが大の呑助て、家屋敷まで呑みつくしたあげく夜逃をして仕舞ひまするし、獨殘された自分は大の馬鹿と言ふ境遇ですもの、村人の情だつていつまで續きませう、可愛そうに二日も三日も水を飲んで寢て暮らす事も少なくないそうで、が感心にも正直てした。

さよう金さんはいけない事には仕事が嫌なので、あの樣な躰を持ちながらも食ふ事に困つたのです、其れは餓じい時には随分働きますが腹がよくなるとブイと飛出すので、二三回で懲りて誰も雇ひませんでした、其内金さんにはよい報がありました、それは父爺が七里ばかり距つた町に來て商法を開いた事で、でも金さんは行かなかつたのてした、矢張生れた里が戀しいのでせうか。

あゝ其の金さんは何うしたのでせう、家を飛出してか

ら何の音沙汰もないのですが、もしや死んだのではありますまいか、浮世をはかなんで、生甲斐のないのをかこちた其の言葉から考へ合せましても死んだのに違ひありません、あゝ金さんは屹度死にました、そうまことに悲慘な一生でありませんか。

＊　＊　＊

大層な心配だつたが金は戻つて來たよ、と十日目の晩でした、兄は妾に言ふのでした、妾はその時何なに驚たのでせう、實を言ひますと妾は内々金さんの爲に廻向してやらうと思つた位で。

金さんは何うしたのと聞きますと、唯遊で來たと許り其れからは又悲慘な日を送るのです、ああ馬鹿は何處までも馬鹿でしやうか。

馬鹿とか狂者とか、毛色の變つた人門は寫しよささうて寫しにくい、それは觀想がわざとらしくなるからて、此作者は事實上に材を採つたか、想像より來たか知らぬが、無雜な點は手柄てある。（選者評）

（選外）　佐世保　汎　愛　子



○お靜

長野　幽蹊女史

ソッと涙を拭ッて座敷を出た靜ちやんは、今繼母の折檻を受けたのて、夫れて思はず不覺の涙にくれたのである未だ十三と云ふ蕾の身ながらも、浪風荒き世の潮流にもまれてちさき胸の裏にも堪へず苦悶の波が打つてゐる。靜ちやんは實に不幸な子である。慈母樣には六才の時に別れて、夫れから間も無く今の繼母樣が迎へられたのであッた、それから父樣が其翌年の秋、流行病てつい落命なさッたので、殊更に繼母の我儘、殆ど其極に至ッた。最も獨の兄樣があるので、夫れを唯一の慰藉として、繼母の苛責も甘受して居た

のであッた、然るに唯一の慰藉ともし、杖柱ともたのんで居た兄様が、補充兵として召集され不日入營せねばならぬ身となつた。靜ちやんの悲しみはどの位で有ッたか只、『兄様！妾を可愛いとお思召たら萬望生て還ッて頂戴ネ兄様、妾死んでも待ッてるわ』、是が最後の訣別の言葉であッた。——母は寧ろ喜んで居た——泣いて泣いて泣き盡したけれど、兄様は戰の終る迄は歸られぬ。

二三日前の事兄様が戰地へ出發からと云ふ手紙の中に『吾等二人は實に不幸な身の上である、雖然是も運命で致方がないお前は嫌でも有うが留守中は殊更忠實に孝行して居てくれ、僕も戰さが終はすぐ歸てお前と幸福な生涯を得ようから夫迄は何卒辛棒して居て呉』と云ふ事が書てあッた。すると此書簡が不幸にも繼母の手に握られて終た、『何だとえ嫌でも有ふが孝行をしろ！オホヽ、聞てあきれるよ、可よ嫌でもなんて致方無の孝行なぞは眞平だよ、不幸者奴が！オ前と兄様とが同意になッて獨の母様を厄介者扱い、一躰母様を何だと思ッておいでだい、養ひの親の恩も忘て、夫な不幸者はも一親とも子とも思はんから、何所なりと勝手な處へ出ておいて』ア、情無い御言葉行けと被仰て何處へ行かれ様『お母様皆妾が悪かッたのですから勘忍して頂戴チ、致方無なんて夫な事を假にも思ッて可ものですか、其は兄様が何かの間違だろーと思んだからネお母様』再三再四お詫もし申譯も致が、繼母は頑として聽かぬのである。

原作は猶ほ終りの一節ありてお靜は家出し里川へ身を投げると云ふ筋になつて居る、併し其れては餘りお話じみて、昔の繼子いぢめを焼直したやうで、十三の子が自殺する動機として受取り難い、故に其一節は割愛した。（選者評）

▲東洋女學校の生徒募集　小石川の東洋女學校にては來る四月の新學年に際し第五年級以下各級生徒合計百五十名を募集する由にて入學志願者は三月二十五日限願書を差出すべく監督舍へ入舍を望む者は同十五日迄に願出づべしとのことなり尚同校は德育に重きを置き修身科の外毎月第一土曜日に校長村上博士其他名士の修養談ある外今學年より科外として和歌及挿花を教授し和歌は文學士尾上柴舟氏擔任する由なり因みに同校創立後日尚淺きも眞面目との評あり男爵岩崎久彌氏も同校の趣旨を賛し此程金壹千圓を寄贈せられし由



消息文

文學士鹽井雨江先生選

秀逸

〇久しく音づれぬ友に

茨城　小泉濱子

あはれ秋もやう〳〵くれ行きて、片田舍の淋しさ、一しほまさり、夜な〳〵すだく虫の音さへ、露草と共にかれはてゝ、千草に舞ひし胡蝶のかげも、はやいつしかうせ、目にうつるもの皆哀れにて、只翠りにして昔の姿床しきは、常盤樹、それのみと相成り申し候。妾は、此の淋しき自然の景に對するごとに、いつもあなた樣の事思ひ出されて、そゞろになつかしく、涙に暮るゝにて候。碧色滴たる高きみ空に冴え渡る今日此の頃の月、あゝ此の月!! いかに眺め給ふにや、御樣子こそ承はりたく候へ、妾はかはりなく、父母の膝下にて、家事の手傳やら、弟妹の世話やらに、日を送り居り申候。小學校にありし弟の、幼稚園へまゐり。幼稚園にかよひし末の妹は。今年初めて小學校にかよひ申し候。夜々、親子兄弟うちつどひ候うて、樣々の物語りに、時のうつるも覺え申さず候が、いつも妹が片言ならべて、學校にて聞きたるはなしのおさらへいたし候ふに笑はされ申し候。

一昨年の秋、共にかざして寫眞とり候ひしが、美しき紅葉も、殘りなく散り落ち候につけて、ありし昔を思ひしのばれ申し候。

昨日拾ひ置きし庭の紅葉、一ひら二ひら封じこめて、送り上げ候間、本のしをりともなされ給はゞ、本懷の至りに候。

あはれ、御暇もおはしまさば、御返りことたまはり度く朝な〳〵小川の岸の枯木のもとにて、郵便の來り候を、たのしみまち暮らすべく候。

まづは右申し上げ度くて、あら〳〵かしこ。

（雨評）難ずべきところも、さしてはなけれど、また特に取立つべきよしも見えず候。

〇懷しき兄上の許へ

下關　水月女

露のやどりの明け暮れに、袖しぼらぬをりとてはなく一日一日と徒に過ぎ、今年もいつしか秋立ち候へ共、父上の御病氣は癒ゆべくも見えず候。然し、さして惡

くも成らせられず候まゝ、み心休ら給ひてよ。今日も朝とくより、お薬貰ひにとて、岬峠をこえ候へば、麓なる母上のみ墓より打招く尾花が袖も懐しけれど、ひとり待ちます父上の案ぜられて、行く足さへもしどろもどろ、裾にまつはるしがらみも拂ひかねてぞ急ぎ候ひし、ああ今日も暮ぬ。今宵も父上と澄み渡る月を詠めて、昔の事ども語り出で候。今は父君もおやすみ遊ばし候へば、只一人燈のもとの物思ひ、身にしむ夜半の秋風寒く、つゞれさせてふ虫の音に催されて、冬の衣のもうけ致し居候へ共、そゞろに物の案ぜられ……兄君戀し懐しさのやるせなさまゝ、針待つ手先しばし止どめて、かくはみだれし筆はしらせ候。心の内推し給ってよ、かしこ。

（雨評）其情は誠にやさしくきこゆるものあれど、筆はまだたど〱しきをしむ。

○出立を友に報ずる文

讃岐三本松　さつき

かねてよりかゝらんとは思ひ候へ、さりとて餘りに事の早さよ、いぬる年の文月より、朝な夕なに、師とも友とも頼みわたりし鎌倉の海山にも、あはれ、なげきてる賤が身は、遂に袂別つべき悲境に、おちいり候ぞや、實に涙もろきものゝ習とて、先立つ物は、袖時雨のみに候。まいてや、君のゐます事の都とは、雲井遙に打ち隔たり、かついはけなき弟さへも、此の地に殘し行くことの悲さよ、いかで筆や言葉には盡すべくも候はずよ。さはさりながら、たゞ徒らに、なげきの淵に沈まんは、いとをこなる業の限に候まゝ、苦しき心堪へ忍び、明日の朝まだきに、此のなつかしきふるさと遠く、西の國べに出で立ち待るになむ。あはれ君よたとへ海山千里の雲はいかにへだて候とも、必ず隔の垣は結び給はで折々には賑ひ勝る都大路の様など、もらし給ひてや、猶聞え参らせ度事はみ空の星に似て、數へ盡くせず候へども、あすの調度ものするなど、殊の外いそがはしうてなむ。何れ彼地に到りつきし上、萬くわしうも聞え奉らんを、必ずあしくは、思し召し給ひぞ。先は右御しらせごとのみ、あら〱かしこ。

（雨評）未だ練熟な欠くものあり。

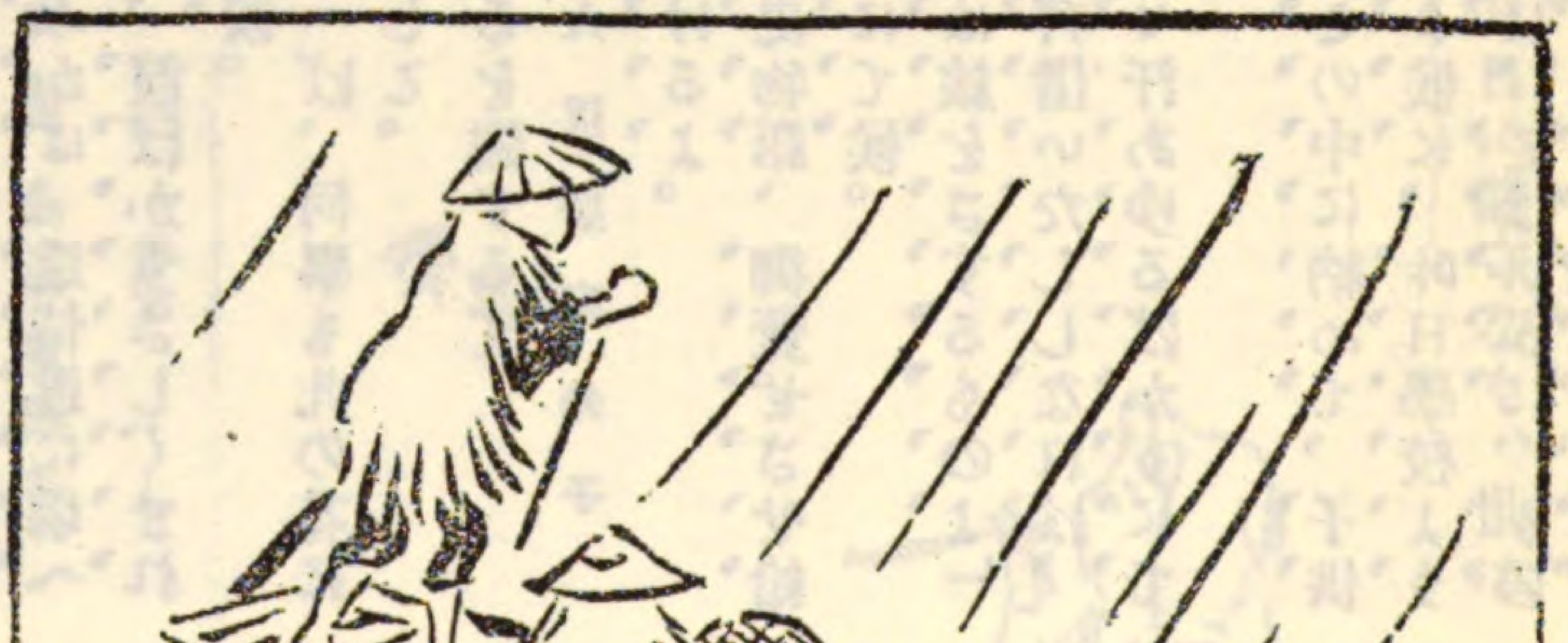
○妹に

日本橋　遠藤ふき子

七日付けの書面拜見いたし候。そなたには辛抱出來兼る故。郷田の家を出たしとの趣き驚き入り申し候。そりや嫁に行きたては、隨分つらきものにて、夫は勿論姑や小姑召使等への氣苦勞、一方ならぬ事とは推し候へ共、そは敢てそなた一人がするにあらず。今奥様と

し崇めらるゝ人、おかみ樣とし呼ばるゝ人も、皆始めはそなたと同じ思ひを致しゝ者にて、詰る所今の奥樣おかみ樣は、其のつらき悲しき關所を堪へ忍びて通り越しゝ人に候。妾なども此の家に嫁ぎし當時は、夕暮など裏の井の邊りに出てゝは、幾度涙を拭ひ候ひしよ。さはれ、妾の家といふは、此家より外になきを思ひ、何事もこれが自分に廻り合せし因とあきらめ、自分一人にて耐へ居り申して候。されば、どうやら當家は他より風波の少き樣覺えられ候。要するに其の家の樂しきと否とは、其の家の主婦の心次第に御座候。白き藻の花一花封じてめん〳〵、この花や、冷たき水の上に開きをり候ものなれど、妾は曾て此の花よりして一の不平を聞きし事なく、一の怒りの言を吐くを見し事無之候。よく己が境遇に安じて、流れのまゝに逆はず敵せず、なよ〳〵となびき居るを見候。何卒此の品高く色清き花を、手の平になと載せて能々お考へ直しあられ度く候。

（選外）三陽 加藤よし子



○親しき友の許に

筑後國 大島××子

一樹の陰に宿り、一河の流れを汲み候も此の世ならぬ契りとこそ申し候へ、さるに、久しく、同じ學び舍に宿り、恩愛の流れを汲みし身の、今は山河遠く隔てぬる西に零落ひて、夢ならでは會ひがたくさても浮世の年月は、昨日と暮れ、今日と明けつゝ、早くも去年別れにし花咲く春の空眺め候ては、懐かしき御許樣をしのびつゝ、思ひを曉雲に乘せて、ひれ伏して、そこ冷たき石に啜り泣き候よ。憂き事繁さ、胸の傷みにえ堪へて、飄然家を出てつゝ身を芳草に横へて、去年の春、花の片ケ瀬に、滿目皆エデンなりと只行樂に、人生の果敢さを嘆く人をば、春明方の夢物語と聞き流し候身の、移れば變る世の常の習ひとは云ひながら、今は我が身の上になりぬる悲しさよと、追懐の涙に袂を濕し候。さるにても花は昔にかはらぬ色香清くして、一本櫻蕾を破りそめて候につけては、徐に

吹く面上春風の聲に斷腸の調べを聞き、青春快樂の子を羨みては、ひたすら御懐しさに堪へず候。綿々たる哀情、しのぶれど色に出て候のみかは、遠情遂に堪へがたく、筆とり候へ共、悲しや、涙ばかりさしぐまれ候て、思ひの半をもうつし得ず候。

これに半開の櫻花二輪添へて候へば、何事も此の花に姿が意を御尋ね下され度候、かしこ。

○借りたる書籍を汚せるを謝する文　大阪　露滴光子

あはれ申しわけなき事をし侍りけるよ。

只今人しておかへし申し侍る歴史物語、御覧ぜさせ給ふごとく、表紙に墨ぬりたる事にて候。

大事がらせ給ふを「可愛き子には旅をさするものよ」などと、無理にこひ参らせて、拜借いたししなれば、ことさら申しわけなく、滿身たゞ汗あゆるばかりにて候。

常に學校に參り候ときは、手ばこの中に納めて、子供などの引き出さぬやういたし置き候に、昨日學校より歸りて、ふと机の上をながめ候に、こはいかに、かの書の表紙繪の、弓もちたる武士は、いづくにかくれけむ、たゞ筆のあとのみ黑々としたるに、おどろきて、誰がしわざぞと、つゝみもちたるまゝ、詮議いたし候へども、誰れもしらぬよしてたへ候、折柄、門にあそびし弟の入り來り候て、「姉上よ、ゆるさせ給へ、我れ罪ふかき事したるを」と涙ながらし候に「何事ぞ」といへば、かくかくとこたへ候に、きけば、お友達のとはしらで、かの書に墨ぬりしことを、仔細に物がたりて候あはれ一度は私も憤り候へども、又思へば、罪犯したるをさとりて、萬づつゝまず述ぶる心の、最いぢらしう候て、いかにも姉が佗び聞申し侍らんと慰め置き候。

表紙を汚したると、いと申しわけなく候へ共、中なる文字には、幸ひ一點の汚れも無之候間、何卒ゆるさせ給ひてよ。泣くなくわぶる弟の心もおしはからせ給ひて。萬づたいめの上にこそかしこ。

○都の友へ釣葱を贈るとて　三河　霞溪女史

眞夏の空ながら此頃の暑さには、そゞろ釜中にある心地すなるを、少しの餘地もなう居並立ちならべる都の地の、さぞかし嚴しう候はん、お許樣にはいかゞ過ごさせ給ひてか。希望みちませる御身の上、よくぞいたはらせ給ひてよ。さてをや、是れなる葱草は、過ぎつる去年の春、別れてもかたみに偲ぶよすがにと、み手づからわが家の庭石に植ゑ給ひしものながら、三年の雨露に霑ひて、かくも生ひ盛り侍り。あはれ宣ひしざれことの、いつしかに實となりて、落葉堆き細谷の宿

露にけさ秋分ち參らせてより、しかすがにいとほしき御面影の葱の草に偲ばれて、朝な夕なを鳥が鳴く東の空にあこがれ侍りしが、流るゝ月日に關守なく、世はまたも軒の釣葱に親む夏とは遷り侍り、別れては中々に相見えんのよすがもあらねば、せめてもの心遣りに庭石より取りての忘れ遺身、遙々送りまつるになん、風に搖ぐさゝらの葉の涼しさに、ふる里の夏を忍び給ひなば、はしたなき妾の心をくみ、文机近き丸窓のほとりにつらせ給ひてよ。ゆめの心づくしを仇になし給ひぞ、先は御許樣戀ふる心を、釣葱の草によせて、あら〳〵かしく。

（選外）　山城　鈴木きく子



○愛子を失ひし友へ　神田　山本富美子

八重樣御事、小學校御時代の御筒袖姿、勇ましう見上げ奉り、末たのもしく思ひ奉らせしに、餓なる御症にて、唱歌の聲又と伺ひ難く成り果て候事、夢の世と申しながら、いと〳〵果敢なき極みに御座候、朝な〳〵大路ゆく童の、同じ羽織袴など着たるを見れば、やゝご歸もかけなき計りなるに、今はおはせぬ成けりと思ひ返しては、只涙のみこぼれて候。又御前樣には、常よりの御病にて御ふしどにても居給ふ樣聞及び居。實にやる瀨なき御歎きはさる事にて、今更數ならぬ妾が、もゝ度千たび聞え上ぐとも盡くまじく、果た失禮なる御事ながら、仄かに承り候へば、ひたすらの御いとほしみに、御いたづき中なる御身をもいとひ給はず、風雨をもしのぎて、日毎に墓まゐり遊ばされ候由。母たる御身として、さばかり亡き子の御魂を弔ひ給ふ、さる事には候へど、世にはめの子をの子など數多おほしたてたる甲斐もなく失くしはて、

親のみ獨りのみとり殘されたるも、間々あるならひなるを、御前樣には心やさしき御娘子たちの、いとおほくおはしませば、幾分か御心を慰むるふしもある可く今の此御歎きにのみふしゝづみ給ひ、何事もうち捨て給ふやうにては、御子樣方の心細さもはかり難く候へば、何事も御心強う思ひ返され、御身の御保養なさるべく、ひたすら、祈りまゐらせ候。妾もかねて杖柱ともたのみつる妹を失ひし悲しみに思ひ比べて、唯今の御さま、かばかりと思ひやり奉り候まゝ、かくは文し上げ候かしく。

○香港なる兄上の許に

熊本 財津すみ子

あゝ思へば、過ぎし十二月卅一日!!! 忘れやうとしても、どうして忘れられませう。いざや出發といふ間際に、ステーションまで見送ッた私を、人なき所に呼んでさま〴〵の御訓誡一々胸にしみ込んで泣いたのは、今の今まで私の胸に殘ッて居ます。その時に、紀念にと下さッた白絹のハンカチーフ、ヴワヰオレットの香床しい、ハンカチーフは、彼の母樣の御かたみの蒔繪の手箱にをさめまして、兄樣戀しい時に取り出して、薄く殘ッた名殘の香をとめては、兄樣のやさしい心を慕ッて居ます。兄樣が學生上りの一人の初旅。まして遠い〳〵ホンコンへ行ッて、實業界へ身を投ぜうとなされるのを、老父樣は大變心配して居らしたが、今では大きに御安心なさッて、案んずるより生むが早いと繰りかへされます。兄樣は歐米人を相手になさいますのですから、大和男子の氣性をます〳〵發揮して、引いて帝國の國威を發展するやよう、片時も忘れない樣願ひます。日にまし暑さ烈しい頃になりますので、御からだ大切に願ひますよ。本日小包で手編の靴足袋二足御送致しましたから、その御積りで。ではさよなら。

○久しく逢はざりし友よりのかへし

茨城縣 石塚露江

瑞枝さす青葉の蔭はしげけれど、暑さのみ日に日に、增しゆく今日此頃戀しの君には、彌々御健かに御座してとの御玉章、繰返し繰返しつ、ありそのかみの事ども忍ばれて、懷舊の涙止めも敢へず候。あはれ懷しの君よ、磯松傳ふ涼しき風の袂を拂ふ夕日の岡に、御別れ申してより、三年の星霜に、唯々夢にて候ひぬ。あゝ、何とて逆卷く浪風の、かくは激しかりし三年よ。妾は如何にして此の浪風を凌ぎ果しかを覺え申さず候今ゆくりなくも、遙知の或る夫人の同情によりて、此處蓬の草そよぐ此の沼邊を、永住の地とは定め申して候。千萬無量の情緒を棄てゝ、朝夕一葉の葦わけ舟に、彼の野の花の一曲の唱ふるの樂天地の身と相成り申して候。あゝ餘りに石火なる心の――境遇の變遷に、われながら驚れ候ふよ。何にとて心強くも、三年の永き其の間消息給らざりしつれなさやとの御怒り、さこそ尤にて候へども、往時の好みに御免じ下され度候。あゝ戀しの君と、鴛鴦波こまやかなるあたり、一葉の舟を泛べて、三年の涙多き妾が歷史を、物語らまほしう覺え候を。せめてもよ一日のお遊びを。呉々も御身の御出ましを待ち樂みて、斯くはあら〳〵と、なしき筆とめ申しつるになん。かしこ。

○都の友へ(都の友よりの返し)

徳島 佐藤きん子

よべの雨、名殘なう霽れにし朝に候。湖風の淸きが音づるれば、綠葉に涼しく笑める露の白玉の、ほろ〳〵と滴たるは、げに惜しき心地いたされ候。またしても古めかしきとには候へども、わが小さき庭の秋の景色いさゝか申し上ぐべきに候ふ。小さき庭とは申せ今を盛りの秋草の花々、げに立田姫が綾錦を織りなせるそれのやうに候。朝な〳〵、その花々に埋れたる庭の飛石づたひ、靜かに運ぶ庭の杉下駄、かろきが心地よ

う候。先づ少女が唇に裝ほへる口紅のそれに似たる鷄頭の美しき、奥ゆかしき枯梗藤袴、鳳仙花の白きが崇高く、秋海棠の優しきとり〴〵にうれしく候ふ、白菊黄菊はまだ蕾かたく候籬にからむ朝顏の日毎々々に小さくなりゆくも、あはれ深く候、夜な〳〵其花々の美はしきを屋根として、すだく虫の聲々、心淋しくも候ふかな、晝は、里のうなゐが蜻蛉釣る聲のきこえ候。窓を推せば、いさゝ小川の流れを越えて、吹きくる秋風、肌に心地よう、とみれば門田の黄金の漣、いと穩かに寄せるにて候。田畔に立てる案山子の姿可笑しう、今し呼子の音に群雀のポッと舞ひ立ち申し候。里はこれより秋に候ふ。小さき園守もやがて忙はしくなるべきに候ふ。かしこ

○金城の友に

能登花螢女史

この紅葉またも錦織りなす頃は歸りくるほどにと云はれて別れ申ししが、我が門の紅葉、頃日美はしう錦色なし燃えんばかりに候へども、君には御歸りもこれ無く、いとわびしく候。あゝ思へば、昨年の日暖き七月に候ひしよ、君と共に別れを惜みて、十五夜の月影清き袖が濱邊に、只二人……語り交して、さて、その果に、白き眞砂に「永しへに」と君かけば、寄せくる浪に跡もなう消えつ、「雁のたよりは」と我れ書けば、又しても浪は消し去りつゝ。惜みても果しなければ、遂に手をば握り合ひてこそ別れたりしか、お別れしてより月圓かなる事七回、其都度ありしそのかみ偲ばれて、君懷しさ思ひに堪へず候。卷き込めし野菊は、去年可愛らしとて、妾が手取りて君の御髪にかざしし小山の邊りのそれに候。

此の頃は、彼の山の紅葉など、誠に見事にて、諸人は昨日は紅葉見、今日は茸狩りと樂しう遊び居り候へども、君いまさぬけふは、妾には只徒らに涙の種に候。いかで妾が切なる心汲ませ給ひて、情けある君が御言葉賜はらんことをいのり居り候。

○昔の友の許に

伊藤霞葉女

暑い〳〵と口癖の樣に言ひし、夏も過ぎて、早や、庭の木の葉の落つる頃となりましたが、如何在らせられますか。三津の停車場で、つきぬ名殘りの、袂を別ちましたのは、早や一年前の事でございました。それから後、私はもう親に別れた程に寂しうて〳〵、袴を見ては思ひ、野原を散歩しては、思ひ、學校へ行つては、思ひ、いつもあなたのことを思ひ出さぬ事とては、ございませぬ。お悦び遊ばせ、いつぞやあなたと二人があの花園に植ゑた菊……今はもう氣高い愛香を抱いて、咲いて居ります、そうでした、丁度其の時互に手を握り合つて、約しましたこと、あなた、まだお忘れではございますまい。

私はもう、此の美しい菊を見る度に、昔のあなたが、思ひやられます。聞けば、あなたは豐かな平和な家庭に、お暮らし遊ばさる由、お羨ましうぞんじます。此の上はたゞ一つのお願ひ、どうか、昔の友と思つて、何時までも、親しくして頂戴よ。

○絹葉書に添へて戰地の叔父に送る文

山埜じん子

勇ましき叔父上樣……。(第一信)右手には軍刀ひらめかし、左手には朝日の御旗を神風になびかして、進めの號令勇ましく、爾靈山のやうな、あの正源寺山へ、勢ひよく進んで行かれるのは、叔父上樣の可愛い靈雄さんで、今敵をあの山へ攻め寄せて居らるゝ所でございます。これは、妾が昨日の夕方寫生いたしましたので御座います。

なつかしき叔父上樣……。(第二信)これは、叔父樣が奉天の大勝利の際に送くつて下さいました鐵條網を、叔母さんや重ちやんや近所の人々樣がながめていろ〳〵の談しをして居らしやる所を、妾がすさびに寫したのでございます。人々はこれを見て、我が軍人の方の勇ましい働きを感心して居られます。

慕はしき叔父上樣……。(第三信)これは奉天の祝捷會の寫眞で、今眞中に十人斗り居りますのは、尋常小學校生徒の音樂隊で、右より三番目に、小太鼓を首に掛けて居られるのが、あの重ちやんでございます。重ちやんは大そうよく出來ましたさうて、人々が譽めて居らしやいました。妾もうれしう思ひます。叔父さんもうれしい事と存じます。さよなら。

抒情文



文學士鹽井雨江先生選

秀逸

墓畔の涙

靜岡　靜枝

甘泉殿の花も痴風に破れては露泪に咽び、驪山宮の月も狂雲に隱れては蛩石を吊ふ、諸行無常の世と云ひながら、人はかり果敢なきものはあらざらむ。春の朝、花を愛づる人も、夕には北邙の風に失せ、秋の宵、月を賞する人も、曉には東岱の雲に隱れむ。哀れ、浮世は夢か？そもまた夢が浮世か？あたり打ち見やれば、露、路芝に重く、寂として人影絶え、嵐、松が枝に咽びて、蟲の音幽かなり。古墳斷碑淋しき月影に照されて、哀れそが下には幾百の魂魄や眠むる。子に飽かで來し親もありなむ、親に別れし子もありなむ、あるは姉に、あるは妹に、その樣こそ變れ、死を厭ひ生を樂しむは、なべて人の情なれば、逝く者は千行の血涙を含みて土に歸せしなるべし、殘れる人も幾度か薤露の歌に咽びしならむ、吁人生は夢の如く、無常の風吹き荒み、浮世は幻に似て、不定の雲いと深し。

あはれ、君にはかくも一片の石とかはりしか。水魚の交りもたゞならざる君と妾、いつか身に咲く花紅葉、共にかざしてながめんなど誓ひしこともありき。ある時は、浪風あらき浮世、迷路多き此の世、身をいたむるな、道に迷ふな、文よくせよ、歌も習らへよと、嬉しき御言の葉。今なほ耳に殘れども、文かき歌よみて、たれにか見せまつらむ。あはれ文よくせよとは、此の悲しみうつせとにはあらざりしならんに。歌ならへとは、この哀れうたへとにはあらざりしならんに。あゝかの誓ひはあだなりき、かの言の葉はついに遺訓とはなりぬ。

哀れ、花は無情の風に散らされ、月は無心の雲に蔽はるとも、また咲きまた照さん。されど、一度逝きにし君には、幾千代まつとも再び歸るよしもなし。よるべなぎさの捨小舟、それにも似たる妾が運命、あゝ今よりはたれをよるべに、浪風あらき此の世を渡らん。あはれ、墳墓の君よ！妾がせきあへぬ涙の雫、君が上にそゝぐをゆるしてよ。されど、君よ、妾が心くみてゆめ世に降る雨の冷たき雫とな思ひそ……あゝ！

絶えぬ思ひに、いたくも夜は更けぬ。仰げば月は、いつしか浮雲に蔽はれて、颯々たる夜半の風の、さても冷たき、いざかへらむ、さらば、墳墓の君！

（雨評）文は立派に整ひたり。されど、ふるきをなしむ。

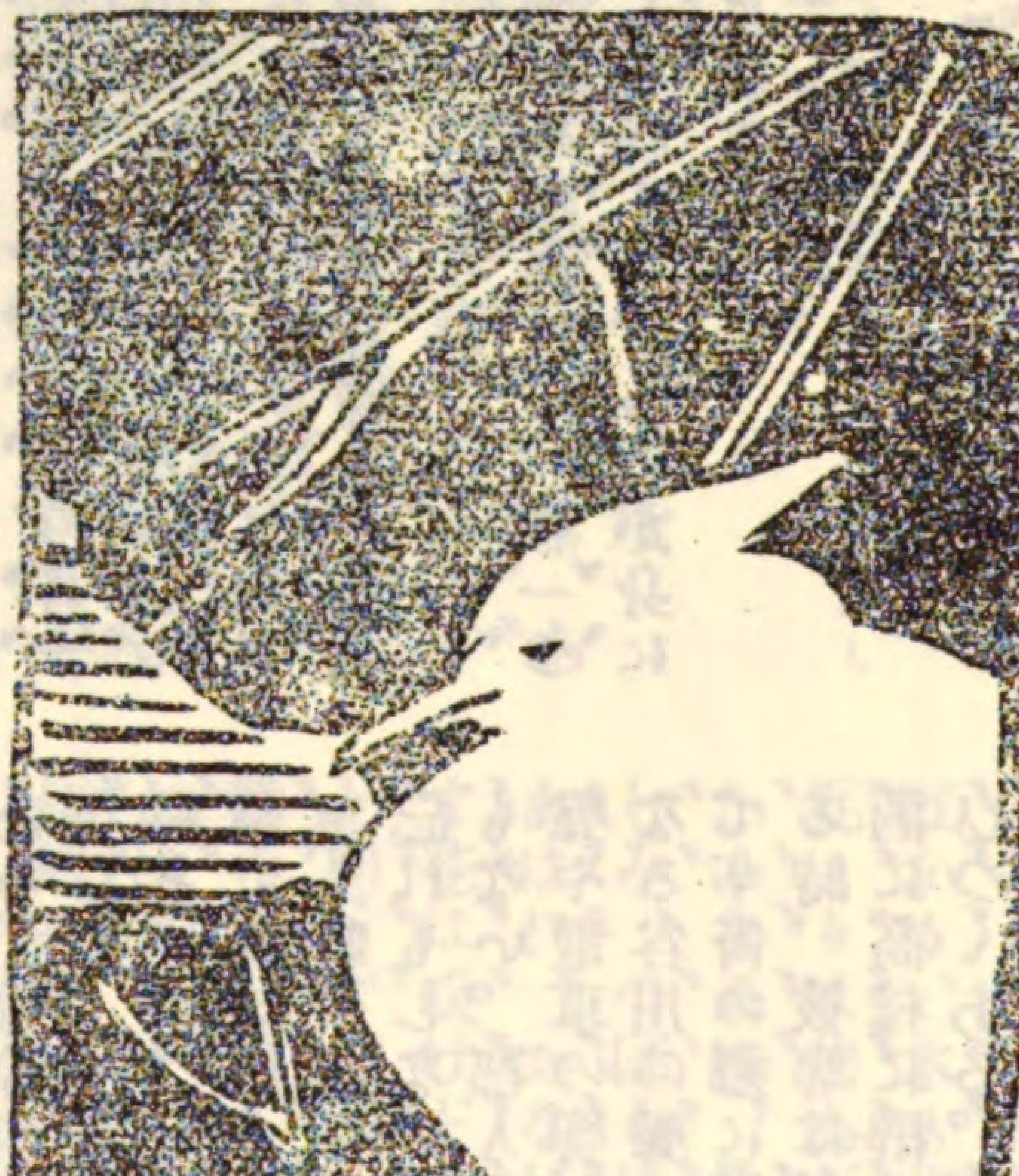
○思ひ出の月

（選外）　筑前　小野とよ子

福岡　櫻溪女史

障子にうつる木犀の黒ずみたる影。雨もはや晴れたるにやあらん。

庭に降りたてば、光りみちたる十三夜の月は、中空に澄みて、望の月をも欺んばかりなるが、木犀の葉におけける白露に、まどかなる影を宿し、吹きくる風に、ハラ〳〵と、散りみだるゝも、こよなき風情ありけり。あゝ思ひ出多き月夜かな。思ひ起せば、去年の此頃、兄上には、み軍に召され給はん門出の祝ひの其夜なりけり。夜はいたう更けて、障子にうつる客人の影さへ、二ッ三ッとなりにし頃、思ひに得堪へて、庭におりたてば、木犀のほとりに人の影。驚きつゝ、月の光りにすかしみつ、『アラ兄様』『オゝ豊さん』と、互ひに手をとりかはし、兄上の熱き涙は、妾が頬に、熱き涙は、冷たき地へと…………。兄上の後の事共諭し給へば、わき出づる涙に、袖もくちん計りなり。かくてあるべきにあらねば、涙を袖におし包み、『兄上の妹なるものを、などて孝養怠り申すべき。をこがましけれど、兄上こそ君のため國のため、唯、忠義の二字を心にゑがきてはげみ給ひてよ。』といへば、うなづきつゝ、打ちふるふ手に、しかと妾が手を抱き胸せまりてや物だにのたまはず、熱き涙ハラ〳〵とそゝぎ給ひぬ。あゝ、そも去年とはなりぬ。口には雄々しげなる事いひたれど、手紙には、しひて勇ましげなる事、いひおくりまつれど、父上、母君は年老い給ひ、妾とて、外に便らん同胞もなし。勇ましき御決心の御手紙、見參らせては手紙抱きて泣き沈み、電報といへば胸躍かせ、號外といへば走りいで、御恙はなきやと胸痛むるを、人聞き



なば女々しとや笑はん、甲斐なしとやあざけられん。笑はばとて、あざけらばとて、妾はつゆいとはじな、妾には、唯、一人の兄上なるものを。

あゝ如何に國ぶりは異なるとも、明らかなる今宵の月には、かはりあるべしとも覺えず。あゝ兄上には、天涯萬里、潮路へだつる異域にありて『三笠の山の月』のそれにはあらねども、今宵の月に、如何なる事をや思ひ出で給ふらん。國は遠くへだつとも、心は同じ同胞の、去年の月夜にありし事ども思ひ出でゝ、征衣の袖をや、ぬらし給ふらん。

折から父母にや後れけん、同胞にや離れけん、雁一つ更け渡り行く大空を、西をさして行くも、おのが身に思ひくらべられて、一しほあはれなり。

（雨評）　文は先づ整ひたり。されどふるきをたしむ。

○故郷

上毛金井の里　綠女

あゝ故郷ほど懷しく床かしいものはない。往て視よ、來て見よ、吾が郷は、眞實に仙人界の樣である。赤城山は、雄大に眺められる、烟たなびく淺間山は、その折々に姿をかへ、朝日には紅ふかく見え、入日の後にはあざやかに、霧も、霞も、そのほどの景色添へつゝ、いつももの新らしく打ち向はれる。月も隈なく照る、谷間の水は、石にせかれて、やさしき音を立て、木々の梢を渡る嵐は、嬌女が奏づる琴の調に似て、何となくゆかしく聞える。俗も、此の仙境の裡に住める人といへば質朴にして同情に富み、そして平和を好む民ばかりである。彼等の家には電燈なくも、暗くはない。時計がなくも、不自由を感じない。身に錦繡の美服なきも、恥とせず。山海の珍味なきも、飢とせず。夜は早くいねて朝は疾く起き、休まんと思ふ時に休み、食はんと思ふ時に食ひ、働かんと思ふ時に働く、學ばないから忘れもしない、罪てふものもないから、法律も別に用もない。都人が忙しき時に、彼等は閑である、汽笛の聲や電車の響が、都人の夢を破るも、彼等は夜、半ばなる谷川の聲、但しは、水卷く水車の響に、悠々として華胥の鄕に遊びつゝある。都人が狂言に浮かれ出づる時、彼等は村女の手踊を見て興じ、都人が葡萄の美酒に高樓に醉ふ時、彼等は手製の濁酒に賤が伏屋に醉ひつゝある。都人が洋琴を聞く時、彼等は自然が調ぶる松風の音を聞きつゝある。都人が悲しむ時、彼等は喜びつゝある。あゝ彼等は手づから種えて自ら食ひ、日出でゝ耕し日入りて息ふ。「帝力我に何かあらん」とは此の長閑なる山奥に住む彼等であらう。人は「鄙は匿れ家なり」といふが、妾が思ふには、必しも競爭場裡に失敗した人にのみ限らない。凡て平和を愛する人、

恩愛を思ふ人、德義を重んずる人、但しは自然を愛する人は皆、此の里を羨むてあらう。しかも彼等の四邊には、自然の恩愛溢れつゝあるものを。あゝ何んと悠久な山里ではないか、あゝ何んと平和な山里ではないか。

あゝ妾も、吾が親しき父母と共に、此の山里に永く生涯を送らう。

(雨評) 文は整ひて出來たり。されど、別に新しきところなきをなしむ。

○田子のなりはひ

尾張　柳水

つく〴〵と思ひわたせば、この頃は、都大路には、あるは杜鵑のなくね聞かむと、いぎたなき夜ごろもわすれて、よただまつらむ人もあらむ。あるは涼しき月影に、歸るさ忘れつゝ、終夜あそび明さむ人もあらむ。あるは、花橘の色香しのびて、昔がたりにときをうつし。夕風薫る池の邊に、空蟬の世の外に思ひをやる人もあらむ。げに夏は憂きものにかぞふめれど、なほ、ひをりふしの心ゆくすさびはあるを、いかゞはせむ、ひなに物する身の淺間しきことよ。名に負へる、櫻の春にしも、秋のみのりのゆたかならむことと思へば、のどやかなる空もおぼえず。況て、立夏後は、なつのぞめきに、玉ゆらも、身をねぎらふいとまなく、たゞ、明けては、終日身を汗にまかせ、心おもひを困しましめ暮れての後も、夜のわざに、足さしのべてねぶりもやらず、折りふし北風吹きたちて、五月雨、いと身にしむころ、袖も袂もしとゞに濡れつゝ、雫の田ゐにおりたちて、ゆふべ曉となく、打ちかせぐさま、それもひたすらに、わが世わたるたづきと思へばこそ。水無月ばかり、木も草も、さながらたぎつ湯濯ぎたらむごど死よりは焔あがり、土よりは煙たちて、身もこげむばかりなるに、長田、狹田におりゐつ、田ぐさをとる苦しみ、つばらに物すべうもあらずかし。あはれ、おなじき世に人と生れあひて、目をよろこばす花は咲けども見えず。耳をたのしましむる禽は鳴けど聞えず。かゝるかひなきわざにのみ、明し暮しつ、露の世をつくす身こそ、果敢なくもあさましけれ。しかはあれど、木曽のみやまに岩茸をあさり、伊勢の海に蛤拾ふさへあるをとおもへは、さるから無下にはかなしとしもおぼえずなむ。たゞかうやうにおもひたへてぞ、せめても、世はすぐすべき哉。

(雨評) 同じみ心に思ひたつて、なほ一層の辛抱苦勞をつまるべき文にて候。

○蝶の骸

石見大森町　せゝらぎ

露しげき野邊の小草ふみしめて、花もがなと求めあるきつ、わけ入りたる丘の麓、ふと見出でつる一本の桔梗あり。天津乙女のかざしか落ちて、この處には生ひ出でけん、おきあまる朝の露をはらみて、ゆかりの色の、したゝらんばかり、その美しさいふばかりなきに立ちよりて手折らんとすれば、あなうたて、白き一疋の蝶のむくろの、そのもとに横れるなりけり。

いえがたきなやみの胸をいだきて、竹深きこの湖邊の里にはさすらひ來つ。罪もなき里の童に師の君と仰がれんことの、あはれ、いかに罪深き身ぞや。早うも一年の秋は立ちぬ。忘られぬ胸のなやみに、味氣なき涙くりかへさんより、かの夜優しき君がみむねにすがりて、小さきこの胸のさけよとばかり、泣き伏しつる時などそのまゝには、たえいらざりし。

あはれ、蝶よ、汝も亦短かりし昔の夢のなつかしうて、荒き世の雨風をも凌ぎつゝ、遠き野末よりはしたひ來しか。いたましや、小さき胸のいかにたへがたうも燃えたりけんよ。弱き羽のいかばかり遠き野山をこえなやみたりけんよ。あなあはれ、思ひにかやせし、小さき骸のいかに安けくも眠れるよ。

折ちじ、えたえじ、蝶よとこしへに安かれな。短き命に、先き立たんも何の凶ぞ、後れんも何の幸ぞこひ慕ふ花の下かげに安けく眠るなれが身はあはれいかに幸多きぞや。

（雨評）思想は、一寸詩題を得たり、されど、筆調これに伴ふの趣味に乏し。結末は更に一層の苦心を要す。

◎零落

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

妾は今しも夕榮美しき田の畔を、牝牛と共に家路さして歸り來るなり、仰げば、うつらふ彩雲のあたり、新星淡くきらめき、伏せば、田路に從ひてうねる一條の小川、そも何時の頃誰が秘めし調や、さら〳〵と微妙の音立てゝ流れ行く。彼方の森をかすめて立ちのぼる夕餉の烟は、老ひませし母君の妾が爲め、溫き飯とゝのへ給ひてか。あはれやこれも宿世かと思へど、勿躰なさかしこさにまづ胸はせまりつ。げに過去は夢なりけり、現在もまた夢ぞ、此れも彼れも夢とのみおもひあきらむれど、さて著じるくやつれ給ひし母君の、御年の御加減とのみは思はれざるに、悲しさのやるせなく、賤の苧環よしなき言も繰り返されて……。妾とても、花の都に奧深く育ちし身。箏取る術は知りつれど鋤取る業は辨へず、自轉車はかれど、牛は追はぬもの

を、あはれ今は……柔きか靴を草鞋に代へ、花を飾りし帽子は菅笠に。曾てはヴァ井オリンとりし此の手の、餘りに小さく細かりしを悔ひたるも、朝な〳〵田の面に出でゝ鋤取れば、いつしか指も太りて、大方の男子に讓らずなりぬ。あゝあさましやな、昔しの友の之を見ば、何と言はまし。さはれ、塵の巷にさすらはんよりは、自然を友として浮世はなれし田園生活も、なか〳〵に嬉しきものよ。まして、いとほしき牝牛てふ親友も得たるを……。おもひみだれて見つむれば、足下にやゝしをれたるばら一輪、それよ乙女の頰の色にも似たるが、氣もすゞろ取りあげて、憐れなる花の運命を占なひぬ、おゝ母君やまちまさむ。

（雨評）まだ〳〵辛苦は尋常一樣の零落の境と申すべき文にて候。



○露

上總　林　霞　江

人の身をつゆの命といふことは、つひには野邊におけばなり、世のうき秋の頃なれや、見渡せば見渡す限り茫々と、みすず高がやすゝき原、原吹き靡く夕嵐、雲井をぐらく吹き落ちて、雁の翅にさゆるらん。前も後ろもすゝき原、右も左もすゝき原、原ははてなく道もなし、あゝ寒し夕秋の風、あゝ淋し夕かれ野原われや命の戀人にわかれ、ひとり青春の身をこゝに漂らして、何を慰さの憂き旅路ぞや、あはれ無情の秋風よ、天地の愁ひをなべて吹き寄せて、わが袂をや充たすとするか、悲しきかなや、幸淺く、命運の盃を違へる量に受けし身の、宿世をかこつ外あらじ。

（選外）

神奈川　中川三重子

尾華の空をかきわけて、ほのめき出づる月のかげ、なれもわが身のたぐひかな。おゝ月よ、凄涼としてなど青白き、性を違へる星の中に、ひとり侶なくさまよひつゝ、果てしあら野や久方の、高天が原に勞れしか、など色あせて氣も萎えて、いまはのきはの姫にも似た

る。いかなる夜の底にしも、なが休息を求むとするか。』

告げずや、いかに、星の子ら、ほのぼの路を急ぎつゝ、いかなる夜の洞にしも、張れる翼を休ふとするか。心もいとど撓ゆましう、あえぎ〳〵て吹く風よ、世に容れられぬまろうどの、われにもまがふさすらひの身に、猶も下界に心のたりて、深山の奥の森かげや、わだつみ遠くむかぶす浪間に。ながかくれ家をあさるかや。

きのふの春はけふの秋。さびしきかなや、春とても、君ありてこその春なりしに。さなきだに憂き秋のくれ憂き身をひとり泣きあますも、袖にもしげく置く露の外、あはれをかくるものもなしや。

折から一陣の風、颯々闇雲を捲き捲けば、月色悼んで西天にうすく、星光悲んで光りなし。

（雨評）これも七五調の流暢なるを示したる文とのみ申すべし。

○雨の日

神田　大澤隆子

『雨が降つて歸れないで、眞實に困つちまふわ、森海樣！貴女お手玉しなくつて……？私しお迎への來るのを待つて居るんだから……。』桃色改良服の山岸さん、白い幅廣のリボンをかざしたお下げ髮を振りたてゝ、紫矢絣の袖長く、紅のリボン美しい、春海樣に云ふたのである。『私もまだお車來ないのよ。其ぢやあしませう。だけど……二人きりぢやあ……。』と云ひ乍ら、傍に居る私には目もくれず、遙か向ふの片隅に居殘つて居る三四人の友を見つけて。『鳥渡入らつしやいよ——村松樣と中村樣、吉田さん——山岸樣とお手玉するから……』『えッ今直に行くわ。』と異口同音に金切聲。やがて、バタ〳〵と馳けて來て。『サアしませう。』（ジャン拳ポンよ〳〵）『あら中村さんの勝よ。貴女からなさいな。』（お一とお二お三い——）と皆樂しく歌ひ初めました。同じ尋常科二年でも、私は一番年下で、殊に不器用なので、皆さんが相手にしては下さらない。此方から頼めば、一緒に遊んでも呉れるだらうに、其の頭を下げて頼むのが大嫌ひ——其となく口惜しいので。私は獨り悄然と外面の雨脚を眺めながら、放課後の淋しい教場の片隅に、乳母のお迎ひに來るのを待つて居た。

『オヤ貴女は泣いて入らつしやるの。又誰れかにいぢめられて……？』と、心づけばいつ入らしつたのであらう。受持の福田先生が、慈愛籠れる美しいお眼で、氣遣しげに見守つて居られたので、私は地獄で佛の思ひ。『いゝえ。』とお答へしながら、温かいお手にすがりついて。覺えずホロ〳〵涙をこぼした。『貴女もお手玉に入れてお貰ひなさいな。其内に乳母やがお迎へに來るでせう。』『私お手玉下手なんですもの。』『其れぢやあ、先生と遊びませう。此方へ入らつしやい。』と仰有り乍ら、お机の抽斗から、美しい千代紙を出し、鶴や蓮華

お三寶、お船などいろ／＼折つて下さつた。私はもう嬉しくつて／＼、今泣いた鴉が直笑つたので。

＊　＊　＊

雨の日毎に、私は、常時を追想し——懷しい先生のお優しい面影——お手玉の事——其から其へと思ひ浮べぬ折はない。

お別れしてから、玆に早や十歳。あゝ慕しい福田先生は今尙何處に鞭を執つて居られやう……健やかにお在してか……吁いかに……。

（雨靜）まづ／＼と申す文にて候。

○雲の色

東京　高橋鶴子

（一）

海づら遙か、淡墨ながしたらんやうなる房總の山々、いつしか夕霞につゝまれ了りて、沖の島のあたり、白帆三ツ四ツ、松黑き巖の影をうねり行きつ、沖なる波に飛ぶは、鷗にやあらん。

み返れば、抑繪のごとき靑松白砂、浪は徐ろに渚を這うて、とゞろ／＼と暇おきつゝ、松風淸く面を吹きて神の國かぞも、夏すゞしき漁村の濱邊に、今妾は唯一の親しき友に別れんとはす也。

おゝ、懷かしのこの濱邊。また何時の日か、二人手に手を、とりて、汝が優しき姿を賞でん。されど、男々しき親しの友は、渺茫の海のあなた、露寒き滿韓の地には行く也。

あはれ、さても靜けき夕なるかな。

（二）

さるにても、美しきは我が友の心かな。いかに御國の爲めとは言へ、故郷には老いたる、身にも代へがたきたらちねと、未だうら若き弟もあるものを。

さらでだに、か弱き女の身を持ちながら、寄る邊なぎさの荒磯邊に、血なまぐさき異鄕の空を、さびしとも思はで、銃の烟りに起き臥しゝて、心づよくもたゞ一人、朝には見るもいたはしき、傷負ひたる御國のつはものを迎へ、夕には悄き仇國の手負ひを慰めて、みとりに行かんときは……。

あゝ、今更に妾は友の心の氣高きを覺えて、そゞろに胸のいたきを知りぬ。

（三）

おぼろなる岬の端しのかなた、今しいと淸らけき一輪の月は、音もなう、きしりいでつ。

「さらば蝶子の君よ、いつまでか袂しぼらんも、かひなし。今は恙なく妾がつとめ果てたらん曉を待ちてよ、願はくば、さきくて在せ。」

友はその麗しき眼に、一點の淸き露をやどして、聲う

るはせて言ひぬ。

「あゝ、露子の君、さらば、かなたの空は、風もあらく雪も多しと聞くに、心して……。」

妾はおぞくも、後は言ひ得ず。たゞ友の手にぎりて泣きぬ。

潮風一トしきり、磯馴松に訪づれて、ざうとばかり、水晶の玉ちりて轉ろびぬ。

友はやゝありて、固く握りし手をそと放ちて、やゝ口重く言ひぬ。

「蝶子の君、願はくば我が願ひ聞いてたべ。そは、我が母と弟を、蔭ながらみとりし給はんことなり。あはれ長き年月の變はり、この願ひ聞いてたびてんや。いかに。」

あゝ、雄々しき友も、心の一隅には、やさしき女の情はありしよ。

「そは、いと易きことなり。露子の君よ、幸に心安くあり。君が、彼の地にあるかぎり、妾は、かの君に霜をや打たせざらんに。今はたゞ、まさきくおはせ。」

「おゝ、蝶子の君、よくものたまひつるものかな。今は心やすらかに、天の勸めを果たさなん。さらば。」

沖のかた、漁り火の二ッ三ッ五ッ、影かすかに、波にきらめきて、夢よりも淡し。

（四）

眺めやれば、夕凪ぎの大海原、げに襞したらんが如く水や空、空や水なる美しき景色に、目に入る一點の瑕もなし。

「さらば。」

「さらば。」

妾はまた、友の手に、あつき接吻して、そと放ちつ。あはれ、言ふに得言はぬ無量の思ひ、見返しては盡きぬ名殘を惜しみしも、かたみに見合す眼には、御國の爲めと、女々しき涙、見せじとてそ競ひたりしが。いつしか有情の月は西に傾き初めつ。夜も今は更けゆくにやあらん。いで、我等はともに去らん。

ほたり!、松の雫、月の雫。

あゝ神よ、願はくば只一人の親しき友を、とこしへに恙なく守らせ給へ。

海づらの何處、艫の音かろう海士舟の歸りゆく。をかしき欵乃の一ふし、微かに聞ゆ。

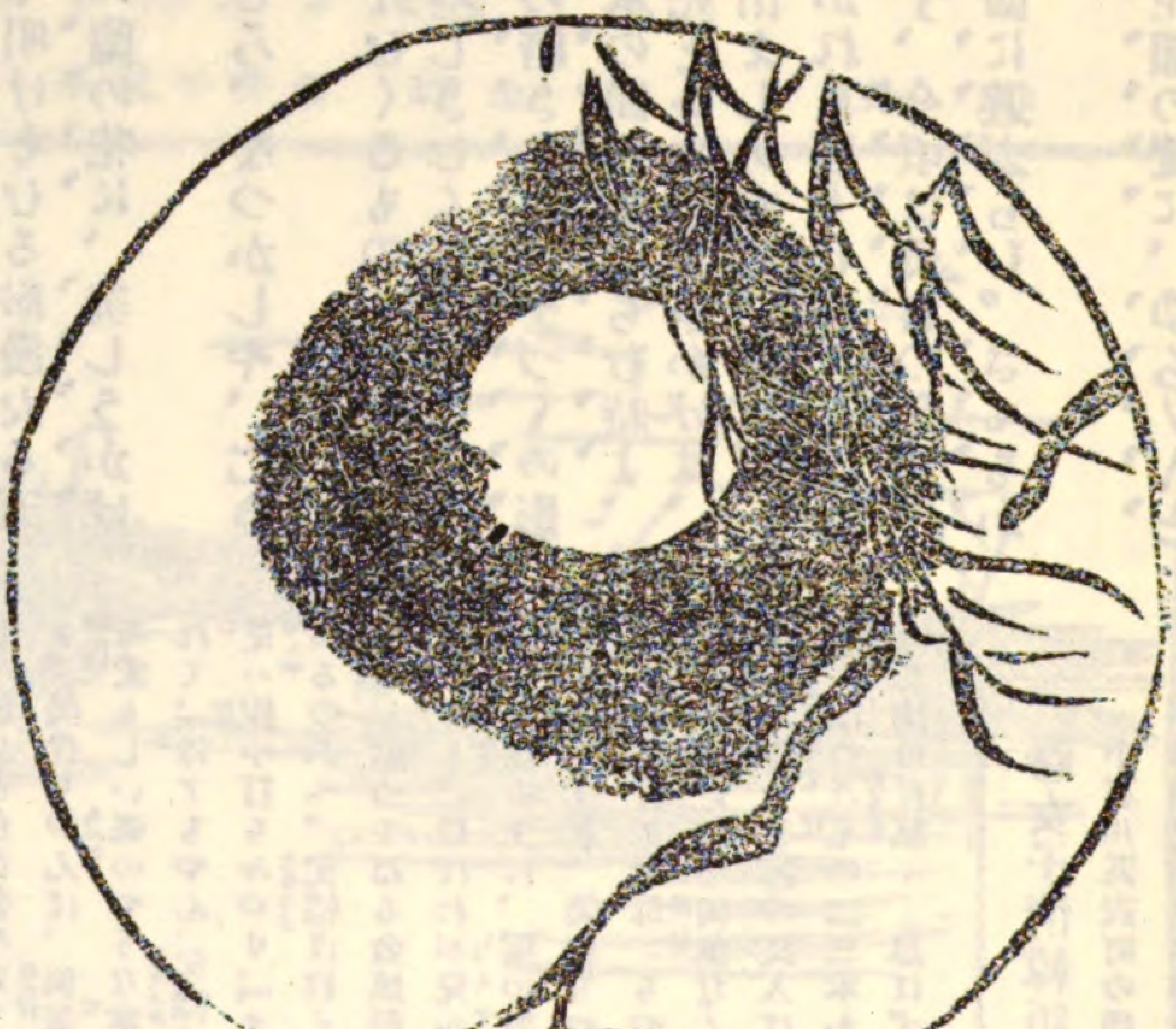
◎明日の別れ

伊勢國　きみ子

果敢なしや、悲しや、幾春秋、姉とも思ひ妹ともちかひて、慕ひ慕はれた花子樣は、今日を限り此の村を去つておしまゐなさるのである。あゝ、明日からは、誰れと共に語り、誰れと共に悲しみを分たう。唯一人取り殘こされた捨小舟の、將來の楫は誰が取つてくれるだろうと、思へば思ふ程、心は千々にみだれて、時鳥血に泣く樣な思ひがする。「やませ風別れの風だよあき

らめさんせ、またいつ逢ふやら逢はぬやら」。黙うたれた里川堤の柳のほとりを、さもだるさうに歌うて行く馬子の追分節が、とぎれ〳〵に聞こゆるのである。

ああ、何て悲しい歌だらう。馬子が私の心を察して、此の樣な悲しい歌を歌つたのてあろうか。否、必定偶然に合つたのてあろう。あゝ空蟬の世の中はこんな果敢ないものかしらと、考へれば考へる程、昔の面影が現れて、樂しかつた春の櫻狩りや、嬉しかつた汐干狩りが、今更の如く繰り返へされる。あゝ、此の樣な樂しみが、沙漠の旅人が翠の泉を探し得た樣な嬉しさが、またと再びあるであろうか。あゝ悲しい明日の別れ愁い明日の別れ、昨日の笑みの流れのまだつきぬ間に、淺間しや今日は涙の淵。をし鳥ならねど、浮ぶ瀬がいつ來るだろうと、うらめしい浮世の波風にもだえて、せき上ぐる胸は、もろき涙に覺えず袂をぬらした。折柄、烏羽玉の宵闇を破つて、野寺の鐘が淋しさうに三ッ四ッ、餘韻長く低う幽かに聞こゆると、不意に現れた螢二ッ、是もたえぬ想ひに身をもやして、高く低く飛て行く。彼方にはたしかめる樣な終列車の瀛笛が、一聲鋭く胸に答へた。



(外遊)　繪島　飯田貞子

○忍ぶ草　伊豫久米の里　土居綠香

裏山の氏神の社に、寂寞を破つて鳴くふくろふの聲に、冷たき夢さまされぬ。枕に通ふ脊戸のかけひの、水の音、常にもまして高きは、昨日の雨に、巖根の清水の增したるならん、さても靜けき朝かな。起き出でゝ、そと窓押せば、いとも淸き朝の氣は、露に亂るゝ小萩の香りを、含みしまゝ、つと身にをさまりて、昨夜ひとよを、歌にやみし頭に、いゝ知らず妙なる想ひをあたへしめつ。

未だ夢よりさめぬ天地は、朝もやもて深くとぢられ、神容厳たる如法が嶽のみ、白雲の上にそびえつ。あふげば、淡き曉の月は、ほの〳〵明けそむる渺漫たる天涯遠く匂へり、露ふくむ垣根の蘭の花に、美しうかげをやどして。

あはれ、かの月の沈み行くところ、なつかしや、亡き妹が小さき魂のねむるところ。

誰れ一人おくつき訪ひ、香花たむくるものもなき、かの里のおどろの下に、とはに空しきむくろをよこたへて、さぞや淋しかるらむ、ほの暗き木立に夕づゝの影またゝき、小夜長けて猿の辟木の間にさゆらむ時よ、あゝ如何なる罪のありてか、死といふ冷たきかげは、十年の秋を、うたかたの如く消えしめぬる、あはれ、幼なき汝にも、浮世の浪はのがれえざりしな。今頃はかの里の土と化せしか、さらず、今頃は母君の慈愛のみ腕にいだかれて、エデンの園に遊ぶらむ。さてもかの星の光のくしきことよ。

折りしも、朝もやは、西の方花瀬の麓に、ゆら〳〵と流れて消え行けば、如法が嶽は、太古の面かげを、下行く水に洗はせて、とはに變らぬふかみどりは、我れにやがて來むとこよの容を語るに似たりな。

◎美代ちやん

豊島佐野さん子

今年四つになる美代ちやんは、いつになう好機嫌で、今もわが窓に咲きし、氣高き白百合を見て、莞爾と笑まれし、その姿の優さしさ、愛らしさ。美代ちやんは、何氣なく母の前へ走せよりて、尽々とした乳房に、可愛らしい楓のやうな掌をあて、莞爾と笑みしが、俄かに貌をシカメられて、『母アちやん、父樣はいつ皈るの……』と幼な心で問ふた。母はわが兒の貌を打ちみやり『オヽお前、夫れ程までに父樣を懷しげに思つて被在るのかへ、父樣はねえ、遠い〳〵ずノ滿洲とかへ……お皈りにはお前のほしがつてゐる金鵄勳章と、露助の首とを、お土産に持つて皈つて來ますよ』と、母はわが兒を慰めた。後は儚なかくも熱き涙を洩らして、わが兒の貌の上に、雫の數滴こぼれぬ。あゝ、其の時の母の心の中ぞ、苦しき悶ありき。美代ちやんは、花ならば春の野に咲く菫のやうな愛らしい顔を擡げて、『母アちやん、金鵄勳章や露助の首よりも、父樣に抱かれたいわねえ』と何氣なく母の涙ぐみし顔を瞶めた。

あゝ、其の父其の良人は、可憐れ儚く胡地の露と消えたのである。露の頬にほつれ毛の二三本かゝれる磯子夫人は、夫の俤の偲びてか、一倍増せし胸の動氣……思はずわが兒を抱ずりて、其の場へ打ち伏れぬ。



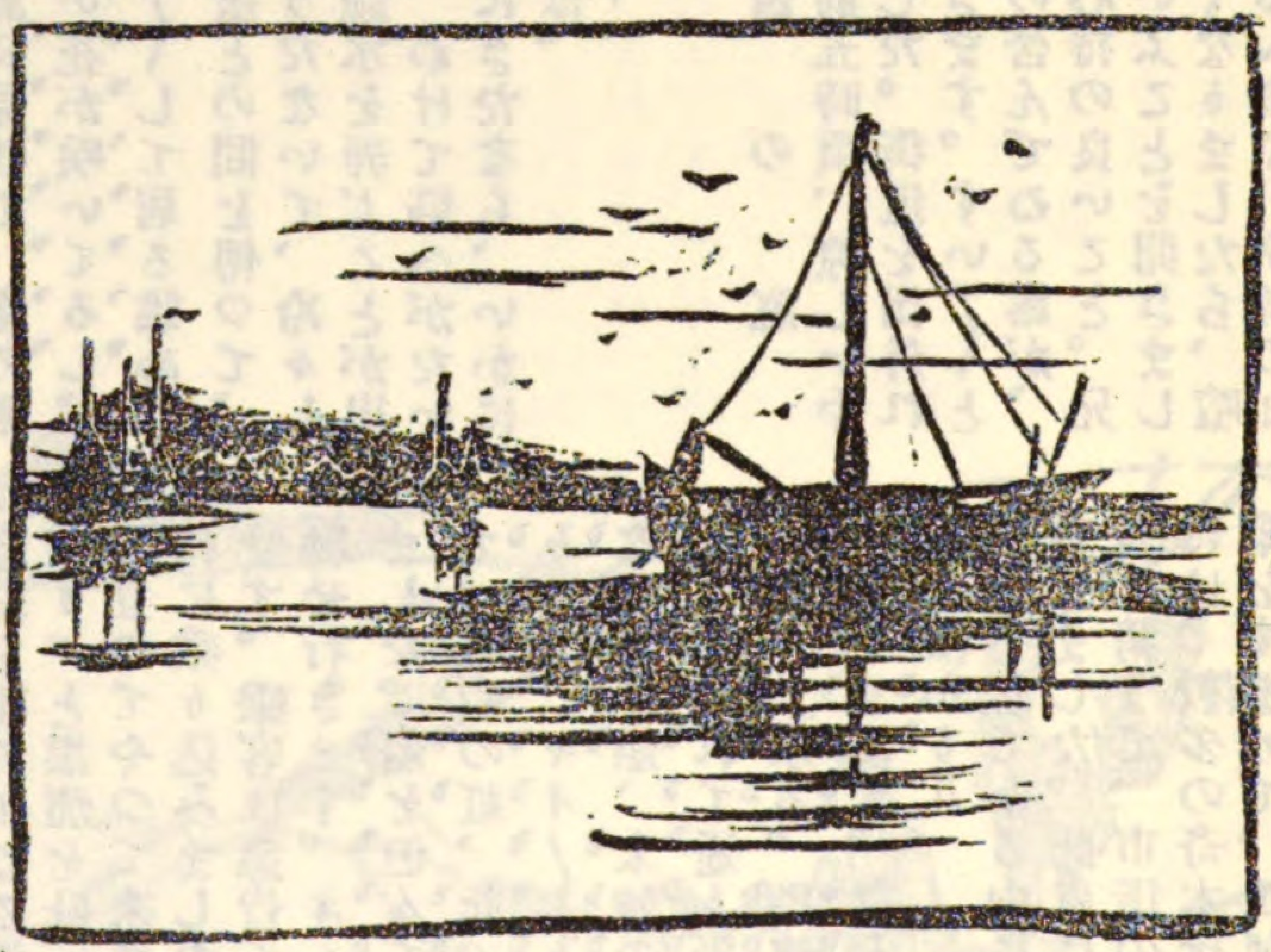
文學士鹽井雨江先生選

秀逸

○谷の奥

小石川　近藤愛香

澤人村から古賀山の峠にぬける一條道、見渡す兩毛の原野は、限りなく開けて、早穂麥は遠く刈り上げられた其あとに、丁度紺青色の繪の具を覆ぼしたよう、五點十點ところ／＼に植ゑ付けられた苗代田、小松林の間にこゝそこ、傘をかむせたような藁屋が、糸のような烟をあげてる、其間を一條、帶のような野川の流れが、流れに沿ふた竹籔のとぎれ／＼を白く緩く、うねりゆく、果ては大崎川の中流にそいて、末は北海の浪に入る閑古の流れかとわづかに思はれた。こんもりした雜木林を一めぐり、めぐつていづる楢林の中から、小な淸らかな流れがサラ／＼と優しい音を立てゝゐる、この淸い谷川の兩岸共、きり立つたやうな、峻しい岩に挾まれて、まはりの大きな杉林や椎の木立の中に、只一本樵夫の往來する細道がある切り、ほんとに寂しい谷の下り坂、生茂つた兩側の草木は、兩方からたわみあつて、谷の奥遠く半町ばかりの間、自然のトンネルをなしてる、こゝを出て少し行くと、牛の臥して居るやうな大きな岩がある。其の下を先の谷川が心地よう流れ流れてゐる。すぐその目の前に、美くしい淸い水が、高い岩の間から、絹をかけたやうに流れ落ちてゐる。中段にくると、劍のやうな鋸のやうな、峻しい崖につき當つて、ザアーッと四方へ砕けちり、



（選外）　上野　金井千代子

半ば霧となつて落ちてくる様は、誠に見物で、崖の兩側には、何だか名も知れぬ美くしい花が咲いてるし、小柴の梢が、瀧から起る風にゆら／＼して居る眺め、繪にもかけないやうである。崖と崖との間を傳つて、瀑水の後にいづると、少しも水にうたないで、冷々した岩に跪いて、目の前に霧とふる瀧水を翫ぶことが出來る。谷の奥のめづらしいこの瀧、わけて堪へがたい夏の炎天に、塵をのがれて、こゝにきたなら、いかに愉快なことであろう、見ぬ人の目は。

（雨評）結末が平凡なり今一層の工夫を要す

○水戸海濱紀行

上毛 西の窓

街のとある旅館を出ましたのが午前五時頃、涼しい中に歩きませうと思つて、早く出ました。街道を出外れて、夏草の生ひ茂つてゐる道を行きます。すい／＼と足を輕く運びますと、途端の草葉の含んでゐる露が、裾や袂にかゝりましてそれは／＼心持の良いこと。兄さんに朝の旅は一層愉快であるといふことを聞きましたが、今更分りました。定めし熱くなりましたら、喧しい程の蟬の聲が出ませうと思はるゝ森や、水源の知れぬちよろちよろ水は、皆旅行者のお友達でせうなど思ひ乍ら、行きますと、那珂川の堤に出ました。

水色の繪具を溶いたやうな流れは、兩側に縁どられた綠色の堤の間に、漫々としてゐます。水邊の柳が綠濃き枝を垂れてゐる様は、美人が髪を洗へるやう。ボーツと黑煙を吐いて來る那珂川下りの汽船が、波を蹴立つてやつて來ましたので。切符を求めて、急々それに乘り込みました。最早舟中の人となつたのであります。乘客は悉皆で八九人、小蒸汽は舵機をきしつて馳せ行きます。オヽ涼しいと思つてゐる間に、日は出ました。船を包んでゐた川霧に、其の光りが映じまして、五彩の虹、此の輪の虹を潜つて、船はなほ／＼進みます、ギイ／＼といふ音に、面を上げますと、大きな帆掛け船、太鼓のやうに孕んだ五十反帆の船は、川風に追はれて通り過ぎました。續いて來る、二艘三艘四艘、又來る。砂河原に水游びせる兒、岸の茂りの蔭に舟を止めて、絲を垂るゝ翁、それ／＼書題に適したものばかり!!

恍惚としてゐる中に、小蒸汽はぐらと搖いて、岸邊に着きました。此處は名たゝる湊町であります。案内の者に誘うて、市街の高い丘の公園に上りました。園内には、數多の奇木珍草が植ゑ並べられてあります。洋傘をすぼめて、四阿に入りました。四方の景はさつと開いて、一望目睫に入るといふ有様。市街はすぐ足の下。大きな甍や煙筒が立つてゐます。離れて目を海岸に注ぎませう。

寄せては返す大浪小浪は、砂地にさつと海の花、一眞

線にずーつと銀粉を振り蒔いてゐます。一條の銀河は洋々たる太平洋から流れ出てゐます、涼しい海風は、足元や襟の邊を扇つてをります、そして、時々漁師の謳つてゐる節面白い磯節が、手に取るやうに聞えます。

此の夜は波の音を枕にして、惠比藤といふ旅舍に泊りましたのよ!!（七月三日稿）

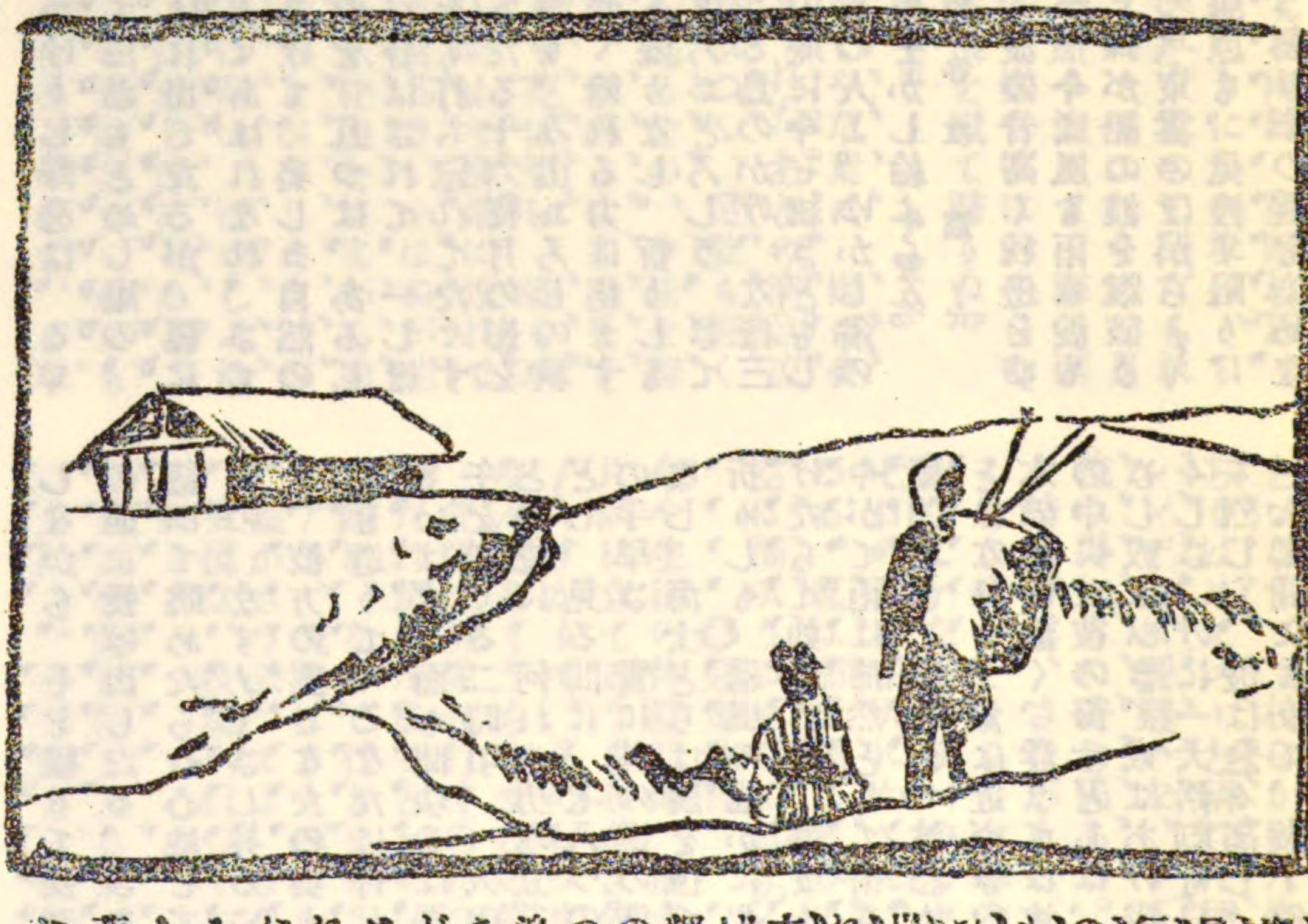
（雨評）先づ難なき文なり

〇私の一夕

加賀　應子

街にきしめく車のひゞき、やうやうまれに、鐵鍛ふ男の子がつゝの音も、と絶えて、花賣る乙女が呼ぶ聲のみ二聲三聲涼しう、浮世の

（選外）　和歌山　樵見白蝶子



塵もいつしか靜まりて、見る見る、詩の神の御手に包まれ行く夕暮の色にぞ、そゞろ世のうきふしも、古里の戀しさも忘られて、獨り里川の流れひたひたと、小笹の緣を洗ふ岸邊に沿ひて、觸れなばこぼれん萩の小徑を、尾花の招く方にぞあこがれ出でつる。仰げば、夕陽淡く遠山寺の塔に輝き、遙の野らを辿り行く人の、白きすげ笠の響のみ見えつ隱れつ、ほのかに洩れくる追分節の、涼しき餘韻の、やうやう微になりゆくさまなど、さながら繪の如し。さても風暖き春のあした、亂れ散る花片を、めぐる盃の霞にかけて、暮れゆく春の運命を歎きし木蔭は、かしこなりき。れんげかざしにかへて、黄金の色濃きなたねのかげに、せりよ、よめなよ、と蝶

蝶の夢をさましつゝ、右に左にかけりし野邊は、こゝなりき、今や柴のとぼそ驚かして白湯もとめし庵の、半ば稻掛け棹のかげよりあらはれ出でたるが、僅に春を忘れぬかたみなるこそ、いとゞあはれなれ。さても、此の庵よ、遠く世の俗塵をさけて、美しき自然の色香にうつらふ樣だにたゞならぬを、且つは、あるじの翁のやさしき心根などさへ思ひ合はされて、一しほのゆかしさに、暫し我が身の上をも打ち忘れてたゞずむ程に、小川の面、いつしか皎々たる十六夜月の影を宿し、まさご淸らに自然の美を語り。み山おろしの秋風は、ゆるらかに稻田の面を撫でゝ、餘れる力は絶えずつゞれの袖に通ひ、心地よきこと限りなし。折りしも人待ち顏なる小犬の音、いとおどろおどろしう、さてはと急ぐ家路の空には、塒をあさる鳥のかげ、なほ三つ四つ二つ。見かへれば、戀しの庵に今ぞ細きともしはかゝげられぬ。あはれなつかしの人よ。ゆかし翁の君よ。今宵かの火影に如何なる事をかし給ふらん。

○海の樂

四谷　紅露女

夜半の程は風吼え雨降りしきり、波の音高く枕邊をゆすりて、つゆまどろまれざりしが、今は風も雨も波も靜まりてや、聞ゆるものは、たゞ吾が船の波を蹴破りて進み行く轟々たる音のみ。やがて、東雲のほがらほがらと明け行けば、さすがに廣き靑海原も、見渡す限り、水平線みな霞もて包まれ、紅深き朝日影の霞を染めなしながら、そを破りて長閑けき光りを、きらきらと海の面に投げ出したる、さながら咲き匂ふ山櫻に薄絹を蔽ひて眺めたらむ心地ぞする。かくて、閃めきたる朝日の、ますます差し昇るにつれて、涼風のそゞろに起り、彼方の雲こなたの雲と動き初め、波も音なくうねりを造りて、こなたに押し寄す、其の靜けさ、實にえもいはず、而も聞ゆるは吾船の進行の音のみ。かくて午を過ぐる二時頃、一人の海士の「一隊の魚群現はる」との聲に、何れも勇み立ち、小舟を下し、網を整へなどし、見る間に、七八つの小舟、點々並べられたる其の手早さ、實に其の道の達人ならでやは、と驚くの外なし。海士どちは腕を撫でつゝ、魚の行手を守りしが折りしも、暴風の遽かに起り、灰色の綿をちぎりて投げたらん如き雲の、纏まりて黑紗となり、日を掩へばやがて雨は沛然として横ざまに降り來り、雷響き、稻妻閃めき、風吐え、波怒り、一瞬の間に凄じきけしきとはなれり。魚は近づきたるにや、大なる怒濤の中に、木の葉の如く、浮きては沈み、現はれては隱るゝ小舟の中に、彼の海士どちは、白波散らしつゝ、或は網をさし或はひき、或はあげ或は魚と組み合ひつゝ戰ふ男々しさ、げに一大活劇も只ならぬ心地す。雨はますます烈しく、波は愈々高し。一大奮鬪によりて、數千の魚を得たる海士どちは、悠

々暴雨の中に、小舟を揚げなどする内に、雨晴れ風も止み雲も晴れ渡り、再びけさのけしきにかへれば、日は既に波間に沈みて西の方は淡紅の雲もて閉ぢられぬ。やがてけしき變りて、星三ッ四ッ現はれそめ、月は皎々として中空に冴え、隈なく照り渡りて、海の面に映象すれば、海士の船舷によりて樂しげに何やらむ聲高に嘯ぶきつゝ、吾船は轟々波浪を蹴て歸りぬ。

◎夕庭

鳥取市 上山千重子

「露の玉殘して晴れ渡る村雨、美しや草葉に、姫百合の蕾に……」。今しもさッとしぐれたあとの清さ涼しさを、其まゝ歌によせもてうたひつゝ、足駄も輕く踏みならして、二畝に足らぬ我が庭もせの、夕景を探るのである、げに父樣が出征以來、何處とはなく見すぼらしうなつた、が春秋主なしとて花は笑む、蝶も來て舞ふ、枝も茂れば幹も太る、といふて醜草に埋れても居らぬ、では何處に差別があるだらう、いはぬが花だ。併し、あの立派な所縁の深い久松山をさながら我が庭の築山を見せて、谷の流れの末をひきしひさご形の池のおもしろさ、今も昔も變りはない、否寧しろ池の緋鯉が子を產んで、二年前よりは趣を深めてゐる。今丁度汀に百合が眞盛りだ「稚子の笑顏其まゝのおもかげ」といふ歌句の通り……。其百合といはず、小草といはず、下枝にかけた蜘蛛の巣にまで、名殘の白玉ちりばめて、スーと晴れた雨雲、更に夕日をあみて、オレンヂ色に靉靆いた、すると葉末々々がきらめいて、花は得知らぬ香に滿ちる。可笑しいのは芋の葉に大きく結んだ露、さながらそゝつかしい星の君が天から落ちた樣、そよふく夕暮の風に葉の上をコロ〳〵ころがつていたが、すべつてホロリ地に碎けた。淡き〳〵七日の月は中天にかゝて、土藏の白壁此上なく榮へてゐる。私は茄子畑に佇みて、腰折一句產み出した時、空は漸次うつらひて、前の久松山、夕もやに包まれた。

◎兒童教育

神奈川 内島久子

今や生徒の休憩時間。幾多愛らしの兒童は、運動場の片隅に立てるうらわかき先生の周圍をとりまき、手に〳〵すがりて、そのむつまじげなるさま、よそ目にもなんとなくうらやましい程である。

先生は兵隊に行くのだつてねー。先生がなんて兵隊に、なんて行きませうさ。

たれがそんなことをいひましたか。

アラ、先生はうそばつかり。それでも、うちの御父樣がさう云つてよ。さうよねー、光子さんの所の御父樣は、役場へ行つてゐるから、よく知つてゐるはねー。

東海道神奈川驛を去る北一里、片山里に一つの平和な村がある。今を去る三年の昔、村田てふ先生は、其の

土地の小學校に奉職する事となつた、爾來、ながの春秋、一日の如く、兒童教育の勢をとり、村人の尊敬一身に集り、したがつて兒童もよくなづいて、子弟の情まことにあたたかく、教育の効果もこれでこそと思はれた。

時は一月廿一日、突然村田先生は、補充兵役召集令狀に接した、あはれ、先生の其時の心情は、どんなであつたろう。兒童のこれをきいたら、如何に感ずるであらう。否きくばかりではない、數日の中にこの先生と分れなければならないのである。それから、二日たつて、兒童との告別式があげられた。勿論、右の次第は校長の口から一般兒童につげられたのである。

其の翌日、神奈川停車場に、村田先生萬歲の聲がきこえた。其の聲の主はたれだれ。

奉天占領の號外が出てから數日、この平和な一村に、かなしみの雲がみちみちた。いつしか櫻さくてふ春もすぎて、近年まれと云はれし連日の卯花くだしも、ほとときすのなく音と共にはらはれて、なく蟬の聲いとしげきけふこの頃、青葉茂れる八幡社の境内に、あたらしき石碑がたてられた。

◎星　　淺草上郡　富子

時々吹き來る微風に、右に左に列を亂して、叉正しく昇り行く煙に、殘光を浴せて居たりし日も、今は全く山の端に落ちて、空も紫色と化し、鳥も塒に引きつけらるゝ頃となつて、群れて遊んで居つた小兒隊は、一人去り二人行きして、だん／＼頭の數が減じて來た。妾は夕方には常にそゞろ歩きをする習慣で有るから、今日も、格子戶を後にして出た。

二丁も來たかと、思ふ頃「ハイご免」と、うしろから車夫が高聲で、どなつたので、びッくりして「イヤナ車夫！」と口の中で云うて、傍へよつて、勇ましく驅けて行く車の上の人を見ると、大風にかまへ、食はへた煙草の煙が、一直線に後を引いて、襟の高さ正に一尺。

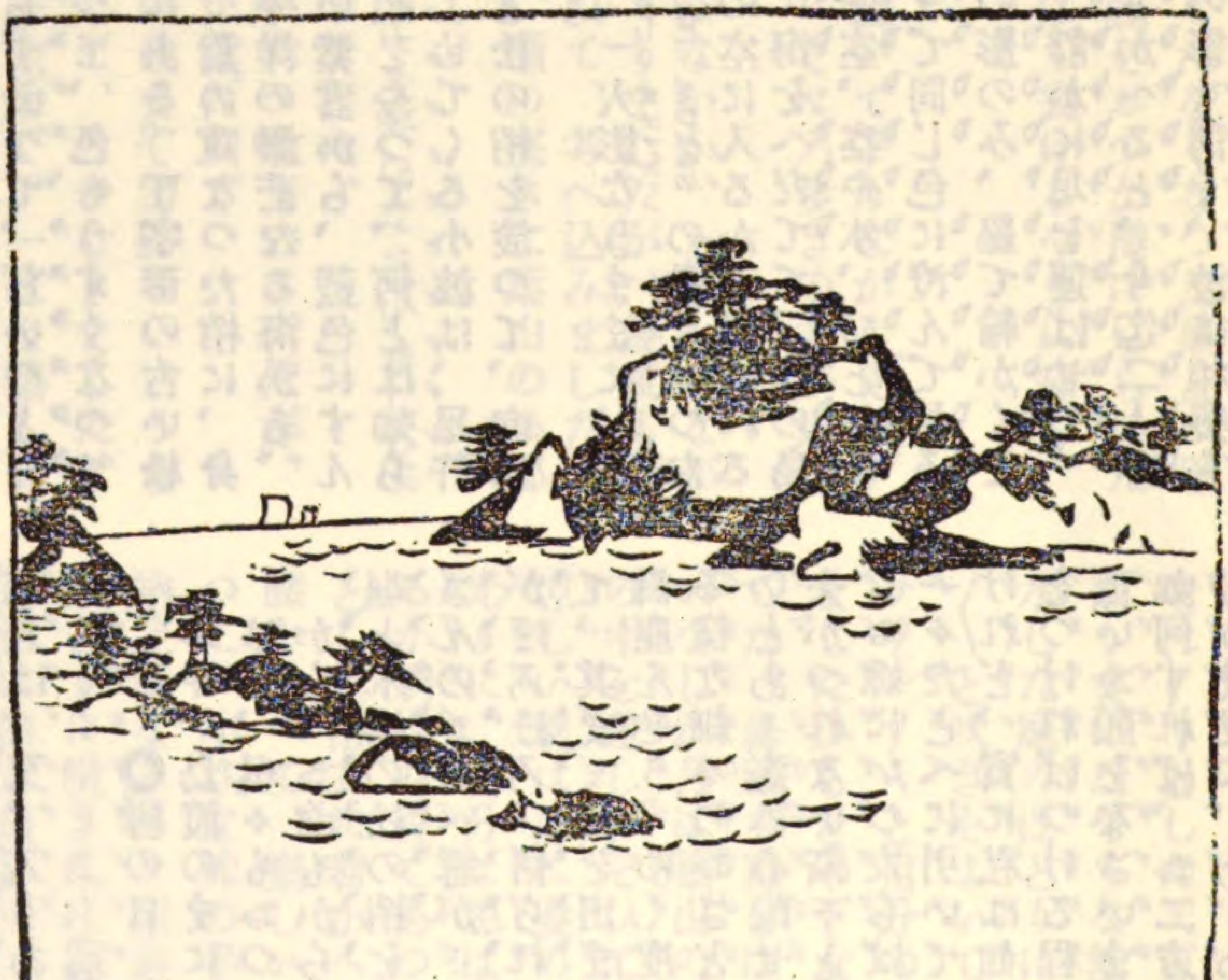
尚足に任せて步んで行くと、日は全く暮れて、彼方此方は燈火點々てなくつて、滿點である。軒について居る瓦斯燈を、遠くの方まで見渡すと、まるで瓦斯燈行列が來た樣だ。

時に横町から「お月樣幾つ」と優しい愛らしい聲が聞えた。オヤ月が出たのかしらと見たが、空には何もなくて、只白い雲の片々が、驅けつこでもして居るかの樣に、急いで行くばかしてある。

丁度其の時に聲が妾の前へ來たから、見ると、四ッばかりなる少女、其が姉てあらう、十五ぐらゐなるに、おぶさつて居て、先きの歌は、姉が敎へて居るのであ

つた。「お上手ですネ」と妾が云ふたら、姉は「今晩は」と云ふたが、少女は耻しさうに、顔を姉の脊に押しつけて行つてしまつた。あゝ無邪氣なものだ。姉たる彼女も無、樂しみてあらう。悲しい時も小供の無邪氣な顔を見ると、悲しみも忘れてしまい、怒つた時も、お父ちやんや、お母ちやんや、姉ちやんと云はるゝと、怒りも靜まるものであるが、不幸、妾は兄たり、姉たり、弟たり妹たり、一人も持たないのであるから、世の中の睦まじい姉妹を見ると、羨望に堪へぬのである。

「スッス……」前を犬の走る音て驚かされて、考へも無茶苦茶となつてしまつた。あゝ、もう歸ろう、左樣しやう、明日の學課があるからと腹の中で自問自答して、足を家の方へ向けた、すると「一つ星めつけた」と艶なる聲が又聞え出した。前の子と同じ様な聲だ。使から歸つて來たのであらう。



妾は無意識に空を眺めたら、廣々たる蒼空に、一つの星が、ちよこねんと、輝いて居る。オー今また、一つ出た前のと並んで、星よ！星よ！汝も亦姉妹であるか、樂しさうに輝いて居るのを見ると。あゝ笑うて居る樣に見える。

（選外）　武藏　渡邊きく子

○寫生帖の一ふし

麹町　重田春子

夕飯を終へたので、海水服を浴衣にぬぎかへて、髪も結び直して、さつぱりした心に、仲やと共に浪打ちぎはに立つたのは、日も陰暦七月十五日、時も暮れかかりの七時ごろ。……沖から追つてくるかのやうに、夕暮の幕は追々にあたりをおほつて、月は今、水平線上に昇つたばかり、眞紅の色をおしげもなくはなつて、波に千點の黄金を散らし

て居る。

「ォ、奇麗だこと」と、我知らず云つて、ぢいつと月を見ると、だんだん小さくなつて、色もうすくなつて動いて行く。妾は一間程右手にある。丁字形の古い松の木の、星影さへ見えぬまで、葉の重なつた梢に、身をよせて、はるかに果なき太平洋の渺茫たる海から、月に彩られて居る一群の美しい紫雲から、藍色にすんだ悠久なる空と、かう順々に眼をやつて、何とは知らず、ほつとといきをついた。よせてくる小波は、足許に迫つて、海の夜風は、颯々と松の梢を渡つて、向ひの岩につきあたる。

「ォ、海原月夜の景色…………」人影なきまゝに、不意に妾は高く聲をあげて、Silbar waves（シルバー ウエブス）の歌を歌つたのである。我ながら、その聲の空に入るかと思はれるばかりひびいた。はるか彼方に海をへだてて、江の島の火が、ちらちら見へる。水や空、空や水、ひとしく蒼白い月光をうけて、果なきまで同じ色に澄んで居る中に、この濱づゞきの並木松の影のみ、墨で輪かくを取つたやう。仲やに促されて、静かに足を運ばせて、うちの入口に來た時、ふとふりかへると、今迄二人が立つて居つた丁字形の一本松の影も薄く、波は相變らず月に黄金を散らして、うつすらと海上靄のかかつた景色、その美しいことは、白絹にやさしく畫いた淡き淡き墨畫そのまゝ……。

二人は、又、入りあへず、暫し無言に佇んだのである。

…………（避暑日記中より…………）

○雪の日

静岡縣　石神喜惠子

おや、鳥渡のまに大層積つたこと。それじや、八重さん、呉々もおつか様や信夫さんへ宜しくね。それから、お前もからだを大事におしよ。

颯と木枯の松の梢をゆすると、送て出て下すつたお母さんのお肩へ雪が……。私はもう母衣の中で、熱い涙がほろほろ。悟られまいと、無言の會釋に、涙かくして、其まゝ門を出ました。あー何と云ふ有難い親心で御座んせう。ゆく度に、それはそれは、かんでふくめる様な細々のおさとし。親の育ての悪い故と云はれまいとあー迄御心配せらるゝお母さんに、どうしてまあ夫がつれない斯々と、話されませう。學校へ通ふ頃からお嫁にいつたらばと、御自分のお若い折りの事を、一々たとへに引いてのお噺、嵩く忘れは致しませぬ。私が氣をつければつける程、おつか様のお眼は險しく、夫は苦いお顔をなさいます。困るつらいとは思ひながら、如何すれば、お二方の御機嫌が直るか、愚かな私には分りませぬ、あーあ、こんなつらい思ひをする様ならいつそ……。止度ない涙は頬に溢れて、天鵞絨織の膝掛に幾滴も々々々。

ぐわら々々々と石橋の上を軋る腕車の音に、我家近くなつたのを心づいて、あわてゝ涙を拂つたが、今出拵にお化裝して來た顔の、定めて汚なくなつた事と、思へば、氣が氣でなく、泣いた顔をおつか樣に見られたら、またどんなにかと、胸ははり裂けるやうに痛く、當惑に唇を嚙んで居ると、

　八重さん大分早かつたね、

と門口に思ひがけないお聲。驚いて下りながら見廻すと、まつたく止んだ雪の庭を、そゞろ歩きの夫が近ついて來て。

ほんとに夢ではないか、夢ではないか、と怪しみながら着更して、晩餐の支度にかゝりましたが、幾度もぼんやりと胸當の上に兩手を重ねて、考へ込みました。きけば、おつか樣は、一昨日、頃の寒さに葉山のお邸へおうつり遊したと。

その夜、夫は始めて私のする事にお笑ひなさいました。そして、歎息しながら仰しやりました、

なさぬ中と云ふものは、實に六ケ敷ものさ。だが、八重さんは、ほんとに馬鹿正直だね。

あー私はほんとに愚か者、今の先まで勿體ない、うらみぬいてと、顔を火のやうにして、うつむきました。雪の日、それは私が今までの一生中で、一ばん嬉しい日で御座んした、私はいつも雪を見ては、頰を赤めてにつこりするのを禁じ得ませぬ。

◎濱邊の夜

小石川　近藤愛香

晴れ〳〵とした天氣の夕方であつた。空には銀砂子を振りまいたやうな無數の星屑、一面に輝き渡つて、打水した庭のほとりには、云ひ知れぬ快味の風が、そよ〳〵と吹きそよいで、はなれ家からもる、風鈴の音、チリン〳〵と自分の名を呼んでも居るやう、湯がわきましたからとの下女のしらせに、帶を解いて書齋を出でた、湯殿の窓をはね上げると、外は涼しき夕顔棚。いつしか月は築山の松の梢に懸つて、笑ひながら湯槽の中を差しのぞひて居るので、中ば窓の戶をとぢた。涼しい風は靜に髮のほつれをふいて、肌にうつる月の光りに、自分は思はずうつとりとして、身は何處にあるか別らぬ程であつた。浴をへてから、こざつぱりとした浴衣に着かへて、池に出島の四疊半に親子四人、膝を並べて、樂しい夕餐の膳にむかつた。夕食をゝはつて、小さな妹の手を引きながら、此邊にては名高い納涼場なる月ケ濱邊の芝地へと、歩をすゝめた。道のほとりに咲き亂れた桔梗、女郎花、野菊のいろ〳〵、裳裾に拂ふ白露に、花の香のしみ入るかと覺えて、云ふばかりもなく、四丁の道を僅かの間に歩いて、身は

忽ち濱邊の詞にあつた。耳をすますと、あたりの草村に鳴きいでた蟲のかず〳〵、鈴ふる音、機織る響き、餘韻のこもる松蟲の音、耳騷がしき轡のひゞき、風につれて或は高く或は低く、かなづる蟲の音の、悲しくもあり面白くもあり、沖の方には漁船と見えて、三つ四つの光りが波間に見えつかくれつ麗はしく、薄墨の松原あたり浮び出でた樣な別莊の光り、時々岸邊にうちよする波の音はザブリッザブッと、其の度々、なきつれた蟲の聲音は、はたと途絶へる。月の前に雲が現れて、朦朧と二人の影を地上にうつした。濱の一夜も漸く更けて、沖の漁火も見えずなつた。仰げば大空を横ぎる、銀河一條、織姫の戀路の船を浮くるやら。自分は早くも妹を誘うて閤を下つた。燈淡き草屋の軒をすぐる時、中よりもるゝ横笛の音。アハレたが優しきすさびよと、板戸の間よりひそかにさしのぞける時、自分の顏は忽ち暑さをおぼえた。

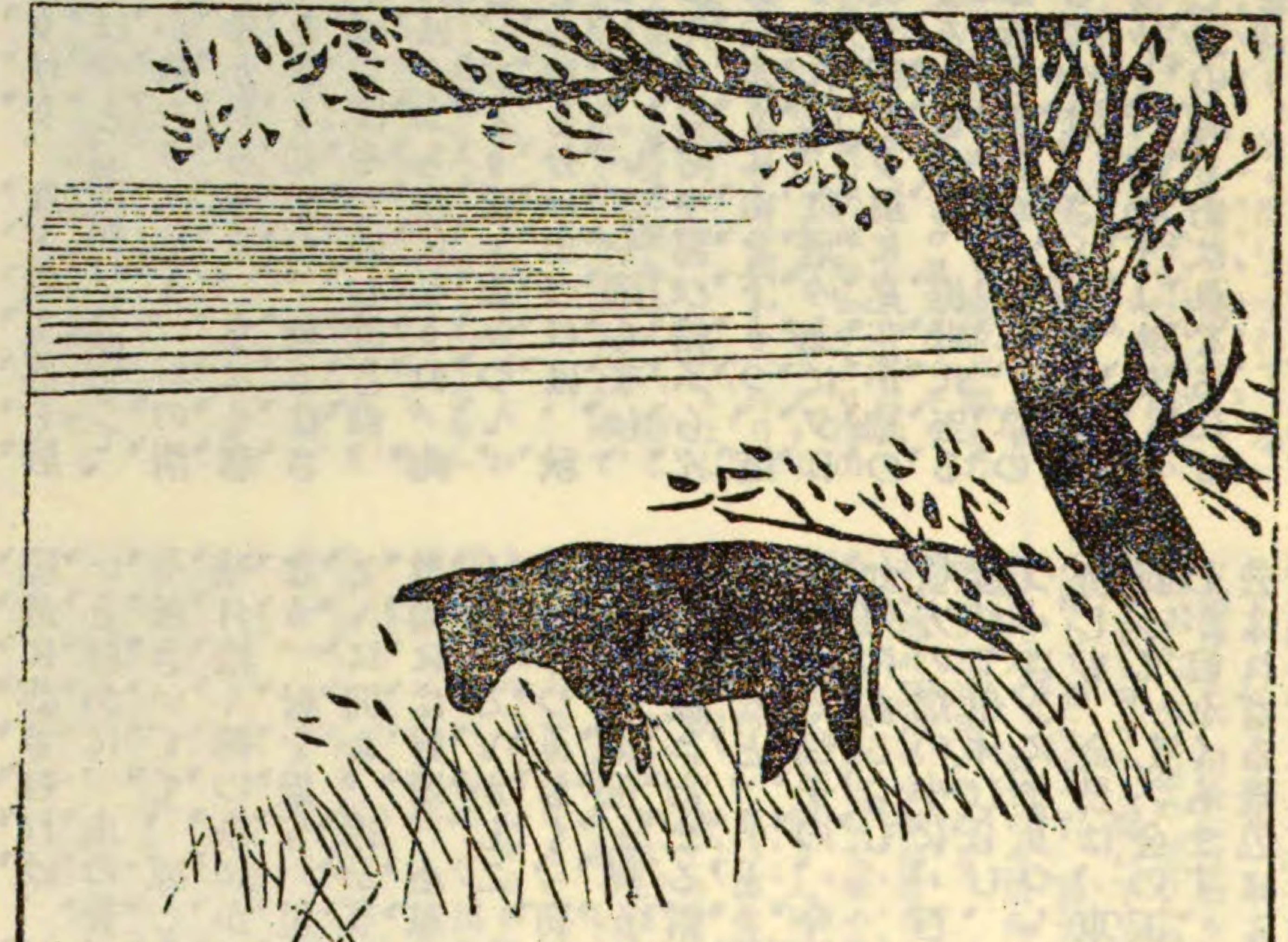
◎磯の夕　　鳥取市　上山手亘子

今しもさつと夕立したらむかとあやまたるまで、別莊番の爺が丹精の遣り水は、此處彼處にけぶりて、軒端のしのぶに通ふ凉風、浴後のぬれ髮に、いとゞつめたう覺えつ。いづこともなく風のまに〳〵洩れ來る讃美歌は、昨日あひ見し西洋人の一行が、樂しき夕の口ずさみなるらむ。とまれ、暑さもなやみも忘れらるゝは、此の頃の磯邊よ。かなたの森にいそぐ小鳥の一群、うすれ行く彩雲をかすめて、二聲三聲鳴き渡れば、宵の明星淡くまたゝき、七日の月は中天にほの白う仰がれぬ。柴の折戸そと押して、濱に出づれば、濕りたる眞砂に小さき足跡印しつゝかへり來るあまの子ら、さげにし籠をさしのぞけば貝のくさ〴〵滿ちたり。三つ四つひろひ得て爺に示めせば「オヤ、御孃樣がお取り遊ばしたゞか、ハー御功績で……」と年寄の氣の早さ、あはれ妾はいふべき言の葉も出ですなりぬ。やう〳〵「兄樣は」と濁せば「何か鳴り物を肩にして御出かけなさいましたよ」といふ、さらばと妾は再び濱邊をさまよひつ。さても、兄君が行方やいづこ、西か東か、藻鹽燒く浦人に問へど、知らずと答へき。唯磯馴松風かすかに音立てゝ何物にかしらべ合はせもずる氣色なり。すゞろに汀にイずめば、水や空、空や水とも分ぬまで渺々たる日本海沖に、たゞよふ眞帆片帆はさながら鷗の遊ぶにも似たるよ、日は全く沒して月澄み行けば、平和の海は夜の女神のひめごとさゝやきつ、黄色の波足下を洗ひて、白きしぶき花と散るめり。あはれ天には永へに朽ちぬ星の花あり、地には此處に不斷の香ぞ湧く、げにあかぬ眺めや、此磯や。

○秋のひと日

米澤　本間菊枝

先つ頃のあらしにて、栗の實は大方落ち失せたれど、茸は今や盛なるなど人々の言ふに、いかで一日はと心はしきりに行けども、いかにせん、賤の手業の隙なきを。さるに、うれしくも一日隙を得たれば、つとめて立ち出づ、籠を手にして、只一人そこはかとなく、秋野の露にそぼちつゝ行き行くに、吹く風冷やかにして、打ち招くますほの薄も、われを迎ふるにやと、いとうれし、やがて、朝霧の消え行くにつれ、旭の光りきら〳〵と、山の端をのぼる程にし、分け入る奥は松並山、誰が結び捨てけん尾花が袖を道のしるべに、小高き山に登りぬ。見渡せば、山姫の織り出でたる錦の色も淡く、林間に酒を暖めん頃はまだしかるべし。松の梢には自然の調かなでゝ、小鳥は歌を合すなり。あはれ此の幽清なる秋の氣色や、日頃の身にも似ず、いとにが〳〵しうなりて、思はず「遠音にひゞくはつゝみか翠か」と聲高に歌ひぬ。鳥は驚きて飛び去りぬ。うたて甲斐なき事してけり、いざや之より家づとに何かなと繁みをくゞりて、彼方此方と彷へば、何やら得ならぬ香のするに、心ときめきせられて、ひたすら匂ひを便りに、そこゝとあさりあるく中、ふとつゝじ株に袖ひかれ、あはやと云ふまに、からくもふみしめし足の下、こはいかに、其處一面松の雫の霑ひに匂ひ出でたる松茸のきみよきうれしさ、何



(選外)　愛媛　玉井正之助

にか例へん。げに楽し甲斐ありけり、など氣も落ち居ずうれしうて、先は眺め盡さばやと、御籠打ち開きて、匂ひをそへつゝ、いとゆるやかにたうべ終り、谷の清水を木の葉に汲みて飲めば、ゆかしう香る。水にも移れるにや、やがて、いそ〳〵と取り初めぬ。稚きはさすがいとしうて、後の人にゆづらばやと殘し置きぬ。松葉などしきて、籠に入るれば、ふち高になりぬ。此品よき畵にもかゝまほしなど、ひとりほゝゑみつゝ、いと高う唱歌などして、やをら林を分け出づれば、秋の日脚のはや山の端に近うなりぬ。いざや歸らなむ、父君が晩酌の御肴に參らせばや、さぞや喜び給ふらんかしなど思ひつゞけつゝ、ひた走りに山を下りつ、道の小笹をふみ分けつゝ、かへり見れば、紅葉の上に夕日のさしたる、いと美しう、吹き下す夕風に尾花が袖のなびき合ひ、我れを送る樣なるもをかし。裾野に至る程、日は全く落ちて、四方は皆暮靄につゝまれ、草の葉に置く露やう〳〵繁くなるにつれ、さゝがにの糸にかゝる無數の白玉が、ほろり〳〵。其の下よりは、何をかごとがましうなき出でし虫の聲もあはれなるに、折りから天涯遙に孤雁の一聲。

○秋の曉

武庫郡　梅子

曉鐘に夢さむれば、枕邊の燈將に消えんとして、四邊いと靜かに、虫の音、雨戸の隙間より幽に聞ゆ。いでや起きいでて、涼しき晴風に吹かれん。

殘月淡く柳の糸にかゝり、朝顔は天上の星よりも微かなり。村を過ぎ、里を行くに、鳴き殘る虫の音、そここゝに聞え、冷かなる風は、面を吹いて、心地よし。道端には野菊、小萩、蓼などの、今を盛りに咲きほこりて、こゝかしこ、白く、赤く、黄に、紫に咲き亂れて、うつくしく、蜀黍は高く空に踊り、芋の葉は低く地に舞うて玉を轉かす、いと面白し、稻はやう〳〵色づき、置きあまる露のこぼれて雨の如く、案山子に止まる雀など、いと〳〵興あり。木蔭に見ゆる草の家より引ける鳴子の、今しも鳴らんとすらむ、雀等の心や如何にあるらむ。

彼方の畑の中に、百姓の鍬を杖にしてたてるは、耕に疲れてや休むらむ、土手のあたり動めくは、後になりつ、さきになりつゝとびゆく樣、あはれ繪にも似たり。折しも、金烏は、東岳の上にさしのぼり、葉末の露は輝きて、しろ金の玉の如く、乙女の鎌は、時々閃きてわが目をくらます、閃めき、輝やく、其美しさ、得も云はれざる景色にこそ。

○ある夕方

鳥取市　清　子

翠の木立になよめな光りを投げた夕日の影も、追々雲にうすれて、小いさな星が、たゞ一ッ淋しさうな顔を出しました。とおもふ間もなく、闇は手をひろげて、勢よくおそつて來ました。アレ〳〵向うの欲や屋根やお隣の高い杉の木も、何もかも、すつかり同じ色に……。

私は、糊こはき浴衣の袖に、そよ風をうけながら、今、夕顔や朝顔に水をそゝぐ手を止めて、思はずこの景色に目をとどめました。せはしさうな邸の聲、荷車の音、犬の吠え聲、鼻歌など、いろ〳〵複音が聞えたが、やがてもう皆それらも闇にうすれて、つつまれて、果はひつそり。折りしも、可愛い妹も、うちわ片手に、庭に出て來ました。妹はふくやかな朝顔のつぼみを、一ッ二ッとかぞへて、自分の年のかずより澤山なので、さもうれしさうに、笑ひます、その横顔に、まあ、神々しいしろがねの光り！あちつとおもつて仰ぐ青ずんだ櫻の木の間から、お月様が、洗ひ上げたやうなきれいな〳〵お顔で、お早うつて……。あゝほんに先程荷車をひいて歸つて行きました人達は、自分の影をふんで、樂しく家路をたどつてゐるでせう。一日汗を流して働く人を充分なぐさめて下さるから、お月様はほんとにおやさしいのね。

私、お月様大好てすわ、何だかうれしいので、幼い妹と聲を合せて、お月様えらいなとうたひますと、ほら空ては有難うつてよろこんで耳をかたぶけて、聞いて下さいますやうてす。一度黑く沈みきつた木立も、皆ゆめがさめたやうに、生々として、清く尊く見えます。さと吹く風、まあいゝ事。そのうち、垣の邊で、何蟲か、すゞしい音を立て初めましたあゝ彼方では母様のお聲、忘れてゐました夕顔の花がいつのまにか。咲いてその露の一ッ一ッには、小いさなお月様もゐらつしやる……。

○松原のお宮

名古屋　中平文子

松蔭の鹽湯浴んで、我が世の衣にふるゝは惜しい様な湯上りの肌を、せめてとサッパリした糊附の浴衣によそほうてゐると、「姉さん」と聲から先に、裏庭の枝折戸開けて、ちよこ〳〵と可愛らしい下駄の音、夫は大好のお隣の冬ちやんで有つた。

冬ちやんは今年五ッ、年よりはませたれど、色の白い、一の字眉の、圓な瞳持ッた、田舎には珍らしい美しい子である。

「姉さん、又松原のお宮ちやんへ行きまちやう」と云ふので、「エヽ、さア、參りましやう」と庭に下りると、冬ちやんは嬉しくて堪ら無いかの様に小躍して先に立つた、撫子や月見草の徑み辿つて行くと、いつか太陽は西に沈んで、金色の夕榮を、古城の松にあびせつゝ、空には早や紫の星が二ッ三ッ晃いてゐる。

清い流の里川の土橋を渡ると、其處は松原のお宮である、小な塔籠の間を縫ふて、一本古びた松の根に腰を下すと、冬ちやんは早や、例の様に蒲燒屋を始めた。「姉さんはお客様よ、サア買ひに來て頂戴」。お尻の大い庄屋蟻を取つて、赤い落松葉に突きさし、小笹の葉に包んだのが、五錢十錢、夫も暫く、燒てあいて仕舞つたと見えて、白い油屋さんの塵を拂つて、自分の膝に丁然と腰を掛けた。「オヤ最うお止めつ」「エヽ、お蟻さん痛い〳〵と云ふから、もう堪忍して上たの」「然うまア、冬ちやんは悧こい事。あれ御覧なさいな、冬ちやんが餘り大人いもんだから、お月様まてが笑つてらつしやるわ」

松葉かげから、につこり顔を出した七日月を指すと「あら、さうネ、」と嬉しさうに云つたが、急に眞面目になつて「姉さん、あのお月様、最うぢきに圓くお成なさるの？」「はア、最う七ッ寐んねすると」と云ふと「そう私可厭だ」と冬ちやんは悲しさうな顔するので「まア、其れが何うかしたの？」と聞くと「でも―姉様昨夜仰つしやてたう、お月様が圓くなると、遠く〳〵のお家へ歸るんだつて、だから私……」「冬ちやん!!!」自分け碎と抱きしめた、さなり、自分はこの夕月の圓くなる頃、遠い我家へ歸らねはならぬのである。あゝ、さりながら自分はこの愛らしい冬ちやんは、永久に〳〵放ちたくないので……思出多き此の松原と共に……

○箱庭

静岡　た　子

小高き山には、老松の葉も青々と天に聳え、下枝に蔽はれし古宮は、雨風にや破られし、いとあはれげに、今其の前に伏拝む老人は、御國の勝利我が子の無事をや祈るならん。鳥居石燈籠など、いづれも古めかし。小指程の南天の下に、毛色美しき小鹿の居るを見れば、この宮は奈良の春日のにや、藍を堪へし小池の底には、如何なる大魚や遊ぶらん。渡したる丸木橋を行く人かげの、水にうつる樣など、わざとならずして面白し、昨年祖父よりたまひし青桐の下のさゝやけき藁家、あゝ、そが中には、賤の女機織るらんか、糸くる媼もあらんか。

さて、この地には、先つ頃より蟻と云ふものあまた移り來て、これこそ己が國よと云はぬばかりに、東西をかけまはる樣、こよなうをかし。さゝやかながらに面白く整ひたるこの箱庭は、我が妹が學びの暇の手すさみに作りしものにして、名をば桃の園とぞ云ふなる。

○草刈り

常陸 大久保きん

妾は今し籠を脊負ひ、一挺の鎌を提げて、柴の折戸をくゞり出でぬ。宵月は西の山の端に落ちなんとして、宛ら病婦の瘠顔の如く青ざめつ、宵の明星は猶東の空にのこるなり。鶏鳴暁天をたゝいて、寶の奥にいと幽かにきこえ、清風そよと木の間を吹きて、數滴の銀露はら／＼と、襟元に落つる心地よさ。

やがて夜は全く明けはなれて、遠近の林の中よりは、朝げの煙たちのぼりぬ、さながら夢の白龍のぬる／＼と。妾はとある廣野原に至りて、籠下ろして鎌とりぬ。鎌の行くところ、白玉のそれにも似たる露のこぼるゝさま、いと惜しき心地すれども、落ちてあとなく消ゆるをかしさよ。名も知れぬ千草の花は、佳人宮殿に弄ぶ所とならずして、あはれはかなくも妾の籠に納められたるをかこつらん。

猶も刈り行くなりしも、蝶は花の臥床を失ひてか、驚きて舞ひ上りぬ。汝ありしならば、かくも無情のことはなすまじきものをと、獨りごとすれども、甲斐なし。

やがて草は籠に滿ちたるにより、それを負ひて、家に歸らんとすれば、何時の間にか、蝶は籠の中なる花の上に羽を休め居たり。前の花床もとめ得たりしか。あはれ可憫の蝶は、妾の脊の上に罪なき夢結びつゝ、花の心とや語るらん。

蝶の夢を醒ますも、罪と思ひて、靜かに草の上を歩みて、家に歸りぬ。日はうらゝかに門邊の松林にのぼりぬ。

○起床の數分時

京橋 曾村鞠子

一番鶏の聲が、靜かな空に響く。戸の隙間から、蚊帳の上に細い／＼光線がさす、淡い影がふわ／＼と波を打つと思ふと、何時か妾の夢は破れて居るのである。

朝顔、心の中に先づ此のことが描き出される。今朝は幾つ咲いたであらうあの大輪の瑠璃も獅子咲きの赤も咲いた筈。雪ちやんの大好きな縁取りの薄紅は、何うだらう。妾は斯う考へて、早くも二番鶏のなくのを待つのである。

行燈の光りがぼんやりとなる。戸の間が餘程白んで來た。蚊帳の中には妹の雪ちやんが、すや／＼と寐て居る、足をまる出してある。

「まあ風を」妾は思はず聲を出しながら、夜具をそつと足の上に乗せてやる。薔薇色の唇が、夢の樣に動く。と思ふと、寐がへりを打つ。枕がはづれかゝる。直してやる。

昨夜の夢の名殘りてあらうか、頬がぽつと紅くほてつて居る。短かい御下げの髪が、ふわ／＼と眞白な頸に流れて居る。その可愛さと云ふたら……。

妾はたゞ夢の樣に、雪ちやんの顔に見とれて居る。待つて居た二番鶏。毎朝二番鶏のなくのと共に、跣足のまゝ庭を逍つて歩くのは、妾が夏季休暇中の唯一の樂でもあるし、又課業ともして居るのである。

今二番鶏がないた。妾は床の中に起き上つて、帯をしめ直す。雪ちやん

はまだすや〳〵と寐て居るのである。あゝ樂しい散歩。今出て樣として居る姿の顔のほゝゑみ。平和の神樣は賤が伏家の唯一の慰藉者である。

○秋の天地

尾張　八重子

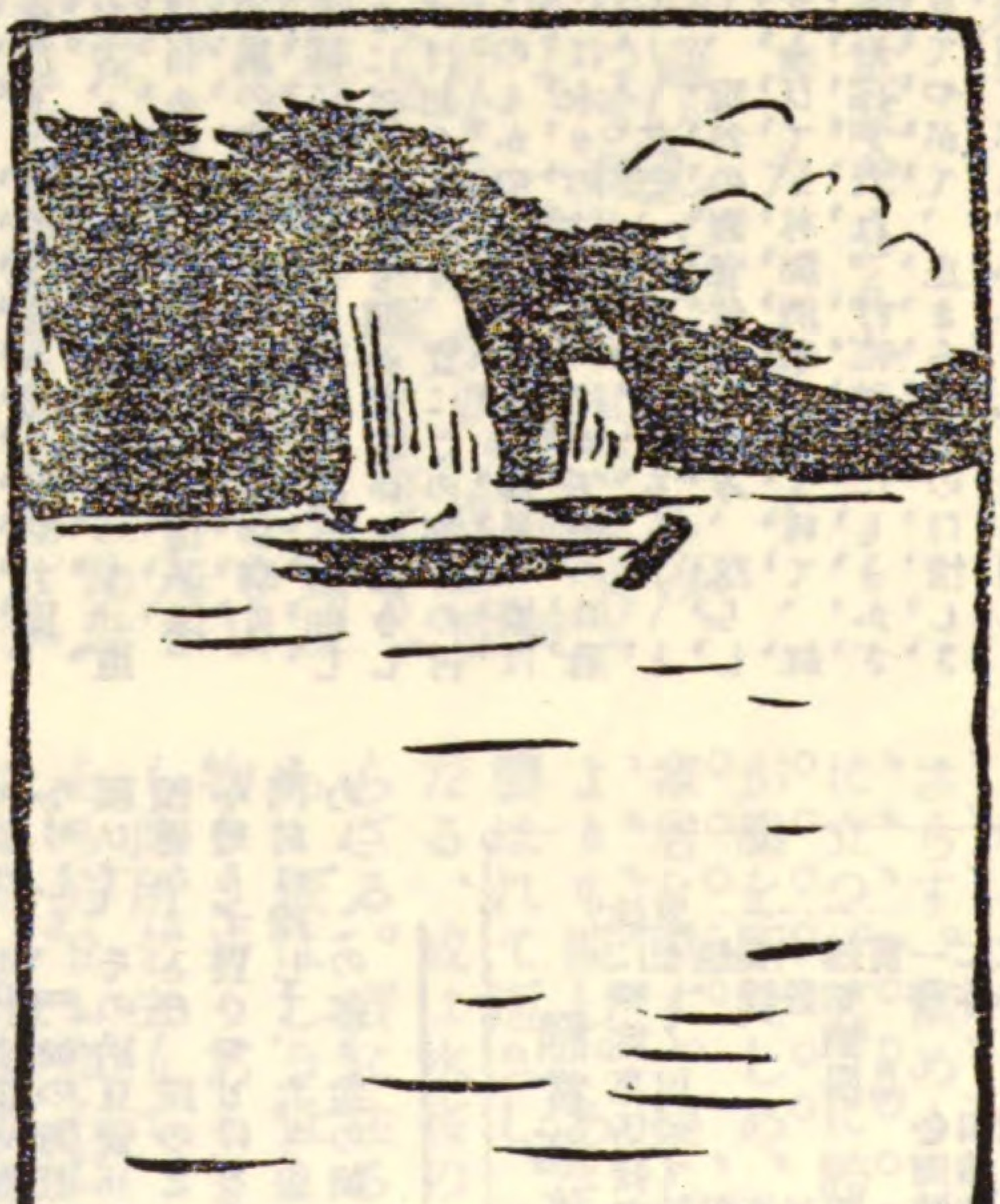
（選外）

○

青葉にこもる夏は逝きて、いつしか秋は來たりぬ。緑深き木蔭に詩集繙きしは夢と消え、天のみ神は、よべ吹き荒びし秋風と共に、むし暑き夏を取り去りてこゝに涼しき秋を造れり。誰か秋を哀れといふや。見よ、秋は收穫の期にして、萬物の實を結ぶ時にあらずや。秋の草花は彌生の空にも增して、われ等の眼を樂しましむるにあらずや。げに、閑靜にして美しきかな、秋の天地。

○

夕べそゞろ歩きに、野邊の景色を眺むれば、ま垣に咲ける萩の花の、吹く風に搖られて、西に東に動くさま世心知らぬ少女心にもたとふべしや。花薄の、月の出づるを待ち顔に風に打ち靡き、野菊の花の狹き道の邊を飾りたるなど、いと美し。色おもしろき刈萱や、朝こき紫の色さやかに咲き出でたる桔梗や、さては、女郎花など、くさ〴〵匂ひ出でたる、また一入床し。眞澄の月の冴え渡り、庭の草葉におく露に映じ、物のあはれを知りけん松蟲蟋蟀の、草葉にしだくなき聲に、はら〳〵とこぼれて、ちさき月のあまた碎くるも、またなう面白し。



岩手　黒澤美江子

○

秋の月こそげに〳〵爽快なるものなれ。夕餉も終りて、端居近く皎々たる明月の光りをあびつゝ、一家談笑する樂しからずや、二三の友と共に、一葉の扁舟に棹して、河上銀波を漂はし、鄙びたるうた唄ひつゝ小川を漕ぎ下るも、亦快ならずや。殊に仲秋の月明に乘じて、輕舟遠く海上に漕ぎ出て、白鷗の三つ二つ波間に飛び、海上一面に金波銀波の漂ふを見、時に水禽の聲を聞かば、心天外に馳せ身俗塵を脫するを覺えん、げに爽快なるかな、秋の夜の月。

○

秋もやう〳〵更け行けば、農家は取り入れの最中なり。春種を蒔きしより、雨につちかひ、風にいたはり、いつくしみ育てし甲斐空しからず、今や黄金の實を結んで、重げにうつむけり。そゞろ歩きに野邊に出づれば。若者は打ち揃ひて、面白う唄ひつゝ、刈り取るなり。こなたには稲こきする乙女あり。かなたには鼻唄面白う手綱取る童あり。いづれも其の稻の豐けく實れるを見て、喜色面にみてり。おゝいかに閑靜にして平和なる秋よ。

○紅葉を那谷寺に見る

越前　志田芳子

那谷寺は加賀國にありて花山法皇御歸依の觀世音を祭る祠あり。春は櫻秋は紅葉を以て名あり。

入重葎、しげれる宿のさびしさに、人こそ見えぬ秋の來て、あまり淋び

しき夕まぐれ、しぐるゝ空をながめつゝ、四方の梢のかなしさに、物や思ふと村雀、飛び立つ鳥の羽もがな、思ひつゞくるなりもなり、野山の紅葉昨日今日、いかに麗らかなるなむ、常に籠りておはせんは惡しかりなんや、いざたまへ、あすの一日を紅葉見て、遊び暮さんいざやたまへと二人連。

神無月の三日の朝、鳥より早く起きいでゝ、旅の裝束はでやかに、金津の驛に着きにけり。汽笛の合圖に動きだす、汽車は見る間に早や十里、動橋にぞ送りける。渺まく隧の哀れなど、如何に思ふとかこちつゝ、道のやましさ打ち忘る。此處らあたりは目も遙く、靡びやかなる淺茅原、枯れたる虫の聲あはれ。野面をそよぐ風の音は、琴の調べに通ひ來て、いともなかしくおぼゆるに、雲の絶え間に日影見て、草葉の露の色白しこゝは名におふ那谷の寺、彼業平の心には、神代も聞かずといひおきし色も龍田のもみぢ葉は、いまだし見ずば知らざるも、實にこの那谷の村紅葉、それになさ〳〵劣るまじ。このもかのもに峙てる、屛風の巖は黒く〳〵て、下にたまれる水奇し。上には木々の梢しも、はや下染の時過ぎて、百入千入に薄き濃き、花葉さま〳〵其姿、心ありげにちら〳〵と紅葉を將の神心、神さび心すみわたる、那谷の觀音伏しをがみ、落ちしく紅葉かいあつめ、腰打ちすゑてやすらひて、林間酒をあたゝめて、紅葉燒くなど吟したる、つき〳〵しこそおぼえたれ。げに神代にもきかざりき、唐紅に水くゞる、流れの面を見てやがて、止まらぬ旅の口惜しさ亦來ん年に契りおき、かへり路につき道すがら、かへり見る日に別に日の、あたるがごとし紅葉山。燃ゆるがごとし那谷の寺。

秋田縣　大越幹子

○霜の朝

『霜下りたり』寒げなる下女の聲。

妾は初霜を愛づべく、例よりも早く起きて、庭に歩を運びぬ。庭もせにおける白霜に、花草はうらかれて、見る影もなくやつれたる中に、誇り顔なる寒菊の一と株。いみじくも咲きたりな、見渡せば、木々の葉霜をおびて、一入紅色に染みたるに、楓は殊更に美しく、枝もたわわに垣越しに見ゆる隣りの柿の實、又いやがうへに紅し。千年綠を變へぬ松が枝さへ、今朝は翁の頭髮の如白かり、鴉はカーの聲をも發せず今塒を出でたらむ樣にて、杉の梢に首を縮めて止まれり。

やがて、妾は朝餉の膳を揃へて、母樣に手傳ふべく家に入りぬ。をりしも、門前の街道を隔れてゆく納豆々々の可憐なる聲。妾は母樣に願ひて、その納豆賣りを呼びけるに、年の頃妹と等しき位にて、身には襤褸をまとひ、跣のまゝにて入り來たる。餘りの憐れさに、籠の納豆苞を殘らず買ひやりけるに、彼の女は頰に悅びの色を浮べ、小さき足跡を門前に殘して、たち去りぬ。あゝ、この寒き霜の朝を、わが宿は、納豆汁の團居の膳に溫まらなむ。

論文

文學士 鹽井雨江先生選



◎樂天家たらんか厭世家たらんか

静岡 たか子

あゝ樂天家たらん哉。春風駘蕩として天地をつゝみ、花の裳裾、蝴蝶の冠、霞のかつぎ輕く野山にさまよふそれのごと、面白きは此の世よ。一枝の筆を握て、天下を論ずるも可なり、人物を評するも可なり、或は東西して名所古蹟を尋ね、花にうたひ月に舞ふも可なり。樂しからずや、自由の鄕。櫻花散る早けれど、又幾度も咲かむ。長久に盡ぬ此の世に、春來る度は、野をも山をも裝りなむ、缺くればこそ、月もみつるなれ。人も生るゝは寄、死するは歸と、古人も云はれしを、此世に別れて樂しき故鄕に逝かむこそ、なかなかに樂しからめ。艱難は樂を生み、病は健康の基、爲の天災は世の汚を淸むる神の御手ならずや、何か悲まん。あゝ樂しきは此世よ。時は變れど、變らぬ心の春ぞ樂しき。いざや、いざや、人も吾も、此の樂しき世を、面白き世を、手とり足そろへて舞ひ歌はなむ。あゝ樂しやな

あゝ、厭世家たらん哉。それ、秋風の木葉をちり亂す時、生物はあらゆる悲みの聲を出して、天地に號叫す。淒き月は惡魔の眼にて、四方をにらみ、梧桐一葉は幾多の同胞をうばひ去りぬ。あはれ、世の無常は知りつくしぬれど、なほうらめしきは此の世ぞや。春蝶の樂しげなりしも、羽は落ち色はあせて、野菊の傍に屍をさらす。富めりし家の主も、つゞれに面おほひて、門に立つ。天下に誇りしローマの古城徒に訪ひ行く詩人が腸を斷たしめ、奈良の舊都あれて、月空しく苦むす家居を照す。樂しさ嬉しさは、只一夜の夢に似て、夢よりも淡し。あゝ厭ふべきは此世かな。若き人の病に襲はれて逝きし、火災にあひてにげ後れ黑こげになりたる、或は水害のため父母を失ひし、いづれか無常ならざる。實に生るべからざるは、此世よ。あゝ厭はしき世よ、人里遠き深山に住まんか、其處も物うき折りあるを。秋蝶の見にくき樣せむよりは、早く此所を去りて、天つ星かゞやく鄕に行ましものを。そも亦まゝならぬ浮世や、あゝ厭はしき世や。さても、己は如何にすべき。まゝならぬ浮世を、まゝにして暮さんか、樂しき此の世を悲しく過さんか。あゝそも如何にすべき。

◎眞の婦人

長野市 飯塚ぎを子

眞の婦人にてこそ、はじめて眞の婦人の性格をこそ論

ずべけれ。さるをいまだ修養のあさき妾のよく論ずるの力なきことあきらかなれど、日頃の所感のくさぐさとりあつめ、今こゝに述べなんとす。をこなる方にあざけり給ふ事なく、幸に妾の心あるところ汲まれ、女子文壇愛讀せらるゝ諸孃がたの、一度は己が心に問ひたまはんことを。

あゝ、今の世果して眞の婦人として具ふべき性格あるものあるにや。あかつきの星のあはきその光よりもあはくいと少きことこそ、げに國のためなげかはしけれ。一度歐洲の文明の潮流我が國にいりてより、とくにめだちて進みしは、教育の業なり。いづかたをながむるも教の庭のあらざるなく、教へ草つむこらのあらざるはなし。まことや、君のめぐみの露にうるほひそだつなでしこ、やがては美しき花さかせ、みをむすびて、わがくにをかざらん、ゆくすえたのもしくぞ思はるゝを、又ちかき世よりして、女子教育のこゑたかまりて、妾のごとき婦女にふさはしき學問をさづけ、婦人の地位をたかめ、女としてもつべき德操を教へんとて、いづくとなく女學校なるもの設けられ、ものまなぶにやすく、智をひろめ德をみがくにやすき世となりぬるをまことに婦人としてはづべからざる性格をそなへたる人の少なきは、いとをかしき事ならずや。ことに「式部」などと、將來のぞみある女學生方々の。歌に川柳にものされるゝをみても、眞に婦人としてふさはしき人なく、我國女德の地におちたるやあきらけし。女子文壇に毎號剽窃詩文の報告あるをみても、ちいさきことながら、お互にかたはらいたくぞ覺えらる。かくもあさましくみだれにみだれしかと思へば、我國婦人の前途大に憂べきことなり。學問に長し、藝術にたくみに、みめよくかざれるを、眞の婦人とはいひがたし。もとをわすれ、すえに走り、氣のみ高尚にながれ、實行力に乏しくては、何らのかひやある。世はいまはねむれるにあらず、活動しつゝあるを、耳かたむけて、世論のむこふところをきゝ給はれな、すべてのけがれをさり、誠のみちゆき、大に修養し、大にいましめ、大につとめて、もろともに日本婦人の特色を世界の活舞臺にあらはし、年毎に色うるはしくさきそろひ、旭に匂ふ櫻花よりも美しく、眞の婦人らしき性格の域に進まんことこそのぞましくぞはべれ。

○讀書の必要を論ず

神戸　翠雲女史

人は、生れながらにして萬有の理を曉り古今の成敗を知るものにあらじ。必ず師につき書によりて之を學ばざるはなし。されば、古人韋編三たび絕つといひ、手に書を捨てずといひ、或は螢を集め雪を積み、或は圓き枕をなし股に錐を刺しゝ類の苦をもなめき。これ他なし、讀書の必要を感ずればなり。然はあれども、廣き學海の中、卷秩の多き、牛に汗し棟に充つといはん

もなか〳〵愚なる程なれば、いかて之を讀み盡すことを得べき。たとひ能く讀み盡くすも、彼のいはゆる蛙鳴蟬噪にして止まんには、何の要かあらん。故に我れ等はまづ己が目的を定め、之に適する書を選びて、能く味ひ、眼光を紙背に徹し、意を言外に求むる習慣を養ひ、智識を啓き德器を研き、國體を重んじ世を益することを圖るを以て、急務とすべし。徒に詩を作り歌を詠じ、益なき死文を玩びて、一の定りたる目的もなく、彼を讀み此れを繙く如きは、啻に讀書の要を失ふのみならず、又己が能力を害ひ、所謂書を讀む人にあらずして、書に讀まるゝ人ともいふべきか。そも〳〵讀書の要は、多く讀むにあらずして、善く讀むにあり。善く讀むにあらずして、善く行ふにあり。彼の在衡朝臣が參內の車に文書を入れ、義家朝臣が江師の門に兵書を學びしも、徂徠先生の大學俚諺解に於ける、敬字先生の自助論に於ける、何れも善く行ひしものといふべし。元より人の能力は限りあるものなれば、此の廣き世の中の事々物々を悉く知り盡くさんは、かたしとも難きわざなれども。書により序に從いて之を學ぶときは、天地を極め六合に亘るも、何の難きことかあらん。實に書はあらゆる智識の源にして、又人世の鑑なれば、萬有の理を知り古今の成敗を鑑みんとするものは讀書の功にあらずば、いかてか之に通ずることを得べき。あはれ世の活ける智識を啓き、活ける業を爲さんとする人々よ、活ける眼を開きて、活ける書を讀ずてやは。名譽も財産も爵祿も美妓も喜樂も平和も、書によりてこそ之を求むることを得るものなれ。されば、我れ等は更たけ人の眠れる後も、獨り燈をかゝげて、冊を開き、見ぬ世の人を友となし、後白河院が讀みおかせ給ひし

濱千鳥ふみおくあとのつもりなば
かひある浦にあはざらめやは

といふ大御歌の意を辿らんとするものなり。

（選外）　志摩　木田つた枝



◯出放題　讃岐　さつき女

◯人間は機械に非らず、力に限りあり。事業は限り無

し。限りある力を以て、限りなき事業に應ぜんとす。如何にしてよく我々の天職を遂ぐべき。修養なり。我れ之に依りて、日日新なる活動力を養ふべきなり。

○修養は活動の源泉なり。之れありて、吾人は宇宙の競爭場裡に立つ事を得。之れ無ければ、吾人は生存競爭に堪ふる能はず、吾人は修養の源泉より、活動の水を汲み來つて、此世界に活動し得る者なり。修養無き人は、實に憐むべき限りなる哉。そは根無き樹の如く、又源なき流れの如し。遂には枯れ涸くべければなり。

○同じきものを評するにも、其人の心によりて、雪と墨程の差を生ずる者なり。されば惡しき人なりとも、之に伴ふ者はよしと譽め、たとひ良き人なりとも、之に伴はざる者は惡しと毀る。故に毀譽によりて、其よしあしを定め難し。されば譽めらるゝも毀らるゝも、つゆ心にかくべきにあらず。さるに、世の中に、人に譽めらるれば得意げになり、毀らるれば憤り慨くやからの多きこそ、いと／＼慨はしけれ。知らずや、見る人の心々にまかせ置きて高峯にすめる秋の夜の月てふ古歌を。

○智惡は小出しにすべし。夫れ、人は一躍して名高き人物となること能はず。今より思へば、豊臣秀吉は、其境に應じて智を發揮したるなり。初め草履取りをなし、それより薪炭奉行となるに及びて、又相當の智を發揮せり。かくして諸侯に列し、而して後、遂に天下を一統せり。若し秀吉、初め草履を取るは、我れ之を爲すをはづとして、自ら英雄なりと稱して、其の職をおこたりしならば、遂に天下を一統すること能はざりしならむ。

○巖上の感　　群馬縣　田所きよし

百州の廣きを眼下に睥睨するの地に住して、何の不滿かある。眺望絶佳、見渡す千里、一眸の中にあり。何ぞ喜ばざるを得んや。異郷の眞を知るの地、此の巖上をおきて、はた何れの地かあらん。

霧こめし沖、輝く朝日に生む白帆、蜿々として流る、長蛇の如き大河、走る車馬、錦織りなす花野原、花に舞ふ胡蝶、其の他ありとあらゆる物事、一として眸中に入らざるものぞなく、一として心身を樂ましめざるものなく、眼下に眞の美を畫く。噫、何たる佳景ぞや、何たる絶景ぞや!!

翻て足下を見れば、吾は戰慄して、その危險なるを知る。噫危かりき。若し一歩を誤たんには、千尋の底に、空しく哀れの死を遂ぐべきなり。足下千尋の谷底には岩角突出し、猛火其の勢を逞しくす。噫、何たる危險ぞや、何たる危險ぞや!!!

人生の生涯は、實にも不憫なるものなり。恰も岩上に立ちて、四方を睥睨するに異ならず。『浮世は勞苦を意味す』と、眞に然り。絶景なる哉樂世なる哉と思ふも、若し一歩を誤たんには、忽ち猛火燃ゆる千尋の谷底に

生を終ふべきのみ。分時も心をゆるすべきにあらず。只勞苦のうちに一生を終ふべきのみ、厭ふと雖も亦免るゝを得ざるなり。

唯一歩を過たざるこそ、これ人生最上の幸なるべけれ。若し一歩を誤たんには、是れ人生最上の不幸なるべし。

危き哉、人生。

われは唯、一歩を誤たざるを願ふのみ。噫々。

○侃々錄

信濃國　帶刀きさ江

一

大將と馬丁、大臣と小使、岩崎家の令孃と土百姓の娘、其の身分には上下の差別あるべし。其の腦力と智力には、天壤の懸隔もあるべし、されど、共に食て寢て此の世を過すは、同一なり。猶品性人格に於ては、決して貴賤によりて差をいふべからず。寧ろ後者に庶々品格の完全なるものを見出すものなり。

況や、國家を形成する上に於てや。皆共に組織上の一要素なり。何ぞ軍司令官と輜重輸卒に輕重あらむや。

二

平和は人世の理想なり。戰鬪は平和に至る手段なり。

戰鬪の後に於て、初めて平和を得べし。

艱難なる世路を勇往猛進するは、戰鬪なり。成功の域に達して安息するは、平和なり。

故に、健鬪者にして、始めて平和の眞味を樂しむを得ん。

三

人は渴しても盜泉の水をのまず、飢えても周の粟を食はず的の意氣なからざるべからず。又弱者を助け强者に抗し、貧者を憐み富豪に楯つく位の義俠心にも富まざるべからず。

意氣と義俠心、此の二者をよく利用すれば、人を壓し人を服さしむるに難からず。古來の偉人は、之れを用ひたり。古への傑士は之を用ひたり。婦人の身とて、其の用なきものには非ざるなり。

四

水湧けば必ず流れ、人生まるれば必ず死す。これ天地自然萬代不易の法則なり。

古今星霜幾萬歲、未だ不死の奇藥求め得しを聞かず。東西茫々一萬里、未だ不老の妙術の傳へられしをきかざるなり。

さるを、人の子の愚なる、此の法則を無視し、此の法則を悟らず、徒らに死を厭ひ生を願ふ。過てる哉。

死、死、之は悲しきものなり、恐るべきものなり、僅か五十年、槿花一朝の榮永きには非ず。永く生きんは樂しみ多し。されど、猶死して光榮ある死なりせば、死するはいかで悲しかるべき。見よ、ネルソンの死や、凜として千載の後も其の壯烈をうたはしめ、廣瀨中佐の死や、義烈鬼神をなかしむるには非ざるか。あゝ、死、光榮ある死を愛せ。

五

世の中に眞の交友なき程不幸なるはなけむ。友は人の安慰者なり、友は人の唯一の保護者なり。蹉躓して失望する時、希望の光りを望ましむるもこれ、零落して不遇に泣く時、溫情を以て慰め吳るゝも友、櫻花繚亂風に亂るゝ春の黃昏。粉雪漠々雪折れの竹の音さびしき冬の夜半。そこに歡聲湧き、そこに笑聲屋外に洩るゝは何。あゝ友なるかな、友なるかな。人生五十泡沫の果敢なき一生、友を外にして、何處にか快樂を求めむ。友を措いて、何處にか幸福を探さむ。

◎無益の收得すべからず

小樽　梶水仙子

抑も人生は、一面に於て、或物を得んが爲に費さるゝ者である。人は呱々の聲を上ぐると共に、得んが爲に啼き、得んが爲に叫ぶ。長じては、智識を得んと努め、位地を得んと踠き、富貴を得んと急せる。或は家庭を得んとし、或は名譽を得んとし、權勢を得んと欲す。人生、日常の生活より國家社會の事に至る迄て、人は得んが爲には能く耐へ、能く忍び、能く進むの熱心を有し、如何なる者を犧牲としても、得ずんば止まざるの情神!!如何に熱心にして旺んなるか？時としては、道義を犧牲として迄ても、得んとするの熱心さへ有する者がある。雖然、其の得たる物を能く維持し、能く調理する熱心と伎倆と忍耐とを有する者!!世上果して幾許かある。見來れば、寥々として曉星の如くではないか。

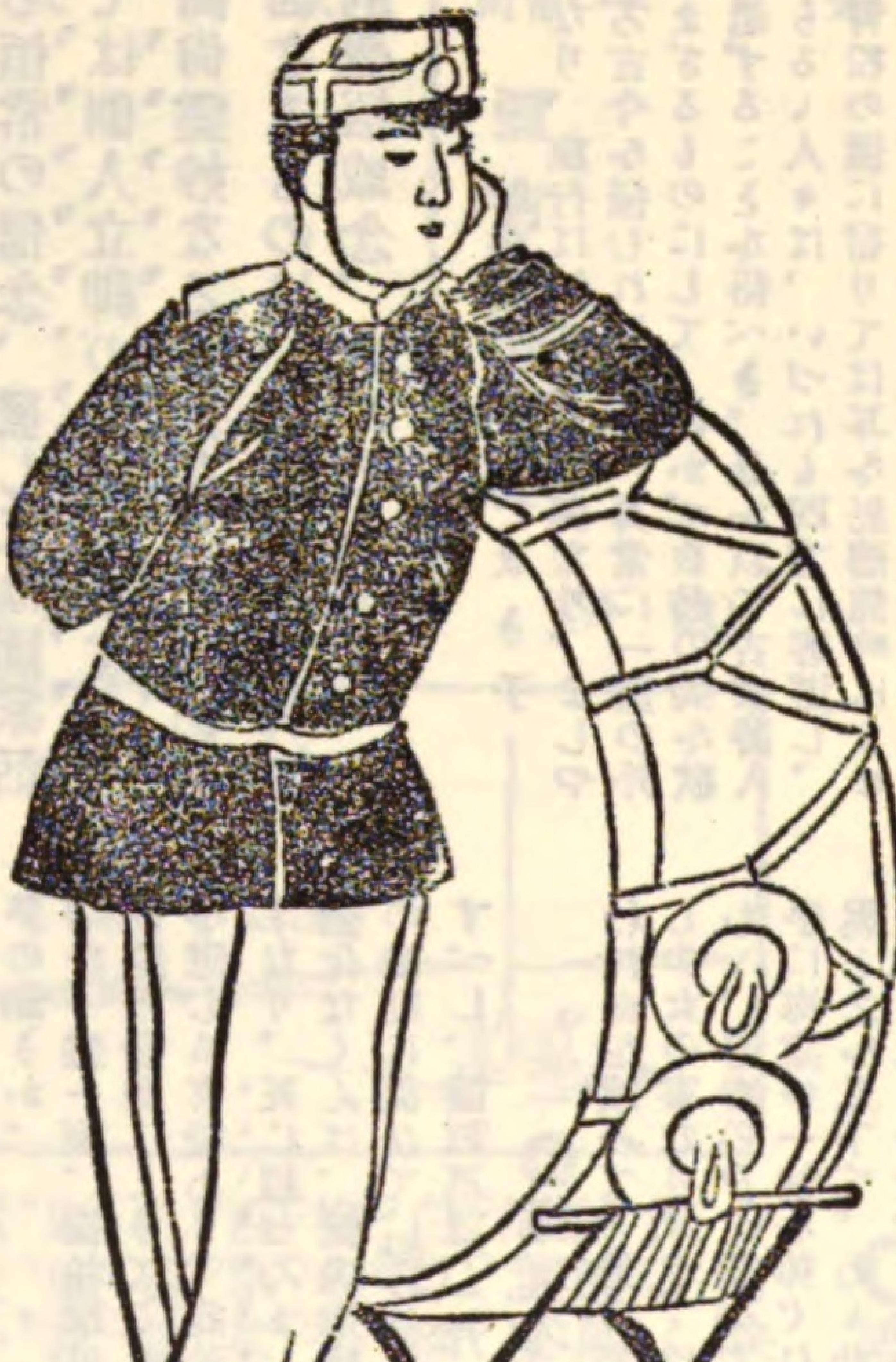
先づ友情に就きて之を見よ。友情は人生至高の得物である。一人の友を得るも、決して容易の業に非ず。肝膽相照し意氣相投ずる迄には或は誤解あり、失敗あり又淚ありて、曉天の明け行く其の如くにして、やうやく友と友とは相結ぶのである。雖然。一度之れを得ん乎？其の後は果して如何。啻に其の得たる友情を深うせんと圖らざるのみならず、動輒一少瑣事の爲めに友情を傷けんとし、或は友に求むるに急なるが爲に自ら求めて友情を冷却せしめんとはするのである。友情と雖も、之を放任して顧みざる時は、種々なる弊害は續出するのである。如何なる美花と雖も、之を放任して顧みざる時は、終には醜容見る影もなき形と變ずるのである。花の燦爛たる時のみ、能く手入れし、常時には放任して顧みざる時は、其の枝は枯れ、其の樹は弱りて、翌年は葉も花もなき枯木と變ずる者である。於是乎、怜悧なる花匠は、花時よりも花なき時に最も意を用ゆ、人生の事亦たこれと同じである。願はくば花なき時に、花を得んが爲に熱心なれよ。花散つて花なき時に、又花を得んが爲に、更に熱心勤勉なれよ、多く求めずして、少しく能く保存せられん事を!!!

◎愉快

日向　花田春江

笑ふ門には福来り、泣顔を蜂がさすとか。まーほんとに其通りだ。此世にある間は、成る丈け愉快に日を送るが目的だ。如何に悲しんでも駄目だ。古来煩悶の人の發明した事業は無い。面白い愉快だと云ふ内に、巨大の機械を發明するのだ。それ此愉快と云ふことは、寸時も忘れてはならぬ。（選外）

曉に鳴く鳥の聲は愉快に聞え、夕に鳴く鳥の聲は悲哀を感ぜらる。されぱとて、其鳥の聲には變りはない。たゞ其人の聞き様で、愉快にも悲哀にも聞こゆるのである。曉に鳴く鳥の聲だとて、煩悶して居る時は。決して愉快には聞こえはすまい。又同じく夕の鳥の聲も愉快の心を以て聞いたならば、矢張り愉快に聞こゆるに相違ない。皆世の中はこんな風で、一人は愉快と思つても、他の一人は心の持ち方によつては悲しむかも知れぬ。要するに快は誰しも快、悲は誰しも悲である。決して悲を快と云ふものはない。只悲しむが、何の益もないから悲しまない。其悲しまないのが、即ち愉快である。



故に見るもの、聞くもの、皆愉快の觀念を以てしたならば、勉强も自由に出來、すれば又快、快ならば、隨つて身體も健となる。さらば又々愉快を覺え、一の愉快の觀念は、あらゆる愉快を形成し、凡ての物面白く

横濱　小峯圓子

思ひのまゝに此世を渡つて行く事が出來るだらう。あゝ實に愉快と云ふものは、人生、寸時も忘れてはならぬ理想の友である。

○覺悟

名古屋　野百合

山岳を望みて、徒にその巍峩雲を凌ぐの勢あるに驚くなかれ。江海を望みて、徒に其の洋々天を浸すの概あるに驚ろくを休めよ。蓋しその然る所以のものは、必ずその源因の然らざるべからざるものありて存せざんばあらず。國家もまた猶此のごとし。徒に國家の繁榮隆昌なるを見て、其の原因の那邊に在るを知らざるものは未だ以て邦家の大事を論ずるに足らざるなり。然らば則邦家をして、隆昌繁榮ならしむべき原因とは、果し

て如何なる者ぞ、農か、工か、商か、學術か、將た男子か、何ぞそれ然らむ。之等のものは、固より社會をして、物質的に進步せしむるのみ。之れ唯枝葉のみ。末端のみ。妾等、固より物質的の進步が、更に形而上の進步を誘引するの力あるを否定するものにあらずと雖も、苟も社會の空氣をして、淸鮮ならしめ、鬱勃たる有爲の氣象、高潔なる恒常の信念、發しては國家活動の性命となり、收りては個人立脚の骨髓ともなるものは、物質以外、更に高尙靈妙なる原因なくんばあらざる也。而して其の原因なるものは、女子の深く胸憶に銘刻せられたる道德的覺悟感念、之れのみ。

○旅行と讀書

神奈川　片野まき子

自然は一詩卷なり、一の良教師なり、旅行は活きたる學問なり。よしや萬卷の書を讀破して、學ぶところ古今を極むればとて、身常に一室の外に出てず、足未だ他鄕の土を踏まざるものにして、いかで自然の美を歌ふことを得べき。天下の形勢に通ずることを得べき。是を以て古來詩人文士と呼ばれ、英雄豪傑と稱せらるゝ人々は、いづれも四方に客遊し、山水の間に放浪して、或は白沙靑松の濱に宿りては耳を怒濤龍吟によせ、或は萬仞の山嶺に登りては十三洲を眺瞰して愉と呼び、快と呼び、或は山寺に鐘を聽き、漁村に雨を賞し、或は古樹の陰によりて西詩を誦し、或は草堂の下によりて神史を讀み、或は孤帆夕陽を趁ひ、或は扁舟に明月を迎ふ、以て思想を養ひ、以て見聞を廣うせざるはなし。蓋し旅行は吾人が學校に於て、或は書籍について、或は新聞雜誌につて、或は人の談話によりて、學びもし聞きもしたることを實地に探究し、實際に研究するに最も適當の方法なれば、旅行と讀書とは恰も身體と心意との關係の如く相待て其進退を共にするものなり。

○變遷

和歌山縣　森井艶枝

滔々たる流水は、止まる時なけれども、昨日の水に非ず、吾人は尙生存し活動しつゝあれども、しかも昨日の吾に非ず、秒一秒、刻一刻に變遷すればなり。

榮枯盛衰は是春の夜の夢、昨日紅顔の美少年も今日は是白骨、蝶よ花よと撫てし子も、北邙一片の烟と散り果て。翠帳紅閨の中、偕老同穴の契も哀別離苦は免れず、後園に花を詠じ高樓に月を眺めし貴人も、時來れば襤褸の乞兒たらざるを得ず、昨日の淵は今日の瀬となる習、人生は眞に夢の如きか。

嗚呼一盛一衰、松柏摧けて薪となり灰となり、桑田變じて海となるてふ世路の變遷によりてこそ、人生は大なる趣味を有すれ。悲哀の中には之を慰むる喜悅あり、痛苦悲慘、窮りなき中にも、希望の曙光は、之を照すなり、死に瀕せんとして、悶煩するものには、天國あるなり、人生に變化なくんば、乾燥無味砂を嚙むが如くならむ。適者生存の今日、進化の法則に從ひて、變化するものは、永久に榮えん、然ざるものは、之に反すべし、懷舊萬望、一片の目に、萬斛の涙を灑ぐの感くなんばあらず。

○風雅の少女

秋田縣　出羽雪子

われ史を讀みて、最もあはれと覺ゆるは、彼の太田道灌に、山吹を出し少女の事なり。

あゝ、暮春の夕、雨霏たる時、瀟洒たる一少女の、茅の戸に跪きて、雨手に海棠の一枝を捧ぐれば、綾藺笠目深に、華なる狩衣つけし武士の、睨と之を見下す。あゝ此處に至りては、げに宛然一幅の妙畫にあらずや。さては此の少女、そも如何なる女なりしぞ。こは諸嬢の、自ら起し給ふ問なるべし。然るに之に就いては、古來不詳也として、誰も取調べず、道のため、惜しき事なり。玆にわれ思ふは、此の少女、應仁の亂を避けて、京に侘住みし、公卿などの女にてもありけむか。

あゝ斯くも風雅の少女にして、その名遂に表はるなし。惜しき哉。あはれ其の跡だにあらば、人は尋れ行きて、山吹の花も植ゑ、弔の塚も建てむに。今の、新派和歌など弄まるゝ方々。諸嬢は、時に當りて、能く此の少女の如き才あらせらるゝや否や。

仰ぎし姿のしほらしさ　都戀しき行く秋を
姉に送ると窓にして　添え歌思ふりんごの實
（評）果實の美は我國の歌人に忘られたり

新體詩

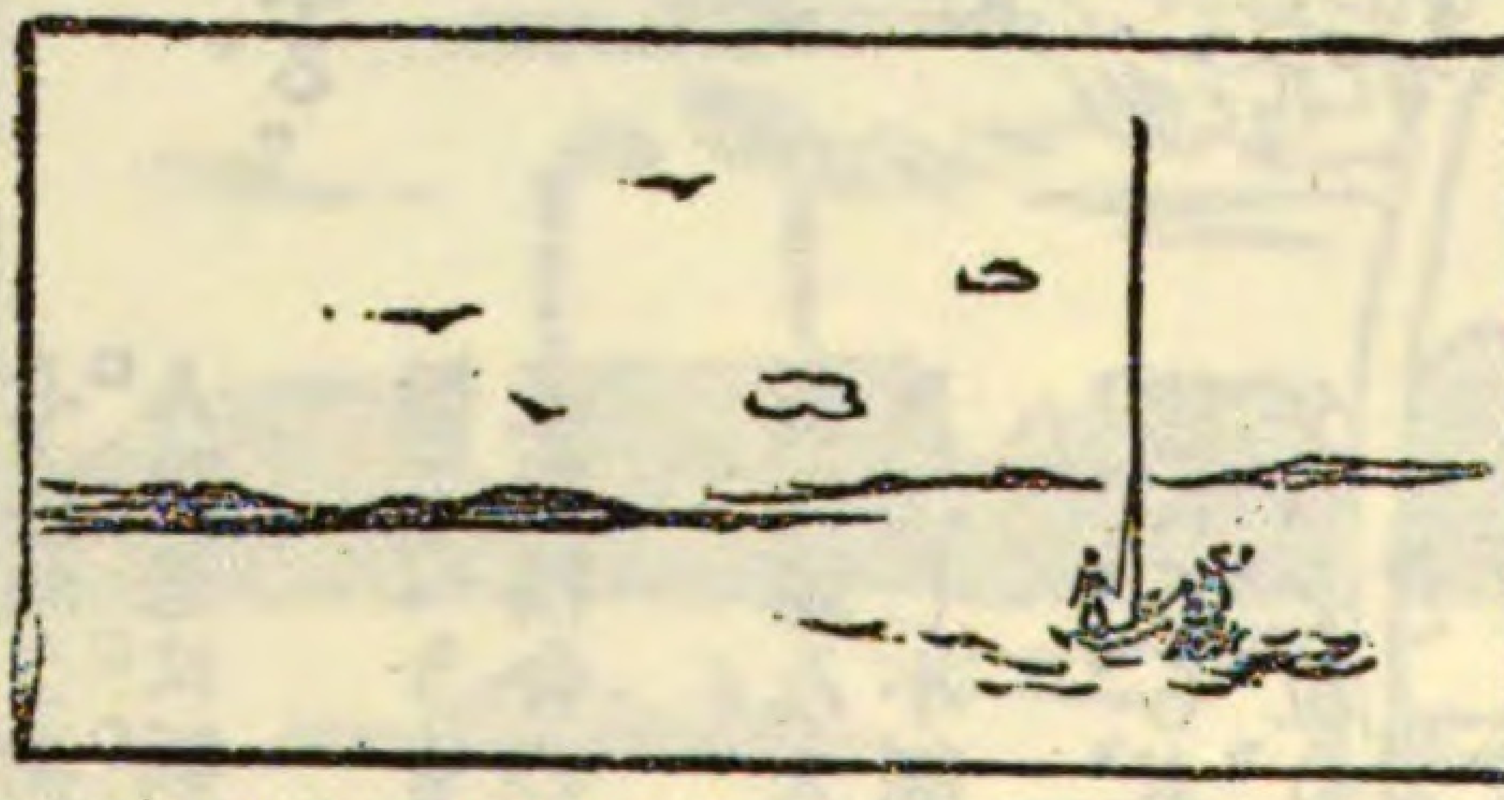
河井醉名先生選

地　○りんごの實

久留米市原古賀町　彌吉和歌子

晨た星の露うみて
土を根にかひはくくめば
二葉の緑り美しく
妹が化粧の十一を
窓にもたれて笑めるかな
花あたゝかに實を結び
一日一日と包みたる
白然の色はあらはれて
いや麗しき黄金色
乳房にぎる小さき子が
右手に持つ實は何の實ぞ
針もつ母に抱かれて
頰にあてゝは片ゑみの
花實ごつこ木の陰に

（選外）　大阪　飯尾美和子



人　○春の御園

芝三田豐岡町　三瓶花鄉

夕日映えては七彩の
沫花ふりまく噴水や
緋鯉眞鯉の逍遙に
清き惠となだれより
白き裸形の御像は
梅の香にほゝゑみて
百草なぶる芝の上
孔雀雄々しう羽ばたきぬ。
姫は自然と笑む顔に
黄金小扇かざしつゝ
綾のふり袖なびかせて、
獨誦すなる春の歌、
胡蝶ひらゝと舞ひきしを、
姫が緑の御髪に
匂ふ優しの花得ては、　靜かに羽をいこはせぬ、
（評）風韻饒る

秀逸

○雪　江州　琴瑠女史

魔神呪の劒ふれば、　青空忽ち妖雲湧きて、
平和の光消え失せつ、　呪をこめし白雪は、
冬の御領は我領ぞ、　人の子怖ぢよと降り來る。
地の國守る冬御神、　水仙聖く薫らせて、
狂へる雪を地にうけつ、　御惠み深き洗禮に、
匂も高き純白の、　啓示の色と甦らしむ。

（評）詩も純潔

○小さき美魂　新潟　野薔薇女史

蕾ながらに野の花の、　冷き土に返るごと、
若うて逝きし妹の、　靈想はなをもつきずして。
この世を永久に愛天使の、　かろきあや羽に抱かれて、
御空はるかに翔け離り、　榮ある神の樂園に。
彩の羽ある天女と化して、　夕べ月の桂男と語り、
羅似合ふ若まみに、　星と笑む妹が美魂。

（評）想像豐かなり

○古精舍　長野　美　子

三百年の春を夢を大天地に葬りて
枝立てゝ見る古精舍の寂默いとゞ凄い哉。
誰ぞや藝術の鑿の手は雙樹の花の浮彫を
斜にかけしさゝがにの何を彩る糸ぞとや。
七段高き聖壇に御衣まばゆき紫の
人瞑想に額垂れて涅槃を說きし跡いづこ。
散るべきものと花は落ち常なきものと人は逝く
祇園精舍の鐘朽ちて物、活動の影絕えぬ。
胸に泌み入る苔の香に背きて仰ぐ鐘樓の
きれし小綱になほ見ゆる姿さびしき若者が！。
戀にうらぶれ世を遠み幸にはぐれて鐘打きて
夕べを泣きし面影をかき消さむにはわれ弱き。

（評）作者、毎に一家の風を持す、希望あり信念あり詩狀に憧憬ふかき人

○天宮　牛込　小島はま子

夜、天宮に登り行く、　神の子追ひて追ひ掛の、
翔りに辿る夢の路、　路の細きを危みそ。
化粧豐かに飾り衣、　手にす無弦の小秘琴、
富士、秀峯の上よりぞ、　高き飛揭に起す旅。

地を離れて上つ方、
御子敬ひの禮なしつゝ、
大氣を去りし濁ら世に、
汚れは知らぬ星の子が、
送りくれたる花の輪の、
蕾に含む香に醉ひて。
乘りて鞭つ天馬の背、
運ばれ行くや天宮に、
宮の園生の垣づたひ、
姫はいづこに待ち給ふ。

（評）稍露骨淺膚なるを惜む

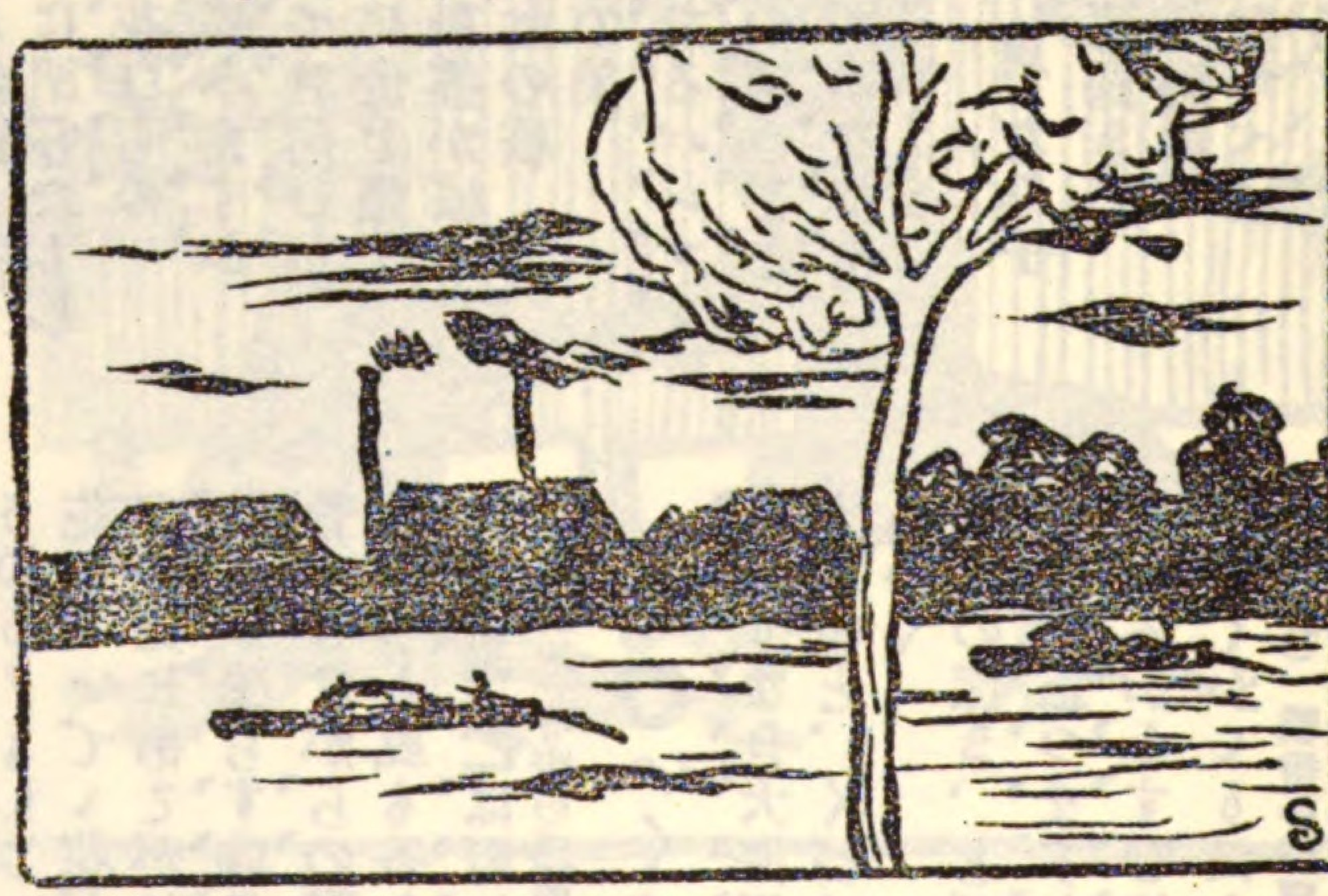
○村の夕暮

陸中　佐々木紅袴子

日正に暮れんとす、今日の仕事も終
へたれば、
いざ歸らんと鍬とりて、眺むる景色
うるはしや。
日正に暮れんとす、彼方の森の紅葉
は、
今し夕日に輝きて、燃ゆらん如く見ゆる哉。
日正に暮れんとす、耕しおへし畑の面に、
なげし光は淡けれど、黄金の色に見ゆるなり。

月の宮居の細殿に、
奔け行く樣も急がるゝ。

（選外）　淺草　宮下さつき



日は既に暮れたり、彼の森影に立ちのぼる、
烟は夕餉たくなるか、村はしづかにかすみ行く。
日は既に暮れたり、いざと家路にふ
み出せば、
希望の光みち充ちし、
暮の明星かゞやきぬ。

（評）他奇なく平坦なるが却つて題意に適ふ

○友の結婚を祝ひて

直江津　文子

仰げばうれしむらさきの、
み雲ひらきてあひだより、
あらはれいでし星二つ。
み空の花とめでられて、
散らでしぼまでとこしへに、
匂ふおもはのけだかさよ。
ふたつの星のへだてなく、
いとうれしげにさゝやくは、
なかに思ひのもゆらむか。
くしき光りのつきざらば、
かはらであれな結びたる、
えにしはかたくかつきよく。

（評）好祝辭、二個の幸は星の如く輝かむ

○病める詩友へ　群馬　遠藤照江

小さきハートに受し矢を　君は危くたもちたり
清きみ胸に喰ひ入りし　毒を盛りたる銀箭よ
いたわしい哉詩人の　胸はなやみに閉ぢたりし
風に崩るゝ牡丹花の　紅色あせて花ひらの
一つ一つに落つるごと　君は今かも病みますか
嗚呼行春を限りなき　希望いだきて君病むか
運命かなしき人の子の　あやにく詩に世を强て
幸はも知らず折々に　詩の思想の動搖がば
觸れて調律ある胸の糸　空に渡れば虹の橋
七つ彩糸あさやけく　彩色繪く天の榮
たとへば崇き畫工が　愛でゝ秘めたるパレツトに
たま〳〵溶きし隈どりの　セピヤ匂ひの清きごと
さながら馨る詩ごころ　せめても君が幸なれや

（評）詩人は幸ひなる哉、病んでもなほ此福音を聞き得る

○春野の歌　徳島　小川なみ子

榮に靉靆く七彩の　雲美はしう幕闢きて
聖き默示に天降りし　春を領する姫神の
白衣の姿み手麾して　御袖に空の雲呼べば
金糸のすぢの陸に射て　海より春の光りさす
降臨ませたまふ野のほとり。
胡蝶の舞もおもしろや　咲きては樹々に花を彫り
赤よ紫、黄よ綠、　萠えては草に綾を織る
ゆたかに透る彩霞　かすむ山〳〵『霓裳』の
空ゆく鳥は『羽衣』の曲。
うねり〳〵しさゝ川の　ふるく花かげ流れては
花よりいでゝ花がくれ　そこに微妙の響あり。
春の光にあこがれて　梢〳〵にゆきかえる
鈴ふり鳴らす駒鳥の　平和のしらべ水に射て
音もさながらの『春の譜』や　野の榮えを祝ふかも
おのづと風も香をもちて　み神の幸ちにこれやこの
春の『聖氣』は野にみちぬ。

（評）春野の感興、遺憾なく歌ひ出でられる

○いくさふね　蘆の江子

かぎりなき大海原に、近づきぬいくさのふねは
大浪雪と、くづるゝなかを、菊のみしるし、朝日にきらめく
朝霧の深さ、とざしに、黒烟空につゞくよ
白き鳩三つますとにあそぶ、天なる國のみ園をかりて
又はるかかすむ浪ま、敵のふね一ッ見え初め
うすくかゝりぬ水や空、動かぬ艦は繪の如し。

（評）戰爭を詩題とせるものにては是等先づ成功に近し

○微吟　大阪市　池田靜子

春零落の花の色を、胸にひめたる我こひと、

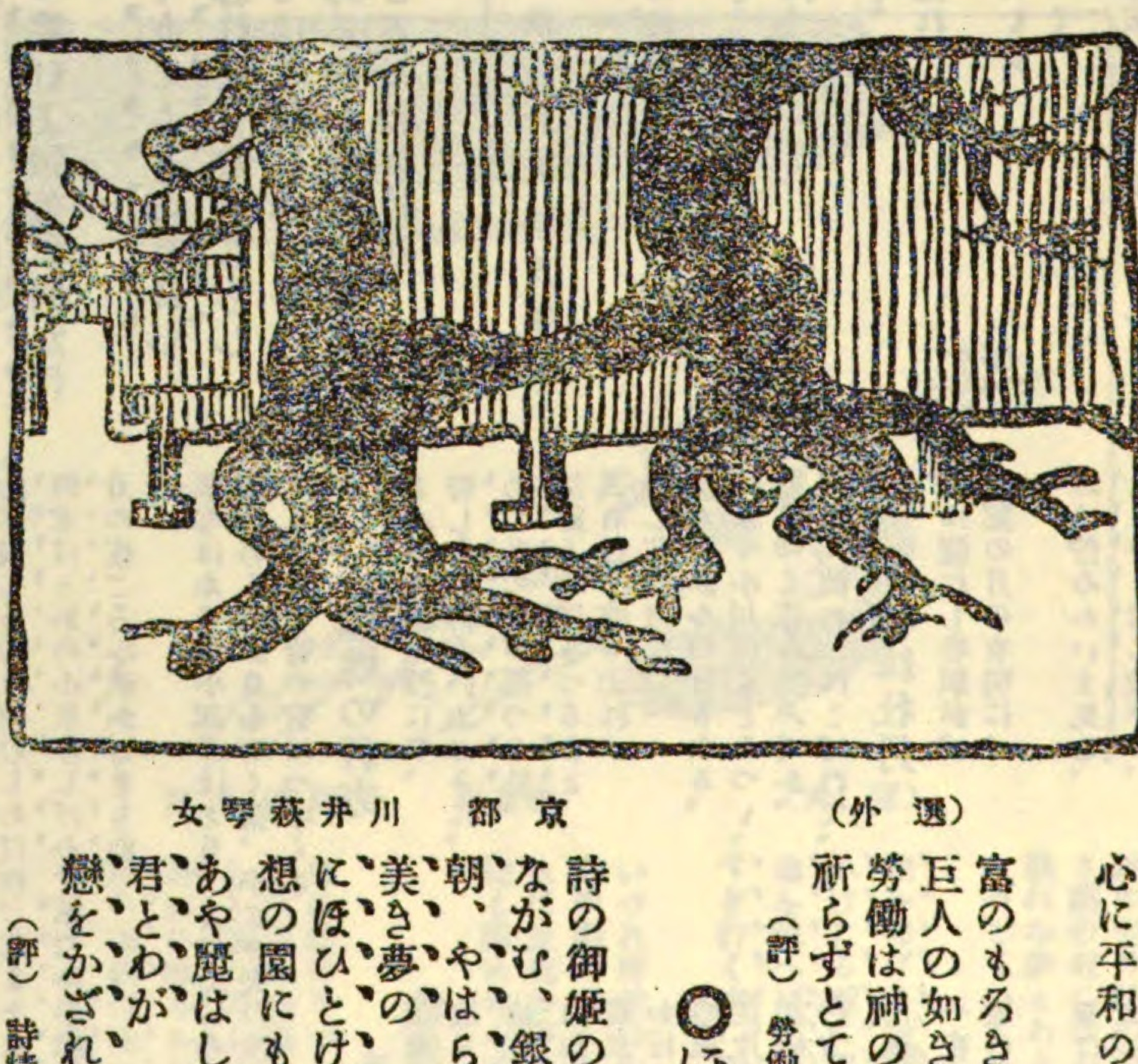
そゞろ感慨にほゝ笑めば、あやしううかぶ君がかげ、
あゝ莞爾たる優笑に、
うしや思ひのみだるゝよ。
秋、憂愁の花の香を、
寂びたる戀のにほひよと、
そゞろ悟りしそのゆふべ、
童がすさぶ草笛に、
君が彼世のさま見えて、
あはやみだるゝ胸の琴。

（評）微吟ながら遠神縹緲

○秋のつとめ

神戸　喜久恵

秋の日は今東に
榮ある彩を雲になげ
勞働の途に人誘ふ
西吹く風は冷かに
朝は平和の領にして
諸人善を語るべく
けがれに染まぬ大空は
希望の色に滿ちたるよ



京都　川井荻琴女

勞働の途に門立ちて
終日額に汗なすも
偽ならぬ喜悦の
心に平和の報いあり
富のもろきをさゝやきて
巨人の如き杉が枝や
勞働は神の命にして
祈らずとても神は護らむ。

（評）勞働の詩は敬ふべき心地せらる

（選外）

○ほのめき

露子

詩の御姫の、うつくしき、罪をつながむ、銀糸と、
朝、やはらかき春雨に、幼千草が
美き夢の
にほひとけては、うつゝなく、理
想の園にもつれては、
あや麗はしき、陽炎と、艶いかな、
君とわが
戀をかざれる胸の彩糸。

（評）詩情を解する人

○牧守

茨城　石塚靜江

澄みわたる朝けのそら、 うち見やる十里の牧場
平和の光は滿ちて、 さながらに神の御園生
子羊の若草食むを、 見つゝ笑むよ讃美歌朗かに。
流れ行く夕彩雲を、 みおくりてふと仰ぎにし
若星のやさしき光、 野は暮れんと牧笛ならし
稚子の如と群るゝ羊を、 集めては牧屋にかへる
これやこのみ神のたびし、 世を終る吾がつとめぞと
朝な夕な羊の子等と、 たはむるゝ若き牧守。
（評） 牧の子の生涯、何ぞ平和なる

○此の流れ

豐前 竹内つる子

君すむ家は川下の、柳つゝみに打ちわたす、
橋のほとりときゝしより、とみに床しきこの流れ。
それよ花散る春の夕、花に想ひをやらんとて、
硯の水を掬ふとき、玉手をぬらすもこの流れ。
それよ月すむ秋の夕、笛に想ひをこめんとて、
欄干の端にたゝずとき、面わうつすもこの流れ。
あゝれがはくば此の川の、流れとならんすべも哉、
戀しき聲にせゝらぎて、胸の思ひをかたるべく。

○虫の宿

金澤市 吉田治子

秋まで宿らんふりがれの床を、 尋れあぐみてふと見いでたる
黃ろき花の下かげ土に、 しばし眠れば夢破られし
こほろぎの御宿は山吹の園
わが親しらぬみのむしあはれ、 父よとなかん聲さへかれて
野末はるかの小草のしげみ、 かたみの衣打かつぎては
月の夜ごろを秋かぜまちぬ
夏なほあさき小川のほとり、 とはんにあまりまだ風寒き
戀かあらぬか身をやく螢、 小さき光の消え得ぬさきは
さしづめ今宵の宿はつゆくさ

○蝶の行方

栃木縣 松本ふくの

よんべの星の涙にや、 葉末に綴る白露の、
寄しき野神のいぶせきに、 散りぬはら〳〵芝の上。
あゝ此の露の落つる時、 自然の神はみ聲立て、
活動く時はきつるよと、 白銀黃金の征矢そゝぐ。
萬有並に夢やぶれ、 蝶は女神のみ召しにて、
美し花の唇に、 おぼろ〳〵に宿立ちぬ。
詩人の夢をのせきたる、 春風そよと吹き來ては、
いさゝ小川によどみつゝ、 花片白く漂ひぬ。
散りゆく花を惜みてか、 胡蝶は抱きぬ水の花、
やがて流れにはこばれて、 行方はいづこいづちなる。

○緋牡丹

神奈川縣 中村清子

花に遅れし春姫が、 一夜宿りの園にして、
若葉の月の有明に、 旅の粧裝を急ぎしか。
垣に佇みかいま見し、 夏は綠の手を伸べて、
そとひく指に綻びの、 紅もゆる絹小袖。
戀に血はわく若人の、 それよ思ひを宛然に、

眞紅の色の狂ばしう、
艶麗なりや白露の、
そゝと紅をのゝけば、
園生の若葉眉を顰めぬ。

○夕暮　豐後　佐賀原清子

松風しばし聲を絶ち、
夕映はやゝもかくろひて、
湖心に落つる鐘の音、
かぞえて獨り佇めば。

凝雲低くゝ夕汐の、
和ぎて沈みて流れ行き、
光つめたき星一つ、
空のあなたに輝けり。

あまり淋しき夕暮を、
聲はりあげて遠方の、
友懷しき名に呼べば、
反響かすかに尾を曳きぬ。

○人生　長野縣　中島いち系

天には光地には暗、
あひだに迷ふ人の身の、
吾れ今こゝに惑あり、
はた今こゝに望あり。

緋牡丹こゝにさきいでぬ。
朝日にころぶ花の上、



（選外）　神奈川　小野ゆき江

遠く濁れる渾沌の、
吾が行く所見る所、
浮世の塵は繁くして、
死と善惡のある所。
誠の光り誠の美、
さ霧の暇にほのめけど、
孰れを夢とあきらめて、
いづこうつゝと悟らんか。

空を仰げば新月の、
ふけたる面に望あり、
地を眼へば稲妻の、
すぎ行く方に迷あり。

いづれ浮世はぬば玉の、
夜の衾に似たる哉、
人は生死の夢の中、
迚も醒めなん時ぞなき。

○森の泉　京都　竹下秀子

泉は湧けりゆるやかに
青草茂る森蔭の
小き巖の間より
神秘の歌をかなでつゝ
神の御胸に生れ出て
平和の里に流れ行く
汝は幸多き身なる哉
　こゝには珠玉の寶もなく
ほとりに草は萠ゆれども
迷ひの雲も得湧かじな
底の眞砂は見えすけど
故に利慾の影もなし、
眞紅の花の咲かざれば

峰に柴折る山かつや
つとめにかわく唇に
彼等が清き歌聲に
永久に洞くなり森蔭の
野邊に草刈る賤の女が
新なる生命あたへては
自然の響を合せつゝ
清き泉は音立てゝ。

○つれなき君

高崎　狩野董涙女

川邊にそよぐあしかつみ
つたへよ吾が身唯一人
つれなき君の來ましなば
來たりて泣きてゆきしよと

暮るゝみ空に照る月の
水面にかげをうつしては
光をあびてさまよひて
笑みあひし時もあるものを

はかなきものは人ごゝろ
かくもつめたきみこゝろの
みなさけあつき君にしも
あるとは知りぬ昨日けふ

戀しき君よ其かみの
今一度は返りませ
みなさけあつきみこゝろに
いにし昔の戀しさに

吾いまこゝにたゞずめは
照らせる月はかはられど
流れはむかしにかはられど
君がなさけやいまいづこ

○星　影

四備　秋月子

大海原に漂ひて、
彼岸は遠し涙荒し。
身はよるべなき捨小舟、

されど仰げば大空に、
前途教ふる星一つ。
不斷の光かゞやかし、

いかに浪風荒くとも、
みそらに冴えていや高し。
はえある色は永劫に、

○機織る乙女

千葉縣　鶴屋たけ子

機をおり／＼少女子が、
織出す綺羅は數あれど、
我身ばかりは嫁入りの、
歎く心の裡問へば、
うたて貧苦に生れきて、
衣はいまだし調はず、

○萩小徑

刈谷田川　しんろ子

紫うすき秋の霧、
臙脂のかをりこまやかに、
そひつゝありく萩小徑。
夢とこめたる野の朝を。
翡翠丈なす美き君と、
四つの小袖に露ぞちる。

○涙の河

茨城　小泉榮子

秋の心に堪へかれて、
今宵かゝれる雲もなく、
ふりさけ見れば大空に、
光あふるゝあまの川。

見よ、人の世の秋は常
地には涙の川あらむ。
水嵩や世々に増すとても、
見れどもそれとわかぬのみ。
み空に星の河あらば、
人の目つれに露ありて、

○神の森

神戸市　村田鈴子

木枯しすさぶ吉備の西
佛塔高く雲つきて
遠き昔の其の頃に
何時くか鳴きはゞたきて
里の人々不思議と言ひて
神の御使の清き鳩
罪深き人多くうれいて
三日三夜を祈りける
たゞ大きなる響あり
太子が森のたそがれや
暮色蒼然來るとき
歸り集へる多くの鳩の
塒につかぬ事ありき
其夜眠づかず居たりける
何神命をまつものぞ
それ太子の罰なりと
時しも雨の暗き夜に
たちまち節と光りして

大なる鳥の森に消へしと
それより豊作あゝ五百年
つぐなはむ信實しあらば、
安く眠るこの亡骸を
心から慰めたまへ。
眞白きは君に似通へる、
優しきは君にかよへる
はかなきは蒋きゑにしぞ、
秋草の柩に入れて
紅雀に「胡蝶の碑」。

○悔の唄

愛媛縣　天野八重子

行きては惱む盲目の、
細りし足も力なう
助を人に乞ひ呼びて、
三年を旅に草枕。
草葉にをける白露の、
繁き情の人心、
村より村に罩られて、
涙に重き雨の袖。
且つては紅の振袖や
艷なる舞に蝶と飛び
紅顔われはほこりしが、
定めはあはれ蝶の身や。
犯せる罪の身のきはみ、
誠の情人々の
心にわれは悔言を、
唄ひて君にまゐらせん。

○くちなは

久留米市　巴陵女史

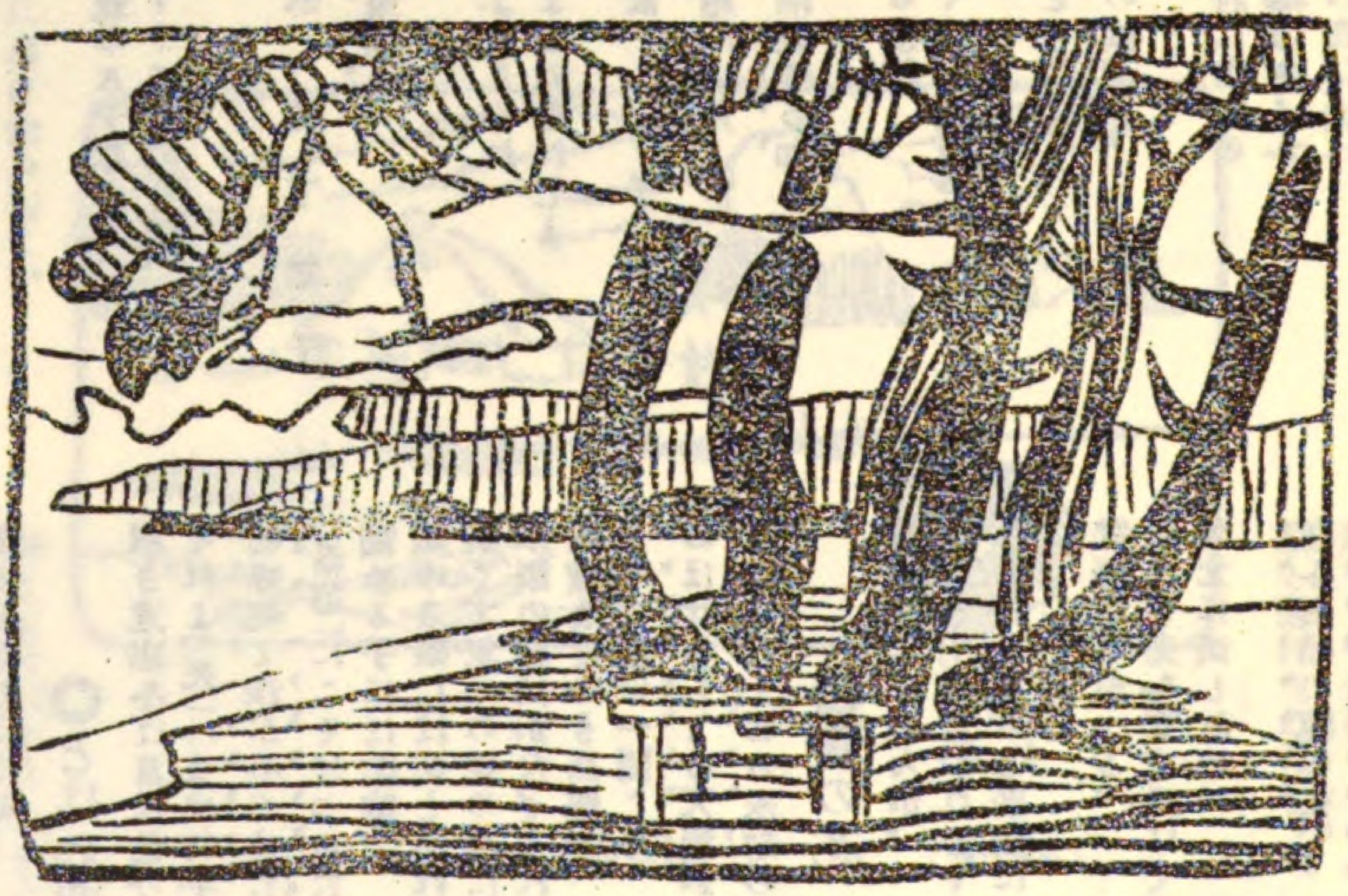
散りぬるよ梧桐の葉の二つ三つ秋の野路
うすれずみ色みにくくちなはのうづくまる。
やがてまた霜おかむなれはそも冬ごもり
ほそ穴をもたずとや哀れなり此の夕

○秋の譜に

小石川　塚田てり葉

○夕（一）

いたづらに戀しむ君よ、
君が泪何か假す



京都　川井萩雫（選外）

○雀の子

小樽　岩谷綠子

塒を出てし雀の子、町を飛ぶとき童らは竿もてつゝきからかひし、畑に餌をばあさるとき鳴子の音はおどろかす、塒につきし雀の子、いともつかれしつばさをば露もつ草にやすめつゝなにを夢みん星あびて神にだかるゝ夢かそも。

○少女

磐城國　原田清子

憂世の塵に汚れざる、少女姿を皆ふれほ、御空に匂ふ星の花、露に濕ふ薔薇の花、手折も惜しく眺めてば、祈るよ永劫の處女姿
ああ少女子の花ならば、咲かぬ蕾の姿にて、
永劫に在れかし戀知らで。

靜岡市　たか子

羊の群をともなひて、
語る少女の金髪に、
夕日斜に照りそひて、
見あぐる花の顔ばせを
吹き行く風も長閑なり。

（二）

小牛の背の牧童が、
背負へる籠の八千草に、
夕日斜にてりそひて、
打ちふきすさす笛の音や、
調をあはすむら鳥。

○谷の菴

京都　竹下季子

君功名の名に醉ひて
谷の庵に兎飼ふ
幸ある我を忘れなり
朝黄金の花散りて
暴風すさぶ夕まぐれ
清水を慕ひ雲を戀ひ
とひぞ來ましぬ君はしも

○色の賦

三河國　浪子女史

東雲紅くうつろひて
朝暾未だ地に二尺
空を彩どる眞紅の色
青春の血潮燃ゆる如と。
春のぬる風たちまひて
梢にさかる櫻花
たとへば二八の美女が
微笑をたゝへし頰の色。
絞れば滴る若草の
綠の雫そとうけて
君美しと綺羅とる
若き詩人の胸清き。
狩の歸るさみの貸せと
となふ猛將に山吹の
花さし出す早少女が
無言の返事などふかき。
せせらぎたつる谷川の
水に姿をうつしつゝ
靜けく垂るゝ紫の
藤の花こそ床しけれ。

糸より細き春雨の
斜にそほつ夕暮を
君が家垣訪はん時
卯の花白く香をはなつ。

○とはの我がむろ

釜山港　池田郁子

弱き意志をば身に包み
堪へぬ苦しみ抱きては
それよ「死」にます行手なし、
鳴呼死よ汝が手つめたしと
「希望」にこそはつめたけれ
汝がむれ硬しとさり乍ら
惱める子には柔胸よ
一切空を、空をこそ
悶ゆる眼には花と見れ、
斯くて望みの死の暮に
かなた常世の妙華吹き
不斷の樂はかなてられ、
七寶まばゆき高樓の
五彩きらめく綾幕
その一垂の一間こそ、
おほせかしこみ天童が
來よと手招き新らしう
しつらひませる永劫の我がむろ

○藤の花

三重　奥瀬かすみ子

眉美はしの上人が、
歌、雙六の興さへも、
ひねもす永きつれづれに、
なだむよすがの術もなう、
そとおり立ちし廣庭に、
蹴鞠遊びの面白や。
裳袴ひろがへる、
繪にせまほしの優姿、
ぬるき光を背に受けて、
白き顔せほゝ笑みの、
眼元に淡し紅の、
血潮の色の美くしき。
春を名殘の藤の花、
寫して消さ泉水や、
一の玉子がそと戲りし、
鞠にほろゝと花散りて、
窈窕立ちし姫君の
ほい笑み聲の豁やなる。

○此の愁闘

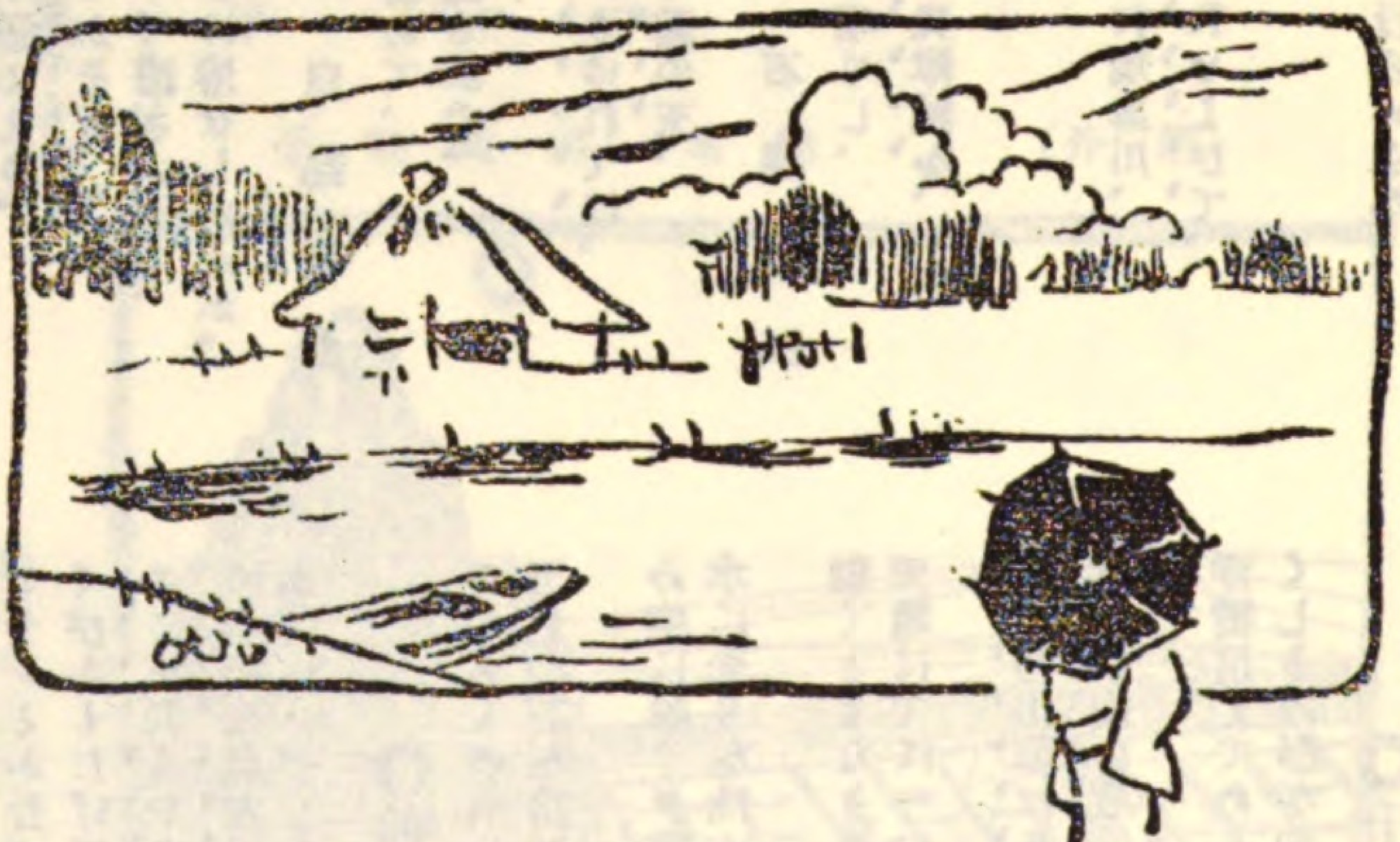
あゝ苦悶の己が身や、
千筋の糸のもつれては、
ありし昔を偲びては、
世にすてられし弱き子の、
小さき胸に堪へ難み、
漂ひ出てぬわれ知らず。
野べにたなびくうす霞、
そは春姫のやはらかき、
み息なるらむ人の世に、
御遊の駕駐れば。
戀ぞ生命の少女子が
天女に似たる愛の手に、
脊子いたはりて遊べるを、
見ては想のみだるるに。
白、紅や紫の、
色美しの花すみれ、
つがひの蝶の戯れを、
思へば君を偲ぶかな。
あゝいつはりの君故に、
うらぶれ果てし我が胸や。
亂れに亂れ絆れては、
かへらぬ恨多きかな。
夕ぐれ低き夏ぐもの、
峰は隠れて夕空の、
星も涙をもらすとき、

○山僧

あしたゆ山寺の老僧、

和歌山縣　小川敬代

あゝ憂愁の我が胸や、
解けぬ誰に恨むべき。



憂愁の影に身は沈み行く。

三重縣　山本富士子

小栗の經を讀誦する、

寧朗かに谷に遊ろ。
風ゆるやかに、
紫と離れて空に匂ふ。

白檀の香細うちぎれ、

僧の影羅漢に似て、
觀法の力未だ衰へず、
求むるもの無き淡生涯。
理想の土は今一歩、
さらに俗塵の下界をのぞまず、
花散りて又枝に復へる。
心靈いよ／＼清う、
戒をたもつ玆に五十年、
山永劫に高く水永劫に長し。

（選外）

○幽韻

上野　佐藤露子

鹿兒島　山田榮子

夜を守る月の影追ふて、
戀を生命の少女子の
天女に似たる愛の手に
あはれ小羊屠所にゆく。
あゝこゝに神みそなはせ。
塵なき世や天の國
笑まひの神の膝近く
母ますやはき野にゆくを
泣くな小羊いふ勿れ、
母いづこ母まさばとや。

羊よとはにあたゝかき
　胸の柔毛の幸を守れ
はかなき夜は露とめて
　己が響にし聞えたり、
少女子のこれ願とや。

神韻來る月の空
　かすか友よぶ家の鐘

ゆくもかへるも幸のそれ
餘韻にまどふ小羊や
あゝなどか頬の笑みなき。

茨城縣　拾紫子

○月

月よ、いましが大空に、
凉しきゑみを湛ふとき、
むかへてやどす湖の、
胸の騒ぎ知るかそも。
詩思に痩せし詩人を、
われかぢ取りて漕ぎいてゝ、
うみの胸にし抱かしめて。
なれがゑまひに浴せしめんか。

福岡　白鷗女史

○白ゆり

清き泉の湧くところ、
綠若葉に姿秘めて、
あした微笑む白ゆりの、
天の香尊う薫るかな。
夕べ天もりの天つ女の、
紫衣のみ袖にさゆれては、
花のみ靈か詩の靈か、
くしく輝やく露の玉。

茨城縣　石塚靜江

○螢

世にすてられし旅の子が、
用なきものと嘲りし、
故山の空のしかすがに、
戀し、御母の奥津城を、
涙にてこそ拂ひしか。
はかなきものよ人生は、
今日ありてまた飛鳥川、
三年を旅のうき草の、
よるゝ波にたゞよひて、
淵瀬も知れぬ運命や、
夕闇によりそひて、
靑春き血汐のほのめきを、
君が胸門に傳へにし
昔の夢も今もなほ、
川瀬の柳ぬふ螢かな。

○浦邊の娘　阿波　富士子

秋の浦わの夕まぐれつ方さゞめきかへる網引人のむれに
はろかおくれてき少女一人何を思ふかいとしほ／＼と
はこぶ足さへ結ぼれがちにゆくは何所の名は何とやら
紺の筒袖絆もゝのしごき白の手拭造作もなげに
シヤンとかむつた姉様かむり見たやつゝんだ其面影を
くびをもたげて空うち見つゝ思ひ餘りてもらすかうたに
心こめたるやさしきこゑは天つみ神のかなづる絃か
右手の松風左手の浪に和してひゞいてむれにもしむよ
あはれいづこの名は何とやら

○袖ケ濱の夕　能登國　杉下文枝子

その名もゆかし鵜浦の
袖ケ濱の夕まぐれ
五色の石を拾ひつゝ
汀のあたり彷徨へば。

み空に動く夕雲の
五彩ほのかに匂ふとき
水に光りを沈めては
黄金みだるゝ浪の面。

動くともなき眞帆片帆
いつしか空にかくろへり
天地はては一つにて
夕ばえしろき西の海。

七ツ島山暮れそめて
近ぐからろのきしりては
紫匂ふ山の眉
夜のとばりの包みたり。

浮雲消えてあらはるゝ
ゆかりの色の新星の
くしきみ影を仰ぎては
高き希望のなからめや。

○千代川岸邊に佇みて　大阪　楠美白鷗子

緩く流るゝ千代川の
岸邊に生ふる靑草を
踏みつゝ光背に受て
白石洗ふ人見しや
柳の枝に衣かけて。

少く積まれてそここここに
布は柔順しき小羊の
草地に出てて群れる
齒にも似たりな竿振りて
人は牧者の如きかな
御空に黑く立のぼる
煤煙のいつか現はれて
河よかくまで濁りけむ
人の自ら紡ぎたる
其古へは清かりき。
嘆きにあまる花蔭に
彼岸を望みて佇めば
布は羊と見ゆれども
牧人歌は悲しくて
其平和の姿あらじを。

（選外）桑名　山崎初子

◎梅よ

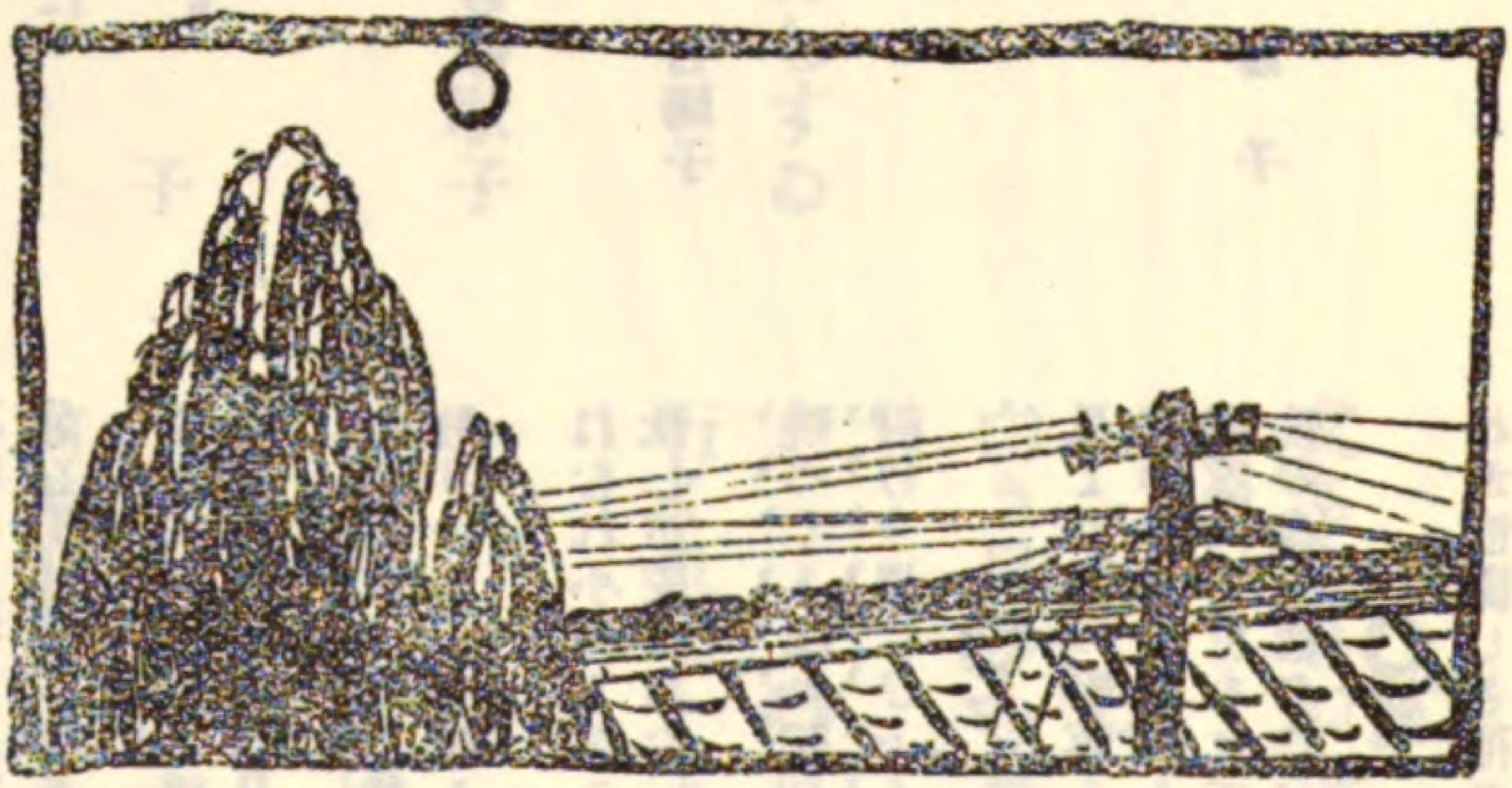
上総　桂子

あはれ汝よ心あらば、
主なしとて忘れずに、
又こん春も咲き出てゝ、
床しきかほりはなてよや、
といふ聲も力なく、
いとゞ涙にむせびたり、
うきをのせたる輿ははや、
霞の中に消え失せぬ。

◎蓮

長野市　飯塚きな子

あけの星影うすらきて、
ほがらほがらと夜あけて、
きらめく露もほの見えて、
浮葉をわたる風きよし。
池のみぎはのさゝなみに、
よする黄金の旭かげ、
色も姿もうるはしく、
匂ひけだかき花はちす、
にごれるみづに生立ちて、
濁りに染まぬけだかさは、
人のかゞみといはまほし、
學べ人の子まなべかし。



◎海邊の逍遙

京橋　黒ゆり

磯濱千鳥なき行きて、
白帆沖邊に消えゆけば、
夕月あはく波をゆり、
哀れしらるゝ君が身よ、
太平洋はかるゝとも、
變るなかれな君と我、
さあれ思へば一ときの、
夢は長くもあらざりき。

◎白露

新月女史

月の都を出てしより、
行方を風にまかせつゝ、
消き御神のめぐみをば、
世に傳へくる白露よ、
下界になやむ人の子の、
憂の眼にうつるとよ、
長き望をあたふなり、
たふとからずやその光、
草葉にやどる蟲の身の、
はかなき命つなぐとき、
凉しき音をばはなたしむ、
たのみあるかなそのしづく、
つきせぬ情と涙をば、
人のたもとにそゝぐとき、
彼に無限の笑ありて、
おゝ美しの白露よ。

◎井筒の水

茨城　石崎女子

花よりあくるあけぼのも。
螢飛び交ふ星の夜も。
形に影にむつひにし。
昔の夢は今何處。
小雨そぼ降る窓に來て。
共に寫しき草花を。
野川の水に二人して。
共にながめき姿をば。
舞へる胡蝶に身をよそひ。
霞にまどふ衣を着て。
我等が春をいつまでも。
去らじとこそは思しが。
夢の浮世の夢の跡。
たづれん方もおぼろにて。
はや彼の君はよそ人に。
とつがれしとぞ今はきく。

井筒の水は今も猶ほ。　昔ながらにすむめれど。
一人淋しき影を見ば。　水は何とか思ふらん。
心の花のたのみなき。　嵐にもれぬうたてさに。
思はじものかなか／＼に。　殘る心を如何にせん。

○帆かけ舟　　本郷　山田せい子

帆ばしり行けよおそれなく　追手のかぜの吹くまゝに
荒き嵐を凌ぎ來て　靜けき波間わけ行けば
思ひ當るよおのが身に　よしや船路は荒るゝとも
浮世の波のはけしさに　比べはものゝ數ならず。
帆はし行けよ何時までも　晴に嵐に休みなく
浮世のしほの身にしみて　荒き海ともいとはじよ
沖の小島の荒磯も　住めはすまると聞くものを
行けよ我舟休みなく　追手の風の吹くまゝに

○露と花　　濱鄭　久須美白鳩子

花に結びて花に消え　露に匂ひて露に散る
奇しき物は世の中の　露と花との契りかな
花の命の露の身は　風を悲しみふく風に
花や散らんと心おき　風な吹そと願ふらん
露を力の花の身は　風を悲しみ吹く風に
露や消えんと搔亂れ　風な吹そと祈るらん

○霜　　秋田縣　出羽露子

橘に　霜ましろ　しろ銀か
よべ見し　彼の星の　いつしか
落ちて　碎けて　散りてか

○綠衣を纏ふ　　紀州　田中孝子

綠衣を纏ふ我影を　水の鏡に映したる
小欲の風情嬉れしげや　まこと眞紅の朝日影

五彩の窓を開くとき　葉ざまの露のプリズムは
水面に錦散らすかな　あゝ美の神のこもりゐか
百葉搖ぎて露の玉　溽れて戀を囁くがごと

○逝く春　　高崎姬百合

暮春の夕香もうすき　のこりの花にさそはれて
寂びし小島の音を聞きつ　ゆこがれ出てぬ柴の戸を
こゝは村城の土橋の上　名なし小草の花はあせ
下ゆく水は夏の日の　蜻蛉の羽にも似たるかな
たえてはつゞく笛の音は　曲も悲しき暮行春
散りゆく花を問ふ蝶の　つばさふるはすあはれさよ
れむれ小蝶よとことはに　花のしとれの其中に
汝しが床はあたゝかく　笛の主こそとむらはん

○夕暮　　山口縣　白蓮女史

曉つぐる鷄の聲　つゞく御寺の鐘の音
靜けき里にひゞく時　あはれ我世の春は逝く

見よ夕陽の影落ちて、紅ふかき彩雲の
西のみ空に亂るとき、そこにいせきの光りあり。
彩雲淡く色あせて、嬌求むる百鳥の、
後の森に騒ぐ時、そこに美妙の調べあり、

○鶯　　千葉縣　伊藤みち子

わが世優しき花の香に、憧がれ出てし鶯の、
鈴の音轉ぶ聲あげて、調も優ふ曙の曲。
時流れて春逝けば、一音悲鳴を限りにて、
遠く追はるゝ鳥なれど、恨怨惜惡の心つゆもなう、
笑みて青葉にかくれける、天の詩人復た來てうたへ。



和歌

佐々木信綱先生選

秀逸

○君が宿を訪はむ訪はじのたゆたひに
　菊の園生の月かたぶきぬ　下野　木村しすゐ

○歌巻の銀杏のしをり色あせて
　裏葉の歌の恨めしいかな　久留米　彌吉和歌子

○夕まくれ西行く雲を眺むれば
　そゞろ戀しきふるさとの人　周防　節子

○手折りなば露やこぼれんこのまゝに
　すぎんはをしき秋はぎの花　駿河　あき子

○湖添の十戸の小村月ふけて
　み空はてなう雁なき渡る　新潟　大崎秋韻

○文もあきぬ海も見あきぬ磯やたか
　雨の降る日を友も訪ひ來ず　横濱　山崎雨村

○亡き母のみ墓詣でゝ歸るさの
　夕さびしき松風の音　筑前　副島吟風

○虫の聲
行くれて一人さまよふ小松原
　身にしむ虫の聲高きかな　相摸　山口春子

○天に啼く雁の嘆きも知らざりき
　母の此世に居ましゝ頃は　新潟　風間孝子

○何事を思ふとしもはあらねとも
　眺めやらるゝ夕くれの空　下野　中山光枝

○山かけの十戸の村はたそがれて
　御寺の鐘のたゞゆるうなる　大分縣　西萩子

○　千葉　小川芳竹女

召されたる兄は凱旋て父は癒えて
　幸多き年の初日をろがむ

○　釵山　神津小舟

つれづれにそゞろありきの夕まぐれ
　紅葉ちるなりひらひらとひら

砧　兵庫　ゆかり

小夜砧音たえだえにかよひ来て
　老のねざめのさてもわびしき

○　兵庫　久子

照りわたる月見る毎に思ふかな
　わかれし友の上や如何にと

○　越後　白菊子

なつかしき君しいまさは海越えて
　行かむとぞ思ふ佐渡が島根も

初日　京橋　黑ゆり

紫ににほふ海原鶴なきて
　ほがらほがらと初日さし昇る

○　愛媛　八千草

征く君と里の土橋に別れてし
　其夜に似たる水の上の月

○　千葉　天美桂花女史

國の爲め功をたてし武夫の
　譽れぞ高き後の世までも

○　石見　白百合

たまはりし君のうつしゑ取り出て
　今宵また泣きぬ小雨降る夜を

○　相模　大谷津総子

坊はいま軍ごとすと出て行くを
　そと見送りて母泣き給ふ

○　水戸　榊やへ子

鐘の音もくぐもりがちに黄昏れて
　夕べ淋しき山もとの里

○　相樂郡　堀池靜子

片戀ひ波のよるよる獨り寢の床も淋しき浮枕かな

○　下總　古矢枯葉女

ともすれば涙の多き日なりけり征途の夫の神となりし日

夏の歌の中に　赤阪　佐藤いさを

馬洗ふ人影絶えて追分の頭に暮れゆく川沿の道

秋　京橋　伊東幸子

蔦絡の壁にかこまれ秋の野をさまよふ袖に白萩ぞ散る

○　茨城縣　森もと子

ゆふべ毎なさけをつげる鐘の音に昔おぼしし人の戀しき

○　常陸　秋山ほとゝぎす

逝きて三月君がかたみの玉章をみだるゝ胸に押あてゝ見つ

○おしなべてあはれみふかき秋の夜を君に逝かれて獨り待つ月　茨城縣　藤原咸子

○姫君が蝶と遊べる萩の圃籬にさはりし花ほろゝちる　茨城縣　花野落葉子

折にふれて　奈良縣　かほる子

あふぎ見る月もこゝろもかはられど我が身一つのかげぞ淋しき

○　上毛　吳竹

妹は姉あれは妹とぬらさはと一傘に行く秋雨のみち

○　紀伊　松山小糸

小鼠の銅なさずも彈く箏に失せにし母をおもふ夜半かな

○栃木縣　いさを子

名月やなき母上の墓とへは白き胡蝶の舞て出てけり

醫師をたづれて　茨城縣　板橋愛子

師の君をまたも訪ふべくたとり來ぬれむの花散る夕暮の闇

○福井縣　曉楓女史

あとゝはむうたて我世の寥うして老いぬ夕戸の白菊の花

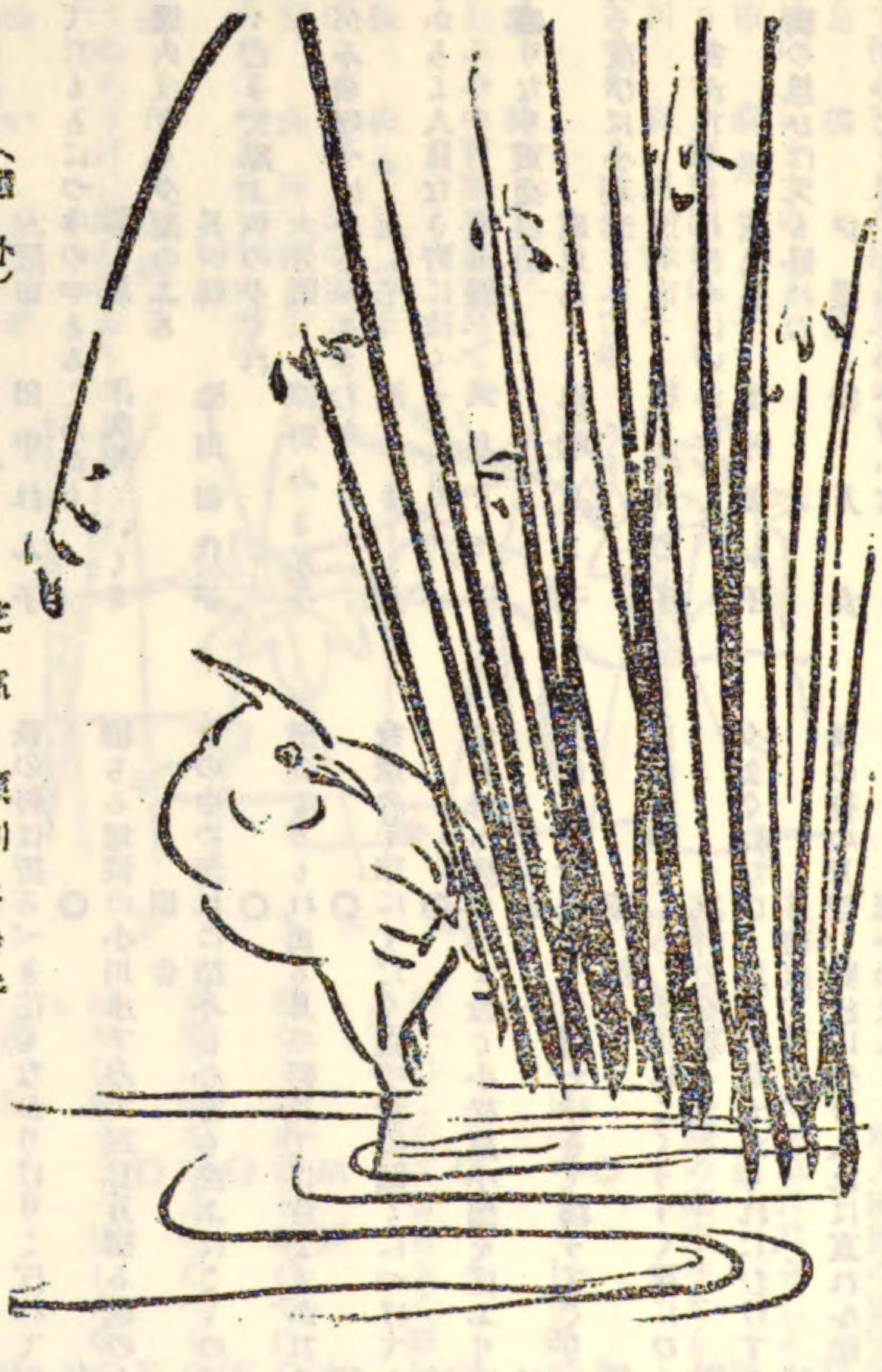
（選外）

○　備前　松本蔵登

うらぶれて夕野にひとり佇めばみ空の星の光つめたき

山家秋夕　熊本市　金澤なでしこ

折々はみしかなくれもさやかにて紅葉にくるゝ山かげのいほ



秋の歌の中に　熊本市　羽田すみれ

老僧の小笠に日影かたむきて秋の大野はたゝ虫のこゑ

○　茨城縣　恩田和子

泣く兒をばひざに抱きて滿洲野なる夫のためとて白砂の襯衣

○大阪　澄子

鐘なりぬ夕べの彩はうすらぎぬ桐の一葉の落ちて聲なき

○金澤市　大塲波子

折々は小蝦もはねて背戸のはかげ小暗き朝月夜かな

風　金澤市　越野芳子

秋風は枯葉を捲いて墓を撲ち睨むが如き星の瞬く

○金澤市　山田はる

さを庭のにこしゆきたる名なし沼水のゆるぎに萩みだれちる

○奈良縣　久保田富子

なき母の御名とのうるにさ夜ふけはなき行く雁の聲の淋しも

眠兒　豐前　柳瀬倭文子

いたいけのみどり兒ねぶる顏の邊に蜻蛉のかげの見えつかくれつ

芝區　瀬川とき子

○　廣島縣　翠園女史

昨日まで親しき夢路を辿りしも淋しくも覚めしばかりつゝ

○　千葉　森ひさ子

はる雨のふるやの軒のつれ〳〵を語りかはなる姉かな

夕雨

美しき胡蝶さまよふ丸窓に琴の音絶えて夕雨のふる　越後　畑野藤子

秋景

枝豆の色つきそめし山畑の夕日まばゆく蜻蛉の飛ぶ　愛知縣　顯子

山紅葉

秋山のもみぢあぢこち見めぐれば裏おもて紅きにしきなりけり　尾張　田島周子

折にふれて

夕されはいとゞ秋風身にしみてたもとにつゆのやどるころかも　大阪市　田中れん子

折にふれて

絶え〴〵に虫の音細き墓原の燈火ほそく夕雨のふる　群馬　津久井いくさ

秋の夕ぐれ　長野縣　池田和代子

御堂より御經のみ聲もれいでゝ亡き父忍ぶ秋の夕ぐれ

○　大分縣　綠野みさを子

萩芙蓉夕日にやせしみ墓道師がみ名呼べばいらへまさむか

○　上毛　清き月

なみ居たまふ師の君々よはらからよ人目なき野に泣くきりぎりす

秋　埼玉縣　武島くに子

山里の辻の御堂に秋立ちて今盛りなり黄菊白菊

○　鹿兒島　池端ちよ子

里川の畔道三里秋暮れて風吹く度びに小萩流るゝ

懷古郷　熊本市　村上はつ子

月の夜はいとゞ古郷の忍ばるゝ我かたらちねは今はいかにと

○　鹿兒島　小村とし子

今しがた結びあげたる黒髮の胸の思ひに又も亂れぬ

折にふれて　伊豫　松月女

ひとゝせに母と兄とのゆきしより幸なき身よとかこつ今日かな

○　鹿兒島　酒匂ひで子

淋しさに小母の尼すむ寺訪ひの途に會ひけりさびしかりしと

○　新潟縣　吉田彰子

くれてゆく野邊に若草つみわびてすてし歌をも誦して見るかな

○　越後　神田春枝子

春の野の蝶にも似たる我が想やさしき花に夢や結ばん

秋の山寺　下野　木村すみれ

僧の君が昔語りに小夜ふけて散る花寥し萩の山寺

○　越後　村松芳子

朝霧に弱き胡蝶の夢問ふないづれ人の世春ながからぬ

○　德島市　若山操

秋の野は折るべき花もなかりけりこぼれて消ゆる露のかなしさに

○　美作　國司もん

柳ちる垣根の小川水すみて三日月宿る秋の夕ぐれ

田舍　白露

世の中の汚れに染みし心をも洗ふはこゝの清き山水

○　花蝶子

雲間よりもれ出る月の影見ては君ますかたのしのばるゝかも

○　德島縣　浦上登志子

我庭の千草にすだく蟲の音の聞くにつけても秋ぞ悲しき

○　德島縣　植松かつ子

病む母を戀ひつゝ急ぐ小松原小雨そぼふり時鳥なく

○　柏崎　村山芳子

美はしき夕榮やゝに消えゆきて淡うすぐらし白百合の花

朝顏　備後　岸田好美

ほのぼのとしらむま垣にこくうすく露にひもとく朝顏の花

墓畔の夕暮　香川縣　小林すゑの

夕まぐれなびく尾花に見えかくれたむけする子のおもやつれたる

月前虫　熊本縣　森永すなへ子

秋の夜の月澄む野邊に分け入れば哀れを添ゆる虫の聲かな

思ひのまゝ　攝津　白椿

おく露のいろはひとつにあるものを秋の草木の千々にやそむらむ

○　若松　田中むらさき

夜は匂ふ園より明けて白菊に朝月宿す露の玉玉

○　岡山　小見山富惠

秋なれや汝が移め置きし女郎花留守せん姿れの接吻けもがな

人間　　下總　鈴木克榮

人の世はたかきいやしきへたてなくはかなくならん手枕の夢

○　　香川縣　村上雅子

榮えてし紅葉の錦今いづくあはれ秋風に枯枝の泣く

秋の夜　　越後　小林きく子

木の葉しく圍の破戸に立よりて澄み行く月を迎ぎ見しかな

夕立　　鹿兒島　柳葉

銃の音は今はた絶えて丈夫が屍の上に夕立のふる

夕暮野　　金澤市　森井せき子

小羊の踊る細路夕くれて黄菊ちるなり琵琶湖のほとり

○　　神奈川　吉川常子

ながめやる遠路はるかに雁なきてそゞろにおもふ古郷の空

○　　上總　林よしえ

軒ちかく落ちゆく月の影ほそしふみの言葉を思ひ出てよ人

○　　豐後　山中しづ子

馬ゆきて旅人たえし森かげのほこらを暗く秋の雨ふる

秋の夕鐘聲　　宇都宮　金澤保子

夕まくれ月まちなれは秋ふかみあはれ身にしむ山寺の鐘

○　　常陸　川並汀柳子

破れ垣をもるゝ朝風さむうして心ありげに萩が花おちぬ

○　　岡山　いさ子

聲たてゝ庭の落葉に風さわぎ淋しく照らす冬の月

わかれ　　大阪府　和久美津雄

さらはとて友と別るゝ村はつれ雲低うして雁なき渡る

亡き父のうつしゑ　　長野縣　池田和代子

手にとりてまた手にとりてふし拜む現てもこひしき父の御すがた

○　　紀伊　奥むつ子

夕顔の花に宿れる白露に涼しくうつろ夏の夜の月

○　　大阪市　田中常子

月夜よし萩が垣根の虫よろし笛もちて訪へ松かげの庵

○　　大阪市　松本須磨子

瀬戸の海は舟の進みに興湧きて綺筵歡筵多きかな

軍人家族の留守宅を訪問し若妻の心をくみて　　福岡市　坂梨芳子

夕顔の棚下草になきしきる誰松虫や武夫の園

蟲　　姫路　船戸ゆき子

繁り生ふ萩の葉末ゆそよき出つる風にみたるゝ蟲のこゑ〳〵

○　　鳥取　安倍きしよ

荒浪のけづりてくしき巖の上に天津女神を友とかやせむ

○　　神戸市　今村すま子

橘一つこえて百合さく野を行けば君かあらぬか笛のこゑする

朝顔　　大阪市　かすみ

榮なき賤が伏し家のやれがきに淋しう笑める朝顔の花

○　　石見　後藤かつ子

南國に春を三月のわづらひや朝ふる雨のしづ心なき

○　　巣鴨　佐藤露子

萩の花散らまく惜しみ來て見れば宵の時雨に山紅葉すも

暮秋　　熊本　上野百合子

きび畑に黍の穗ひくくうなたれて小雨さびしき夕暮れのみち

○　　上毛　兒島野菊

よき月に思はず更かし歸る野路虫の音しげく踏む由もなき

浮雲を見て　　福岡縣　花田紅蓮

戀やみぬ宿世この世に榮はなし風にまかする此身浮雲

かたつむり　　横濱市　阿賀孝子



(選外)　本郷　木下久子

勧めなば何ならざんかたつむり家負ひてだに千里行く世な

○　　群馬縣　さゆり子

琴の音と紅葉散る逕に寐て聞きし夢の名殘か淡川のおと

○　　茨城縣　井原正子

まろぶしの醉たいたはる花給蚊帳つるに鐘きく京のうす月

秋の日山行　　群馬縣　中曾根和久里

思ふとちかたらひながら落栗のいが踏むみちも打ち忘れつゝ

○　　小石川　海老澤トク子

故郷は彼方の空よ小雨ふり宵静かなる一ッ家のまど

野の川　　麹町　榊原千重子

冬かれし廣野の中をたゞ一人いさゝ小川やいつち行らむ

○　　神田　小磯君江

白萩が袖に思ひをさゝやけど玉露が夢のまだ現なる

○　　山梨縣　佐藤輝代子

秋きぬと紅なせる草葉にも征露の兄ぞ思ひ出てらる

○　　磐城　佐川繁子

戦ひに逝きぬと聞きし兄上を偲べば細き雨降りしきる

出征の兄を思ひて　　群馬縣　田所若葉女史

もたれよる柱つめたき夕まぐれ鐘の音響きて兄をたづぬる

行秋　　宮城縣　横澤さつ

たつた姫ひきとゞめんと出て見れはゆくへもしらず秋はいぬめり

あはれなる乞食　　宮城縣　古河松江

宿もがなと見まはす邊虫鳴きて今宵も同じ此草の中

○　　四谷區　紅露女

みいくさに夫は銃とり妾は獨り早苗取るなり五月雨の空

○　　京都市　すみれ

芭蕉翁のかりゐせしてふそが宿に獨り淋しく菊の花咲く

我が心　　備中　稲本みどり

けふ田舎あすは都とかはれどもかはらぬものは我が心かな

○　　印旛　小島よし子

出てましゝ雲や彼方の秋の空亡せしわがせこ出て乘りまさん

凱旋　　三河　澤田へま

功たて歸る子うれしはたかなし母のゑみ顔そのつくもがみ

○　　上毛　筑波すみれ

あれみよと妹の指さす方みれば遙かなるかな琵琶法師ゆく

○　　上野　隈口初子

こゝかしこ稲田に殘る菅笠に夕雨ふりてこほろぎのなく

○　　上毛　磯貝すゑ子

うぶすなの社にまりを忘れけり神の子今宵つきて歌はん

○　　下総　しん子

山を越え土橋渡りて川に出てゝ故郷の空いとはるかなり

姉の命日に　　羽前　竹田せん

曉の鐘のひゞきもうらみなり姉亡くなりし朝と思へば

病床にありて　　岩代　杉原たかやす

常の日は戀しくもなき故郷もなやめる夜半ぞいとゞ忍はる

涼風　　越後　伊與部いさを

涼風は雄松雌松に訪づれて水面にやどる月をくだくよ

墓前にて　　越後　會田春野

とこしへに眠れる妹が奥都城に夕淋しうこほろぎのなく

○　　因幡　福井靜枝

故里に歸ると聞きて嬉しくもまたはづかしやとらわれの身は

○　　加賀　處子

照る月に更けゆく夜も忘られてたゞずむ袖に桐一葉落つ

夏の夜　　長崎　松葉女史

なつの夜は嬉しきものよおもふとちすゞみがてらの浮世話は

○　　日本橋　植松ひさき

ひとり居の秋の雨夜のつれ〴〵にひもときて見る桐壺の巻

○　　茨城縣　小泉女史

天地に我等二人のなさけあり木枯野襲ふ風のふくとも

月の夜に　　羽後　鈴木しゅん

庭にいでゝ月にものをば思ふときかきねにしげく虫のこゑきく

○　　下野　細香子

亡き吾子を忍びがちなる夕月夜哀れな添へて虫の啼く哉

失題　　下野　紅秋女

夜な／＼に鐘守に通ふ姫子は末のしらべや悲しかるらむ

萩　　長崎　みすゞ子

年毎に姿やさしく咲く萩をいつもめ　（選外）
てにし母ば今はや

漫吟　土佐　秋月廣江子

望なき我は谷間の小艸なりひとり崩
えいてひとり枯れ行く

折にふれて　宮城縣　りわ子

おばしまによりてつく／＼行末の戀
思ふ夕べ萩の露ちる

○　金澤市　はなわ

月しろし松原一里浪はしづか今宵は
君の何思ひます

○　岐阜縣　夢醉女史

雨につけ風につけても思ふ哉吾が故
里の君や如何にと

○　美濃　臼井安子

故郷の母君の上や如何ならむ雁の便
りの待たれける哉

○　大阪市　池田靜子

やむなくもやきはらはなむ花堤あす
は少女のうらみきくらん

○　上毛　小野里　光

秋の田の稲葉の風も露繁く露立ち登
る秋の夕ぐれ

○　神田區　大澤際子

秋の夜をひとり小琴取出てゝ那須野の調に亡き母思ふ

○　美濃　紫星子



夕月のくまなく照らす月影もこぼらく見ゆるしづかかやり火

春の歌の中た　津市　谷　かく子

月おぼろ近衛司の春の夜や一位たちますすきざはしのもと

○　津市　花尾淑花子

鳥取　上山千重子

勾欄に月眺めます姫君の綾の小袖に
紅楽こぼるゝ

野營の月　靜岡縣　森　宮代

武士のけふをかぎりとあたし野には
つかの月やいかに見るべき

○　愛知縣　柳　村

名のみして驗も見えぬ神ならばあだ
に思ふも明さし物を

○　岸和田　鈴木絲里

煙たちて暮れ行く村の畔道をぬい行
く妹の影の淡けき

月前虫　大分縣　後藤たき子

月影の清き夕は猶さらに聞もゆかし
き虫の聲々

○　伊豫　吉田須美子

白萩の香床しき枝折戸を靜かにもろ
ゝ秋の夜の月

○　備前　松本もと

朝々をそゞろあるきの濱五丁姫がみ
髪に朝の風ふく

深夜水鷄　大阪府　山田女史

槇の戸をたゝく水鷄にめはさめぬ月
は端山の松にかゝりて

○　東京　朴　蝶子

野の秋の花の中行く紫のたそがれ近き二尺の袂

夏の心　細沼藤子

風をまつ外に事なき人ごゝろ夏は神代に立ち歸るらん　群馬縣　田所きよし

○

夢さめて枯野の月のほのうすく虫の音細う白菊の匂ふ　横濱　數島花子

名處梅雨

みつ汐も爭ひかれて流るめりほり江の水のさみだれの頃　栃木縣　佐藤よしの

月前蟲

夜を寒み寐さめて聞けば破壁の隙洩る月に蟋蟀の啼く　三重縣　奥瀬かすみどり

○

さみどりの野にひら／＼蝶舞ひて小羊眠る午下りかな　伊豫　霞菜女

萩

しら露のおきそふ野へにはぎの花こぼれながらに咲くぞゆかしき　千葉縣　桂華女史

○

相見れば都訛りのにくき君去年の里居のひなぶりに似ず　茨城縣　沼尻みね子

○

古寺のかれより外に友もなし父母に後れて兄に別れて　磐城　鈴木はる子

歸省

天地の聖き光りを身にあびて姫百合かをる故郷の朝　秋田縣　大越幹子

○

夕くれの富士を眺めて知られけり明日の天氣の雨か晴れかは　越後　細野操子

百合

星の子が戀せし百合に雨ふらば白雲をりて花をなだめむ　北品川　橘星子

○

潮の香にうづもれて來し船歌を夕ふきちらす磯の松風　日光町　若菜子

虫

あばら家の軒にすだける鈴虫の夕べにせまる聲のあはれさ　小樽　梶水仙子

雨中の鹿

木の葉散る山下蔭を村雨にぬれつゝ行けばさを鹿の鳴く　埼玉縣　石田季子

出征軍士

ますら夫が草をしとれのつゝ枕夢や故山の地をばたどらむ　兵庫　山本利子

○

我背門のはたの茄子の花さきて田草とるべき時は來にけり　周防　楓子

○

討死の兄が墓前に國旗高く萬歳叫ぶあはれ弟　神戸　山邊なでしこ

撫子

しきしまの大和撫子うつさてやしこ草生ふる西比利亞の野に　豐後　矢野しづ香

折にふれて

手をとりて虫なく露の萩原に靜に立ちし草月夜かな　下關市　菊子

萩の露

手折なば散もやせんと惜まれてしばし眺むる萩のしらつゆ　長崎市　磯山浪子

此秋

この秋はいかに暮さんみいくさに出しますらを歸らさりせは　大隅　山崎東洋子

折にふれて

何となくきゝても見たし深笠に尺八ふける人の身の上　埼玉縣　紫女史

○

夕されは暑さ流れて山川の水底淸くすめる月かな　麴町　加藤豐

○

亡き君と共に語りし村の橋出水に落ちて秋行かんとす　長崎市　磯山春舟

○

たゝら濱沖つ島根に寄る浪をしつめて涼し夏の夜の月　備前　松本茂登子

夕雲

牛追ひてかへる童も心ありや笛の手とめて夕雲あふぐ　牛込區　市來こと子

折にふれて

春霞かすみわたれるをかのべに里の少女か若菜つむなり　群馬縣　松江いつ子

○

千萬の神もろともに益荒夫が仇平げてかへる今日かな　茨城縣　大部春浪子

夏の歌

桑の香に夜更け渡る蠶部屋今年は誰の衣に織るべき　千葉　木内胤子

鮎つり

蓮の葉を小笠にかへて同じ程の里の童の池にふなつる　津市　佐藤喬子

夏夜

手枕をしばしとたのむうたゝ寢にはやくも明る夏の夜のそら　山口縣　松風女史

鏡

あさゆふにむかひてみなりとゝなへん心のうちはよしうつらすも

○　名古屋　細野よし子

みじか夜の更くるも知らずはしの上にすゞみながらにいくさ語りする

雨　福島　水野芳子

今日もまたぬれてぞかへる幼な子の母のいましめ何と聞くらん

○　和歌山　田中孝子

茶畑に姉さんかむり二つ三つ綠の波にゆられ見ゆるかな

松が枝の鶴　茨城縣　松波女史

君が代の千代に榮えし松が枝にすごもる鶴ゝ舞ふぞありける

○　兵庫縣　篠田喜子

おもかげは闇に殘れどにほひなし憂き身と知りてかつよそは

小流　淺草　上郡登美

あきつ飛び夕日を浴す小流や緋鯉一つに里の子群るゝ

夏の暮　廣島　福壽章

人影ののびて夏の日黃昏れて廣野にもるゝ蜩の聲

片手を失へる軍人のために　澁谷　林田糸子

片かひなくとも何かならさらん心安かれますら夫の友

夏草　茨城縣　小泉涙子

をしなべて野は夏草となりにけり牛ひく童見えわかぬ迄

水鶏　中根岸　春子

たゝかれて思はぬ月を見つる戯くひなは人をはからざりけり

昨年嫁せし友の出產と聞て　麴町區　鈴木光子

君と袖別ちし時は去年の夏今は樂しき家の母御前

○　磐城　矢吹ちか子

たまことの音はたえて淋しくもほとゝぎすなくたそがれの空

○　福岡市　涙の子

金色にくだくる月の浪わけて江戸の大橋舘船くゞる

新樹　三河　伊藤こま

わか庭のわかばの木末風淸く星かとまごう螢みつよつ

○　岩手縣　毛利子

五月雨のおとのいやます今宵かな物おもふ身はえこそねられね

○　相州　長谷川ます子

やま里にしたしきものは春ごとにとひくる軒のつばめなりけり

○　千葉縣　しづの女

人の手に神のやとりてかくばかりくしく妙なるわざやみすらむ

○　神田　とし子

門川に小魚あさりし里の子もいつしか去りて日は暮れにけり

繪端書に添えて　芝區　顯川とき子

御軍の庭に血しほも流しける君におくらんこの繪はがきを

湖畔の夕暮　越中　菊榮女子

牧童のすさぶ笛のね遠うなりて波のまに〳〵十六夜の月

机上の綾雨　福岡　坂梨芳子

背の君の今日も送りて綾雨花姿が文机の邊に馨ゆかしき

梅雨　香川縣　千鳥子

とひこんと契りし友はふるまゝに音つれもなき五月雨の頃

折にふれて　大阪府　白やぎ女史

岡の上の樓に入日の月落ちて枝豆賣る子聲ほそり行く

夏月　埼玉縣　細沼藤子

夏の夜の月の處女の姿をば池のかゞみに寫す涼ずしさ

○　日本橋　高橋薫子

幾百里花の御國に憧がれて歌の聖に逢ばやと思ふ

早苗　群馬　石井とく子

しつの女が門田の早苗取り〳〵にとりおくれしといそく今日かな

五月雨　下野　高橋ふぢ子

亡き母をしのぶ涙のこの夜半をいかにせよかと五月雨のふる

○　陸中　黑澤美津

たゞきのふ君が御文は手に落ちぬまことか今朝の討死のしらせ

○　若狹　井上艶子

森影の牧場背葉に蔽れて羊呼ぶ子の影絲なり

折にふれて　攝津　渡邊初實

くらき夜を窓にもたれて眺め居れば君かあたりに星も落ちたり

はがき文



天 ○落葉掃

岩代須賀川町 根本松江

人は紅葉狩に出る頃、私等は徒跣になつて、お庭の木の葉を掃き、私は菊が植ゑてある方から、弟は無果花の木の方から、兄上は裏門の方から、而して集る處は柹の大木の下。

處は約五百坪

地 ○忘れぬもの

群馬縣多野郡新町百六十八 藤本芳子

兄さんが試験に及第した時の電報の文句と、私が川へ落ちた時助けて下さつた洋傘屋さんのお名前とおばあさんの命日と一番近しく交際する鶴田さんの番地と戰地に居らつしやる兄さんの隊名之れだけ暗誦してます

人 ○嫁入

三重縣三重郡四坂部百卅三 山本富士子

歴史や地理の外に

すわ嫁入と見物人、村夫子一人なあに人より三十日遅れて見る積りならと落付拂へり、人皆其名言に感ぜしが、倖彼の嫁御寮は其後三十日經ぬ間に離縁になれり。之を聽きたる村夫子は失つたと許り絶叫しぬ。

何ぞ人情の反覆を絶叫せざる

秀逸 ○朝燒夕燒

磯生 森田志滋子

暮れやすき秋の空はいつしか西の方に紅をぼかして遠山は云ふばかりなき麗しさ幼き妹の日にも止りしか姉樣アレは何よとの尋ね夕燒ぞと答へ置きしに、翌朝東の空を指さしてアル／＼姉樣夕燒がしてよ。

天地の美は幼な子の瞳にも輝く

○大食會

岩手 森 森子

常々食自慢の者共五人、我家に小豆汁大食會を開た、

サア食るは〳〵、物も云はず……、今や四人は、擔腹肩息、それに平然、尙食つてるのは、片鬢の火傷た宇南川岸の助八倭男であつた。

此談タカヂアスターゼの實高倍す

○妾が書齋　飛彈　後藤八重子

障子を明けると庭が見へる六疊の室、紫檀の机の上には文具が一通りと女子文壇が四五冊のせてある、右手の書箱には洋裝の可愛らしい袖珍書と和綴の本が雜居して壁には水鳥の水彩畫が懸つてゐる。

疊の上には捨葉書二三枚

○道行く人　京都　堀池靜子

第一に小學校通の女生徒、そら電報配達人が馳けた、鰮魚賣りが過ぎ、此の次は犬を共に獵師、酒樽擔ぎし問屋の小僧、今過ぎたのは自轉車乘りの吳服屋の番頭。

今も京都邊にありや錦影繪をおもふ

○凱旋　岩代　高澤恭子

適ばれ千軍萬馬往來の勇士、遠藤猛夫今や目出度凱旋

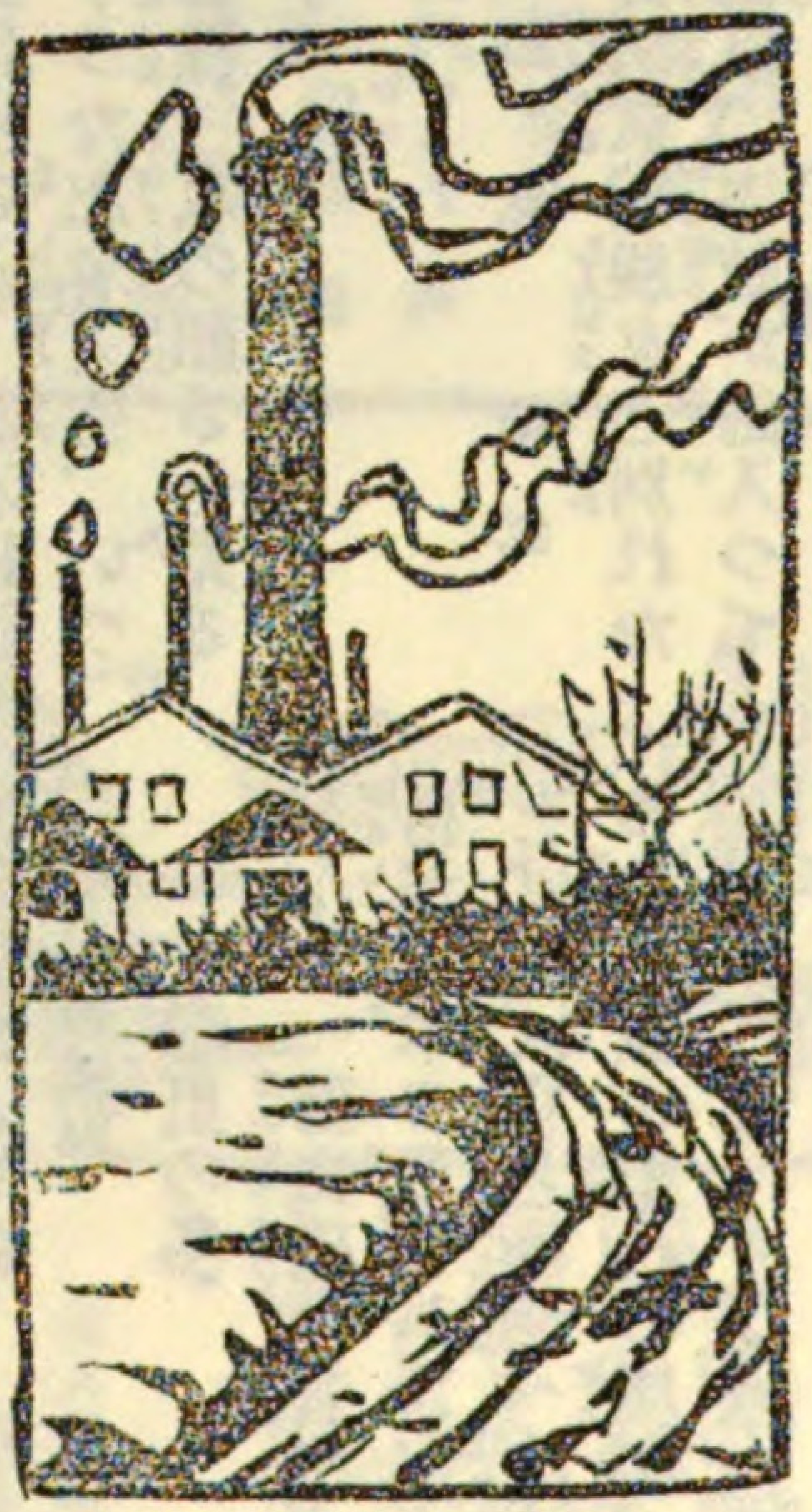
して、誰くが如き萬歳聲裡、悠々と我家に入れば、僅か二年が程に、籬は破れ壁は毀れ、見渡す田畝は雜草離々として、あはれ妻は病に惱み愛し子は飢に泣く。

數篇集合にも拱口あり

○凱旋　茨城　栗田信子

今日は兄上の凱旋の日私は嬉しくて〳〵何事も手に付かず、只うろ〳〵うろついて居るので母樣に叱られて仕まゐましたの、それに、母樣は叱りながら、矢張うろ〳〵して入らつしやるのよ。

心こゝにあらず



(選外)　麻布　大手たけ子

○百合と蛤　三重　奥瀨かすみ

ずッと昔、混沌たる地の蛤王、天つ國の百合姫戀ひて、きづき上げた空中の大樓、只、ついまよはされ、地に降れば霞と消えて、化身は野邊の百合の花よ。蛤王、因果めぐりて今も尙、築きつゝある蜃氣樓！

小散文詩

○冬の朝　大阪　鴨正子

眼が寤めると邊り仄暗く朝風寒い雪の朝！寂然！丁度太古の様だと思つて居ると脊戸の方でキヽーと釣瓶繰る音。母様におさし申してはと急ぎ馳けて行く。靜かな世の中は只下駄の音と梢ふく寒風とキヽーの音のみ

實に靜かなる朝、人は太古に似たることあり

○好きな人

群馬　伏島直子

女子文壇を持てきてくれた時の郵便屋さん、誌友倶樂部で質問した時丁寧に敎へて下すつた記者先生、いつもきれいな繪葉書ばかり下さる姉様、私の顏さへ見るとだつてと兩手を出す妹のしげ子。

此ところ記者大得意

○悲しい事

横濱　林藤江

昨年母上に逝かれた事、兄様の御病氣、親友と別れた事、父上にむりな小言を云はれた事、盜賊が這入つて晴衣を取つて行つた事、お正月でも手がしもやけてお友だちと羽をつかれない事。

若き戀

○田舎の妹より

下野　久保やな子

姉さんと學校へ行く頃、いつも妾等を馬鹿にした隣の與作は、兵隊になつて先達てそれは威張つて行つたのよお嫁に行つた花川のお孝さんは此間可愛い赤ちやんが出來たのよ。姉さんお正月にはかへるの

言ふにや及ぶ、歸心矢の如し

○炭燒く翁

上毛　河内とめ子

深山の奥に引きこもり、顏となく手足となく、煤にまみれて、着たる衣もつゞれがちに、見るだにいぶせき心地すれど、あゝ心のやさしさよ、小屋の傍に咲ける菊に笠かぶせぬ。

人間の美點

○里の冬

相模　山本久代

どんと一聲鐵砲の音がすると同時に、身を切る様な木枯が、木の葉をがさがさとからたち垣に吹寄せて、霰をばらばらと椽側へ吹込む。急いで戸を立掛ると、胸の邊り血に染れる鳩が、ばさばさと飛込んだ。

神よ、傷めるものを救へ

○猫

徳島　春野いつみ

私が魚の料理して居た時に、一寸鉢を取るとて傍へ向きました間に、泥坊猫に、魚を取られ、腹が立つたから追つかけましたら、納屋に居る親猫の處へ、持て行き渡しました、これを見てたゝく事も出來なくなりました。

其一、今だけは許してやる

○猫　名古屋　あい子

妾しが料理を御辨當に入様と思つて入懸けますと郵便ッ――!聲を聞き玄關に走て行き歸て見ますと頂いた料理がありませんさがして居りますと御庭の隅で隣の猫がウ――ウ――と云つて食て居りました

其二、今度は許さないぞ

○山家の秋　陸前　平塚よね

峰の紅葉の山越しに庭の聲聞く秋の夕暮雲も動かぬ靜けき空に、只村々の烟ゆら〳〵と立ち昇り、やがては烟も薄れ〳〵と、紅葉の山も村々も夜のとばりに包まれて、遠き砧の音絶え〳〵に、空渡る雁が音に通ふ。

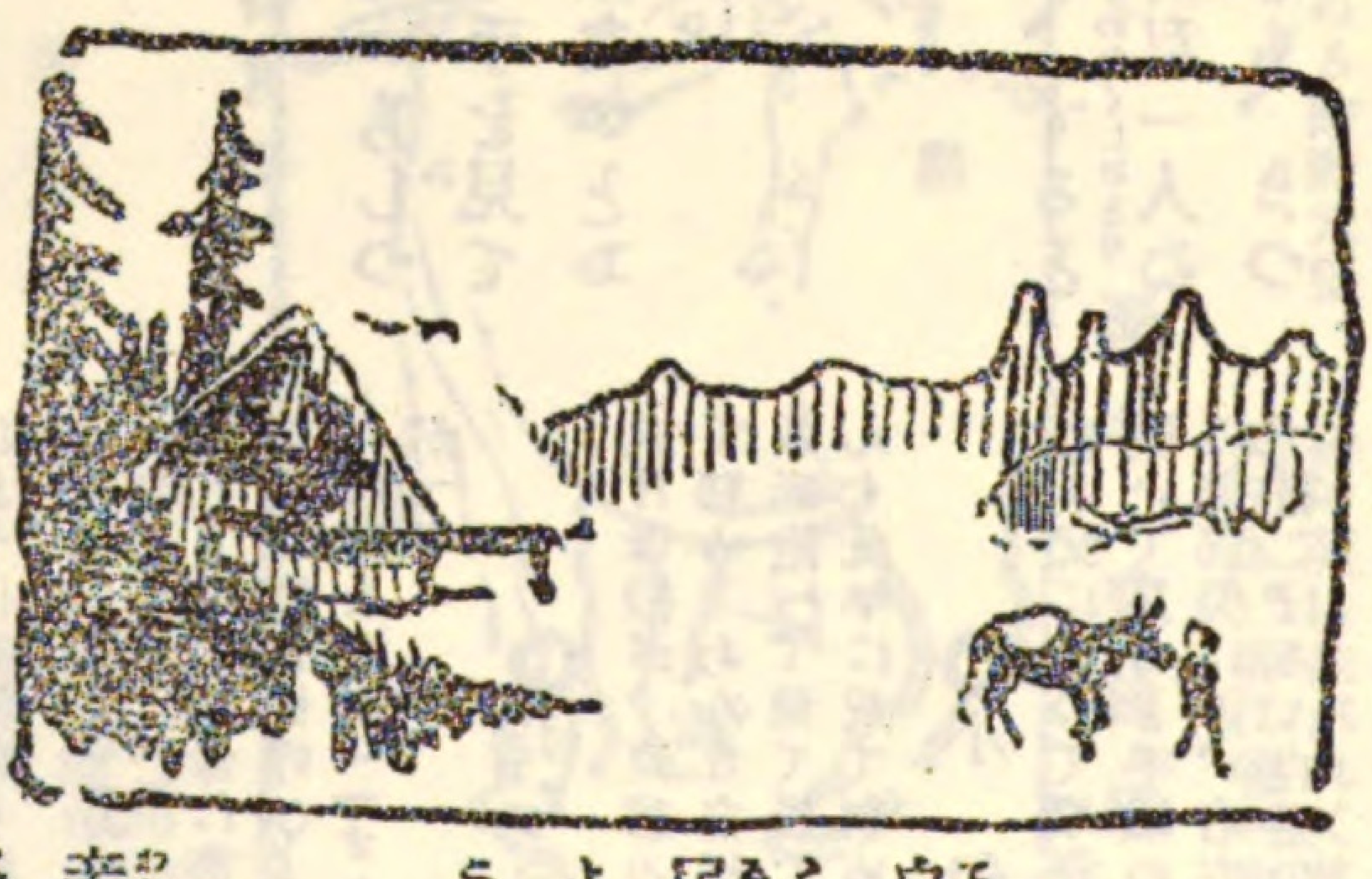
調子好し

○甚だしき差　能登　高森いち子

往來の見える二階で、裁縫して居た頃は一枚の羽織に一日半も懸つたが、此室へ來てからは、樂に一日で仕上る。但し是は九月頃の調です。

妾の隱居所

(選外)　茨城　外山よね子



○雪の朝　伊豫　[illegible]香女

今朝起きて見ると野も山も畑も木も道も眞白になつてゐる。私は井戸傍で水を汲んでゐると柳の枝に雀が二三羽不意に驚いて飛んだ機に柳の雪がスル〳〵と落ちて妾の首に「あッ…冷た」

雪後晴朝、空は水淺黄、地は銀の布

○田茂平爺　越後　五十嵐美波

「お隣の御主人様は毎日菊園へ出て、御自作の花の出來を喜んでお出てたが、おらはまた黄金色に實つたやつを見渡して居ると、家へ歸りたくないのよ」と、氣味よげに話す田茂平の顏は宛然大黒様のよう。

主人は壽老人

○縁談　上毛　季子女史

妾は昨夜眠れないので獨り目を覺してゐると奥で御兩親の寢物語、耳を澄して聞くと兄さんと妾の婚禮を來月一日にするつて、あれどう云ふ譯だろう、あのなつかしい兄さんはほんとうの兄さんではないだろうか。

はづかしき

○笛　淡路　奥井汀女

草刈の吹く笛なれば青葉の笛、住吉の汀にて吹けば高麗笛、さらば門通る按摩の吹く笛は何笛ならんと、おりふし思ひ出てゝは妾が秘藏の銀笛取り出てゝ吹く、是れも亦如何名づくべき。

淡路なれば千鳥の笛

○兄様　水戸　山田艸月子

歡呼の聲に迎へられてプラットホームを出ていらしつた兄様、答禮遊ばすのにお上げになつた右の手を見て私は驚きました、いつのお音信にも變りはないとおつしやたのにお手の指が二本ないのですもの。

殘りの三本が凱旋の土産

○私の希望　千葉　靜園

私の希望は何億萬年も生きてゐたいのです、すると此の地球が月のようになるでしょう、その時私一人ゐたら、他界の人から、てんなみにくいものでも、きつと、地球姫位にいふてくれるだらうと。

萬年後の地球姫たらんより現在のやまと姫たれ

○天狗　南千住　江口春子

陸軍の叔父様と海軍の父上とはお互に武功話、母上は追羽根で勝つたと喜び、弟は一年間無缺席の賞與を誇り、私は短歌當選の披露、兩歳の愛子は、私の着物は赤くつてよ。

○小猫　船橋町　紅女

書齋の窓の下の梅が此頃咲き出しました、すると毎日毎日此の梅に止まつて啼く鶯があります、今日も來て啼いて居りますと私の大好な三毛がしようじの隙からねらつて居ります、あらつどうしましやう。

○だまされた　横濱　野きく

今しも一生懸命に書き終つた清書を見て居ると、後からいたづら盛の甥が「母様が御呼びよ」「ソー」と答へながら急ひで姉様の居間にゆけば「私は呼びません」「オヤ」と又自分の室にとんで來ると。「マア大變御清書が」

○美ちやん　大坂　きよ子

或日母様が、京都の時代祭を見て御出に成つて、「私は、まあ此年に成つて初めてあんな立派な御祭を見たよ」と、おつしやるのを側て、御土産の人形抱へて伺て居た、今年五才になる可愛盛りの美ちやん「母様美ちやんも此年に成て初めてよ」

○小包　伊勢　武部みちよ

亡き父に代つて學資を送らるゝさへ涙の種てあるを亦も心を籠めた小包開いて見ると手織の袷二枚、賃仕事の傍漸々出來上つたからせめて試驗の御褒美にと、右左の袂には勝栗と寶丹膏、あゝ勿體ないと取上て見れば香こぼるゝ白菊の花。

○つるし柿　筑後　近藤りえ子

弟と二人て此頃やつと仕上げた六つのつるし柿、二人て喰べるのもどうやらと、其二つをお兄さんのお位碑に、二つをお父さんとお母さんに、殘りの二つを妾と弟と二人てたべました。

○お正月　筑後　近藤はる子

今日はお正月だからつてお隣の光子さんも、君江さんも、皆な奇麗なお衣裳着て、うれし相に遊んで居るのに……妾はこうしてお母さんと二人で煙草まきの内職……噫、死んだお父さんさへ居らうものなら

○父の日課　　下野　撫　子

家のお父さんは毎晩お酒を一合宛嗜みますのよ、すると直に、ほろ／＼機嫌になる、調子のお可笑な謠曲を歌ひ出す、果ては床にある狩野元信の幅を眺ましてれ一人は半醉叢は山水だつて申しますのよ。

○かたみ　　（選外）　臺北　松浦郷子

讃島　水仙子

去月七日逝きませし姉君の片時も離れ給はざりし御机の上のノート、水茎の蹟も美しく、「女子文壇投書原稿纂記」とのみ、吁今姉君の居まさば此の美麗なる女子文壇如何に欣び給ふらんものを、悲しき哉。



○凶　作　　陸中　佐藤　伊與

七十餘りの家の御祖父樣、米の飯を食ふの出來ろさへ有難い此上何が入る筈だと御飯と御汁許り此頃は少とも御魚を召し上らない。

○お正月の心配　　相州　井上　久子

お正月が來るに美着物が縫ひ上りそうも無いのと、四方拜に雨が降りはしまいか、羽子を突くに風が吹きはしまいか、歌留多に負けて墨でも顔に付けられはしまいかと。

○うれしいと悲しいの二つ　　川越　山田　松子

凡そうれしいといふ事と悲しいといふ事は、此世の中で離れ難い物でございます、私の兄樣は先日入營致しました、御國の爲に盡すのですから嬉しいと思ひますが、又三年逢ふ事が出來ぬかと思ふと、悲しく思ひます。

○告別式　　大分　甲斐ふい子

妾は今講堂で告別の辭を述べて居る所なので。少年少女の視線は一様に妾の顔に注がれて其凉しい瞳には熱涙が一ぱい。所々から嗚咽の聲さへ聞える。妾は唯一生を此小學教師で送りたいと思うた。

○辻占賣　　飛彈　高　小夜子

『淡路島通ふ千鳥の……』凄まじい吹雪が夜を我物顔に荒れ狂つてゐる眞夜中を變らず聞ゆる辻占賣の聲、年はまだ遊び盛りの十才だといふのに、噫彼には親はないので有らうか？否！彼は親の爲に苦むで居るのである。

○朝の雪橋　　姫路　水の守歐子

早半時間も人通りがない、柳と松が兩方から、水を覗いて居る小川の橋は、夕べからの雪の中に印せられた、レールの樣な轍の後と、二の字を畫いた下駄の後と、花の紋の樣な犬の足跡とを、靜に／＼雪が埋めて居るばかりで……。

○白　菊　　下野　早　苗　子

待ちに待つたお庭の白菊が今朝漸く咲きました。氣高い姿とでも申しやうか、眞白な花瓣に露を含んだ神々しさ、私は思はず輕くキッスを致しました、そして清い心の此花を理想の友に仕樣と、ひそかに誓つたのです。

○年の暮に　　下野　か　ほ　る　子

あゝ今年も暮てしまうのに慾り勝の何一ツ出來なかつた此の身、御日樣にも面目ない然し今となつて悔いたとて詮無き事來る年の元日からは必度時計の針にあやかつて、はげみますと、天に向つて誓ひました。

◎見舞狀　　静岡　春子

中年前迄奉職して居た學校の生徒から、澤山見舞狀が來ました、見ればやさしい文字を以て、僅二三行書てあるだけですが、形式的の長い手紙よりは、どんなにうれしかつたでしよう、私はすぐ心をこめて禮狀を出しました。

◎怪雲　　巖手　折居綾子

刈りて刈りて刈れども束に足らず、空徒らに枯れて穂空し、盧に待つ老媼と且つ我れあゝ晩餐をいかにすべき。鎌を捨てゝ圃に泣く歳七十の翁、深刻の恨を面に盛んで天を仰げば、何の兆ぞ怪雲飛んで遙かにちぎれ行く。

◎美いちやん　　津　松尾はな子

夕まぐれ、詩の小窓に凭つた儘、一輪咲いた庭前の紅梅に見惚れて居ると不意に垣の外から其花を取らうとする兒があるので、「あれッ」と思はず下りた椽の先。「姉さん妾よ」つと現はれた美ちやん、私は只恍惚した。

◎お目出度い　　麗生　森田喜代子

年神樣へ上るのだからお芋を掘つて來いと母樣の仰兄樣の出征以來持ち馴れた片手に日當りよき芋穴の傍落葉をかき分ますと思懸ない福壽草が一輪金て盃の樣嬉しさの餘りに母樣に告げました。

◎冬の朝　　埼玉　井上なか子

今日は朝から向ふの山が鳴り出した。兄樣が戸外を覗いて「竹林を風撼る日の寒さ哉」折柄颯と吹き來る一陣の風に、あはれ美しう咲き亂れて居た築山の山茶花二三輪はら／＼「山茶花の脆し冬咲く意地に似ず」

◎夕ぐれの鐘　　遠州　土屋松江

妾の家の、すぐ裏の丘に、お寺があつて、いつも鐘をつく、始のほどは何とも感じなかつたが、妾のなつかしひ姉が、彼の世に行つてから、夕ぐれのひゞく鐘の音の味な、眞に知つた。

◎小音樂家　　牛込　林安津子

弟が音樂學校から歸りまして每日ド、レ、ミ……と復習が始まりますと何時も二歳になる美ちやんが側に參り弟が兩手の手指を動かす通りに眞似を致しますから母上や私が小音樂家が出來たと笑ひくづるゝのであります。

◎義足　　仙臺　白薇子

妾は泣きながら母上と豫備病院に見舞に行つた處が、意外にも隻脚なる兄上の足は矢張り二本でありました、……あゝ其の左足こそは實に恩賜の義足を拜用たのであつて、此時ばかり悲みの涙と嬉し涙とが一所に湧き出てました。

◎愛の園生　　群馬　遠藤照江

「皆さん學課ですよ」と黑袴の何處となく人懷つこい愛の神の宿つて居る樣な二十四五の女が衣服さま／＼な子供に告げると直ちに列んで一棟に入つた暫時すると「天に在ます……」と祈禱の聲、門には「少年感化院」と書いてある。

◎哀しき事　　長野　島垣永子

何が一番哀しいと云つて、親兄弟に訣れた時程、哀しき事はない、是れは一人妾のみではない、誰でもそうであろう。現に妾は其味を知つて居るのである。

◎殿樣の屋敷　　安藝　兒玉たく子

昔し殿樣の屋敷なりし所が、今は荒畑となつて彼方此方に梧葉が散つて居る、噫かはれば變る此世の中、榮枯盛衰、人は七度の浮沈み、とは宜なる哉。

◎お出迎ひ　　茨城　桂葉女史

昨年滿洲へお出征になつた兄樣がいよ／＼今日は歸つてくると聞いて、顔でも化粧してお出迎しやうと思つたが母樣が臺所のお手傳しなといふ

のて亂髮のまゝ裸足になつて働いてゐると、あら最早門に。秋村少尉萬歲。

○椎拾ひ　　　　諏訪　おぼろ

あらお君さん早くいらつやいなこゝに澤山落ちてゝよ、そう、けどもこゝにも澤山よ、大きなのが。そんならわたしもそこへ。お俊さんお君さん早く〳〵、まあ大きなのが。あらそう、わたしどちらへ行うう？

○朝　寢　　　　秋田　松田せい子

宵の中葉蔭の薔薇まで殘りなく數へておいて、明日の朝こそ兄樣よりも早く起きて見やうと心掛て寢ましたがだうして〳〵、兄樣はまうお庭で楊子をおつかひです もの、わたし此の朝寢が花に耻かしくつてよ。

○病室の夜半　　　　茨城　青柳　愛子

長き夜の夢さめてひとり廣間の病室にあれば、殘燈未だ消えやらで愁吹く風は肌にしみ、何となく哀れを添へ、利根の芦間になくちどりも我心をなくと思ひやられて枕をしめすことのみ多し。

○十二月號　　　　下野　久保いわ子

山茶花を面白そうに散らして居る雀の影がちよい〳〵と障子に動いて、美ちやんは人形を抱いたまゝすやすやと眠つて居る、暫し針の手を休めて其寢顏に見とれて居ると表に一聲郵便！オー嬉しい女子文壇!!!

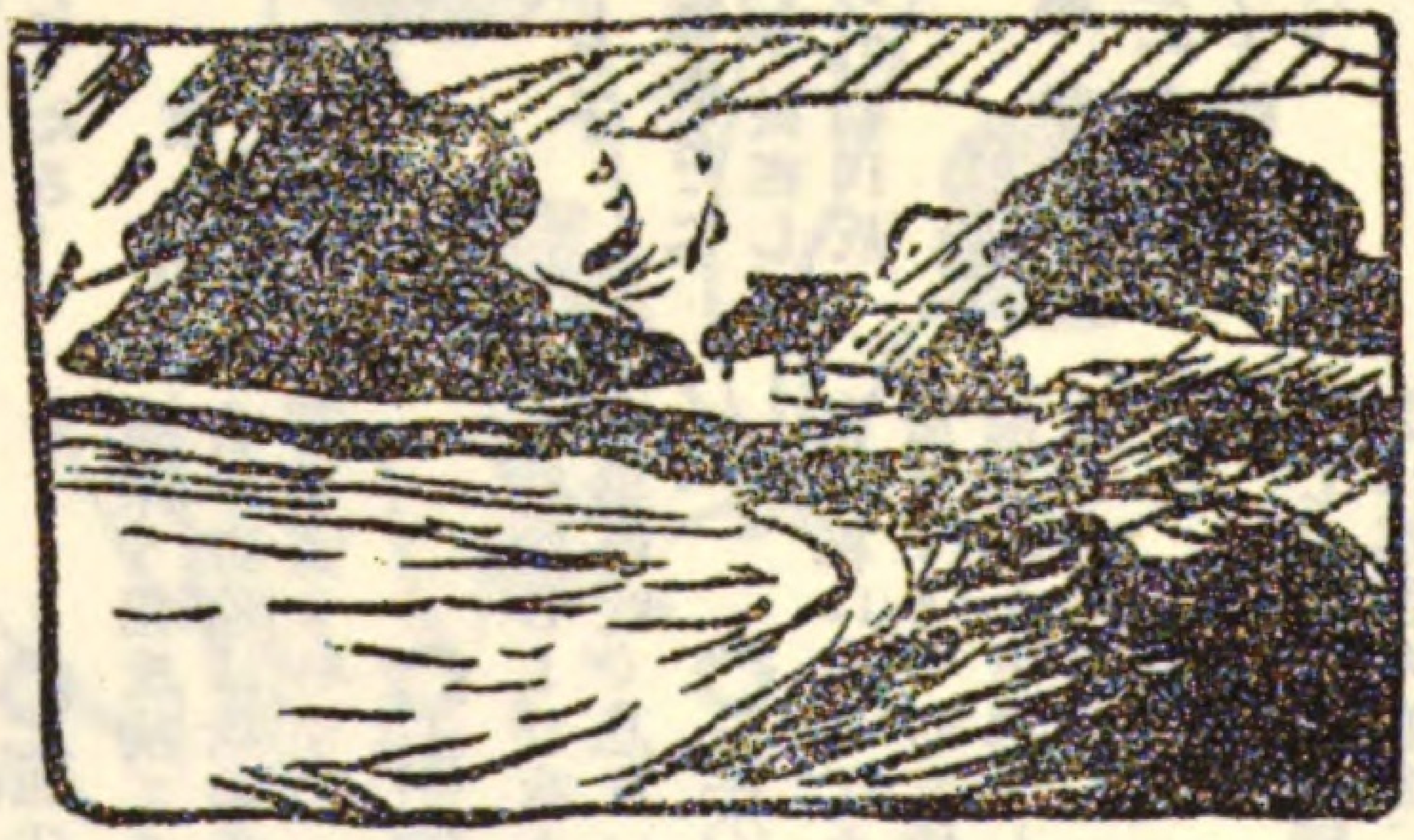
（選外）

紳田　山磯　君江

○犬　　　　伊勢　堀　くに

私の隣に赤といふ犬があつて私を見るといつも尾をふつてゐて來るから可愛がつてやります、或日私が學校から歸つて來たら赤が私の家に來て球をそばへ大切な庭の椿の木を折てしまつたその時私もしかりました。

○菊にリボン　　　　大阪　玉水



『姉さん御庭の菊見て頂戴な』と 妹はれざ〳〵私の室に入て來た、何だと思て行つて見ると、白菊に淡紅のリボン「おやまあ菊にリボン」と笑つた。

○明日の天氣　　　　入間　岡野　美津

私の妹は、明日は學校で東京へ伴れて行くと先生がお話しをしましたつて、もー大嬉びて姉さんお天氣は大丈夫ですかと夫のみ訪れて居りましたが、三時頃起きて見れば雨ふるところが星がふりそうてした。

○秋の風　　　　陸中　駒込とみゑ

白菊の今を盛りと咲きにほふそのかげに、小猫一匹ひそまりて、籬になせし篠竹の端にとまりし、蜻蛉を狙ふ折から、桐の葉一つ其の脊にばつたり、蜻蛉も小猫も驚いて飛びよるこそおかしけれ。

○寒い朝　　　　宮城　古河　松江

今朝は實に寒いので、私は朝飯の後片附も早々に濟まし、すぐ爐端に往つた、そして冷たい足を暖めたら、左の足のかゝとの所がいやにみり〳〵痛んで來たので若しやと思ひながら見ると、まア眞に赤切が。

○お正月　　　　岐阜　田舍乙女

妾今朝お庭の寒牡丹を眺めて居ますと築山の陰が騷がしいての何かと思ふて行つて見ますと、弟の健ちやんと妹の愛ちやんとがニコ〳〵とはせ寄て姉樣早く御覽よ、こんなに氷がはつてゝよお正月ももうぢきだわれ。

○女子文壇　　　　土佐　秋月扇江子

お婆樣は扇さん未だなのとおせき遊ばす、それも其筈、日は餘程傾いたのに、今やつと稿を合した計りだもの？是てはとても明日の間には又一生懸命になつて、運針の眞最中、郵便と投げ入れたのはまーどうせう女子文壇。

○此袷　出雲　綾錦

亡兒の召服を氷に替へやうと横町を曲る時、嵐が面を掠めて。途端に路傍の虫屋が灯を奪はれて、其處には闇を劈いて虫の音が時雨る。それが姿には、賽の河原で泣く稚兒の如に……吁此袷は！怎う仕やう。

○洋燈　東京　木村みふれ

學海の燈臺となりて、光をはなつこの洋燈、今朝粗忽して首がちぎれたのを、リボンを、あつちこつちと、クル〳〵卷いて、やつと附けたら、弟が見て、やあ此の洋燈は、名譽の負傷をした、だから繃帶してゐる。

○可愛い妹　松山　わか葉

私が裁縫から歸るといきなり走て來て姉ちやん、と縋りつく、林檎の樣な頰にキッスをしたら其濕かだつた事、夜る抱いて寢ると黑い房々とした髮の毛を私の胸にすりつけて兩手を懷に入れて乳を探る。

○希望　麹町　金子よし子

學校から歸つて來ると姉さんが來てゐた、錆茶へ黑白の横竪縞の御召に、濃栁鼠へ白茶金で葵を織り出した帶で八月目の一郎さんを抱いて被在した御側へ行つてあやすと好く笑つて可愛いの私も早く姉さんみた樣に成りたいわ。

○鈴虫　上毛　津久井紫子

玲瓏たる月は今しも秋草茂る園を照しそめて誠に美景であるが一本の白萩嚢の風に一寸よろけて西の方へ向いて居るので起してやろうと靜に庭に下りたつ折しも下から愛らしい聲を立てて鈴虫がなきだした。

○繪葉書　金澤　大地波子

妾が臥つて居る枕許の二枚折りの屏風に、御友達から送つて來た繪葉書を、皆貼つて貰ひました。すると不思議にも其の日から、永の病氣が次第に快くなつたやうて。

○わが祖母　小石川　千代子

わが祖母は今年九十三歲でありますが夏でも「コタツ」ははなれません駒さんと云ふ愛らしい小猫を友だちなんかのやうに思つてけんくわもしませんて仲よく每日遊んて居ります。

○錦帶橋　周防　樂隨利之

我故鄕の、錦帶橋しかも、三橋の一と、かぞえらるゝ橋、其の下を流るゝ錦川等其の名の如く、景色の宜き事、他國の人の目を、驚かすものなり。

○都の菊　東京　鄙波子

秋深う相成候てまがきの菊の匂ひ出て申候、いつも、空氣淸らかなる田舍の野辺に秋の千草のみめて給はて折々は御出京なされ空氣汚れし塵の都の菊もめで給はずや。

○田舍より　熊本　本島とよみ

木枯昨日より吹き荒れて候ひしに今朝は初霜のいとしろく置きて候ふよ草葉の吐く息はいと深くて候、堤のハゼの木は、早、紅葉なして候。

○世の中　出雲　白すみれ

私が机に向つて今行つた繪瑞書展覽會のの事について、夢の樣に辿つて居ますと、お父樣が「あゝ世の中といふものは難しいものだな」と長い溜息をしられまして、私は此時位世の中といふ語を恐しく思つた時はありません。

○飾櫛　小田原　井上久子

美しい飾櫛を裁縫のお師匠樣からお土產に戴いたので嬉しくて嬉しくて夢に迄否な寢言に迄て云ふた大事の大事の櫛をどうしたはずみか井戸の中へ。

○心地よき朝　神奈川　西山加代子

朝早く起て浦の稻田を見渡せばきれいな〳〵露が穗の上に宿て美しく輝いて居ます私は今更に農夫の辛を共に嬉しく思ふ折しも小島は友を呼つゝ樂しく囀つて居る所を不意に鳴子を引くと驚逃る姿もをかしいのてす

○昨夜の夢　川越　山田松子

旅順で戦死された兄様が、昨夜御出てになつて、私に巾着の白のリボン、千代チヤンには薔薇のかんざしを下さいまして、色々戦地の面白い御話をして下さいました、所が悲しい事には、其れが夢でした。

○月　羽後　菅原花枝子

定めなき世の波に揺れて、張り裂けん胸の悶を慰むるは誰ぞや。浮世の榮枯をよそに高く天心に冴ゆるはたぞや。清く軟かき惠を下界に與ふるは誰ぞや。月よ、世にも人にも明し難き妾が煩悶を聞くは唯御身のみ。

○妾のよろこび　静岡　春子

おゝうれし事、母に死別父に生別夫が出征してからは、妹は看護婦學校へ入れ、學資は妾の俸給を以し、あらゆる困難辛苦に耐へ忍びし事、茲に一年。今日しも首尾よく卒業したとの報知を得た。

○女學生　常陸　山田千代子

英語で語りながら李畑の傍へ差かゝつた二人の女學生「あらこの草は何でせう」と。あゝ英語をあやつる事は御存じでも李のなる草一ツ知り給はぬ。

○菊　芝　顏川

日頃兄さんが愛する菊の花が、やうやく四五寸のびまして、きれいな花が二つ三つ咲きました、まだ蕾が二三十ついて居ます、お留守中の私が心づくしか、お目にかけたくて、早くお凱旋を待つて居ます。

○夢　下野　早苗子

五臟の疲れと人は一言に云ひますが此果敢ない夢が又私に取つては無上の慰藉となるです、今は世になき戀しい父上母上にお逢ひ申て而も昔と同じ優しき御聲でみ教をさへ聞く事が出來るのは皆夢の蔭ですもの。

○病氣　天草　田代松榮

私は人から壯健い人だと褒められて居たが不圖病室住ひの身のつらさとなつた獨りの御母樣は甚麼に御心配なさるであろ早く天の神樣に祈りて御母樣に御安心させ申したい。



群馬　後閑齋子

（選外）

○蝶塚　豊後　甲斐ふゐ子

妾は殘んの月影を浴びながら花の香高い菊の園へと來て見ると哀れに美しい一羽の蝶が死んで居る。餘り可愛さうなので白菊の花瓣で奇麗な柩を編んで丘の上に葬つてやつた。

○お月樣　新潟　淚子

人懐しげな顔を傾げて。愛らしい口から花子は姉樣。私今晩と御月樣見てたら。お恥しいと見えてそつと。葉の影になつた。

○お樂み　長門　國子

今日は、當地天滿宮の、祭禮にて、一番賑かな祭りである、夕飯が濟むと、御母樣は、子供等を連れて、御參詣、妾は一人留守番役で、今餘念も無く、女子文壇の投稿を、認める所である。

○朝景色　大阪　白菊

晝間は、さしもに賑やかな、心齋橋筋もいと靜に、新聞の鈴の音が、朝霧につゝまれると、おむかへの戸が、ガラガラ。

○勇さんの發明　青森　二葉女

勇さん、小臼で何か熱心に搗いて居升から、行つて見ますと、まあ、煙草をついてゐるんです、どうするのと問ふたら、辛くつて飲めないから、今お砂糖を入れて甘くするの、姉さん、僕發明てしやうと、特意な顔。

○天長節の朝　伊賀　歸香女史

妹天長節の朝早くより母に請て、禮服を着、今や家を出てんとするや、「靜子さん少しお待ち」と、走り出て、リボンをさしかへ、襟を正し「さあいゝよ」と云ひて登校する、後姿を見て母は笑みつゝ家に入る。

○雪の朝　中津　しらぬひ

子供の戯むれる聲で目を醒して、椽に出て見ると庭一面銀世界、妾は知らず知らず「まあ美しいこと」と呟くと、何時も朝寢の妹が今朝はもう起きてゐて、姉さまと横合からとんできて、冷い手を妾の頬にあてた。

○萬歳　滋賀　藤井さくら

「やあお父さんお父さん萬歳萬歳!!!」今年四つになるお隣りの武ちやんが、兵士を見ると、いつでもかういひなさるのを、聞いてゐる妾は、胸が張りさける樣な感じがしまして、武ちやんを抱きしめそと泣いてゐます。

○秋　紀州　澄江

稲は宛ら黄金の褥をしきたやう、案山子は雨の夜風の日も怠りなく忠實を盡してゐます、妾の机の上の鉢植の蔦も紅に、噫、秋も漸々ふかくなつてきて!。

○愛弟　長野　島垣永子

妾には今年六つになる愛らしい弟がありました。思ひ出せば涙の種今を去る事、三年前丁度今頃ふと風の心地で床に着いたのがもと病は日々重り行き、庭の紅葉の散るのと共に遂黄泉の客となりました。

○朝の景色　越後　としこ

曇色の雲が、紫色となり、うす紅と變り、眞紅となると、やがてきら〳〵とまばゆい程の光を放つて、太陽が昇つて來る、四邊は急に景氣づいて來る。實に心地よいのは朝の景色。

○農家の樂　神奈川　中津川安子

田園生活！ほんに〳〵樂しいものです、そろ〳〵秋の半になりますと取入れたお米は倉に一ぱいになりますの、精出して作つた裏のつくね芋が大きくなつた故今日は私がお料理して父樣母樣をよろこばせますのよ。

○料理のはじめ　石見　さゆり

五六里さきの叔母さんが祭に來られたので妾は學校で敎はつた料理をして出したら大變珍らしいと褒められたから此度は妾が先生で敎へて上げたらたいそふ喜んで花子に敎へてやると勇んで歸へられた。

○僕は淋しい　姫路　水守なみ子

『阿母ちやん、鎭臺さんが澤山凱旋て居られるのに、阿父さんは一つも見えないのね』『あゝ阿父さんはね、何年經ても最早かへつちやこないの』『そんならやつぱり阿母ちやんと二人つきり、僕は淋しい……』

○君子　上總　黒河きよ子

冬の光りは短く箱根の山に收まつて、製糸場の滊笛が鳴つた、糸をとる車の音が止むと君子は、やつれた頬にもつれ髪其のまゝ其の日の賃金を、二町も離れた郵便局へ持つて行く。

○水　岩代　杉原たかやす

わづか一桶の水、お飯となり、汁となり、お茶となり、手水となり、雑巾水となり、はてはたらちねの安否を伺ふ墨汁ともなる。

○朝　大阪　森奈耳榮

御日樣はまだ雲に包まれて居被る私は蒲團の中に包まれている庭の繁みから虫の音が聞える折から秋風涼しくサッとふき木の葉がバサ〳〵と落る私は床を出てうらへ行くと東から日の光がパッとさした。

○樂しき夕　大阪　杉田孤泉

太陽が六甲山に落ちて、この村も又暮れて行うとする時、私は鍬と鋤とを肩にして歌をうたひながら、歩を家に向けたのである。

○みだれ模樣　栃木　木村しずゑ

今し例の呉服屋が來て、喋々と得意の御世辭をふりまきながら母の前に列べた秋八千草亂れ模樣の美しさ!!『御母さん、あれ買つて頂戴な!!』突として障子の影より起る声を轉ばす樣な少女の聲。

○野　菊　廣島　和知廣子

都にかしまだつ友を送りて露しげき野邊につきぬ名殘を惜しむこの夕べ後の思ひいてかとてかたみにつみし野菊の花よ例へ香は失せ紫の色あせん後までもちかひし言葉のみはこの中にこもりて消えざれな。

○鐘の音　茨城　粟山孤舟子

したはしし兄上が、あの世のひと〻なられてから、わたしは、鐘の音の、眞の味を知つた

○鳥　刺　金澤　波子女史

（選外）

嬉しげに囀づる雀を、鳥刺奴が……あれ可愛そうに刺されし鳥は、翼もやつれ毛もぬけて只逃れむと狂ふて居る、又彼所へ一羽來た、何うかして逃してやりたい。

○五作爺　越後　五十嵐美波

田の畔に腰うちかけて、いまし鎌の柄に煙草の吸からを叩き落した五作爺は、破れ笠を片手に立ち上り、儂は露西亞から償金を取らぬのよりか一昨日の暴風で稻作が二割も減つたのが殘念でならねえだ。

○蛙　日向　春江子

隣と謂つても三里もある山奥、深夜山番の翁は一人、かやり火の許に、……、山吹く嵐は沈まりて音なく狐の聲もせざる眞夜中、幽かにチヤボンとの音、一入寂しさを增ぜり。

○未亡人　京城　原野みき子

佛前に夫の軍服姿、戒名の前には香の烟ほう〳〵と立ちのぼり其が前に坐せるうら若き妻の涙聲にて經讀みつ其が後に四歳あまりの少女小さき手を合せて折しも撞き出す入相の鐘母は子を引きよせてよう〳〵と泣き伏しぬ。



○野婦日記　備前　おちば女史

六日、朝早くより稻刈にゆく、やがて凱旋し給ふ背の君に、わが丹精によりて美しく實りし稻見せまいらせんかな。滿洲より手紙きたる直に返事を認む、紅葉一枚籾三粒はかり封じこめて。

○あはれ野菊　下總　鈴木芳枝

麗らかな小春日和、私は一人で野邊の散歩、廣い寂しい枯野原には床しい野菊が只一枝殘つて居たから手折つて來て朝夕

無名子

讀書の友とした、噫あの荒野を飾つた花も今は僅に四疊半を賑すに過ぎない。

○戀　千葉　克榮子

今の女學生の非常に墮落したその原因は九分九厘戀てある、二人とよれば男のはなしてある、早々學校を卒業してあの人と二人て樂しく暮したいものだなどは皆望んて居る所てある、本分を忘る〻勿れ女學生諸君！

○日記の一節　淺草　夕江

寒い夜の事てした亡母の寫眞を眺めて、有りし昔を忍び涙を落した時にそうと羽織をかけて下すつた者がある驚いて振向くと、妹の芳ちやんが後に立つて居た。

◎山遊の童　廣島　すゝき女史

山遊びの童は谷小川の水を止まず飲んで居たが、思ひがけなく柴が流れて來たので、童は驚いて立とうとするとたんに小松へ當つた、赤ひ松葉が二三本ひら／＼と流れの中へ落ちた。

◎妾の喜び　京都　松田ゆき

あの玉が(猫の名)可愛らし子を産だのと、小學を首席で卒業して、都へ遊學を赦されたのと、そして歸省してお母さんに會たのと、戰地からくる父上の軍事郵便と、病氣中にお友だちのお見舞を受たのとが、妾一番嬉しい。

◎頬被り　京都　かすみ子

樹の下隱に腰下し釣せる翁、何だか頬被りを大切そうにして居る、颯と吹き來る風に、アヽレ頬被りは水の面に……と見れば翁のはげ頭に夕はえが映じて、得も言はれぬ光彩を放つて居る……。

◎朝　北海道　石田波津子

村雀の聲の喧しい南園には、小春の暖かい日影が、萎れかけた白菊を生かした露にきらめいて居る。井戸端には、隣家のお内儀さんの聲『よいお天氣ですれ』やがて釣瓶をきしる音がする。

◎三枚　島取　すみれ子

今年八つになる妹の靜と庭の大桐の木葉に花筵座しきて今飯事の馳走最中靜ちやん御皿を三枚持てお出てといへばやがて片手に一枚片手に二枚の椿の葉を姉ちやん此れて三枚れ。

◎嬉しき事　磐城　深山女史

皆様から絵端書送て下された時、女子文壇に初めて自分の名が顕れた時思ひがけ無く久し振て親しき友に遇ひし時。

◎不好な宿題　秋田　松田せい子

七ツになる妹の孝ちやん、學校から歸ると直ぐ妾のお室にきて、姉さん又宿題いひつかつてよ、私宿題眞實に不好よ、題は不好な事だつて、て妾はそれでは不好な事思ひついたの……、といひましたら怪訝な顔

◎秋の夕　伊勢　部武美千代

釣瓶落しの秋の日は島山影にかくろひて、金波銀波のさゝめき鞺う、凉風靜に面を拂いて歸帆の影又一つ、折から寂寞を破りて夕を告ぐる遠寺の鐘。

◎蟲の音　秋田　大越幹子

他人は蟲の音を悲しいものに算へてをります、又詩文にも蟲の音を悲しい所に用ゐて居ます、獨り我家ばかりは六十路を越された祖父様祖母様を始めとして、お母さんお父さん、兄さん姉さん、さては今年三つの竹坊まて、蟲の音は面白いと言つて居ます。

◎あゝ武雄樣　上野　河内とめ子

講和も今は成立して、幾多の出征軍士、皆意氣揚々として歸國せんとするに、あゝ吾が親しき懐かしの武雄樣は……、あゝ今いづくに……ゾツト身にしむ一陣の風に、桐の葉ヒラリと落ちぬ。

◎思出　茨城　青柳かをる子

思へば丁度去年の今頃、萩の上風身にしむころ、妾の母上は、ふとした病がもとゝなり、可愛きもの數々を殘して、返らぬ旅に出て行きぬ、知らせの電報に接した妾は人の居にも憚らず。汽車の着くまで泣きどうしてあつた。

◎十五夜　上毛　千代子

小供等は皆、樂し相に打ち群れて遊んで居る。あゝ、小供の時分は、十五夜といへば、非常に嬉しかつたが今は左程に感ぜられず、反つて歳月の流るゝを恨むばかり。

◎落書　堺　金澤しぐれ

ヴアイオリンの御稽古をして、歸てくると、誰が惡戯か、妾の室の裏手の幾板に、白墨で大きな落書、見れば、相合傘の下に、妾の名と、俊雄様の御名と、前栽の隅で、九ツの花ちやんが、くす／＼云つて居る。

附錄



文藝雜感(春の卷)

記者編述

衣更着

二月の事をきさらぎと云ふのは衣更着の略で正月は稍暖かになりさうてあつたのを、此月寒氣冴え返りて、衣を更に着ると云ふ意味ださうだ。如月、梅見月小草生月、初花月など皆二月の異名である、併し是等は皆陰曆の二月で、今ならば先づ三月に當る、二月の別名をきさらぎと云ふ事は、甚だ適切な語のやうに思はれる、陰曆と陽曆とは問ふ處でないが、此語は二月の別名として保存させたい。

二月の詩題

詩題と云へば狹いが和歌なり、俳句なり、新體詩なり、文章なりに二月の季節の事を歌ひ、又は書かうとする時に、二月は甚だ材料として捉ふべきものが少ない。先づ歳事記の類に依りて、二月に屬する人事の部を調べて見ると、

初午、二月堂水取、薪の能、涅槃會、二日灸、西行忌、彼岸、紀元節

先づ是位なもので、それも多くは俳句の題に限り、初午、二日灸、涅槃會、彼岸など今も詠まれるが、俳句以外には少ない、それも追々一方では年中行事として是等の行事がすたれて行くから、俳句の材としても新しい着想が乏しくなる、若し此中で强ひて詩趣ある

ものを選んだならば、涅槃と彼岸であらう、共に佛典から來たことであるが、彼岸は佛典の意味を離れ、暑さも寒さも彼岸までと云ふ時候の關係上、彼岸と云ふ辭は、凡ての人に一種の快感を與へる、涅槃は釋尊寂滅の日で、基督で云へばクリスマスに當るであらう、此日を年中行事の一として紀念する事も、宗教上の意義は勿論、歷史上の大偉人を追慕する情としても、是非何等かの式があつて欲しい、但し之は文藝上から云へば別問題であらう、要するに涅槃と彼岸は、新しい詩題として、採れば採るべきものであるが、陽曆から云ふと、共に三月に當るから、二月には入らない。

二月の人事は此の如く少いに拘はらず、自然の方になると、相當に古來から俳句又は和歌の題として選ばれたものがある、最も多くは今の三月に相當するものであるが、參考の爲め、之も歲時記の類から拔いて見やう。

虎杖、彼岸櫻（糸櫻とも）、銀杏の花、初雷、初櫻、花を待つ、接骨木花、虫穴を出づ、鳥の巣、荻の若葉、蕨、若紫（二月花を開く）、かづら草、歸雁、蛙蓬摘、蒲公英、大根の花、山燒、連翹、接木、蔦の若葉、燕、苗代、菜花、薺の花、草の若葉、草芳ばし、山櫻、紅梅、藍を蒔く、麻を蒔く、菊の若葉、鹿の角落つ、杉菜、雀の子、初虹、葎の若葉、

右の内には多く歌はれて居るものもある、又餘り知られないのもある、銀杏の花など餘り人は知らない、燕とか菜の花とかは誰の句集にもある、又和歌の題にもなつて居る、凡て草の若葉などは愛すべきものであるが、殆んど歌はれてゐない、題としては存在してゐても、其實は歌にも俳句にも作られてゐない、偶に一つ位ゐあつても取るに足らぬ牽強である、素より二月の植物動物天象等は右に盡きて居るわけではない、歌はうと思へば材料は無盡藏であるが、初心の間は何うしても題が欲しい其參考として、是等を一つ〳〵歌なり俳句なりにして見る事も面白からう。

二月空

二月の人事又は自然で、昔から歌又は俳句の題として、右に云ふ如く選まれてあるが、要するに實際の二月は春と云つても、未だなか〳〵寒い、東京の二月などは恐らく一年中で最も寒さが烈しいかも知れぬ、それだから初櫻と云つても、連翹と云つても、二月の感じはうつらぬ。矢張別に二月の詩趣を見出さなければならぬ、二月と云ふ月は冬が去らうとして去りかねる感じのする月で、寒い事は如何にも寒いが、何處やらに暖かみを想ふ、野に出れば、風冷たく草も木も水も枯れはてゝ、落葉はがさ〳〵、小徑はさは〳〵と寒さうに音をたてゝ、少しも春らしく感じない、併し其中にも暖い日が二日三日あつて、能く見ると枯れたと思ふ庭の雜木が芽を吹き、枯芝の間から何やら青い草が眞似ばかり芽を出して居る、梅の花は半分以上冬の花で、寧ろ春の感じを與へる事は少ない、花では二月のもので、春の感じのするものは殆んど無い、只右に云ふ木の芽、草の芽は確かに春を催ふしてゐる、常盤樹のうらがれたものが、何處となく靑みを帶びて來るなども春の來るしるしで、水溫むと云ふ語もあるが、實際は兎に角、春意は含まれてある。で二月は春を希望する月である、冬の去る月である、或は冬の如く、或は春の如く、時には天かきくもり霜どけして極めて不愉快な日がある、時には日あたゝかに道もゆるみて愉快な日もある、是等の感想を一括して二月空と云ふ一つの名詞の間に含ませれば好からうと思ふ。

女學生の言語と文

あらよくつてよとか、あらまアとか、さうだわとか、てよだわとか、兎に角女學生の間に使はれる一種の言語がある、言文一致の文體が行はれる上は、右の言語が文章の間に挾まれるのは、自然の勢いであるが言語を眞寫する場合とか、小說とかの外は、是等の言語は文章の中に餘り使ひたくない。處が右の女學生語製造の元祖たる東京では、却つて之を文章に使ふものが少ない、地方に行く程多い、生意氣と言はねばならぬ、小說などでなまぎゝに覺えた女學生語を、地方の人の

文章に使はれたのを見るほど、輕薄らしく感ずる事はない。使ふ人は大いに東京通を以て任じて居るか知らぬが、地方人士の江戸語を眞似ると同斷、例へて言はゞ山奥から出た下女が、廂髪に結ふて白粉をつけるやうなもので、滑稽千萬である、一體其女學生の言語からして直さなければならないが、其れは一般に女學生の品位が高まると共に、言語の方も上品になるであらうが、今の女學生の言語は餘り聞き好くない、其聞き好くない言語を、其まゝ消息文に使うたり、好んで文章に挾んだりするのは、何う云ふ積りか解し難い、否解し難いのではない、諸孃は其是非善惡を識別するの眼識が無く、只東京の女學生が使ふ言語だから、好いものに違ひないと信じて、文章にも書くやうになつたのであらう、宜しく今のうちにお改めなさい。

女らしき着想

文章家や歌人には女性として遺憾なく、其思想を發揮した人も多いが、事大問題に渉るから暫く言はず、茲に女性の俳人に就き感じた句を少し述べてみやう。加賀の千代を初め、女で俳句を作つた人も少くないが能く女らしき着想と云ふ事を調べて見ると、餘り多くは無い、女だから女らしい句を作らねばならぬと云ふ理屈もないから、之を詮索する必要はないものゝやうだけれど、然う思つて句を讀んで行くのも些と興味がある。園女の、

　春の野に心ある人の素顔かな

心ある人と言ふ處に、殊更に化粧などをして歩かないと云ふ怜悧な人と云ふ趣が見える、汗の爲に剝る事を恐れて白粉を用ゐなかつたのかも知れぬが、寧ろ然う解釋せずに、初めから素顔で出る人を想像した方が此句に面白味が多い、千代女の

　我裾の鳥も遊ぶやきそはじめ

きそ初めは正月三ケ日の間に吉日を選んで、衣服の着はじめをする祝ひで、昔は斯んな風俗もあつたのであらう、其きそ初めに衣服の裾の模樣にある鳥も遊ぶであらうと言つた處は、流石に千代で、想像の豐かに

あつた女である事が知れる。羽紅女の、

　桃柳配りあるくや女の子

平凡な句のやうであるが、桃柳と大膽に置いて、直ぐ配り歩くとつゞけたのは、些と凡手には出來ない。千代女の、

　拾ふもの皆動くなり汐干潟

貝殼のやうに思つて、掌にのせると其貝殼が這ひ出したり、泥のやうに思つて掬ふと蟹が現はれたり、汐干狩の實景、殊に女として、眼の着け處は正に此外に出ない。智月尼の、

　鶯に手元休めん流し元

東京で言へば山の手あたりの新世帶に、少しは割烹の心得もあらうと云ふ若い奧樣が想ひ浮ばれる、素より茶碗皿鉢、手あたり次第に洗ひなげて日に一つは缺く山出し下女の類ではない、そんなのは鶯の方から逃げて行く。花讃の、

　燕に見透されたる住家かな

玄關あり、客室あり、書齋あり、納戸あり、主人の家と云ふもの、さら〳〵は明け放して見せるべきものでない、併し毎年軒に巣をつくる燕は、遠慮なく見る、男なら無頓着な點であらうが、家守る人の心遣ひは一句に現はれて居る。多代女の、

　散る花に襟かき合す夕かな

別に奇拔な句ではない、只春の夕の散る花を見て襟をかき合すと云ふに春の夕の情と女の情とが一致融合して快感を催ふす句だ。秋色女の、

　井戸端の櫻あぶなし酒の醉

誰も知る有名な句で、秋色櫻の名は今も上野に殘る此れには深い意味はないが、あぶなしと云ふ言葉を最も美しい處に使つてゐる、作者は勿論偶然に感じたのてあらうが、作者の同情が直ちに讀者の同情となつて此句の生命を永遠ならしめた、而かも秋色には外に佳い句は無かつた。

以上は必ずしも名句と云ふてはないが、女らしい着想の特に然う見えるのを、春の部から拔いたので、未だいくらもあらうと思ふ。

俗謡

馬曳くものは手綱握りながら歌ひ、舟行るものは棹さしながら歌ふ、山には樵夫謡あり、里には籾摺歌あり、春の茶摘唄、秋の盆踊唄、凡そ俗謡と稱するものは、何れの國、何れの時にもあつて、永く傳はるものもあれば、流行〱て滅びて了ふものもある、種類も極めて多い、然かし傑作として殘つて居る俗謡は、他の韻文の如く多くはない、又元來が殘るやうな性質のものでない、俗謡を集めた書物と云つても僅少であるから、一わたり眼を通すには造作は無い、苟も詩歌の類に心を寄せる人は、是非此俗謡にも心を寄せねばならぬ、天眞爛熳、人間の情を最も飾りなく言ひ表はしたものは俗謡に多い、又謡ひものとしても語の變化、自由自在なのは俗謡で、卑近だからとて決して輕蔑すべきものではあるまい。

　こゝに自分の手控から一つ二つ拔いて見やう、一は亨保の半頃に流行た小唄で

あれ見さいな、筑波の山の横雲、よこぐものなー、下こそ我等が親里、このなく、このおやさと。

謡の古風な點は「萬葉集」にてもありさうな思想で筑波の山にかゝる横雲を見て、親里を戀ふると云ふだけだが、元來日本の詩人歌人が最も忘れて居る雲を捉えて來た處は、實に感服する價値がある、今一つ寶永年間に流行た小謡、此方は知つて居る人も多くあらしいが、序だから掲げる。

　さてもみごとのお葛籠馬よ、上にやせんしき唐繪の蒲團、蒲團はりして小姓衆を載せて、そなた下りか己や今上る、文をやろにも言傳しよにも、此は箱根の山中なれば、筆にや事缺く硯墨もたず、若しも水口お泊りならば、札の辻から四五軒目の茶屋で、馬も息災其身も無事で、頓てもどろと云てたもれ。

　おつゞら馬は昔、東海道の道中に人を乘せた馬で、此謡は其頃の馬士の境界を謡つたものらしい、馬士同士が箱根の山中で、上り下りに合つて話す體を面白く謡にして居る、水口は近江の驛名で、矢張東海道五十

三次の一つである。

處か右の二個の俗謠は、或は思想を支那の詩から得たのではあるまいかと云ふ疑ひがある、横雲の方の謠に類似した漢詩は、唐の狄仁傑の句にある『登二大行山一見二白雲孤飛一、吾親舍二其下一』と云ふのであるおつゝら馬の方は同じく唐の岑參の詩に『故園東望路漫々、雙袖龍鐘涙不レ乾、馬上相逢無二紙筆一、憑レ君傳二語報二平安一』と云ふので、若し是等の詩から飜譯したものとすれば、原作より遙かに上手なものである。

我子は可愛い

雜誌が來ると開けて見て一番さきに見るものは、自分の投書てある、載つて居るか、載つて居ないかを見て、載つて居れば必ず其れを讀んて見る、自分のを繰返し讀んて見てから後ち、他の投書家の作を見る、自分のは自分が作つたのて、分つて居るから後て讀んだら可かりさうなものを、然うは行かぬ、必ず自分のを先に見る、之れ恐らくは何人も免れ難い處てあらう。人は自分の生んだ子が可愛いのと同じ道理で、自分の作つたものは可愛い、一面から云へば人間の弱點であらうが又人間の正直な處も此點にある。

はかき文の材料

はかき文と云ふのも、百字文と云ふのも、名は少し變てあるが、一種の短文に相違ない、必ずしも葉書に書くに限らぬものをはがき文と云ふのも變てあるし、百字と限つて文章を作ることも窮屈てある、併し此短文が起つたのは、偶然の現象てはない『徒然草』や『枕の草紙』などにも、一種の短文は含まれ居る、『枕の草紙』中、遠くて近きもの、男女の道云々とある一項の如き、優に一個の好はがき文てある、偖て此はがき文と稱ふものは、文章の短いうちに、含蓄の深いやうに作らねばならぬから、自然奇警な文を要する、着眼點の奇拔を要するは勿論、字句も出來るだけは引締める必要がある、明治の文壇ては齋藤緑雨の文章が最もはがき文的の要素を具へて居る、其外はかき文の材料

としては、凡て古今の名文を讀む毎に、其中の特に警句と思はれる處を五行なり、十行なり拔て寫して置くのが最も宜い、西鶴、近松の文章より馬琴京傳の小説中の句、近くは紅葉、露伴の文章中からも拔いて好い句は山の如くある、一葉女史の文にも警句が多い、讀んで行く中に印しをつけて、拔書して置くと大に助けになる。

二百八十年以前の言文一致

元和九年(今から約二百八十年以前)に著はされた處の『醒睡笑』(安樂庵策傳著)と言ふ落し咄などを集めた滑稽的の冊子がある、其書の文章は簡潔な中に古雅な處があつてなか〱面白い、而かも亦其文章が今日謂ふ處の言文一致に近い、今其中の一二章を拔いてお目にかける、但し括弧の中は自分の註釋

文字知顏

六十ばかりの、如何にも賢がほ（賢顏は賢さうなと云ふ意）の禪門（禪門は僧）我子に材木の注文書かするとて、先材木の事と口にかけと好む（禪門が口づから先材木の事と書けと我子に好みを言うた）その時むすこ、材の字、何と書き申すぞと言へば、まづ木へんに書け、扨てつくりはと問へば、つくりはかなで書けと言ふた、あげくに、それ程どん（愚鈍の意）では何事もなるまいと申された。

物しらず

中風を煩ふ者あり、醫者の許に行き脉を見せければ藥ばかりにては、治し難き症なり、ふじ三里（三里は灸を据へる處で向脛を言ふ）に灸をすへられよと言ふに、何れもかさねて談合候はん（談合は相談）と、急ぎ宿に歸り、さて〱うつけたるくすし（くすしは醫者）の申されやうや、ふじは聞及びたる大山なり、其富士三里が間に、灸をせよとはいかに病がなほるとても、抑も、もぐさがつゞくものやと

悲哀の文章

悲哀を現はした文章も澤山あるが、千古の名文として、存外人の氣の着かぬのは、親鸞上人の作と傳ふる

白骨の御文章である、あれは元來佛典から出て宗教用の文字であるが、單に文學的の眼孔から見ても、文字を平易にして、意味を悲しく強くした處は、誠に得難い好文章である、我等が白骨の御文章なるものを聞くのは、殆んど人の死んだ場合に限るやうであるから、猶更悲哀を感ずる度が深いけれども、若し之を平素、虚心平氣に讀み味ふて見ると、如何にも能く悲哀の情と無常迅速の觀念が、通俗な文字で巧みに現はされてある事が分る。

戀と Love

言語學者と云ふものは、面白いことを調べる、或る言語學者の說では英語の Love（戀愛）と云ふ語は、ルヴア即ち『請ふ』と云ふ意義で、日本語の『戀』と云ふのも『請ふ』の意義から來たのださうだ、畢竟戀と言ふ語の起原は東西一致して居る、請求すると云ふ意味から來て居るのは甚だ妙で、言語の起原を探れば、多くは斯ふ云ふものであらう。

『の』の一字

謠曲『舟辨慶』を聞く度に感ずるのであるが、彼の『抑も是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽靈なり』と云ふ處で平の知盛の幽靈なりと云はずして、知盛幽靈なりと『の』の字を省いた爲に、何れだけ、語勢を强めるか知れぬ、知盛の幽靈なりと云つては、何となく知盛らしくない、僅に『の』の一字を省いたゞけで、躍如として知盛の幽靈が現はれる、一體文章を作るに或る場合にてにをはを畧すると云ふ事も一つの手段で、最も盛んにてにをはを拔きの、省畧法の文章を書いたものは西鶴であらう、近くは泉鏡花の文章も盛んに省畧法を用ゐる、勿論拔いて宜い場合と不可い場合がある、例へば百人一首の『秋の田のかりほのいほのとまをあらみ』の歌の如きは、上の一、二句に『の』が四つある是等はあつても差支えない、上に悠長にうたふてとまをあらみと強く引締めてあるから調和する、要するに文章を作るにも一字のてにをはたりとも、大切にすべき

は此れても分る。

『曾我物語』

『曾我物語』と『義經紀』は、我國文書中、古きに失せず、新しきに傾かず、源氏や枕のやうに、曲折婉雅ではないが、文に豪壯雄麗の體が具つて、誠に珍とすべき文章である。今『曾我物語』の一節を左に抄錄す、只抄錄するよりは、評釋のある方面白からうと、小島烏水の評註を加へた『異本曾我物語』九の卷、狩場のくだりを拔く、本文は勿論、評註も亦、好個の文字、相俟つて光彩を放つて居るから長さを厭はず茲に載せる、文章を作る上、讀む上にも少からず助にならうと思ふ。

二人（五郎十郎を云ふ）太刀を額に當て（この一句あり、瞋目を言はず、竪髪を言はず、張臂を言はず、豪氣堂々として廣袤二十里の裾野に横はり富士以東、箱根以西を斜斷して、這個の大舞臺、二人の爲に頓に狹きを覺ゆ）走り廻りける有樣（追ふといはずして走るといふ、風勁くして草偃す）小鷹なんどの鶉、雲雀を追立々々するに異ならず（狩場なり、故に鷹を出だす、裾野なり、故に鶉雲雀を出だす、鷹に迫はるゝ小雀など、常套を言はゞ拙工に過ぎて拙なからんを）比は五月二十八日の夜半過なり（文勢一轉）雨は頻に降、闇はくらし（人より自然となる）只今寢をびれて起上り（急より靜となる）あわて行中に（内より外となる）かい紛れて向へば、しとゝ打（敵、飛燕の如し）又かゝればふつと切て（輕、飄絮の如し）打通ける程に、其數知らずぞ切たりける（寥々たる短句、幾十人の血を舐めて腥き件の兵庫鎖の大太刀と孰れか鋭き）さる程に何者か言出けむ（文勢又一轉す、これより舞臺も一轉、運命も亦一轉）あまりにくらく、敵も味方も見え分ぬに（前文雨は頻に降云々に應ず）續松に火を付て出せやと呼はりければ（「松火に火をつけて」とは猶「提灯に蠟燭をつけて」と言ふごとし、贅言に似たりといへど、之を發言するもの、定めて分別男、故に怱忙の際故らに這の愼重言を出す）御廐舍人の時武是を聞き（かゝる時舍人の名までを拈出す、餘裕の綽々驚くべし）續松一つ投出しければ（一穗の燈）上下一二千の屋形々々より（上下一二千、五字、實に無色の書割、無畫の背景）我劣らずと投出すものあり（先に一穗の燈、是に至りて萬燈の火となる）既に一二萬の火を出しければ、明かなると白日の如く、隅なく照輝けり（暗より明となる）其後續松の火を便として（この解あり前文徒らに死せず）用樹三郎押寄けり（凡そ以上の記事は吾妻鏡に所謂『祐成兄弟討父敵之由、發高聲、依之諸人騷、雖不知仔細、宿侍之輩、皆悉走出、雷雨擊鼓、暗夜失燈、殆迷東西之間、爲祐成等、多以被疵』と云へる狼狽の狀を戲曲的に描出して白雨と急を爭ふ、而も字數は寥々、僅々數百のみ）時政が打太刀に右の肩を切られて引退く（口一喝、刀一打則萬事休矣）かゝる所に（無意味なる接續詞の如くなれどこの間、多少の時間を含む）市川別當次郎走向ひ（「かゝる所に」と

いへる押出より考ふるも此人多少の準備あるが如し）如何なるしれものなれば、君の御屋形の内に參りて、かゝる狼藉をば仕る、名乘〱々々と云ければ（坂東武者對敵の威容を重んず）五郎走懸て、事新しき男かな（先づ一喝）曾我の冠者原が、親の敵、工藤左衛門尉助經を、討て罷出ると云上は（蓋し前に「曾我の冠者が、出唯今君の御屋形の内に於て、敵工藤左衛門助經を打て、罷出る也、我と思はん程の者は止めよ」と呼びたることあればなり）何條事を問ふべきぞ（第二喝）親の敵には御陣内を嫌はぬ例なり（第三喝）かく云は誰ぞ、名のれ聞かん（第四喝）と云ければ（先づ我より名乘て後、他を問ふ、阪東武者、對敵の禮讓を重んず）甲斐の國の住人、市川別當太夫が次男、次郎宗光と名乘所を（次いで來るは劍か舌か）言はせも果ず（驚破）扨は和君は（劍未た交はらず先づ他を舌殺す）盜賊ばかりぞ仕習たるならむ（意は鎌倉幕府に遠き、甲斐の遍土の田舍武士ゆゑ、山賊より外の手並は知ちざるならむといふなり、）（第五喝）かやうの晴の戰はよも知らじ（第六喝）始めて習へ（第七喝）と云ふ儘に、踊かゝり丁と打つ太刀に（迅雷光の如し）左右の股を一方深く、一方淺く、膝口まで切付られ（驚破）高這してぞ迯れける（高這の語、下しえて卑怯、滑稽、觀る如く、市川荒次郎の技を想ふ）其次に（更に開展す）伊豆國住人新田四郎忠常は（若輩莊重、前の用樹三郎、市川別當次郎の輕快なるに似ず）屋形口に伏たりけるが（この怱忙、傍目も觸らぬ間に、かくの如き前刻來の餘事を、悠々略叙する筆法は『平家物語』以下『物語』作者の特技といふべし）重目結の小袖に、白大口のそば取て挾み、太刀をおつ取て、つと參りけるが（愈よ急にして愈よ迫らず）名を得たる兵なれば（讀者をして此の人の一擧一動に注視を呼ばしむ自ら到れり）敵の有樣を辨へ見んとや思ひけん（愈よ迫りて愈よ動かず）暫く控側に立て申けるは、無下なる殿原の振舞かな（味方を先づ一喝）小勢の敵をそれ體に攻むやうやある（第二喝）敵一二人有らば、一人宛立隔て多勢を引圍ひ、前後より太刀を揃て討や殿原（第三喝、五郎の敵を喝すると、四郎の味方を喝すると、好個の對照）と云ふ儘に、つと進み出てにけり（前に「つと參り」とあり、今「つと進み出て」とあり、二ツのつとを累ねて、文と敵と共に漸く迫る）忠常が言葉に付て、一人づゝ押隔て、多勢を以て引廻しけり（大立物先づ出でず、名題以下を間に介す、かくて大立物は濶步し來る）忠常進み出て呼はりけるは（敵も味方も悉く聽聳）いかに助成殿におはしけるや（敵と敵と相喝す、しかも是に至りて、辭色兩ながら慇懃）親類の中一家の族なり、きたなき死にばしゝたまふな（意褒に出づ、眞個日本武士の情誼）と云ひければ、十郞聞て沙汰におよばず（言短意長）夜は更ぬれど（いかに時間を費やしたるかを、十郎の口を借りて示す）いまだ尋常の敵に遇はず（尋常の敵とは、耻かしからぬ好敵手をいふ）殿をこそ心にかけつれ（士は己を知るもののために死す）同じくは一門の印に、私殿

の手にかゝり候ふべしとて、火出る程に打合ひける(言は温和、又は殺急)十郎が太刀は、少し寸延びたれば踊掛つて打太刀に、新田が小鬢を切て、次の刀に右の小肘を切てけり(十郎彼より弱からざるなり)去とも究竟の兵なれば、少も面はふらざりけり、互に打物の上手にて、名を惜む兵なれば、いづれも白むとも見えざりしが(「究竟の兵」「名を惜む兵」相對し、「面は振らず」「白むとも見えず」と相對す、且つ忠常は前の「名を得たる兵を」承けてこゝに應ず、馬琴一流の龍虎深山に闘ふといへるが如き、あだなる喩品を借らざるところ太好)新田は唯今出たる荒手也(荒手とは新手の假字也)腕もたゆまず、太刀のうち所もたしかに覺ゆ(彼に勝つ理あり、然れども必ずしも是より强からず)十郎は宵より多くの敵に討合ければ、身も疲れ、力も弱る上に(彼の敗る、理その一)赤銅作の太刀の柄に血傳へいたくぬめりける間(彼の敗る、理その二、然れども、必ずしも彼より弱からず)太刀をひらめて退きける(一頓挫)忠常は勝に乘て打ければ、今はかうと思ひて打組んとする所に(二人の格闘に、他の一人を交へんとす、變化ある所以、一頓挫又一頓挫)遠江國の住人原三郎が片腹を切られて、小柴の蔭に太刀を杖に突て寄立たりけるが(文例の餘法)つと寄まゝに、太刀を押取直し、右の臂の端をしたゝかに刺ければ(彼の敗る、理、その三)太刀の手あらはに成るところを、忠常左の肩を乳の下まで切付たり(全敗、全頓挫、この三人を中心として閃々たり、戞々たり、太刀の字闘へること九、秋の裾野の穂といづれ)十郎最後の詞に申けるは、五郎はなきか、助成こそ新田四郎の手に懸つて討れぬるぞ、いまだ手負ぬものならば、君の御前近く打寄て具に見參に入れまゐらせよ(豪腸萬斤、壯烈萬世の非情有情を泣かすの語を吐く、一々註するに堪へず)とて念佛十遍計り、高聲に唱けるが、西枕にぞ臥にける(西方は則ち淨土のあるところ、斷末魔の紊れざる眞個日本武士の純粹、吁、今や香魂安在哉)五郎、之を聞て、十郎を今一目見んとや思ひけん(今一目の三字、下しえて通篇皆活く、是ありて五郎阿修羅たらざらんと欲するも得ず)垣の如くなる勢の中を(垣の字前文に「多勢を以て引廻す」を承けて鐵の如く牢し、徹頭せざる也)打破て通らんとしけるが(果れて目泣裂けたる狀を說かずもあれ、文外の文は之を盡くす)流石に一重二重にこそはしらみたれども、さのみは、得こそ靡ざりけれ

(附錄——文藝雜感春の卷——終)

讀友倶樂部



○諸孃と記者

○拙句がいつも當撰しますのはまことにお恥しい次第です、就ては立派な褒狀に賞金までお贈り下さいましてありがとう頂戴いたしました。（佐世保市横山汎愛）（記者曰、此上ともお勵み下さい）○妾昨年十一月投稿致しました時にも申上ましたが、あれから病氣はつゞいて惡く、近頃は醫師も見放ました、併し好きな文學は死ぬまでも遣る積りて、此通り代筆致させて御送り申します、どうか可成はやく發表の手續をして下さい死なぬ内に見たいのてすから、厚かましう御願申します（みつ）（記者曰、御病氣とはお氣の毒と存じます、醫師が見放す位なら大病と存じますが、その間にも本誌の事を氣に御掛け下さるとは、何ともお禮の申やうがない位、記者は感泣いたしました。併し病は氣からとも申しますから、お氣を丈夫に持つて早く御全快を祈ります、あなたの御全快までには屹度御作も紙上に出るでせう、ゆつくりとお待ちなさい、お大事に）○野口先生樣文壇も益々發達て賀します妾も誌友の一人でございますかられどうか宜しくお頼みいたします新年の紙上て先生の御寫眞を拜見いたしまして何より嬉しく存じますそれからお尋てすがれ文壇の原稿用紙は御分配下さる事は出來ませんか（備中笠岡佐藤芳子）（記者曰、御挨拶ありがとう存じます原稿紙は差上てもよろしいが相當の郵便切手を入れて本社庶務部へ請求して下さい）○記者樣私は生れて初めて投書いたしましたよろしくお願いたします（向いゑ）（記者曰、本誌は女子に文壇を供する爲日本に初めて出來た最初の雜誌ですから自然投稿の諸孃にも初めの方が非常に多い、おつれがありますから先づにぎやかに文壇にいらつしやい）○私は愛讀者の一人に加はりましてから回每回每に投書なさる博學多識の諸孃樣方の御作物を拜讀いたしほかならず羨ましく私も出來得るかぎり何々と投稿して記者先生に御目を通して戴きたく日夜如何なる仕事も手につかぬ程かんがへて居りますされども元が教育のない者故どうしても心に思ふ樣には出來ませんでくやしくて〳〵たまりませんこれはせめては中等教育も受けられるやうな身分であつたならと幸福なる諸孃樣の御身上を想像致し殘念さ言はん方なくよな〳〵臥床にはいつて袖をぬらさない時は御座いません何卒記者樣其他誌友の皆樣よこの不幸の我が身ふびんと思召して行末久しく御見捨なく御交通して下さいそして何かと御敎訓下さるやう伏して御願ひ申します（相州足柄上郡川村向原岩田小春）（記者曰、こま〳〵との御仰せ拜聽いたしました、仰せの如く文なり詩なりを作るやうになるには敎育の力も入りませうけれど一つは生れつきにも由りますから、さうむやみにあせつても出來る人は出來る、出來ない人は出來ない、それよりか初心の間は、靜かに愛讀者となつて、諸孃の作をお讀みなさい、讀み得ると云ふ事だけでも、之れ非常な幸ひて、天下幾多の沒趣味の人から見れば、何れだけ幸福か知れません、それは作る方と讀む方と同じだらうと思ひます）○記者樣君子は妾の妹なんです此度初めて投書致しますのですから宜敷御敎示被下ませれ妹になりかはりて妾よりとくと御願致します（喜代子）（記者曰、御姉君のお言葉添、たしかに承はりました）○記者樣私度々投書致しますが一度も出た事がありませんこれで書き樣がちがひますか、それとも文章が拙いので出して下さいませんのか何れにしても悲しくてなりません何卒次號で御答へ被下い（K H女）（記者曰、斯う云ふ質問にお答へ申すのは一寸困りますが書き樣は惡くありません矢張競爭に勝ち得なかつたのでせうから奮つて勇氣をお出しなさい）○記者樣に伺います佐々木先生の「詠歌自在」と「詠歌辭典」と何れが初學者に適當でせう（石狩高稿とく子）（記者曰、何れも適當です、どちらを先にするかと云へば先づ自在を讀んで、それから辭典を座右に備へるのです）○記者樣私は作文や歌を本誌に出して批評して頂きたいのですが何所を名宛とするか分りませんから敎へて下さい（越後蒲原郡田舍少女）（記者曰、東京京橋區大鋸町十一番地女子文壇社に宛てゝお送り下さい）○記者さん下のことを御願ひ致たします、【イ】小說を作らうと思ひますが想は浮びましてもそれを善く書くことの出來ぬのは如何すべきか【ロ】俳句を學ぶ本の名（熊本市新屋敷町財津賤の女）（記者曰、【イ】善く書けないでも書けるだけに書いて御覽なさい、それも書けないと云ふのなら未だ修養が足りないのです【ロ】「俳句入門」（高濱虛子）其他諸種の句集を御らんなさ

い）○記者さん私は女子文壇へは今始めて投書てす本名は高橋寡てあります作文には淡水子と書いてありますが差支はないてしよう（北見國利尻沓形村高橋寡子）（記者曰、差支えはございません）○記者樣に一寸問ひたい事があります、それは、圖畫の事てす、風俗景色の畫を畫き、それへ薄墨を付けてはいきませんてすか、又、はがき文俳句などは葉書にかけとありますが、半紙半枚に書きて論文あるは抒情文と同封に入れて送つてはいけませんてすか是非御答を願ひます（あふみ山中たけ女）（記者曰、圖畫の薄墨はいゝてせう、又はがき文俳句は半紙にてもよし、他の原稿と同封にてもよし）○記者樣どーぞ御願ひ中ます初めて投書するのですからまちがひがたくさんあるだろーと思ひますそして淺學な私故投稿規定が少しもわかりません「政治的時事論に渉るべからず」と云ふのは何のとてすか教へをれがひます（岩田小春）（記者曰、投稿規定が少しも分らないては聊か心細いわけてすが、分らない處はいくらてもおきゝ下さい、政事的時事論云々は先づ諸孃に注意する必要のない位の事て、つまり新聞の論説のやうなものてす）○記者樣妾今年高等四年て和歌が大好きなのそれてはじめて書ひて見ましたが規則に反きはいたしませんか倘何卒御願てすから初心の者が用ひる和歌の御本を教へて頂戴れ（函館東川町さゝふれ）（記者曰、和歌作法の本は博文館から發行したものても數種ありますから御地の書舗て聞いて御覧なさい）○記者先生、和歌や俳句などを五首以下位にしたら如何てす皆さん御賛成を（秋田縣仙北郡角館町西宮藤朝方西宮波子）（記者曰、平凡なを五つより傑作を一つお出しなさいませ）○一月の晴小袖はよいのれえ私すぐとはさむものをこしらへて書齋の處にかけてないてよ（橫濱夢水）記者曰、晴小袖の晴をしたわけてすれ）○記者さま抒情文と叙事文とどこが異なるのてすか私は少しもわかりません本誌を見ても兩方に記事文があつたり言文一致があつたりするのてすもの（ハマ武子）（記者曰、抒情文とは自分の感じたことや想ふたことを作るので、叙事文とは見た事や聞いた事を其まゝに作るのて、例へば學校て友達にいぢめられて口惜しいと云ふ事を文に作つたなら抒情文て、波戸場から見ると日本船外國船など船の種類も隨分あると、一々之を見た通り文章にしたならば叙事文てす、言文一致體ても普通文體ても、文體て區別するてはありません、文章の性質て抒情と叙事を區別するのてす）○御社の誌友倶樂部に出したい事がありますがどなたの名宛にしたら宜しいてせう（仁川港奥田あい）（記者曰、只記者宛てよろしい）○投稿〆切十五日とありますが、十五日以後は出せませんか、ぜひ〳〵御教示下さい（筒井腐子）（記者曰、十五日以後ても結構てす、只翌月に〆切つて選評の方へ廻すと云ふ事てす御投稿はいつても差支えありません）○記者先生妾は伺ひますがハガキ文や和歌又新体詩を一ツふくろへはいけませんか（綾子）（記者曰、かまひません）○初春早々の女子文壇に社主野口氏及び女子文壇社の寫眞が出て居たのてうれしくつて〳〵たまらなかつたが倘此上は記者皆々樣の御寫眞に接したくて仕樣がないわどうか出して頂戴れ（熊本市中村恒子）（記者曰、度々の御注文いつも恐縮して居ります）○記者樣和歌や新體詩を學ぶにはどんな本をみたらばよいてしようかどうぞ次號て御答へを（田舍女）（記者曰、歌集詩集を御覧なさいと申す外はありません）○記者先生にお尋れします私は千惠と申す者てすが女子文壇を拜見しますと大抵のお方は○○子といふ樣に子の字をつけてありますて私も千惠子と猿の人まれをしてゐますが何故に子の字をつけるのかわかりませんので賢明なる記者閣下の御説明をあふぎたいのですどぞ次號に（和泉安田千惠子）（記者曰、子の字の説明は淺學なる記者未だ其由來を存じませんが何れ皆樣は習慣的におつけになるのてせうけれど、由來は他日しらべてお答致しませう）○記者さんわたしは前から女子文壇を愛讀いたして居たのてすが、皆樣があまり御上手なので投稿するのを躊躇して居たのてす、然しこれから投稿いたしていただきますからよろしく御願ひ致します。（浪花大道ゆり子）（記者曰、御躊躇なさるには及びません）○記者さんほんとにお目出度い事れ新年に於て五萬部の刷高とは私しれ第一號から愛讀してる此の文壇否我が無二の親友がかく行末久しく榮え行くかと思へはうれしさに手の舞ひ足の踏む所を知らないくらゐてす（佐賀白すみれ（記者曰、諸孃の欣びは記者の欣び共に目出度い新年てした、お尋れの雑誌は本社の發行てはありません）○私は記者樣に御願が御座いますそれは女子文壇へ愛讀者諸孃又は風景の御寫眞をおだしになつたら一そうおもしろくなるだろうと思ひますなにとぞ皆々樣御さんせい下さい（八王子愛讀者）（記者曰、前號から募集して居り

ますから集り次第に出します」○記者樣男子の方から繪はがきが來て困ります返事出さないでもよろしく御座いますかお敎へ下さい（八重櫻）（記者曰、女子の方ばかりに御交際なさる方が無難でせう）○皆樣私も此度東京市木樣の御紹介で本誌愛讀者の一人に成りましたから何卒宜しく願ひます記者樣十五歲以上でも投書出來ますか私初めて故何もわかりませんが誌友倶樂部の書き方は此てよろしいか（大阪府陰山禮子）（記者曰、お尋ねの事は皆よろしいが只圖畵をはがきに書いてもらつては困ります）○あの記者樣私し兄の土産に上等の繪葉書を貰つたのを御手始に上げました着きましたか（信濃ちか子）（記者曰、たしかに頂戴いたしましたありがたう）○東京錢縫女學校は何町にありますか又月何程かゝりますか御手數ながら次號でおこたへを願ます（信濃一女子）（記者曰、本郷區竹町に在り月謝は分りませんが格別他の學校と違はないでせう）○皆樣に御尋ね申上ます縣立師範學校へ無試驗ではいれる所はありませんか若し御座いましたら敎へて下さい（肥前一女）（記者曰、先づありますまい）○記者樣今月の文壇は未だ發行しないのですか私は每月當地の中町坂田屋よりかつて讀んで居りますが每日さいそくしてもまだ參りませんと云ふのです私ほんとにまちかれます（福島縣愛讀者）（庶務掛曰、さう云ふ場合には相當の代價を入れて本社へ直接御注文して下さい地方の雜誌店では大取次に不信用の爲め雜誌の參らない事があるかも知れません女子文壇は嘗つて發行期日をあやまりません）

○繪葉書編物交換

○妾は自分の寫し畫を葉書に摺りて居ますから繪葉書にて住所御知らせ下さいますれば早速それにて御返し致します寫眞を御送り被下方には「リボン」差上ます（神田區猿樂町一七、精華堂岡本すみ）○皆樣私も繪葉書交換のお仲間入をさして下さいませ御寫眞交換も願ひます（三重縣伊賀上野町紺屋町櫻本琴子）○妾は同胞とては一人も無いので、淋しくて仕方が有りませんから、自らの考案から出た肉筆の畫はがきを下さいな妾も送りますは（下總國印旛郡遠山村駒井野藤崎美奈子）○諸讓樣と御手紙及繪葉書の交換交際致し度（福島縣耶麻郡鹽川町字荒町井上まち子）○諸孃樣地方名所繪葉書及御自分の寫眞を送つて下さい妾も繪葉書で御返事します（香川縣大川郡三本松町松永あやめ子）○繪端書の交換を願います（大阪東區難波南之町十五番屋敷武藤愛子）○妾は片田舍に住む淺學なるものでありますが何卒繪葉書交換を願ます（愛知縣中島郡豊田村大字西溝口平野佐子）○妾は大の繪葉書狂です誌友皆樣交換して頂戴（岩手縣稗貫郡花卷川口町照井美佐子）○繪はがきの交換又は土地の氣候風俗など互に交通に願いたいので御贊成下さいまし（大阪西區江戸堀上通二ノ七七鈴木喜代子）○本誌の愛讀者たる皆さん何卒繪はがきなり御寫眞なり將又御玉章なり是非送つて下さいな私きつと相當に御禮いたしますから又御望みの方には外國の郵便切手を差上げます（東京府下王子山下三十七建部方武石雪江）○皆樣美しい繪葉書有難う御座いました消印て御住所不明のお方は淡路の春江樣、橫濱の春江子樣、羽前の原田樣、御返信に困りますから早速御しらせを願います（東京麴町區九丁目澁谷内吉田花江）○繪葉書の交換願ひます又肉筆の繪葉書を製しなさる御方には繪端書の材料になる樣な繪を差上ますから御申越なさい（德島の富田須多田秋月）○諸孃樣繪葉書や寫眞の交換いたします皆樣どうぞ繪葉書にも寫眞にも新體詩や短歌や俳句やら川柳など書てくざさい（大阪市西區本田町一丁目四拾九番地長谷川方菊澤志津）○諸姉樣妾に繪葉書を送て下さい水彩及び圖案物は特別御歡迎致します妾も自筆をちと畫りますから御自筆も送つて下さい返信は速刻に致しますかられ（岩代郡山町燧田小田島方關美根子）○今年もどうぞ相變らず上等繪葉書の交換して頂戴すぐ妾も上等ので御かへしいたしますから（神戸市相生町四丁目一五一の七木田しげ子）○私に繪はがきを下さつた八十一人の方々にはそれ〳〵御かへしいたしましたが二日、三日、四日の間るすにしてゐました故もしや御返事をもらした方もありましやうかと存じます故其方々はどうぞ御申込み下さい肉筆で御かへしを改ためていたします（山梨縣勝沼町なさなこ令方君江）○諸姉樣繪葉書の御交際をねがひます「栃木下都賀郡栃木萬町かまと屋前澤たま）○書道熱穎の今日手跡の美はしき方と繪葉書や書狀の交換が致し度う御座いますが世廣き天下に我と同好の諸兄姉はありますまいか（岐阜縣安八郡牧村字馬瀨四十七番戸木村花香）○繪葉書の交換又はお寫眞を送て下さるお方はありませんか先着のお方には小說「月と露」をゐげます妾の寫眞も附けて（常陸國高濱町東大橋酒葉つね子）○文壇愛讀の姉樣方きれいな繪端

書下すつて有がとう返事は屆きましたか（埼玉縣入間郡越生町大字上野六四 山口邦子）○妾は嶺子の妹ですの 姉同樣御交際をされ夫れから繪葉書又は新聞や雜誌御送り下さい妾も御交換します先着十名に小說乳姉妹濱子不如歸の三冊抽籤て差上げます（青森縣 鰺ヶ澤漁師町三宅巳子）○皆樣私は美しき繪葉書交換をしたいのです贊成のお方はドシ〳〵御送りを願います特に外國製を望みます（熊本市細工町 三丁目茂里鶴聲）○皆樣私の處に東京三井吳服店の繪ハガキ一組（十三枚）ありますから御申こしの御方には差上ます御申込下さい（千葉町千葉寺通り伊藤方新井秀子）○皆樣繪葉會の交換を御願ひ申します、私の方からは、肉筆や、友仙圖案なぞて、御返し致します、歌や、俳句、新體詩を、書いて下されば猶嬉びます（京都市西洞院通御池南入る生咲みどり）○みなさん私は譬へ女子の方でも雅號方とは絕交します、編物、寫眞、栞の御送りをまつ（廣島縣高田郡甲立村 深瀨箕間ちと子）○皆樣私こんど縫物の巾着はりさしひじつきよだれかけなどをこしらへますから お望の方は編物栞繪葉書など〻交換して頂戴 北海の松井長子樣私此間手紙さし上げましたが お手もとへおはいりなさいましたかおはいりなすつたなら少女界編物等至急御送り下さい 長子樣御入用ならさし上げますよ（菊野百合子）○皆さまゑはがき大好なのよどうぞ美しいの御惡下さいすぐお禮いたしますよ（千葉縣長生郡新治村 上太田森久子）○一年有半、偉人の青年時代、ジャパニース、スケッチブック花ざくろ等の不用書がありますので皆さんの中に八犬傳、新曲浦乃、かぐや姫、桐一葉、不如歸の歌、紅葉全集等何れても宜敷いから御不用書と交換して下さいな（大阪泉北郡橫山村大堀瀨方美濱子）○新詩か和歌を一二首染めた一葉五錢以上のを交換して頂戴（滋賀縣甲賀郡柏木村字泉 高井方辰井きん子）○皆さん繪葉書の交換致しませんか 又地方〻新聞や雜誌も願ます お望みのお方下名（妾もキッと送ります（茨城縣新治郡高濱町東大橋 川並はな子）○妾事過ぎにし、十月の廿九日に直ぐ歸るつもりにて小姉方へ手傳に行きました處思ひの外多忙の爲歸宅する事が延引仕りよう〳〵二三日前歸宅仕ましたところ諸孃樣より澤山の繪葉書到着仕り居り御返事延引之段御斷申上ます、但し今日よりぼつ〳〵と御返事を出しますから、何分夫れ故遲くなる御方も出來ましよが、何卒不惡御勘辨之程御願ます（近江國滋賀郡阪本村井神金子方貝子）○扨十二月發行の女子文壇に私等の名前にて繪はがき交換のむれ細々と記してありましたに就ては愛讀者の方々より繪はがき澤山いたゞきましたがあれは誰かの惡らて御座いまして直に私等の投書致したのては御座いませんから どうかあしからず讀者の方々へ御得心の行くよう文壇へお記し下さいませんか どうも御手數をかけて誠に御氣の毒樣てございますが折入て御願ひ申しませす（淡路高等女學校寄宿舍內船越千枝乃菊川鹿）○妾は諸孃に交際が願ひたい皆樣交際して〻ださいそして繪葉書寫し繪等の交換も願ひます但し男子の御方は御斷り（周防佐波郡宮市新町中本丈吉方中村翠子）○皆樣編物おもちのお方はどーぞおかし下さい（高崎市白銀町二番地岸とも子）○皆さん英文にて繪葉書交換を（越後三島郡片貝村高梨二〇四山崎翠子）○愛讀者の諸孃よ妾は繪葉書が大好きなのですどうぞ美しいのを御送り下さいすぐに御返じ致します（麻布區永坂町六十四番地 本山こずゑ）○私栞を集めてるのよ栞を送られた【一、二、三、着】は夏子、乳姉妹、青春を【四より入着】蘆田川繪はがき一組宛【入着後】はきれいな草花繪はがきて御禮しますよ【五十人限】それから繪はがきも交換して頂戴【三着迄】の方は戰爭畫報一冊宛上げます今年四月限それ以後の方は返事しません（奈良縣生駒郡法隆寺村喜多德松方にて浪靈子宛）○妾は自筆の繪はがき大好なの御望の御方はどし〳〵何枚ても交換を願ひます下手なんだけど自筆のを御返しします先着者十名へは不要になつてゐる書籍や辭書を添えて送ります（佐賀縣東松浦郡濱崎村虹之松原新茶屋渡邊熊太郎方下宿生渡邊雅子）○先月はみなさんお美しい繪はがき澤山送つて下すつて有りがたう以後もどし〳〵送つて頂戴きつとお返事致しますよ（備後雙三郡酒河村青河佐々木元三郎方艶子）○私は此の樣な片田舍に住んて居るものですがどうぞ皆樣よ憐れと思召して御交際くださいな繪はがきの御交換も御願ひなんてすよ（遠江國磐田郡大藤村大久保伊藤ゆわ子）○誌友諸孃妾は誠に不遇な身の上てす、諸孃の內にて、一掬同情の淚を垂れさせ給ふ孃は何卒御交り下さいな少し流の遊ふ絹糸の栞二十五あります、小說て濱子、心と心、因果のひきづる、を想ふ方に差上ます之を御緣にお交り下さい（但馬國生野口銀谷町五三三岩崎榮子）○妾は草深き田舍にすむ一少女てすが語り合ふ友もなく一人て

淋しく暮して居ます者で何卒絵葉書交換を願ひます(筑後吉井町鋼吉爲三郎内 仝ふみを)○絵葉書の交換わたし何よりすきてす。(尾州東春日井郡鷲ヶ村字神領寺本光三郎方 寺本靜恵子)○絵葉書、書面等の御交換を願ひます(北海道札幌區札幌區南四條西四丁目拾二番地 船尾永次郎方小島小島)○絵葉書交換の諸姉よ下名へも乞ふ(伊豫喜多郡山鳥坂村 宮脇あさ子)○本誌愛讀の皆様方どーぞ肉筆水彩畫の絵はがきかまたは風景の寫眞でよいのを送って下さいすぐ相當ので御返信致します 先着者三人まではそれ〴〵はおき新誌しをりを送ります 特別高等品には肉筆の絵畫お送ります 御のぞみの御方は下名まで(羽前國鶴岡町 銀町二拾五番地中村方中村美ちしば女史)○絵葉書交換 並に御文通をねがひます(熊本縣八代女學校本島とよみ)○妾紀念のため先着二名に滿洲軍紀念畫端書御送付致し候間 畫端書にて御申込下され以後畫端書の交際をのぞみ升(淺草區福井町 貳ノ貳村上義子)○栞進呈す、申込先着者二十名に限ります(島根縣簸川郡久多美村福田義子)○絵葉書の交換を願ひます先着者には新潟名所一組返送いたします(新潟市東堀加藤方加藤きみ)

○圖書交換

○誌友諸嬢に御不用の紅葉全集、寛風戀風御所持の御方は相當代價に御讓り願たし又私は中川靜氏君書翰文研究、明和五年出來和歌八重垣全七册【半紙四ッ折判】文化五年出來佩文齋詠物詩選乾坤二册所持しています 相當の小說又は詩的書籍と交換願ます(長門長府一二八、益田しき子)○皆様妾の所に不用の書籍聖書物語七百頁金字入福音排偶便覧五百頁金字入外に大槻の日本文典 三省堂の外國地理あります他の書籍或は雜誌と交換します又御讓申します御望の方は妾の所へ御照會下さいな(青森縣西郡鰺ヶ澤漁師町三宅嶺子)○本誌愛讀者の嬢様左の詩歌文集の内望みの本を一册づゝ送呈致しますから美しい葉絵書に澤山文字を書かず只【望交際】と三字御認めの上送って頂戴小詩、緋牡丹、紫泉集、紅水仙、世界三十六文豪、溫知叢書筆の雫、明星、千紫萬紅、さゞ波、曉、今紫、紅筆、にせ紫、菊花環、日扇子、野の花、行く春、白百合、紅梅、金帆、白椿、女子文林、心の花、藻の花、三光女涙、美草、徒然草、二十五絃、白玉姫、暮雲、等都合不用の書物八十七册右は成る丈上等の絵葉書に(右三字)御認めの上御寫眞を成るべく添へて頂戴絵葉書に詩歌俳句を書いて下さる方々は右三字は不用です右は三月中です申込者百五十名を過ぐれば一國の内一名とか二名とか見計にて呈しますから皆さん其の御つもりて居て頂戴(豐後國臼杵町平山夏子)○私の手に自然と人生和歌言の千種、が不用になつて居ます萬朝小說傑作集か避暑の友かと交換して下さらぬか又藤村全集が不用になりましたから出廬、二十五絃、白玉姫、かと交換を願ひます(熊本市新屋敷町四三財津ますえ)○女子文壇一ノ一、二、四右三册(一部でも)表紙は惡くても口繪のあるのをお送り下さるお仁はございませんか、相當のお禮は致します(靜岡縣小笠郡南山村華仙子)○何程の小說にかゝわらず相當代價にて讓り受けたし妾に明星二十册、ホトトギス、三十册あります絵はがきにてお申込下さい 先着者五十名に差上げます(陸中一關黑澤みよ子)○文藝倶樂部不用のがあります、望のお方には差上げますから上等の絵葉書で申込なさい(下總國酒々井町根古谷小島芳子)○皆様の内に夏子の小說がありますならばどうぞ妾に下さる譯には行きませんかそのかわり妾の寫眞を一葉でも二葉でも差上ます(遠州磐田郡大藤伊藤花子)○皆さん私の元に郁文舍發行拾貳册の會玉篇大全があります入用の方は「言海」と交かんしましよ(廣島縣高田郡甲立村深瀨箕岡ちと子)○「花守、睡蓮、毒草、藤村詩集、七ッ星、青海波、夏廂、等の各詩集。小杉天外の寛風戀風、戀と戀、泡鳴著劍詩海堡技師、一葉全集等」。及女學界、小天地、白鳩、七人、國詩、白百合、等の各雜誌三十四五六年間の「女學世界」何れにても送って下さる方には「相思怨、澄子、涼子、女夫波、伯爵夫人、青春」及明星、文庫、新聲、ムラサキ、女鑑、女子の友、二十五絃、若葉集、戀衣、亂髮の内で直ぐ御好みのを御返ししてよ御好の方には自製の各種編物も差し上げますわ(近江甲賀郡柏木村字泉、辰井きん子)○諸嬢よ各地の新聞、雜誌を送って下さい御禮は致します、亦、先着六名様には美麗な薔薇葉書及雜誌を進呈致します(京都上京夷川通東洞院東入南側玉川清藏方、草葉すみれ)○本誌第一卷の内何號にても宜し不用の方は送って下さい相當代價の雜誌で御禮致します(千葉縣山武郡七氣本郷町下大和田大塚廣作方大塚よし子)○妾は女學生讃歌の栞俳句案内殘月中等美文資料小說新細君等を持つていますが女子文壇愛讀者諸嬢様にお上げしたいのです おのぞみの御方は絵はがきで下名の所へ(奈良縣宇智郡今村 榮山利子)○妾は

男女觀、作文尉俯、小學教育模範作文、作文問答、新細君等持て居りますが どなたか出處、不如歸の歌、金色夜叉の歌かと交換してくれる御方はありませんか 若し下名へ送てたまはれば御望の本直に差上ます（周防佐波郡 宮市新町中本丈吉方中村翠子）○私は若林著「速記術」菊池著「初等幾何」「廿五枚入のアルバム」二冊所持して居ますが御入用の御方は繪葉書にて下名へ相變らず御交換を（越後三島郡片貝村高梨二〇四 山崎翠子）○誠に恐入りますが 只今依田雄甫譯「萬國讀史地圖」御不用の御方は 御惠み下さいましな、私は當地の「名產」及び「北海道十二景」と他に編物三種ばかり 御贈り申します、御惠み下さる御方は一寸御通知下さいましよ、 但し一 番先に御しらせ下すた御方から頂きます（北海道龜田郡七飯村字鳴川番外地松井長子）○私古い女學世界の增刊がほしいのよ 御持の方は下名へ御送り下さい御返禮はきつと致します。（神奈川縣愛甲郡厚木町酒川高子）○私の手許に、湘煙日記、みづゑ、御婦人殿下、徒然草講義上下、食道樂春の卷、續千山萬水、女學生の栞、家庭の友合本、金色夜叉四冊、女學世界增刊世界各國家庭、等御座います相當の本と御交換を願ます（但馬國城崎郡福田村森垣婦美子）○左の書籍が要るお方はお知らせなさい、すぐ送てあげます、スイントン第一第二リーダー、第二の獨案內、北圖芦舟著女子手紙の文、神田乃武著英文法初步、バイオグラフィカルストーリーズ、矢野政二著失敗の半生涯、福岡縣京都郡祓鄕村草場秋璘香子）○妾は小說「伯爵夫人」「人の妻」「琵琶の歌」「萬國葉書帖」等あります「夏子」「涯子」「好色」「金色夜叉」「悲戀悲歌」「塔影」の中何れかと換へてください 亦たコロタイプ繪葉書を換へましようれ（東京府南葛飾郡大島町龜井戶日東軒內鵜澤花と月女）○私は小說の不如歸不言不語 及び日本歌學全書の內の第五編【金葉和歌集詞華 和歌集堀川百首】を持つて居りますから 御入用の方は繪はがきて下名の處へ御申込下さい（淡路洲本細工町奧井汀女）○妾いろいろ書籍を所持して いるので繪葉書をよこして下されし方々へ先着者三十名へ差上げますから（筑後吉井町獨吉爲三郞內岡ふみを）○みなさん御地の諸新聞と 妾の土地の諸新聞と交換致したいです（橫濱尾上二の十五 頓覺洞不風流）○皆樣の內で 水彩畫の御手本持つていらつしやるお方はなくつて、必ず御禮はしますから お持ちの御方はお送り下さいな、 また繪はがきの交換も願ひます（東京日本橋區通り 二の九西川喜代子）○私方に倫理學 に關する文部受驗用の書數册別に東洋女訓叢書全四册あり 何れも御讓申たし照會あれ（伊勢國 三重郡四阪部一三三山木藤子）○妾婦人 畫報と女子文壇を合して入册持つて居ます 失禮乍ら何か編物と交換致したいと思ひます 妾片田舍に生れて未だ編物なんか知りませんそれを 手本として始めます（山口縣玖珂郡余田村內山やすの子）○私は 中學世界少年世界女鑑女學世界 文庫明星中學文壇秀才文壇太陽新聲等三百十二册 持合せて居ます郵送料二十錢御送りの方 二十九名に分配したいと思ひます（讃岐三本松東町久保あや子）○私に左の不要書籍がありますから お望みのお方は至急繪葉書にお望の書名を小さく記して お申し越し下さいまし先着十名迄の お方には繪葉書「戀十種」を一枚宛添へて送ります。さて書名は紅葉山人著「南無阿彌陀佛」。同「此ぬし」。讀賣紙切拔小說「橋英男」。スケッチ九册。はがき文學十三册。「山高水長」。「殘花集」。「軍事小說」新聞切拔百餘章。「楓の下蔭」。（花にしき備後神石郡 油木局區內池田蕗子）○私は當地發行の文學雜誌 小琴を持つて居ります 繪はがきを以て 御申こみのお方に差上げます（廣島縣尾道市長江町福田きみ子）○私の手許に 女學世界女鑑など があります が皆さんの內で（綠雨）（平家物語り）（增鏡）（雲萃雜誌）など御もち合せの方は 何卒御交換被下まし（伊勢宇治山田浦口濱出きみ子）○ 水戶の名所寫眞を三枚づゝ六人の方に上げたいと 思ひますから御望の方は申込て下さい （茨城縣水戶市 風露ノ下山田千代子）○「思ひ出の記」を有つて居りますが「心のあと、出廬」「テニソン」、「キイッツ」など交換致しませんか （茨城縣石岡町 萩原熊次郞方篠馬那印子）○誌友諸姉樣の御中で眞人の 自白懺悔を御持ちなれば どうか 文科大學々生々活と御交換下さいましなそれから 私は近江八景の繪葉書を姉樣達に見て いたゞきたいのですが、御所望の方々は 下名まで御へがキを頂戴な地方の名產大津繪も 進上いたしますよ（近江國大津市土橋町十七、桂花子）○どなたか 諸孃のおうちに佐々木信綱先生著歌まなび 御所持の方お讓り下さいませんか相當の お禮を致します（千葉縣君津郡小原村鎌田須賀）●私に 紅葉全集六册あるの皆樣御自身御寫し繪御送り 下さいました方に到着順一、五、一〇、一五、二〇、二五、に相當した方に進呈いたします（堺市櫛屋町赞見霞洲）○凱旋紀念圖書室設置何本でもよし 御寄附被下

御寄送者芳名は圖書營成記に記入長く保存す又綺葉書望む（常陸國多賀郡南中郷村松井鈴木友次郎方紫水）〇下野松野舍様、妾は理科辭典が欲しいは何卒下名迄御通知下さい（香川縣大川郡三木松町大字北町松永あやめ子）〇妾不用の（山田美妙君著新體詩歌作法）と（菊地幽芳君著己が罪中篇）を御交換下さいませんか（周防熊毛郡三輪村福永美郡子）〇諸姉様の中で俳句新選季記、蕪村俳句評釋を御持ちの御方がありますれば相當の代價で御讓り下さるか又は御好みの書籍と御交換を願ひます（兵庫縣川邊郡川西村の内小戸村與服橋西詰古野政子）〇私「小公子」「女學生の栞」「明治の令孃」「ハイカラ修業」「オルレアンノ小女」などありますが皆様の内御望の方は綺葉書で御通知して下さい（山形縣新庄町高山きよ）〇皆様の内に誠之堂發兌の深井鑑一郎先生の孟子講義下卷をお持の方が御座いましたら、下名へ、御送付下さいまし相當のお禮を申ます、（埼玉縣入間郡南古谷村字久下戸根岸きゐ宛）〇茨城縣の學生と云ふ雜誌が出きましたから皆さんにあげたいのですよ、綺はがきか手紙かて私の所へ願ひます（常陸國高濱町東大橋石崎龍洲）〇妾は文學雜誌を澤山所持し居ります皆様に差上たいが何分多數の人ですから、「帝國文學」を初めとして先着七拾二名を限り綺葉書又は葉書にて御申込次第送呈す、又本誌第十、十一、御所持の方は御送下さい禮は致します（京都市夷川通東洞院東山山崎方玉川瓔子）

〇諸嬢の交際

〇私は田舍の小學校を終へたばかりの愚な者ですが皆さん御見捨なく御交際をねがひます綺葉書や御手紙の交換をして頂戴な必ず〳〵御返事します（神奈川縣高座郡田名村渡邊八重子）〇佐賀の濱子様御寫眞ありがたふ鹿兒島の芳江様御宅を御知らせ下され他の諸孃へも御寫眞及綺端書の交換を願ます（東京青山南町一丁目十一番地大野榮三方露子）〇賢明なる諸姉様妾は當文壇を愛讀して居るものですが何卒御交際を御願申します（愛知縣愛知郡大字日置山王一番戸天野てつ子）〇皆々様より御手紙下さいまして誠にありがたく誌上で御禮いたします北海道札幌の片岡仲子様妹が御手紙しまいなくしましたので住所わかりませんぜひ今一度御手紙下さい（下都賀郡栃木和生町川島吳喜子）〇妾は片田舍にて教鞭を取り居る無學なもので御座いますがどうぞ御文通を御願ひ申します（青森縣南郡野澤慶子）〇本誌愛讀の皆様此度妾も加はりました何卒可愛がつて下さい（金澤市松が枝町内山方川邊清子）〇誌友の諸姉様よ私は實に淺學無才の者ですが何卒お見捨なく御交際を願ひます又綺はがき交換もねがひます（茨城縣土浦町木町寺田米子）〇名古屋の愛讀諸孃のうちで去年の八九月頃まで富士塚町にみえた縣立二年級の森いさを様という御方は今も學校へ通つていらつしやるか又現今の御住所を御存の方がありましたらすみませんが下名まで知らして下さいませか（東京芝區三田四國町二ノ一加藤八重方綾子）〇愛讀者の皆様妾は交際をねがいましたが男子の方から手紙がくるのでこれからの方には返事を差上げませんからさよう御承知をお願いたします（神戸市北長狹通七ノ四六黑河内千代）〇筑前大塚さん宮城曾根さん山形村上さん美作忍田様美しきカードや又はレッターを給はりほんとに嬉しかつてよ、夫れから皆さんお住ゐを明記遊ばさないと、直接にレッターを贈る事が出來ませんわ（北海道渡島龜田郡七飯村松井長子）〇賢明なる諸孃よ新聞雜誌有り難ふ妾旅行中てしたからつい失禮いたしました木欄を借りて深く御禮申上げます（石見邑智出羽森脇仙子）〇前號にお尋ね下さいました上都賀の俊子様同縣てほんとにお懐かしう御座い升わ、私れ先頃四月に宇都宮の女學校終りましたの音樂なんか駄目なんですよ何卒是からは御文通して下さいなそこで貴女の御住所を私の所は（栃木縣宇都宮市二條町三十七番邸、横山きつ子）〇當地愛讀者一同女子文壇一週年の御祝として文友會と云ふ會を立てました御さんせい下さつて和歌なり文なり御寄贈を願ひます尙近い方は御くり合せ御來會下さいまし前以て上毛富岡町今井八百子方へあて御通知を願ます（上毛文友會一同）〇女子職業學校諸孃様に一寸御尋ねいたします私は御校專科へ入學いたしたいと存じます一ケ月の費用何程入用ですか次號で御知らせ下さい（出雲花子）〇諸誌友の皆さん珍づらしい綺葉書（拾錢以上）や寫眞の交換をお願しますそして先着二十人の方へは人生の初旅、人生の老旅、馬琴妙文集、無錢修學其他雜誌を差上げます（岩手縣黑澤尻町齋藤とく方すみれ子）〇綺葉書又は手紙の交換を乞ふ京都十一交換手くに子様おはなしがあります御住所詳細に私までお知らせを願ひます（土佐安藝郡井の口村字一の宮梶原方中山重飯）〇誌友諸姉よ私は赤十字社の看護婦て

只今は救護事業に就ています誠に不束者ですが御交際下さい（澁谷分院内糸子）○何卒親密に御交際下さいませ（陸前氣仙沼町渡辺照子）○私はふつゝかな者ですが何卒姉様方お仲間入りさして下さいませ皆様御手紙も下さい（鹿児島市山下町執達吏役場内吉井秀子）○私は女子文壇のおかげを蒙りまして田舎でもよほど心をひろむる事ができましたよ皆々様どうぞ御交際なすつて下さい（米澤市新町三の丁鈴木紅葉）○妾が女學校一年と二年イ習て居た習字帖はからす丸と云ふのです拙筆ながら上下とも妾が書うつしてありますそれを差上たいのです御望の方は給端書か何かと御交換を願ひます（徳島市富田濱側市山かめ方秋月生）○皆様私も九號から愛讀者の一人に加はりましたから淺學の不束者ですが宜しく御交際を願ひます（佐世保中通り大西閣子）○なつかしき諸孃様妾も當文壇愛讀者になりましたから何卒御交際して下さい直接御文通して給はらば誠に有難うあります（備後福山笠岡町畑梅子）○皆様ふつゝかの者ですがどうぞおつきあいをお願ひします（盛岡市大清水小路江刺家鶴子）○愛讀者の皆様私は誠に淺學のつまらない者でありますがどうぞ御交り下さいまし御玉章の交換を願ます（静岡縣志太郡島田町川上喜代子）○諸姉よ妾しは御耻かしい事ですが此文壇のこんなに盛なるとは知りませなんだどうぞいたらぬ者ですが見捨ず交際して下さい（尾道市久保滝町樋野内須賀子）○諸友諸孃今後は私のやうな田舎ものをどうかあはれと思ふて御交際下さい（高松靜江）○私はいなかに住んて居る今年まだ十二才のふつゝかものですが御なつかしき誌友諸姉様方の中で心ある御方は給葉書や玉章御芳姿のお寫眞など御送り下さいまし私もすぐ御返事をまゐらせます（高崎市白銀町岸トモ子）○皆様私も第九號からの愛讀者で御座います以後御心安く願ひます又御手紙も下さいませ（名古屋市常盤町七十二番戸原田こと子）○諸姉様よ妾し誠につまらぬ者ですがれ此からは御交際を願ひますどうか手紙を下さいませ又御地方の寫眞や雑誌などお送り下さいますれば妾もれ力の及ぶかぎり御返信なり又寫眞雑誌を送ります（備中笠岡町加藤爲綱内佐藤芳子）○誌友の諸孃よ御交際をお願申します其れから越後の小出様妾もクリスチヤンですかられ！貴孃御交際致したうごたいますがドーゾお寫眞やお手紙下さいませ妾も差上ますから（志摩國志摩郡鳥羽町松田規二方清水波子）○岡山の立岡房野様、大阪の吹本きく子様、福井の長谷川靜子様毎度御玉章有難ふ其他の諸姉様どうか御交際をして被下い、そして先着二十名申込者へ短冊を差上ます（伊豫松山市三番町ノ三山脇幸子）○妾は五年程新潟に居りまして此地へ參りました寂しくて仕様ないわ玉章と給はがき下さいなすぐ御返事申しますよ皆さん御願ひですから（京都丸田町通路西後藤方秋月清子）○記者さん初め諸孃姉様方、敬から棒とやらの御願ですがれ、譜の詳細に説てある「古今琴歌集」とても稱ふ様な琴歌本が、何所からか發行されてありますまいか、萬一御承知の御方が御座いましたら御敎へくださいませむか、專ら御同情をお仰ぎ申します。（戀琴女かほる）○諸姉さん私は二卷の一號より愛讀者の一人となりました何ぞ見捨なく御交際を願ひます（北見國利尻郡沓形村高橋はな方高橋淡水子）○皆様この頃は少しもお便りがありませんのれ、二箇月斗り保養して居つた間にお友達が一人もなくなつてよ、私かなしくつてよ、どなたか親密な一生變らぬお友達、否、姉妹になつて頂戴な、お願ひしてよ。（大阪北區友淵渠山方江口千夏子）○私は淺學無才のものですが皆様どうぞ御交際なして下さい（三重縣津市丸の内吉田直の）○愛讀の諸姉様無學者ですが此後宜しく御交際願ひます給葉書の交換や文通なして下さい（石見國那賀郡濱田町石本鶴子）○愛讀壇友諸姉様妾も本年一月から愛讀者の一人として投書致しますから交際を願ます（茨城新治郡栗原村大字栗原二七天谷雅子）○皆様あけまして御目出度う相變りませず御交際下さいよ御願いたします（姫路郵便局區内八代村五十五三木喜代子）○皆様よろしく御交際をれがひます御文通下さろ諸孃へは花の都の面白い事を御返事に書いて送ります（京都寺町四條上ル仙石内金田露園）○皆さん妾も文壇を愛讀致して居りますから何卒御交際を給葉書の交換も必と返事致します（新潟縣三島郡塚の山長谷川秋子）○妾は廣島豫備病院の看護婦てしたが十月限り解院につき今日から皆様とも御文通がいたしたい（廣島縣賀茂郡寺西村大谷とし子）



○課題披露追加

課題『我家の現在』は前號に於て披露しましたが締切日限後數十通の原稿が參りました其儘沒收するも氣の毒に存じますし且惜しい譯ですから其中の秀逸數通を拔いて左に掲げます猶次の分からは堅く五日を以て締切ます。

○　伊豫　白　百　合

世に私しの家庭程、不幸なのはありますまい、父は四年前に逝き、姉はリョーマチスにて、足が惡く、幾兄は昨年八月出征して未だに歸らず、私しは昨年五月から病氣で學校も休暇して居ります、こんな有様ですから財產もなくなつてしまいました

○　伯耆　榊　原　松　子

御兩親の外に兄弟が澤山ありますのでお正月には皆てカルタ會を催したり常には裏の庭で手狹なテニスなしします家庭と學校との連絡には雜誌が必要だとの事、且つは好いて居ますので姉樣と私は女子文壇兄樣は中學世界小さい兄樣や弟は兒童教育を必ず讀むことゝして時々他の雜誌も讀むことゝしてゐます

○　遠江　土　屋　子

目醒時計が、チン〳〵と鳴り出すと、母上と私は臺所へ行き、續いて父も床をはなれて、お庭の掃除に出なさる、義雄のみは皆より、一時間もたつて起きるが通例なのに、今朝に限つて一番起だ、義雄や今朝は珍らしいね、といへば「今日は、よつちやんと遠足をするんだもの」。

○　京橋　香　子

家族は五人、それから兄樣の愛する犬、妾も可愛がる洋犬で名はヂヤツキ、妾は兄妹たつた二人ぎりです、兄さんは今米國へ行て居ります、妾も毎日裁縫へ行く、私の家には何にもありませんけれど、只愛犬ヂヤツキと、それから面白いのは、米國の兄より送て來る、クロンボの繪はがきてあります

○　越後　水　野　き　よ　子

妾の家内は六人でしたが先月姉さんが二人になりまして七人となりましたお父さんは古道具が好きで毎日商人が絕えません弟は今高等小學の三年生で歸つて來ると無理矢理に姉さんから幼兒を奪ひ取るのです

○　神田　小　林　櫻　花

妾の家は家族は六人で父は某會社員で毎日一番上の姉樣は一番下の弟と次の兄樣は妾と、かう云ふ具合に分けて書齋で勉强するので兎角長上に向つては背かれぬやうになつて居るのです、

○　相模　板　倉　夢　水

あけてめでたき今宵、萬里の海をけやぶりて無事に凱旋せし父、東都に勉學せる姉上、兄上、さても母と弟を加へて今宵を愉快に過さんと歌留多會を開きぬ。目出度くもあり、嬉しくもあり、現在我家の家庭。

○次回課題

▲理想の夫（締切三月五日）

注意は前號にあり參照あれ五日迄に本社に到着するやう寄稿を乞ふ

○年賀狀の追加

○愛讀諸孃から賜はつた年賀狀の御禮は前號て申上ましたが猶は締切の後に左の諸孃からお送り下さいましたのが着きました、こゝに追加としてお禮申上ます

○下總、伊佐見澄子○白石松枝○竹村しま子
○大阪、ちなつ○田中嵐城○府下、溝口光子
○横濱、板倉夢水、安田政子、木村園子、山崎京子、安田埋れ木、敷島花子、星戸菫子、叢香女史、福澤秀子、風間康子、靜枝女史○茨城、菊池はる子、岡田はる子、池田せつ子○根室、汲川こう

○編輯だより

○增刊に就いて

豫定の如く本月を以て此『きさらぎ』一冊を編し增刊として發行いたしました、增刊號は凡て前々よりの原稿の紙數の都合で載らなかつたものを集めるのですから、文章其他天地人を缺き秀逸だけ出るわけとなります、最も諸先生の都合で更に天地人を選拔されたのもあります、それから本號のは多く昨年分の投稿ですから選評も昨年の諸先生が爲されて居る次第です、一寸御注意申して置きます。

○誌友倶樂部

誌友倶樂部の欄はいつも大繁昌て前號の如き『繪葉書編物交換』『圖書交換』の全部そつくら載せ得なかつた次第です、是等は皆本號（紙數四頁增加）に載せました、更に他の部の新しく來たものも加へました。

○東北凶作地義捐金募集

善いと思ふ事は直ぐ行ふと云ふ本社の主義から、今回東北凶作地へ寄贈する爲に、本誌愛讀諸孃に義捐金を募ります。天寒うして家に食物の貯へなく、老幼婦女相抱いて飢餓に迫るとは、何と云ふ氣の毒な狀態でせう。我々衣食に不自由なき者は、此際應分の義捐をする義務があらうと思ひます。本社は素より金額の多少を問ひません、金拾錢以上ならば欣んで取扱ひます、慈善者の姓名金額は本誌上に發表します。扨て本社が此の事を思ひついた動機は去る五日、ゆくりなくも下野の一令孃から東北凶作地へ送つてくれと、金五圓を本社に托されました。本社は其公德心の厚きに義憤を起して、茲に義捐金募集の擧を企てるやうになりました、諸孃よ、願くば多少を問はず愍むべき窮民の爲に喜捨あらんことを。

下野の一令孃の金員に添へてあつた手紙の全文は左の通りです。

一金五圓也　封入いたしてあります

近年にない今年のお寒さを記者先生諸氏いかがおしのき遊ばしますか東京は此地方よりも雪がふりましたとか聞きましたがお變りは御座いませんか、私は下野の南東のすみの方の田舍に住んで居りますものですが女學を好みまして學校を卒へましてからは貴誌を唯一の師とたのみ初號から愛讀致して居るものです此度我愛する文壇も先づ創立一週年に成り一卷一號に比して非常の（此度のは）進步實に私はうれしくてなりませんこゝにつゝしんでほきことを申上ます

サテ記者先生!!まことに恐入りまして御座いますが何卒此願をいれて下さいましそれは本月一日發行の近事畫報をみましたところ實に宮城縣などの惨狀……目もあてられぬ程で御座います、自らは父母の膝下にあつて何不自由なく（當地方はそれほど不作でもありませんでした故）充分に衣食して居る身、あゝ今食するものもなく親子相抱いて、さに死なんとする、病の爲めに打伏し今の不作に遂ひ米粒だに口にすることも出來ず、子は外を恐れて遠く走りて家にあらず遂に「あゝ飯が食ひたい」の一言を此の世に後して死したる者、又自分は出征し露醜打平げて目出度凱旋して家に歸つて見れば、あゝそもいかに……最愛の妻は病のために黄泉の客となり愛兒二人は年老いし父と共に見苦しき家にやうやく其日を送つて居らうとは……まあ其時其人々の心中はどんなでせう私はとても平氣で「こんな風なのか知らん」など、申して其樣子を見て居ることが出來ません、みす〳〵そんな人達の死することを聞いて居ることが出來ませうか、同情の念禁じがたく私が平生かみ飾何かに兩親よりいただいた金をためて居りましたが幸此れだけになりましたからあまり少ないと思ひましたが心から出すのですから多少に左右して居られません、右樣なわけ故どうぞこの心中可と思召すならば愛讀者のよしみを以て我同胞にすこしなりとも幸を與へて下さいまし多く書することは出來ません先づは右御願まで

二月四日夜　下野少女より

記者御中

一　喜捨金は拾錢以上の事（地方は爲替に限る）

（どうぞ名は問はないで下さい）

一　喜捨者は一人又は多人數申合せ送金差支なき事

一　申込期限は三月十五日迄の事（可成早きを望む）

一　喜捨金の三縣へ分配法は其筋に依賴する事

一　詳細の報告は四月一日發行の本誌上に發表する事

一　申込所は「東京京橋區大鋸町十一番地女子文壇社義捐金募集掛」宛の事

卅九年二月十五日　女子文壇社

女子文壇既刊目次

二巻第壹號 一月既刊 目次 定價拾錢

美術口繪

○額繪大附錄「晴小袖」 石版十遍密刷
○三宅氏水彩畫「東海道富士」 同 九遍密刷
○清方氏繪端書「水仙と少女」 同 七遍密刷
○本誌選評諸大家筆蹟（鹽井文學士、尾上文學士、沼波文學士、巖谷小波君、廣津柳浪君、河井醉茗君、山中古洞君）
○都下十大女學校々長肖像（伊藤貞勝君、和田垣謙三君、西澤之助君、小林彦五郎君、渡邊辰五郎君、跡見花蹊君、佐藤靜子君、三輪田眞佐子君、スペンサー君、津田梅子君）
○創業滿一周年の女子文壇社と社主肖像
○懸賞圖畫○短册（中村醫學士令孃文子、松本德子、井關照子眞筆）○家庭畫 母親と子供（山本飛聲君筆）
○雜誌の選擇（記者）○文章家の技量（文學士岡田正美）○無題新体詩（文學士尾上柴舟）○革命の響（文學士沼波瓊音）○新体詩の初歩（河井醉茗）○俳諧と三味線（巖谷小波）○水繪の友（一）（三宅かつみ）○英文（一）（河井道子、

二巻第二號 二月既刊 目次 定價拾錢

美術口繪

○三宅氏水彩畫「向島の雪」 石版九遍密刷
○清方氏繪端書「白梅と少女」 同 七遍密刷
○皇太子妃殿下御尊影 ○第一皇孫迪宮殿下御尊影
○第二皇孫淳宮殿下御尊影○第三皇孫光宮殿下御尊影
（以上最近御撮影の御寫眞）
○皇后宮職權掌侍山川操子女史
○本誌寄稿諸大家筆蹟（萩野文學博士、中內文學士、武島文學士、大和田建樹君、福井學圃君、三宅花圃女史）
○英米新流行頭髮の結び方 ○懸賞圖畫
○貴ふべき文藝（記者）○心の緒琴（佐々木信綱）○ナポレオン一世の母（學習院敎授大村仁太郎）○雪ちら〳〵（大和田建樹）○水繪の友（二）（三宅かつみ）○讀むべき書（小紘生）
○英文（二）（河井道子）

〔郵券代用は何れも代價の一割增に申受ます〕

東京京橋大鋸町十一 女子文壇社發行

〔最寄書店になくば直接發行所へ注文を乞ふ〕

定價

女子文壇（每號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）每月一回發行 第二卷より增刊年四回

一册（大判百二十頁）前金拾錢
六册 前金五拾七錢
十二册 前金壹圓八錢
十六册（增刊トモ）前金壹圓四拾四錢

內地は直接申込に限り 郵稅全廢無料とす

外國行 郵稅共 拾四錢

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候
○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候
▲缺本にならぬ法▼：前金拂込むに限る

廣告料金

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）
普通	金拾五圓	金八圓	金參拾錢
特別（表紙裏面口繪對面）	金貳拾圓	（半頁以下御斷申上候）	效驗著大
申込	發行前十五日		

▲廣告特約取次
（神田區千代田町二番地）博報堂
（京橋區南佐柄木町二番地）日本廣告株式會社

明治三十九年二月十二日印刷
明治三十九年二月十五日發行

不許轉載

（二卷第三號）

定價金拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 電話＝〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地 東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿三 東海堂
東京市日本橋區吳服町大番地 北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地 上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地 良明堂

（坪內製本）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

(東京秀英舍印刷)